

博 士 論 文

孔子論的問題解決アプローチの開発及び
地域包括ケアシステムへの応用に関する研究

2014年3月

史 文 珍

愛知工業大学大学院経営情報科学研究科

博士論文

孔子論的問題解決アプローチの開発及び
地域包括ケアシステムへの応用に関する研究

Study on the Development of Confucian Systems Approach and
Its Application to Community-Based Integrated Care System

2014年3月

B11802 史 文珍

指導教員 山本 勝 教授

目次

第1章 序論	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 社会背景及び課題	1
1.3 孔子思想の概要.....	7
1.3.1. 孔子思想の影響力	7
1.3.2. 孔子思想の特徴.....	7
1.3.3. 孔子思想における「理」と「情」の融合	7
1.3.4. 孔子思想に関する先行研究内容・視点及び研究方法	9
1.4 孔子思想及び問題解決.....	10
1.4.1. 問題と問題解決.....	10
1.4.2. システムとシステムズ・アプローチ.....	11
1.4.3. 孔子思想とシステムづくり（問題解決）の課題.....	14
1.5 少子高齢社会及び地域包括ケアシステム.....	14
1.5.1 少子高齢社会の現状及び課題.....	14
1.5.2 地域包括ケアシステムの現状及び課題	18
1.6 本論文の目的及び構成内容.....	20
参考文献（第1章）	22
第2章 問題解決からみた孔子思想の体系化	24
2.1. 緒言	24
2.2. 「論語」の体系化手順.....	25
2.3. 体系化された孔子思想の全体概要.....	30
2.4. システム・マネジメント分野への応用	32
2.5. 結言	34
参考文献（第2章）	35
第3章 システムズ・アプローチにおける孔子論的考察とその応用	36
3.1 はじめに.....	36
3.2 孔子論的システムズ・アプローチの提案.....	36
3.2.1 緒言.....	36
3.2.2 KJ法による「論語」の体系化	38
3.2.3 孔子論的システムズ・アプローチの手順	40
3.2.4 孔子論的システムズ・アプローチの理念	43
3.2.5 孔子論的システムズ・アプローチの特徴比較	43
3.2.6 考察及び今後の課題	45

3.3	地域包括ケアシステム構築及び運営への応用	46
3.3.1	緒言	46
3.3.2	地域包括ケアシステム構築の視点及び発想	47
3.3.3	医師及び市民意識実態調査の実施概要	50
3.3.4	地域包括ケアシステムの構築理念	50
3.3.5	地域包括ケアシステムの推進手順と検討課題	53
3.3.6	孔子思想に基づいた地域包括ケアシステム構築及び運営の特徴	57
3.3.7	モデル事業での検証—足助地区における計画	58
3.3.8	結言	60
3.4	まとめ	60
	参考文献（第3章）	61
第4章 意識革新における孔子論的考察とその応用		62
4.1	はじめに	62
4.2	意識革新における孔子論的考察	62
4.2.1	緒言	62
4.2.2	「論語」の体系化手順	63
4.2.3	孔子論的問題意識構造モデル	65
4.2.4	考察	70
4.2.5	結言	71
4.3	住民の意識実態分析と意識革新の提案	72
4.3.1	緒言	72
4.3.2	市民実態調査の概要	73
4.3.3	仮説の設定	75
4.3.4	市民意識実態調査の結果	75
4.3.5	市民意識実態調査の考察	80
4.3.6	意識革新の提言	81
4.3.7	結言	82
4.4	まとめ	83
	参考文献（第4章）	83
第5章 連携意識構造における孔子論的考察とその応用		85
5.1	はじめに	85
5.2	連携意識構造における孔子論的考察	86
5.2.1	緒言	86
5.2.2	「論語」の体系化手順	86
5.2.3	孔子論的連携意識構造モデル	88
5.2.4	孔子論的連携意識の特徴	93
5.2.5	連携促進の課題と条件	94
5.2.6	結言	96

5.3	介護及び看護サービス従事者の連携意識実態分析	97
5.3.1	緒言	97
5.3.2	介護及び看護サービス従事者のアンケート調査概要	98
5.3.3	調査結果の概要	100
5.3.4	考察	114
5.3.5	結言	116
5.4	まとめ	116
	参考文献（第5章）	117
第6章 評価システムにおける孔子論的考察とその応用		119
6.1	はじめに	119
6.2	評価システムにおける孔子論的考察	119
6.2.1	緒言	119
6.2.2	「論語」の体系化手順	120
6.2.3	孔子論的評価システム	121
6.2.4	孔子論的評価システムの特徴	127
6.2.5	結言	127
6.3	地域包括ケアシステムにおける評価システムの設計	128
6.3.1	緒言	128
6.3.2	地域包括ケア評価システム及び評価における課題・問題点	128
6.3.3	地域包括ケア評価システムの提案	129
6.3.4	地域包括ケアシステムの評価事例	134
6.3.5	結言	134
6.4	医師の役割分担と意識構造分析	135
6.4.1	緒言	135
6.4.2	孔子思想に基づいた医師のあるべき姿	136
6.4.3	医師実態調査の概要	136
6.4.4	医師実態調査の結果	137
6.4.5	考察	145
6.4.6	結言	147
6.5	まとめ	147
	参考文献（第6章）	148
第7章 情報社会における孔子論的問題解決方策		150
7.1	緒言	150
7.2	情報社会における問題解決方策	150
7.2.1	情報社会の問題構造	150
7.2.2	従来の問題解決対策	151
7.2.3	孔子論的問題解決方策	151
7.3	情報社会における孔子思想の概要	152

7.4	孔子的問題解決方策の提案.....	153
7.4.1	ハードウェア (Engineering) 面からの解決方策	153
7.4.2	ソフトウェア (Enforcement) 面からの解決方策	153
7.4.3	ヒューマンウェア (Education) 面からの解決方策	155
7.4.4	フィロソフィ (Ethics) 面からの解決方策.....	158
7.5	結言	158
	参考文献 (第7章)	160
第8章	孔子論的問題解決アプローチにおける今後の課題.....	161
8.1	はじめに.....	161
8.2	孔子論的問題解決アプローチにおけるシステムづくり課題.....	161
8.3	孔子論的問題解決アプローチの発展課題.....	162
8.4	孔子思想と他の思想の融合及び発展方向.....	162
8.5	孔子論的問題解決アプローチの応用分野及び今後の課題	164
8.6	まとめ	167
	参考文献 (第8章)	168
第9章	結 論.....	169
	付 録.....	172
	本論文と関係する発表または投稿論文リスト.....	179
	謝 辞.....	181

第1章 序論

1.1 はじめに

科学技術の急速な発展等により、我々の人間社会は大きな変化を遂げようとしている。この人間社会は産業技術の発展により、物質的には、より豊かな社会になったとともに、医療技術・医療機器の進化並びに医療システムの導入により、人間の健康寿命が延伸して、世界中の多くの国が高齢社会に入ってきた[1]。また、インターネット技術などの発達により世界中多くの国々は、情報社会とグローバル社会となってきた。しかしながら、現代文明の恩恵を受ける一方、人間社会には、公害病、環境汚染、地球温暖化などの環境問題をはじめ、インターネット犯罪、プライバシー問題、自殺、孤独死、精神病、テロ事件、戦争、等の人間及び人間社会における困難な諸問題に直面しなければならなくなったことも事実である。

上述した諸問題は、主に人間と自然の問題並びに、人間の問題（人間と社会の問題、人間と人間の問題及び人間自身の問題を含める）に大別することができる。従来、その2つの課題を解決する理念・方針・方策・手順などにおいては、主に客観性・効率性・合理性などの「理」に偏ってきたと言える[2]。しかしながら、これからの人にやさしい社会においては、例えば、QOL (Quality of Life) 向上、健康で幸せな社会を構築することが重要な課題となってきた[3]。そこには、客観的・効率的・合理的な「理」の側面と、主観的・人間的・感性的な「情」の側面とのバランスを重視していく姿勢と行動が必要不可欠な条件となってくるであろう。

そこで、本博士論文においては、人間の生き方・見方・考え方・進め方を中心とした孔子思想（「論語」20篇500章から構成）を、システム・マネジメント論の視点から、体系化及び考察した上で、孔子論的問題解決アプローチの開発及び提案を模索することを目的とする。なお、ここで開発した孔子論的問題解決アプローチの有効性及び実用性を検証するために、少子高齢社会における諸問題を解決するための地域包括ケアシステムに応用及び考察することを試みる。

そこで、まず、第1章序論においては、本研究の背景として、現在の社会特性及び課題について記述するとともに、孔子思想に関するこれまでの研究及び影響力などを概観する。また、従来の問題解決方法・手順、とくに、システムズ・アプローチの諸方法並びに、その必要性、意義について述べる。さらに、本論文において提案した孔子論的問題解決アプローチを実際に適応する地域包括ケアシステムの概要及び課題などについて考察する。

最後に、本博士論文の目的及び構成内容を示すことにより、本論文における各章の位置づけを明らかにする。

1.2 社会背景及び課題

科学技術の進歩・発展により、人間社会はますます豊かな社会となり、多くの国民は安心・安全・快適な生活が送れるようになってきた。しかしながら、現代文明の恩恵を受けながら、人間社会は科学技術がもたらしたマイナス影響・弊害・デメリットに直面しなければならない。図1-1に示されるように、人間社会は、高度技術社会、少子高齢社会、高度情報社会、グローバル社会及び不安社会に大別することができるとともに、それぞれの社会が抱える問題点・課題を以下にまとめる。

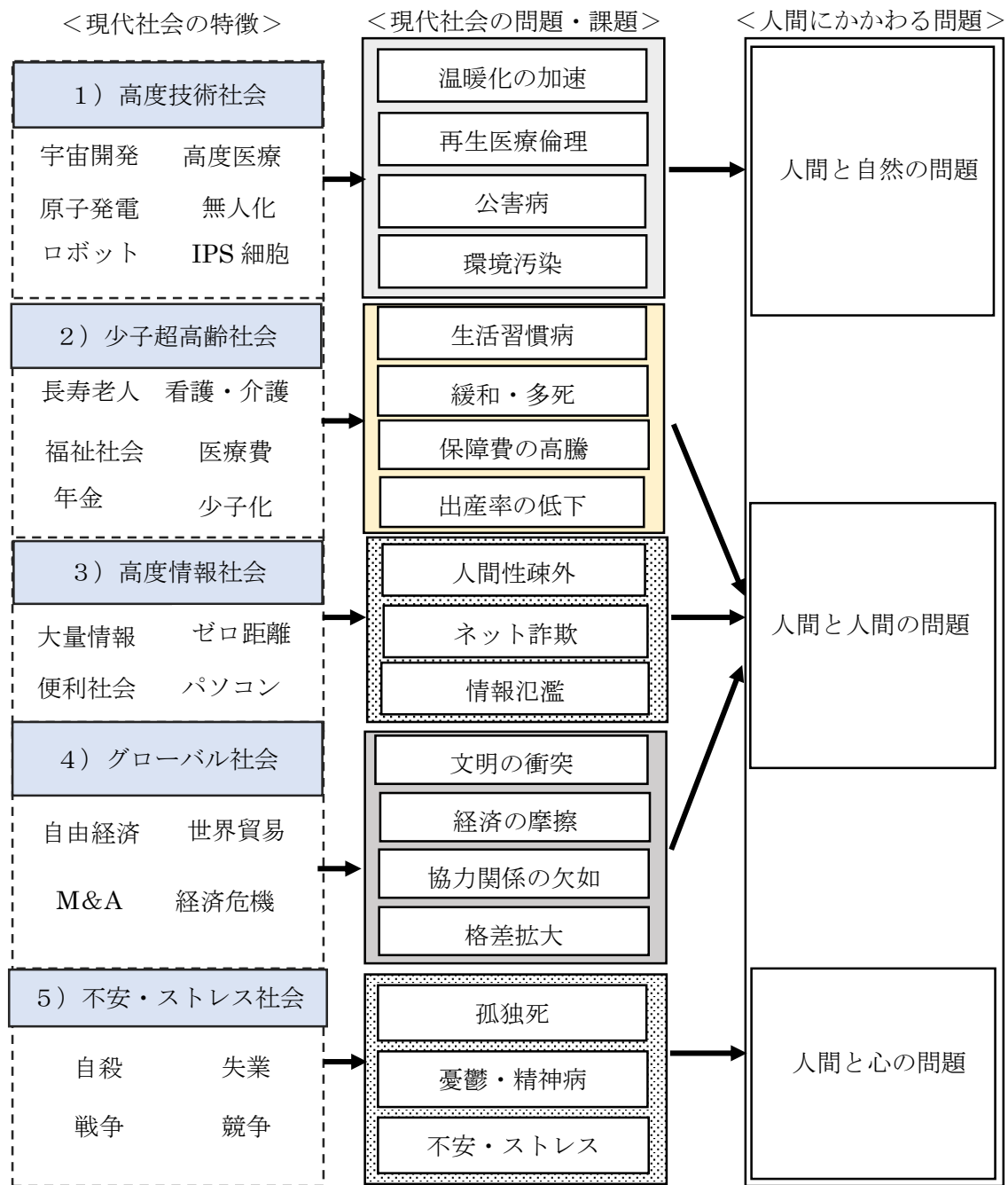
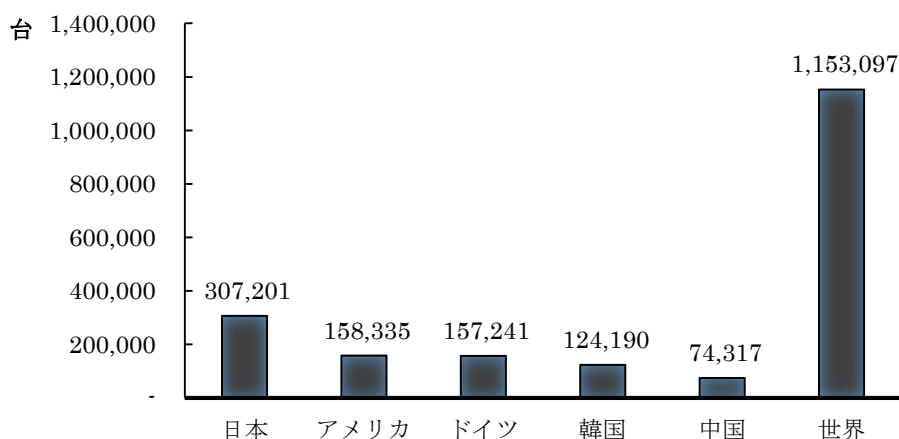


図 1-1 現代の社会特性及び問題

1) 高度技術社会

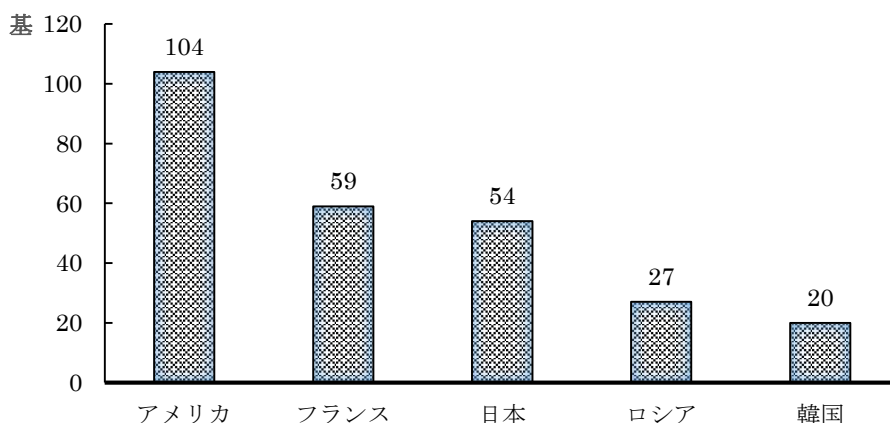
産業革命以降、とくに、20 世紀に入ってから、科学技術の急速な発展に伴い、人間社会においては、経済的及び物的恩恵をもたらしたとともに、日常生活に多大の影響を与えることとなった。例えば、産業分野における効率・効果を向上するために、産業用ロボットなど高度技術が注目されている。図 1-2 に示されるように、全世界で産業用ロボットの稼働台数は 1,153,097 台（2012 年度実績）になった。また、エネルギーを保障するために、原子発電所が注目されている。2010 年 1 月 1 日現在、稼働中の原子炉は 30 か国 432 基に及び、26 か国・

地域で140基が建設中あるいは計画中である[4]。図1-3が主な国の原子電発電所の数である。しかしながら、その反面、科学技術による工業化は、自然破壊をはじめ、生活環境の急激な悪化を引き起こすこととなり、様々な公害（公害病、環境汚染、地球温暖化、原発汚染問題など）を生み出してきた。また、人間社会においては、クローン、再生医療倫理などが緊急かつ新たな課題となってきたと言える。



資料：『世界国勢図会 2013/14』をもとに筆者加筆

図1-2 主な国の産業用ロボットの稼働台数[2012年度実績]



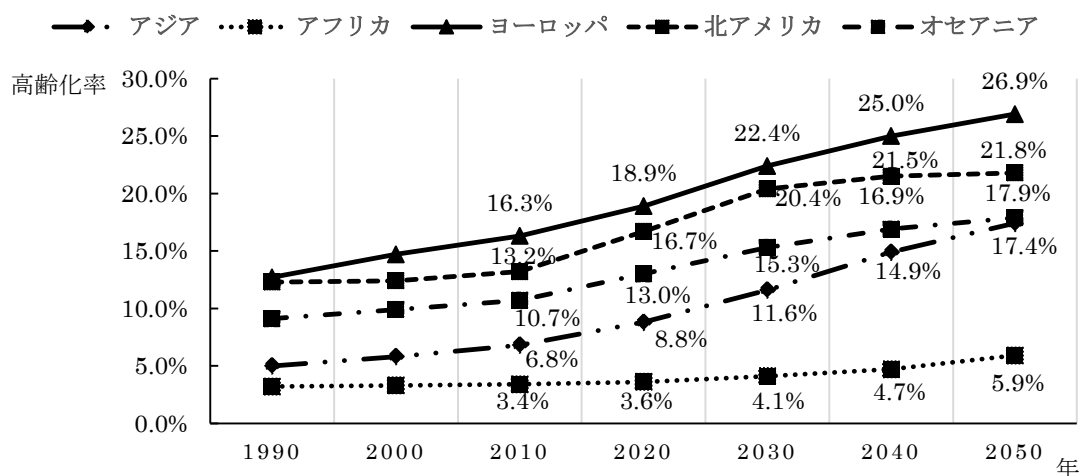
資料：『世界国勢図会 2013/14』をもとに筆者加筆

図1-3 主な国の原子力発電所

2) 高齢社会

科学技術、とくに、医療技術、薬品技術、医療機器などの発展により、年々平均寿命が伸び、世界中の多くの国は高齢社会、更には超高齢社会に入ってきた。図1-4に示されるように、2010年にヨーロッパの高齢化率は16.3%、北アメリカは13.2、オセアニアは10.7となっ

てきた。アジア諸国の平均は、6.8%であったが、その中において、日本の高齢化率は23%となってきた。また、国連の将来推計によると、2040年には、アフリカ以外の世界の高齢率は17%を超えて、高齢社会が到来するとみられている[4]。なお、人口に占める65歳以上の高齢者の割合を高齢化率という。高齢化率が7%を超える社会を高齢化社会、14%を超えると高齢社会、21%を超えると超高齢社会と呼ぶ。



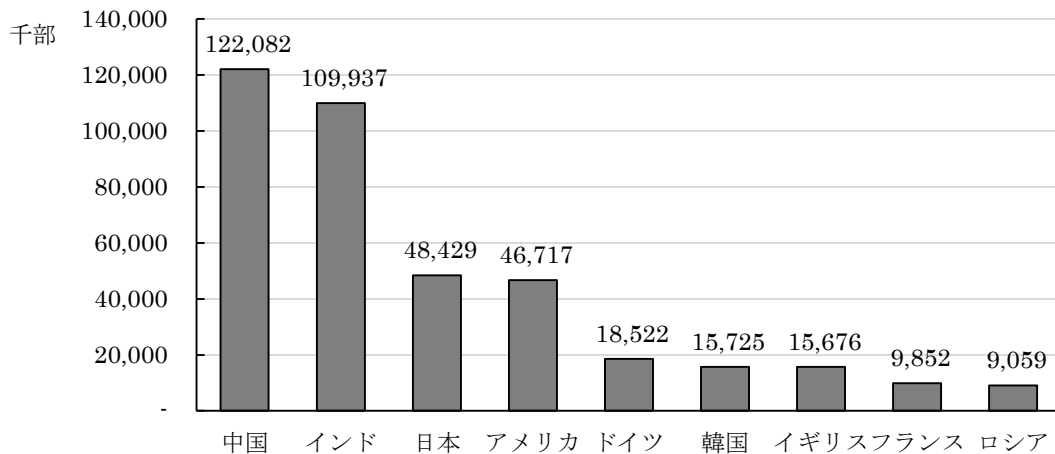
資料：『世界国勢図会 2013/14』をもとに筆者加筆

図 1-4 地域別の人口高齢化の推移と予測

長寿になることが昔からの人間社会の夢である一方、人間社会においては、高齢社会における問題に直面する必要がある。伝染病など急性疾患より、生活習慣病に係る慢性疾患が主な死因となってきた。それとともに、老人の緩和問題、医療・ケア人材の不足、医療・介護を含めた保障費の高騰、さらには、多死問題などが緊急かつ新たな社会課題となってきた[5]。また、日本においては、出生率低下による少子高齢社会が到来してきたと言える。

3) 高度情報社会

近年の ICT（情報通信技術：Information and Communication Technology）の進展や普及が社会の各方面に変化を及ぼしている。2012年に、世界移動電話契約数が6,315,672千件、インターネット利用者数が2,476,680千人、固定ブロードバンド契約数が632,112千件、移動ブロードバンド契約数が1,536,990千件であった。2011年には固定インターネット契約数が315,447千件であった。インターネットは先進国を中心に通信回線のブロードバンド化が進んでいる。これに伴い、データ処理をネット上のサーバーで行うクラウド化が進んできた。また、ソーシャルネットワーキングサイト（SNS）を利用する人々が増えており、気軽に情報発信が行えるようになってきた。また、2011年の各国の毎日新聞発行部数は、図1-5のようになった。このように、収集されるデータ量が膨大でかつ出所が多様であるため、これからの社会は、ビッグデータの社会と呼ばれる[4]。



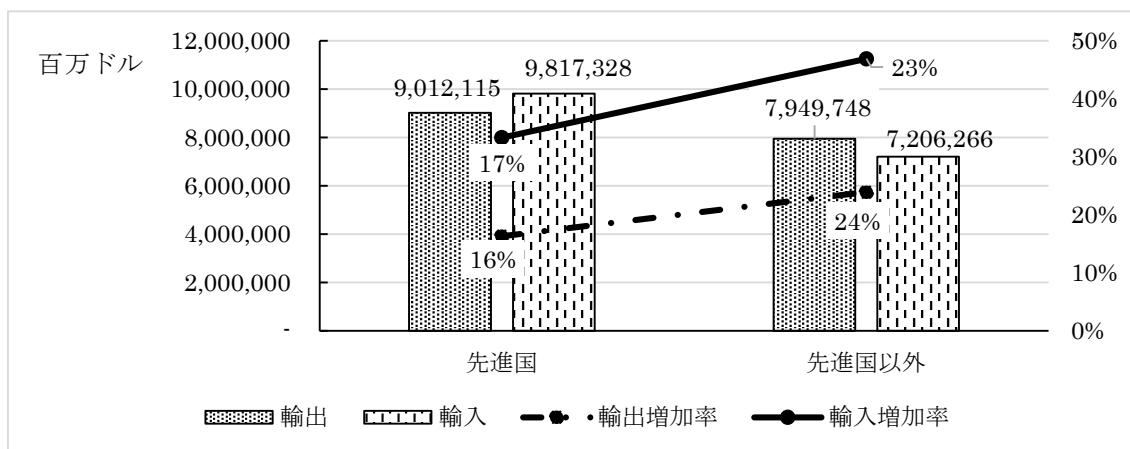
資料：『世界国勢図会 2013/14』をもとに筆者加筆

図 1-5 各国の日報発行部数

一方、ゼロ距離社会（空間的制約を受けないコミュニケーションなど）、と呼ばれるように、どこにいても大量情報が利用できる便利で豊かな社会である一方、この高度情報社会においては、さまざまな問題を生み出し、新たな課題を抱えつつある。知的財産権の問題、情報格差、情報過剰、インターネット犯罪、プライバシー問題、ウイルス侵害、人間関係疎外、情報倫理観及び社会責任感の欠如などが深刻な社会問題となってきた[6]。現在の高度情報社会は、社会環境に対する新たな認識と時代に即した倫理・規範を必要としている。

4) グローバル社会

鉄道、航空機などの高速交通機関とインターネット技術の発達及び普及により、国際的分業、資本の流通、自由経済市場の誕生、人間の流動などを通じて、世界のグローバル化が進み、社会は地球規模で構成され、人々は地球全体を視野に入れて生活するようになってきた。2012年の世界貿易額（ドル建て）は、輸出が17兆3617億ドル、輸入が17兆620億ドルとなった。例えば、先進国別の貿易額は、図1-6に示されるように、輸出及び輸入が活発に行われていることがわかる。



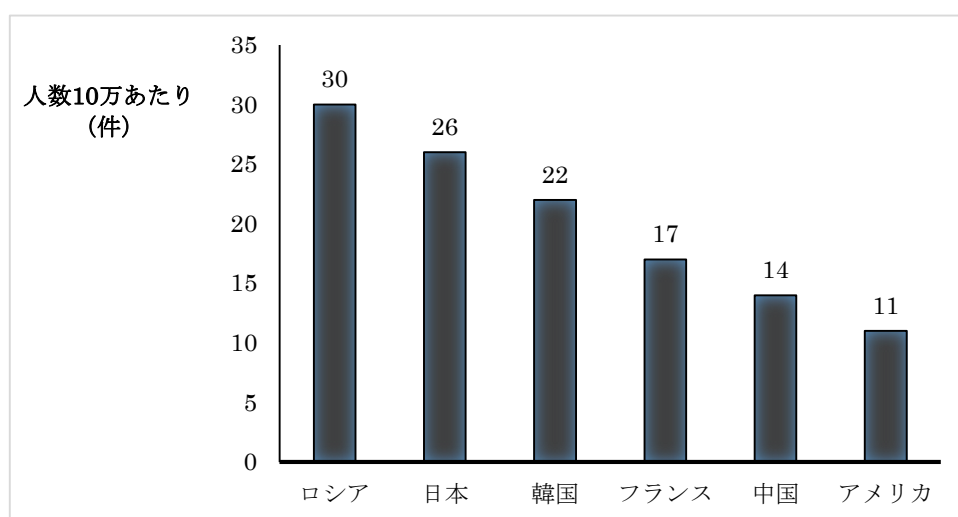
資料：『世界国勢図会 2013/14』をもとに筆者加筆

図 1-6 地域別の貿易額（2011年）

一方、グローバル化にともなって、経済の摩擦（貿易摩擦・制裁など）、地域・国の格差拡大（南北格差・先進国と途上国の格差など）、文明の衝突（戦争・テロ事件など）、とくに、地球問題（地球温暖化・環境問題など）を解決するための協力関係のあり方・構築方法などが緊急課題となってきた。

5) 不安・ストレス社会

人間社会においては、産業社会の発展により競争社会などから生まれた不安・ストレス・精神病など新たな社会問題を呈している。図 1-7 に示されるように、自殺率が依然として高い値を示している[4]。とくに、産業構造及び労働人口の移動などの変化により、人口構造及び世帯構造も変化してきたために、一人暮らし、高齢者夫婦のみの世帯が増えてきた。このため、独居老人の孤独死、介護老人の介護放棄、等の社会問題も出てきた。



資料：『世界国勢図会 2013/14』をもとに筆者加筆

図 1-7 主な国の人口 10 万人あたりの平均自殺率

以上のように、人間社会の変化によりもたらされた新たな社会問題を、人間と自然の問題と人間の問題（人間と人間の問題及び人間自身の問題を含める）に大別することができる。いずれの問題においても、これらの課題（社会問題）に対する根本的解決は、人間の英知と愛情と互助により、長い年月をかけて取り組んでいかなければならない。そのためには、とくに、以下の 2 つの問題解決アプローチ（解決方法・姿勢）が必要である。

- ① 1 つ目は、絶えず科学技術を改善・改革し、生産力を発展・向上することにより、客観的な世界を認識・探求・改造する問題解決アプローチである。それは、人間がいかに自然と付き合う問題であり、主に客観的・効率的・効果的・合理的な「理」の側面にかかわっている課題であると言える。
- ② 2 つ目は、人間の価値・生き方・考え方・進め方などに関係する主観的な世界を改善・向上する問題解決アプローチである。それは、人間がいかに心（自分自身）及び他人・社会の関係を扱う課題であり、主に主観的・感性的・人間的な「情」の側面につながっている問題であると言える。

1.3 孔子思想の概要

1.3.1. 孔子思想の影響力

人間及び人間社会における問題を解決するための思想は、まず、2,500年前中国春秋時代の思想家・哲学者・教育家である孔子（前551年～前479年）の思想と考えられている。孔子思想はすでに2,500年余りにわたり、個人意識から国家制度まで、中国文化の至るところに根深く影響してきた[7]。また、孔子思想は、「『論語』半冊だけで天下を治める」ように、中国の政治を統治するガイドブックとして伝承されてきた[8]。さらに、孔子思想は決して抽象的な形而上的な学問ではなく、人間の見方・生き方・考え方・有り方などを含めた道徳・倫理観並びに、人間関係の付き合い方・方針・理念などを中心にした身近な日常生活から、社会正義・社会管理・国家管理などまで浸透してきている[9]。

孔子思想を体系化した儒学は、中国だけでなく、近隣国である日本、韓国、シンガポール等の諸国においても伝わり、その受け入れが今日では様々な様相を呈している[10]。日常生活においては、儒学の倫理観・道徳観が人々の社会行動や礼儀作法、また人間関係の持ち方などに広く反映されている。また、孔子思想を研究する学者も大勢おり、儒学は学問として成立している。さらに、儒学は企業経営や管理に役立ち、一国の経済成長まで影響してきた。日本をはじめ、韓国・台湾・香港・シンガポールなど東アジアにおいて、儒学は迅速な経済発展にとって大切な存在である。

1.3.2. 孔子思想の特徴

孔子思想は膨大な理論体系を成している。それが長く広く受け継がれた魅力は包括性、適応性及び普遍性という三つの特徴にまとめることができる[11]。

まず、包括性においては、孔子思想は、政治・礼儀・習慣などを含めた国、社会のあるべき姿・あり方から、生き方・考え方・進め方を含めた家庭・個人のあるべき姿まで至るところにかかわっている。内容はほぼ当時人間及び人間社会のすべてを包括していると言えよう。

次に、適応性においては、孔子思想は理論・理念・方針にとどまらず、人間及び人間社会における問題を解決するとともに、社会に実用・貢献することを目指している。孔子思想の方法論である「中庸」が重要視されているため、特定の時代に限らず、時間の推移についてその時の社会情勢に適応され、国や個人に方向を導いてきたことができる。このように実践に移せることを「恕道」と言われている。

また、普遍性においては、孔子思想は特定の時間・空間に拘束されず、どの時代の人々にも魅せられてきた。時代が変わっても変わらないものに、以下の3点が取り上げられる。①教え方と学び方、②道徳と品格（人間関係の調和を保つのに、道徳と品格が基本条件である）、③観察（物事の状態や変化を正しく見ることが適切な行動を導く）。

このように、孔子思想は時代と地域を問わず、全人類に共通して使える思想であるため、孔子が生きた春秋時代だけでなく、他の時代にも適応できた。また中国だけではなく、他の国にも受けられてきたのである。

1.3.3. 孔子思想における「理」と「情」の融合

2,500年にわたって、人間及び人間社会における問題を解決するために、孔子思想がつねに強調・重視・利用されてきたことは事実であるが、従来の重点は、主に価値観・倫理観・礼儀・態度などの人間性・道徳を中心とした「情」に偏ってきたと考えられている。実は、孔

子思想においては、「情」の面を重視するとともに、効率・方法・客観・合理性など自然法則を中心とした「理」も強調されている[12]。孔子思想は、人間及び人間社会にとって人間性の「情」と合理性の「理」のバランスがとれた貴重な思想・教訓でもある。

1) 孔子思想における「情」の側面

人間を中心とした孔子思想は、当時の社会問題を解決するために、人間の生き方・考え方・進め方・見方を問題の切口として、責任感、価値観、倫理観、人間関係、礼儀、マナー、態度、気持ち、目標、動機などの人間性を含めた「情」を大切にしていける理念・方針・教訓である。

孔子思想の対象は実存の人間そのものや、社会関係であり、その目的は善良で誠実な人間、社会に貢献できる価値のある人間になることである[13]。人間の精神の状態を注目し、そして人々に自分の価値を実現させる孔子思想は「身を修める」ことを重んじ、自己を超越する主体性を高めようとする[14]。

また、人間は他人に関わっている社会の中で生きているため、人間の問題は、人間自身の問題だけではなく、他人（社会）とのつながっているところにあると考えられている。他人や社会全体に適応することや他人と協力するような人間関係の課題に対し、孔子思想では、信頼関係、思いやりの心、向上・発展などの解決策が提言されている。

そこで、一人ひとりが個人の社会的責任を重要視するとともに、他人と相互信頼・連携協働・共同発展するような人間と人間の付き合い、人間と社会の関係を大切に推進していく理念・方針が孔子思想の教訓・目的である。このように、人間性を含めた「情」にかかわる課題は、どんな時代であっても避けてはならないものであろう。

2) 孔子思想における「理」の側面

孔子思想においては、価値観などの人間性だけではなく、客観・効率・効果・実用性・合理性などを中心とした「理」も重要視されている。時代及び個人の理解の差により、孔子思想における「理」の側面・部分が無視され、誤解されるところが多いと考えられている。本論文においては、顧[15]を参考し、孔子思想の「理」を以下の3点にまとめる。

まず、本質指向・追求の「理」について、孔子思想においては、「格物致知」のように、自然法則及び物事の本質を追求する理性により、世の中のすべてをとらえて、理解及び考察することが重要視されている。とくに、人間社会のあるべき姿（老者が安心できる）及び、人間のあるべき姿（仁者）を人間社会の基準・規則・本質として提唱されてきた。また、それを達成するために、具体的な内容・方法などが提唱及び実施されてきた。孔子が提唱した人間社会における規範は、現代科学に合致するところが多い。このように、孔子思想では、人間社会における「道」（物事の本質・真理・規則）をシステムの的に追求するとともに、合理性・科学・実践・効率などが重視されている。

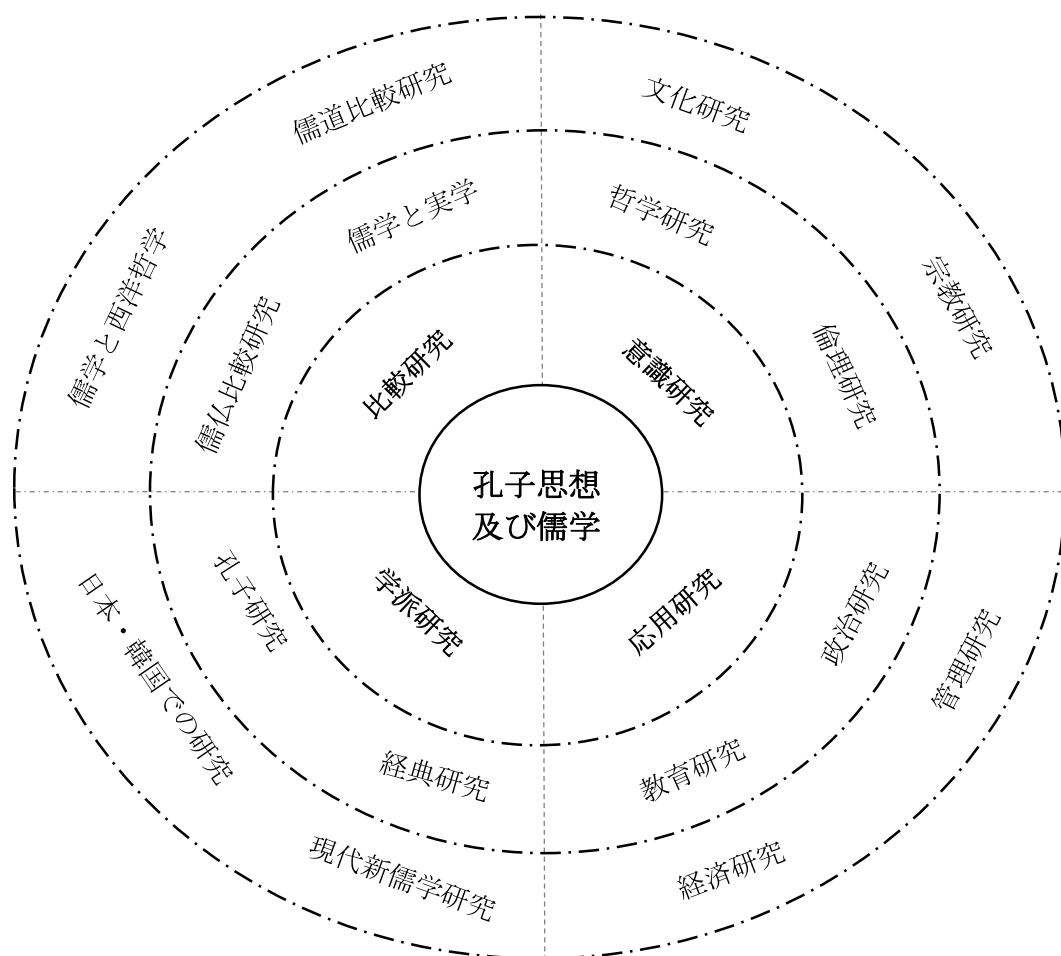
次に、実務重視について、孔子は「民の義を務める」ように、国民の日常生活及び幸福に貢献することを目指してきた。国民の生活・幸福を虚無な外来の力（神様・迷信・神秘力）に依頼しないとしている。

最後に、知識・教育重視について、孔子思想においては、情報、知識、知能などが社会の安定と発展に極めて重要な条件である。また、科学的な合理的なやり方・考え方・進め方、適当な判断・評価、中庸の方法論、及び効果・効率・実用の重視、等が強調されている。

1.3.4. 孔子思想に関する先行研究内容・視点及び研究方法

孔子思想の内容は幅が広いので、研究視点及び研究方法によって、研究内容が各々異なる様相を呈する。従来の研究視点は、以下のように主な3大種類に大別できる[16]。孔子思想の内容においては、道徳・教育・宗教・政治・礼俗・哲学などに分類できる。また、孔子思想の研究においては、人物・著作・思想・実践・制度・経書・学派などに分類できる。さらに、孔子思想の機能・影響においては、日常の倫理意識・礼教秩序・政治理念・教育体制・天道性命・人格修養・聖賢の功夫等がある。

なお、孔子思想を主とした儒学の研究分野においては、「20世紀儒学研究大系」により、図1-8に示されるように、20種類がまとめられる[17]。



資料：『20世紀儒学研究大系』をもとに筆者加筆

図 1-8 孔子思想及び儒学の研究分類

一方、孔子思想に関する研究は、国家や地域や個人、また、時代や環境の影響などによって研究方法も異なる。先行研究においては、主に伝統的な研究方法と現代的な方法にまとめられる。

伝統的な研究方法は、文献の注疏（経書文献に対する注釈）、義理（道義）の解釈、学案（学派に関する資料の編集）・年譜（個人の生涯にわたる思想歷程の記録）、思想の展開という4つの方法が重要視されてきた[16]。

現代の研究方法においては、哲学的な研究方法、文献学と考証学の方法、宗教学的な研究方法、歴史学的研究方法、思想史的研究方法を含めた本流の研究及び、現在に多くの研究者が社会科学の視点から孔子思想を研究する社会科学的方法に大別する。

上述したように、従来の研究は、主に哲学、思想、倫理観、宗教、意識、歴史、教育などの「情」の側面に偏ってきたといえる。また、経済管理に関する研究においては、主に人格・道徳に近いリーダーシップや企業文化の面についての研究に偏ってきたと言えよう。一方、システム・マネジメント（問題解決）の視点から、従来孔子思想に関する伝統的な研究においては、問題解決における方針、戦略、原則、道徳、倫理観、意識、宗教、教育などの側面が重要視されてきた。システム的な問題のとらえ方・考え方・進め方・問題解決手順などを含めたシステムズ・アプローチ（問題解決）から、孔子思想を研究することが少ないであろう。そこで、本論文においては、問題解決の立場から、すなわち、システム・マネジメントの視点から孔子思想を研究していくことを行う。

1.4 孔子思想及び問題解決

問題解決の立場から、孔子思想を研究していく前には、まず、問題解決の概念・背景・経緯などを明確にしたことが重要であろう。そこで、以下においては、問題の概念、問題解決の手順・歴史、システムズ・アプローチの概念及び方法、孔子思想と問題解決における諸課題の関係などを紹介する。

1.4.1. 問題と問題解決

問題の概念及び問題解決の手順などについては、以下にまとめることができる。

1) 問題の概念

問題の概念は、ハーバート A・サイモンが『意思決定の科学』で「問題解決は目標の設定、現状と目標（あるべき姿）の間の差異（ギャップ）、その差異を解決する」と記述した[18]。それは、問題が現状と目標（あるべき姿）の間のギャップであると言えよう。そこで、経営の分野においては、問題の概念は定着してきたと言える[19]。すなわち、問題の概念は、一般に、図 1-9 に示されるように、現状とあるべき姿（目標）とのギャップに対する認識（不満感）であると考えることができる。また、問題における目標は、例えば、生産効率・売上など客観的な目標（定量的）及び、幸福・QOL 向上・調和社会など主観的な目標（定性的）に大別することができる。

2) 問題解決の手順

問題解決について、最初明確に提案された問題解決の手順は、シューハートが 1920 年代に生産管理及び品質管理における問題を解決するために、提唱した「Plan→Do→See」である[20]。「Plan→Do→See」は、何を作るか（目標の設定及び計画）、どのように作るか、その結果を検査するという 3つの手順に関するリサイクルである。デミングは、1930 年代に、シューハートの理念を発展及び改善して、PDCA という問題解決のリサイクルを提唱した[21]。二人とも、生産管理の現場における問題を統計的、数学的な視点から、上述した問題解決の手順を提案したが、現在 PDCA 及び「Plan→Do→See」は、幅広く様々な分野で応用されている。

また、1950 年代に、一般システム理論がベルタランフィに提唱されてから、具体的な問題解決に応用されてきた。つまり、問題を一つのシステムとしてとらえて、システム的に解決していくとなってきた。それは、システムズ・アプローチと言われている。

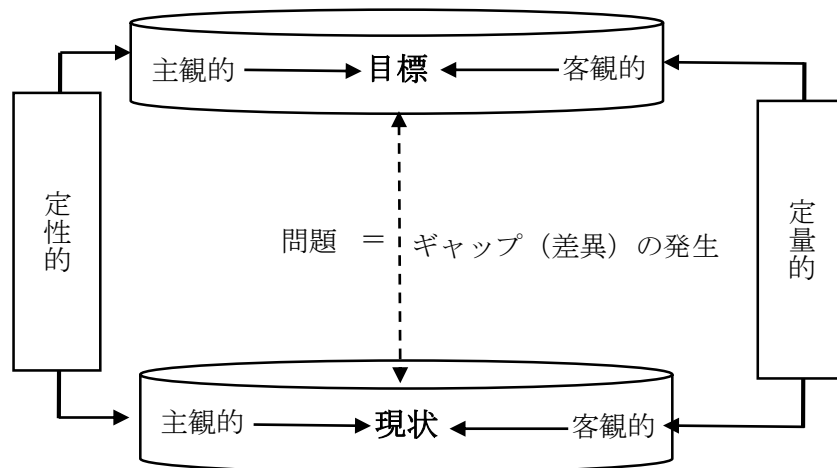


図 1-9 問題の構造概念図

1.4.2. システムとシステムズ・アプローチ

システムの定義・条件及びシステムズ・アプローチの種類などについては、以下に概観する。

1) システムの定義及び条件

システムに関する一般的な定義としては、これまでに多くの定義が提案されているが、その中に代表的な定義をいくつか以下に紹介する[19]。

定義1) システム (system) とは、目的達成のために関連づけられた諸要素の集まりである。

定義2) システムとは、相互に作用し合っているサブシステムの集合である。

定義3) システムとは、諸要素の集合体の活動過程であり、それらの諸要素はある目的のため機能的に結合されている。

定義4) システムとは、所定の目的を果たすべく選定され、配列され、連携して活動する一連の構成要素の組み合わせである。

定義5) システムとは、多くの要素の集合体であって、全体として与えられた目的を達成するように有機的に結合されたものである。

これらのシステム定義から、システムとは、「関係を有する多くの構成要素が相互に連携し、協力し合って、より高い目的を達成していくための有機的結合体」を意味していると言えよう。

以上のシステム定義から、「システム」であるための3条件を次のようにまとめることができる。

① 全体目的 (purpose) があること

まず、システムにおける全体目的を確認することが必要である。誰のための、何のためのシステムであるかを明らかにしておくことが不可欠である。また、目的には階層 (hierarchy レベル) がある。すなわち、システムには低いレベルの目的から、より高いレベルの目的まで自由に設定することが可能である。

② 複数の構成要素 (components あるいは elements) があること

システムの目的が決まると、この目的を達成するために必要な複数の構成要素を取捨選択していく。システムの構成要素は、ヒューマンウェア、ソフトウェア、ハードウェアという3つに大別することができる。

③ 適切な相互関係 (relations) があること

具体的な相互関係として、各構成要素間における情報の交換、連絡、役割分担、連携、協働、システム全体からの調整・調和、等を挙げることができる。

2) システムを構成する4本柱

前述のシステムの定義及び条件により、システムは、図1-10に示されるように、目的、ヒューマンウェア、ソフトウェア及びハードウェアから構成される4本柱で表現できる。

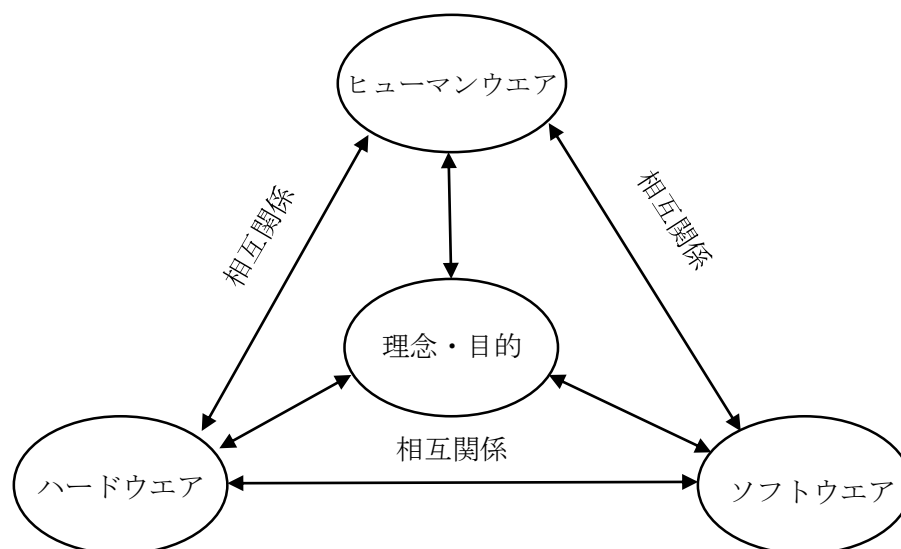


図1-10 システムの全体概念図及び表現図 出典：山本勝 [19]

—システムづくりにおける4つの主要課題—

- ① システムづくりにおける理念・目的の確立である。これをシステムづくりにおけるフィロソフィー (Philosophy) と呼ぶことにする。とくに、社会ニーズ及び顧客ニーズにあったシステム化理念・方針・目的及びこの目標の設定が大切である。
- ② システム関係者における人材確保・資質向上・活用及び円滑な人間関係の構築である。これをシステムづくりにおけるヒューマンウェアと呼ぶ。
- ③ システムづくりを効果的かつ効率的に推進及び運営していくための方法・制度・手順・規則・仕組みに関する創意工夫と整備充実である。これをシステムづくりにおけるソフトウェアと呼ぶ。
- ④ システム内で有効活用される施設・設備・機器・技術の開発・導入・導入である。これをシステムづくりにおけるハードウェアと呼ぶ。

3) システムズ・アプローチの定義及び種類

システムズ・アプローチは、二つの言葉、システムとアプローチから組み立てられた合成語である。アプローチとは、“物事の本質に迫る、あるいは問題を解決する仕方、考え方、態度、方法論” のことである[22]。そこで、システムズ・アプローチは、システム的なアプロー

チという意味で、端的に述べると、対象をシステムそして考察する方法である。一般に、目標達成に向けて効果的かつ効率的に問題解決を推進していくための総合的かつ科学的な問題解決手順として、システムズ・アプローチと呼ばれているものがある。また、システムズ・アプローチがシステム思考と呼ばれることもある。本論文で用いているシステムズ・アプローチとは、効果的かつ効率的な問題解決を進めていくための進め方（手順）及び考え方（理念・方針）を総称したものと定義する。

問題解決を進めていくためのシステムズ・アプローチには、いろいろな手順・やり方があるが、その中でも帰納的アプローチ（分析的アプローチ）と演繹的アプローチがよく知られている。帰納的アプローチと演繹的アプローチの手順及び特徴は、図1-11のように示されている[19]。

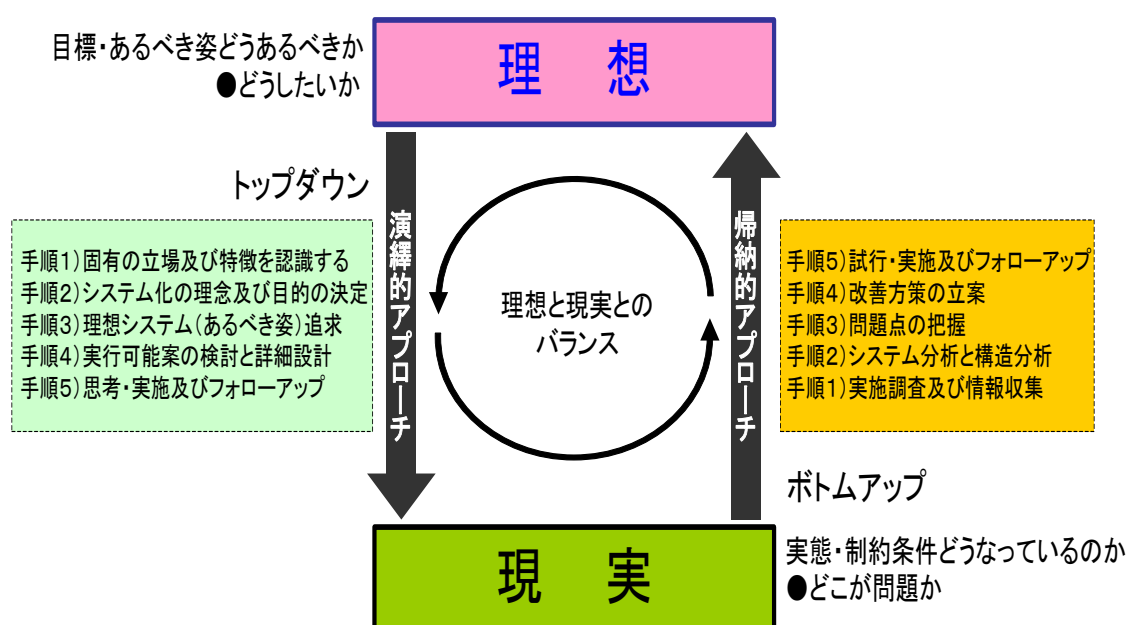


図 1-11 帰納的アプローチと演繹的アプローチの手順及び特徴 出典：山本勝[19]

① 帰納的アプローチ

帰納的アプローチは、現状に関する実態調査から問題解決が始まる。収集した諸情報を様々な角度から分析していくことにより、当該システムにおける問題点・課題を明らかにした後、取り組むべき主要なシステム化課題を選定し、それに対するいくつかの解決案（複数案）を考え、一つの最終案を決定し、それをテスト・実施、運営管理及び評価していくことが、帰納的アプローチの主な推進手順である。

② 演繹的アプローチ

演繹的アプローチは、固有の立場を確認後、そのシステムの果たすべき目的（機能）を決定した後、その理想形に近い実行可能な解決案を考え、それをテスト・実施及び運営管理、そして評価していくことが、主な推進手順である。また、問題解決における帰納的アプローチと演繹的アプローチの特性及び特徴は図1-12にまとめられる。

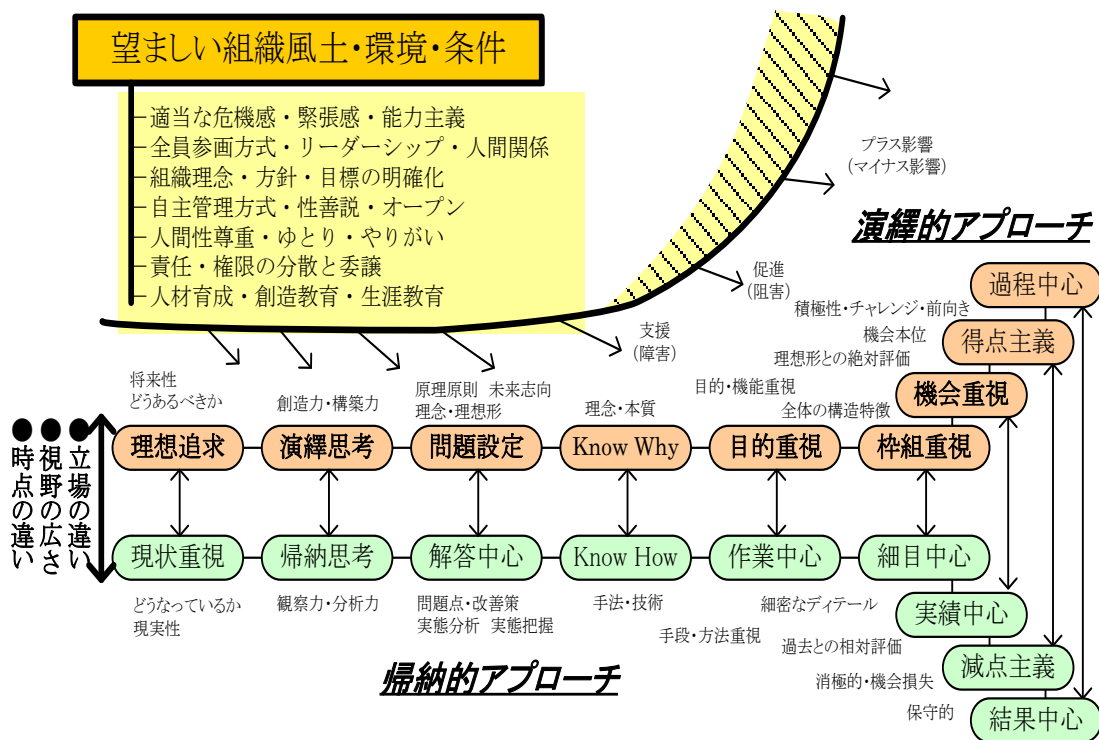


図 1-12 二つアプローチ（帰納的と演繹的）の特徴比較 出典：山本勝[19]

1.4.3. 孔子思想とシステムづくり（問題解決）の課題

これまでの問題解決アプローチは主に客観的、効率的、合理的な「理」の側面に偏ってきたと言える。一方、人間性の「情」と合理性の「理」のバランスがとれた孔子思想においては、人間及び社会の理想形を掲げながら、現実の日常生活における諸問題・現状について様々な解決方策・理念・方針などを提案及び実施することを重要視してきた。理想形と現実のバランスがとれた孔子的問題解決アプローチを究明することが、現代においても極めて重要な課題であろう。そこで、本論文においては、「論語」に記述された孔子思想を、システム・マネジメントの視点から体系化した上で、孔子論的問題解決アプローチを開発及び提案することを模索する。

また、ここで開発した孔子論的問題解決アプローチの有効性及び効果を検証するために、孔子論的問題解決アプローチの特性について考察を行うとともに、これからの高齢社会において、現在最も注目されている地域包括ケアシステムの構築及び運用に関して、本解決アプローチを適用し、その有効性を検証する。なお、この地域包括ケアシステムは、地域住民に対して、医療・介護・福祉・生活支援などのサービスを継続的に提供していくシステムであり、現在各地域において介護保険制度のもとで、そのシステムづくりが推進されている。

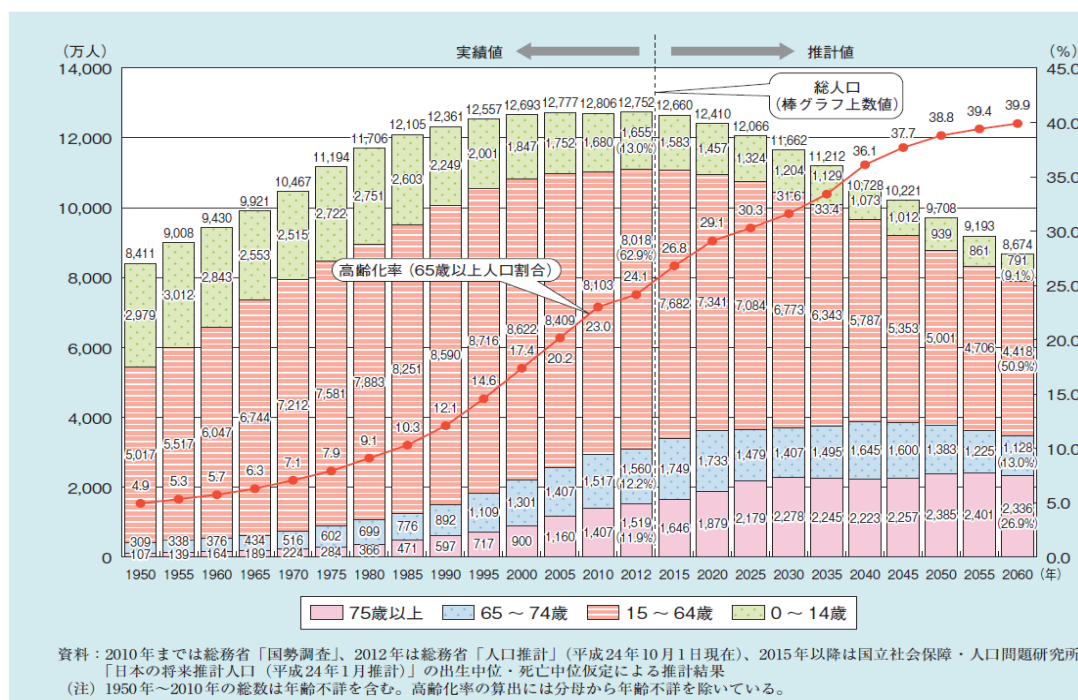
1.5 少子高齢社会及び地域包括ケアシステム

1.5.1 少子高齢社会の現状及び課題

現在の少子高齢社会の現状及び課題については、以下にまとめることができる。

1) 高齢化率

総務省統計局発表の人口推計は、日本の総人口は、平成 24 年（2012）10 月 1 日現在、1 億 2,752 万人となっている。65 歳以上の高齢者人口は、過去最高の 3,079 万人（前年 2,975 万人）となって、総人口に占める割合（高齢化率）が 24. %（前年 23.3%）となってきた。年齢別の人口では、「0～14 歳人口」は 1,655 万人（総人口の 13.0%）、「15～64 歳人口」は 8,018 万人（同 62.9%）、「65～74 歳人口」は 1,560 万人（同 12.2%）、「75 歳以上人口」は 1,519 万人（同 11.9%）であった[23]。

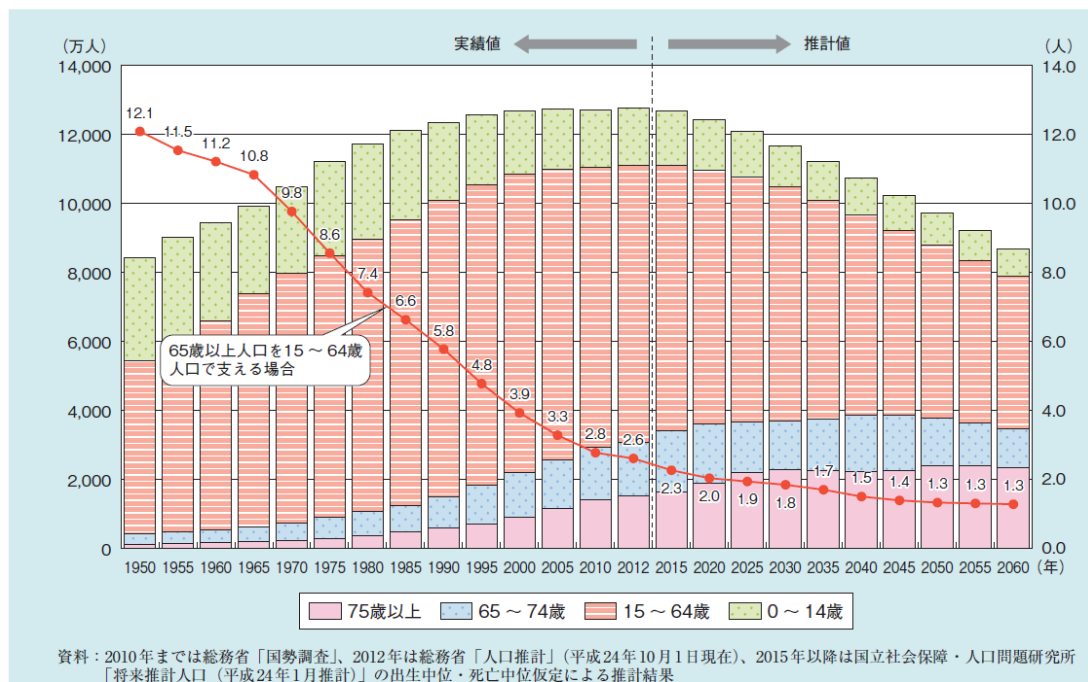


資料：高齢社会白書平成 25 年版より引用

図 1-13 高齢化の推移と将来の推計

また、今後の将来推計については、国立社会保障・人口問題研究所の推計により、このまま少子化が進行した結果、日本の総人口は、2050 年には 1 億を下回って 9,708 万人、2060（平成 72）年には約 8,674 万人になると推計されている。一方、老年人口は総人口が減少に転じた後も増加を続け、2020（平成 32）年から 2040（平成 52）年までは、3,800 万人前後で横ばいを続けた後、緩やかに減少していくと予測され、図 1-14 に示されるように、2012（平成 24）年の 24.1%から、2060（平成 72）年の 39.9%まで上昇すると見込まれている。

なお、65 歳以上の高齢者人口はと 15～64 歳人口の比率により、平成 24（2012）年には、高齢者 1 人に対して現役世帯 2.6 人になっており、今後、高齢化率は上昇を続け、現役世帯の割合は低下し、平成 72（2060）年には、1 人の高齢者人口に対して 1.3 人の現役世代という比率になると推測されている[23]。（図 1-14 参照）



資料：高齢社会白書平成25年版より引用

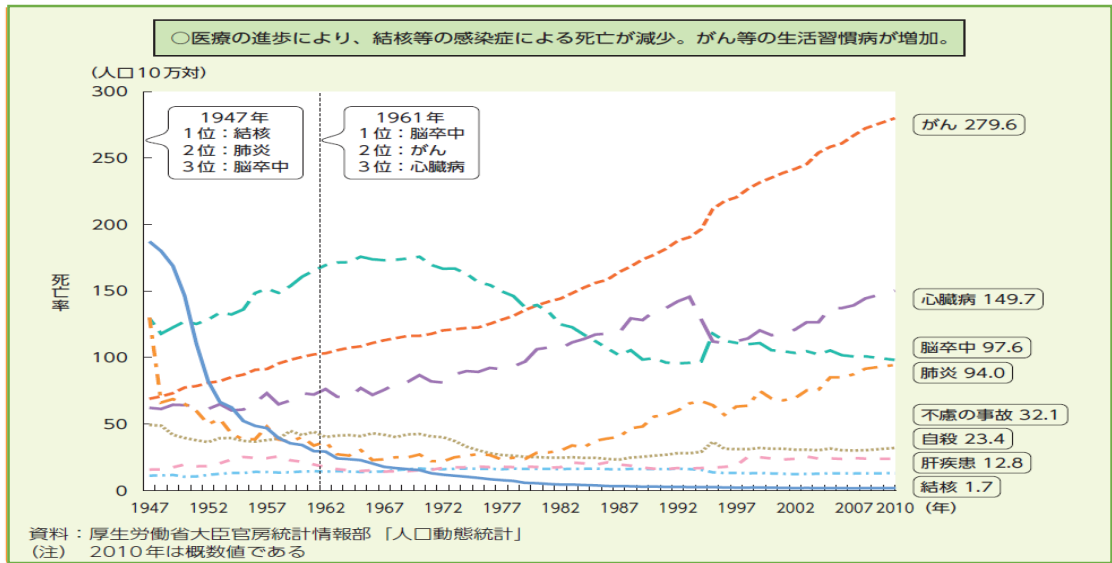
図1-14 現役世代が高齢者を支える推移図

2) 疾病構造

死因別の死亡率をみると、2010（平成22）年では、1位がん（279.6）、2位心臓病（149.7）、3位脳卒中（97.6）が上位の順位となってきた[23]。また、結核の克服により、図1-15に示されるように、国民の主な死因は感染症から生活習慣病へと変化している。高齢化の進行に伴い、がん、心臓病、脳卒中などの慢性疾患の増大という疾病構造の変化が社会に大きな影響を与えると推測されている。

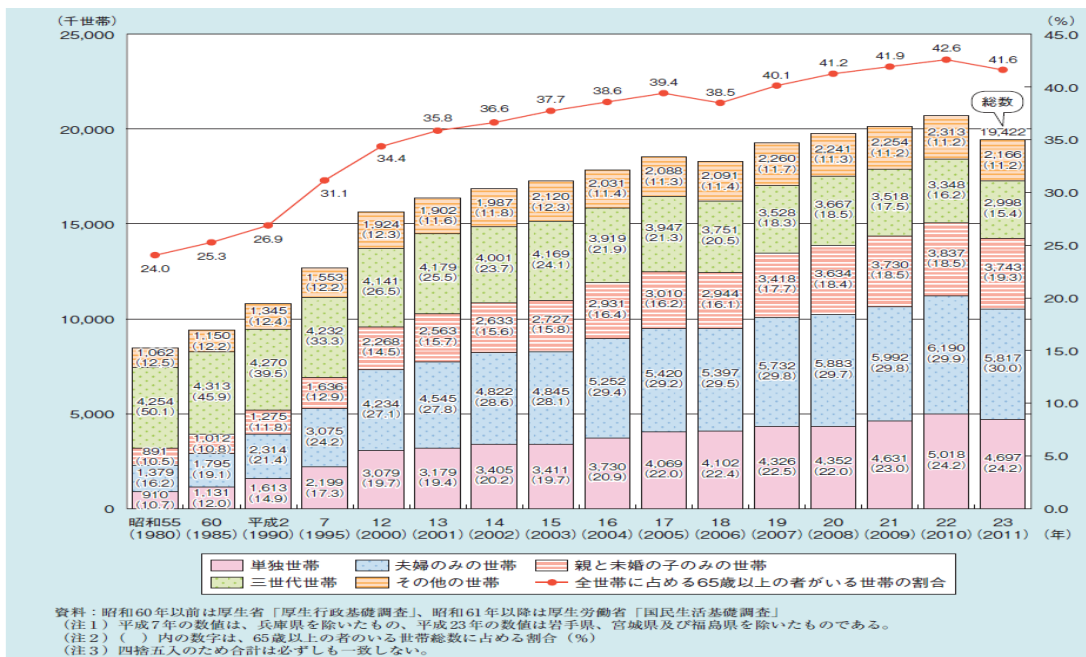
3) 世帯構造の変化

人口の移動及び高齢化の進行に伴い、世帯構造も変化してきた。2011（平成23）年現在、厚生労働省の国民生活調査により、65歳以上の高齢者のいる世帯については、世帯数は1,942万世帯、全世帯（4,668万世帯）の41.6%となってきた[23]。その中に、夫婦のみの世帯が5,817（30.0%）、単独世帯が4,697（24.2%）であった。夫婦のみの世帯と単独世帯を合わせて、65歳以上の高齢者のいる世帯の全体に54%を超えている。また、65歳以上の高齢者のいる世帯の構成割合をみると、三世帯世帯は減少傾向である一方、夫婦のみの世帯、単独世帯及び親と未婚の子のみの世帯が増えている。（図1-16参照）



資料：高齢社会白書平成 25 年版より引用

図 1-15 死因別からみた死亡率の推移図



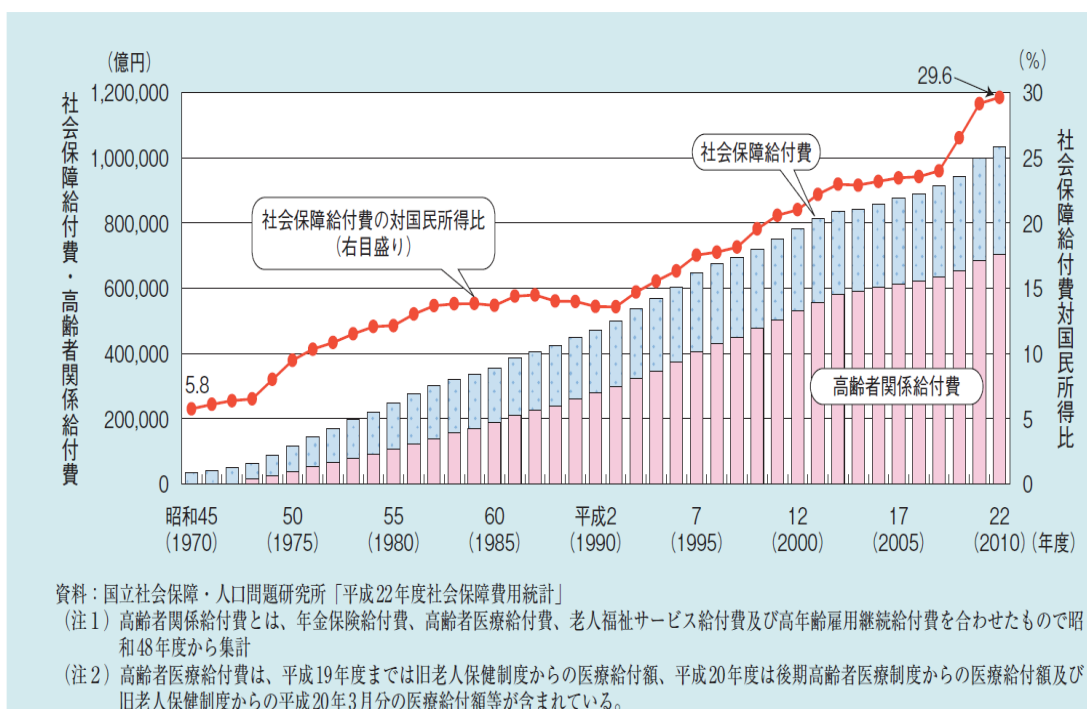
資料：高齢社会白書平成 25 年版より引用

図 1-16 65 歳以上の高齢者のいる世帯構成図

4) 社会保障給付費の推移

社会保障給付費においては、図 1-17 に示されるように、国立社会保障・人口問題研究所「平成 22 年度社会保障費用統計」により、平成 22 (2010) 年度は 103 兆 4,879 億円となり過去最高の水準となった[23]。また、社会保障給付費が国民所得に占める割合は 29.6%で過去最

高の水準となった。一方、社会保障給付費のうち、高齢者関係給付費（国立社会保障・人口問題研究所の定義において、年金保険給付費、高齢者医療給付費、老人福祉サービス給付費及び高年齢雇用継続給付費を合わせた額）については、平成 22（2010）年度は 70 兆 5,160 億円となり、前年度より 1 兆 8,738 億円増加した。



資料：高齢社会白書平成 25 年版より引用

図 1-17 社会保障給付費の推移図

1.5.2 地域包括ケアシステムの現状及び課題

日本においては、住民の QOL 向上及び幸せな健康な調和社会を構築するために、近年、少子高齢社会における前述した諸問題を解決する戦略として、地域包括ケアシステムという概念が提唱されてきた。地域包括ケアシステムとは、安定の住まいを前提として、医療・介護・保健・生活支援など日常サービスを継続的かつ包括的に提供していく仕組みであると指摘されている[24]。地域包括ケアシステムにおいては、主に住まい、医療、介護、保健、生活支援という 5 大目標を目指している。

また、少子高齢社会の特性とシステム化の特徴により、地域包括ケアシステムの構築とその円滑な運営における問題・課題は、図 1-18 に示されるように、以下の 8 つにまとめることができる[19]。

1) 連携・協働：

これからの少子高齢社会において地域住民が健康で幸せな生活をおくっていくことができるためには、質の高い医療・介護・福祉・日常生活支援など諸サービスを、それぞれの地域特性を配慮しながら効率的かつ効果的に提供していくための医療・介護・保健・生活支援諸サービス（活動）の総合的な連携・協働ネットワークが必要となってくる。

そして、このためには、これまでのような保健・医療・福祉サービス提供体制における「タテ割り」構造を抜本的に改革するとともに、一医療機関・組織による閉鎖的・完結型のサービス供給体制から地域完結型（すなわち地域ネットワーク型）への構造改革が必要となってきた。とくに、地域内における各種施設（機能）間の連携促進、多職種間の連携・協働、施設サービスと居宅サービスとの連携促進、等がここでの重要な課題であると言える。

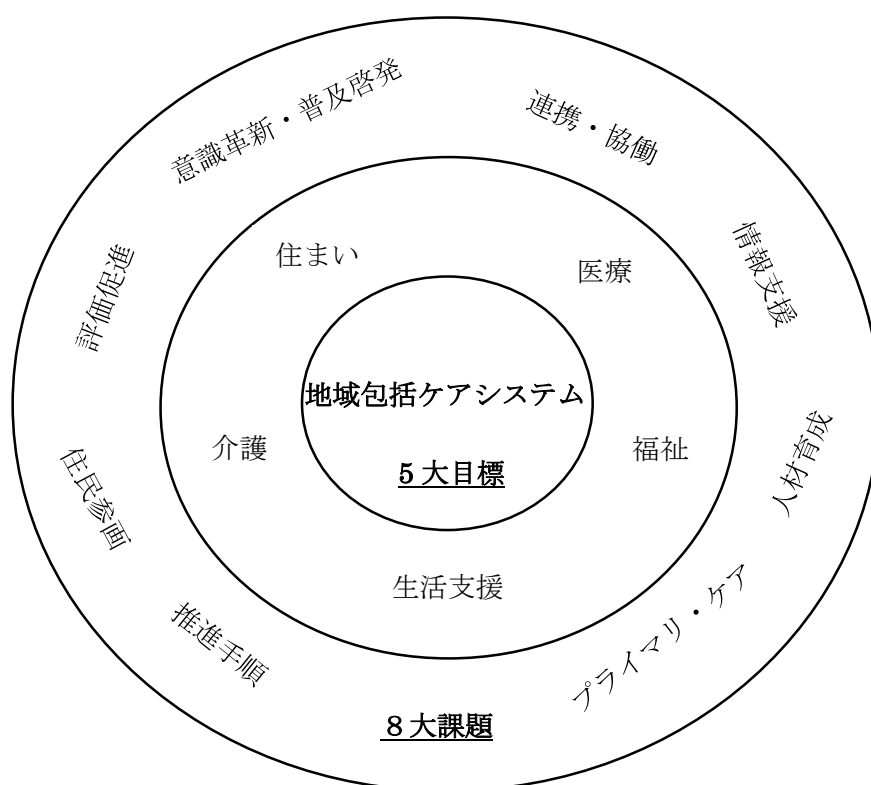


図 1-18 地域包括ケアシステムの目標及び課題

2) 情報支援：

地域住民の健康と幸せな生活を支援していくためには、より質の高い医療・介護・保健・生活支援諸サービスを総合かつタイムリーに提供していくことが必要となってくる。そのためには、関連情報の収集、蓄積、処理、伝達、提供のための情報の標準化・共有化・データベース化および各種の支援情報システムの開発とその有効利用とともに、「必要な人に、必要な情報を、タイムリー」に提供していくための情報ネットワークシステムの積極的な導入とその有効活用が不可欠な条件となってきた。とくに、これからの情報社会が進展していくなかで、この情報支援戦略への期待と役割はますます大きくなっていくものと考えられている。

3) 人材確保・育成・活用の推進：

これからの地域包括ケアシステムづくりにおいて、「人材の確保と資質向上」は重要な課題であると言える。とくに、「人が人にサービスを提供する」医療・介護・保健・生活支援諸サービスにおいては、人材の質がサービスの質に大きな影響を及ぼしている。このため

に、「人材育成における質の充実」、「人材確保」並びに「人材の有効活用」がとくに大切な検討課題となってくる。

4) プライマリ・ケア活動の推進：

生涯を通じて住民の毎日の生活に密着した適切な医療・介護・保健・生活支援諸サービスを提供していくためには、住民を中心とした地域医療関係者間における信頼関係に基づいた健康管理、予防医療、適切な診断・治療および療養・介護の実践および指導が必要である。

5) 推進手順と推進計画策定：

社会・住民ニーズに応える諸サービスの効果的な提供を目指していくためには、つねに住民の期待とニーズを把握するとともに、より良いサービスの提供をめざしてサービスを評価し、そして改良していかなければならない。また、地域包括ケアシステムにおいては、サービスを連続的かつ包括的に提供していくために、永続的にサービスの改良を計画していくための推進手順及び推進計画が必要となってくる。

6) 意識革新及び普及啓発の推進：

住民自身の健康教育・意識啓発・社会参加をはじめとして、地域関係者の生涯教育・教育研修・意識改革とともに、これらの人々の間に好ましい人間関係・信頼関係（すなわち、ヒューマン・ネットワーク）を構築していくことが重要な課題であろう。なお、地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、「賢い」住民の参画と行動が「良い」システムを創り育てる、という意識改革・及び住民の普及啓発活動がこれからの参加型社会において特に重要な課題であろう。

7) 住民参画・住民ボランティア活動・NPO 活動の普及：

地域包括ケアシステムにおけるサービス提供の最終目的は、住民の QOL 向上であるため、積極的に住民・患者・要介護者等の意見・考え方を取り込み、住民の満足度を向上させていく必要が強調されている。そのためには、諸サービス提供に関する各種会議あるいは施設等に、住民・患者・要介護者等が積極的に参画・協力していく必要があるであろう。とくに、「人が人を支える保健・医療・福祉（介護）のシステムづくり」においては、住民の参画（巻き込み）およびコンセンサスづくりも大切な課題であろう。

8) サービスの質的向上および評価システムの導入：

高品質のサービス提供が、住民利用者の満足度を高めていくことは明らかである。このため、保健・医療・福祉（介護）施設ならびにサービス提供者は、主体的に自施設（自サービス）の自己評価を実施し、そしてたえず見直し・改善をしていくことが大切である。

1.6 本論文の目的及び構成内容

本章では、本研究の背景として、社会環境の特性及び問題点・課題について考察した上で、あらゆる問題が人間に関連していることをまとめることができる。また、人間を中心とした孔子思想の影響力・内容・特徴並びに、先行研究の視点・方法などを考察した。なお、本研究においては、孔子思想に基づいて、新しい問題解決アプローチ（本論文においては、システム

づくりに同義する)を開発するため、問題の概念及び問題解決の歴史・手順・視点とともに、システム及びシステムズ・アプローチの概念及び手法・手順・種類・特徴などについて概観した。さらに、開発した孔子論的問題解決アプローチの応用分野である地域包括ケアシステムの背景としては、現在の少子高齢社会の現状及び課題について考察した。

本研究の目的は、孔子思想をKJ法により体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、客観的・数理的・合理的な「理」の側面と、主観的・人間的・感性的な「情」の側面とのバランスがとれた問題解決アプローチを開発することとする。また、本論文においては、主に問題解決アプローチ(システムづくり)の5大課題(推進手順,意識革新,連携・協働,評価システム,情報支援)について提案及び開発を試みとともに、その有効性及び効果を検証するために、具体的な地域包括ケアシステムに応用及び適応を模索する。本論文の全体概念図は、図1-19に示されるように、まとめることができる。

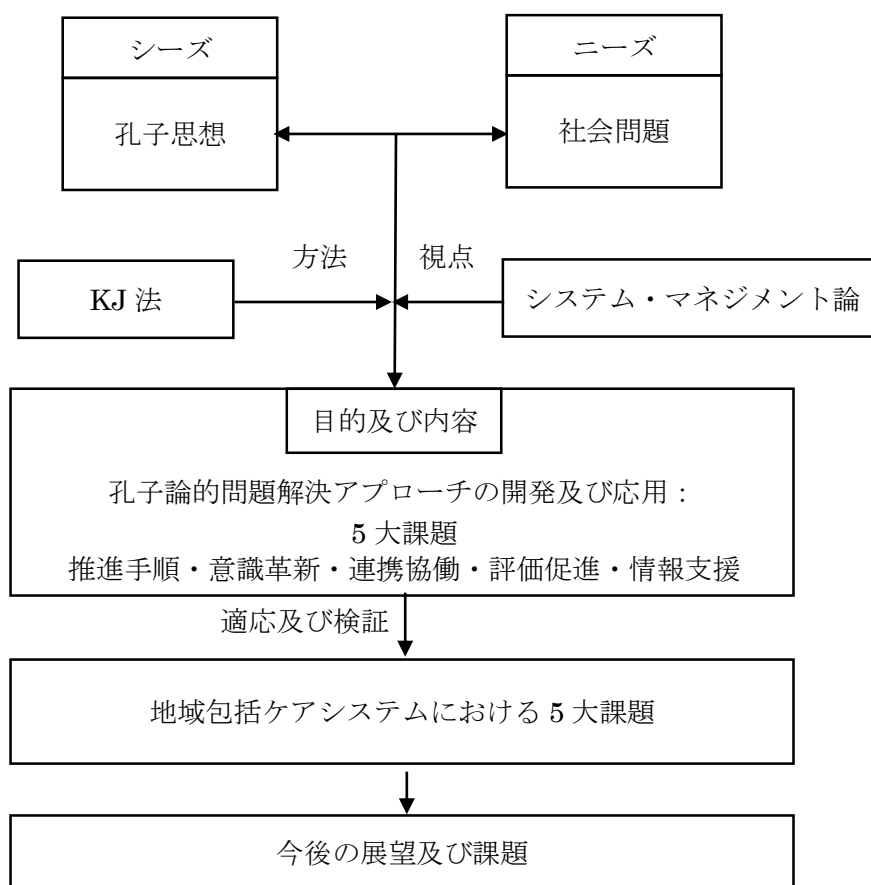


図 1-19 本論文の全体概念図

本論文は9章からなり、第2章以降の内容は以下の通りである。

第2章では、「理」と「情」のバランスがとれた問題解決アプローチを開発するために、人間主義を中心とした孔子思想(とくに「論語」に記述した孔子思想)を、KJ法を用いてシステム・マネジメント論の視点から体系化するとともに、得られた結果に基づいて孔子思想の

概要について考察する。また、体系化した結果の特徴により、システムづくりにおける応用分野などについて考察する。

第3章では、孔子的システムズ・アプローチを開発するために、第2章で体系化した手順で孔子思想を体系化した結果に基づいて、孔子的システムズ・アプローチを提案するとともに、その特徴及びほかのシステムズ・アプローチとの比較について、考察する。また、その有効性及び効果を検証するために、具体的な地域包括ケアシステムの構築及び運営に適応する。なお、提案した孔子的システムズ・アプローチの基本理念及び推進手順に基づいて、主体別に推進内容について提案する。

第4章では、孔子思想を体系化した結果に基づいて、孔子論的問題意識構造を提案するとともに、その特徴について考察する。なお、その有効性及び効果を検証するために、地域包括ケアシステムに適応する。また、地域包括ケアシステムにおける市民の意識実態を分析した上で、市民が地域包括ケアシステムに対する問題意識を明らかにするとともに、その問題点及び促進条件・方策などについて考察する。

第5章では、孔子思想をシステム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的連携意識構造モデルの提案を模索するとともに、その特徴、連携の阻害要因及び連携促進条件などについて考察及び提言を行う。なお、孔子論的問題意識構造の有効性及び結果を検証するために、豊田市における介護サービスの従事者を対象にして、連携実態調査を実施した結果を分析するとともに、連携システムにおける問題点及び検討項目を考察する。さらには、孔子論的問題意識構造の有効性を明確することを試みる。

第6章では、孔子思想をシステム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的評価構造を提案するとともに、その特徴、尺度などについて考察した上で、評価の時期において従来の評価システムとの比較を行う。なお、地域包括ケアシステムに適応するために、具体的な評価システムの設計を試みる。さらに、地域包括ケアシステムにおける医師の意識及び活動実態について分析及び評価を行う。

第7章では、情報社会における問題点及び課題をシステム・マネジメント論の視点から考察するとともに、便利で豊かな調和社会を構築するための新しい問題解決方法を試みる。そのために、孔子思想を体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点からこれからの高度情報社会における問題解決のシステム化方策について考察並びに提言を行う。

第8章では、今後の課題として、提案した孔子論的問題解決アプローチにおける具体化・モデル化、なお、システムづくりにおける課題の発展、孔子思想と他の思想との融合、さらに、具体的な適応及び検証などについて考察する。

第9章では、結論として、本研究の総括を行い、今後の課題について述べている。

参考文献（第1章）

- [1] 山本勝, 佐野正人: 新しい保健・医療・福祉システムの考え方・進め方, 医療情報電送センター出版事業部, 1989
- [2] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集第12巻, pp. 47-52, 2012
- [3] 山本勝: 保健・医療・福祉のシステム化と意識改革, 新興医学出版社, 1993
- [4] 矢野恒太記念会: 世界国勢図会 2013/14, 2013
- [5] 厚生労働省: 厚生労働白書: 社会保障の検証と展望, 厚生労働省, 2011
- [6] 中島義明, 野嶋栄一郎: 「情報」人間科学, 朝倉書店, 2008

- [7] 潘乃樾:孔子与現代管理, 中国經濟出版社, 1994
- [8] 于丹:論語力, 講談社, 2011
- [9] 傅佩榮:孔孟与現代人生, 北京理工大学出版社, 2011
- [10] 劉厚琴:導言, 20 世紀儒学研究大系-日本韓國の儒学研究, pp. 3-43, 中華書局, 2003
- [11] 洪家義:論孔子学說的適應性, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 1705-1725, 1992
- [12] 赫伯特芬格萊特: 彭國祥, 張華訳:孔子即凡而聖, 江蘇人民出版社, 1988
- [13] J. 巴恩:儒家的實用主義, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 403-408, 1992
- [14] 王樹人:儒学能在中国历史上保持文化主流地位的理论特征, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 697-712, 1992
- [15] 顧衍時:孔子思想的时代性, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 837-842, 1992
- [16] 永井輝:儒学復興—現代中国が選んだ道, 明德出版社, 2012
- [17] 傅永聚:20 世紀儒学研究大系, 中華書局, 2003
- [18] ハーバート A・サイモン:意思決定の科学, 産業能率大学出版部, 1979
- [19] 山本勝:保健・医療・福祉の私捨夢 (システム) づくり, 篠原出版新社, 2009
- [20] シューハート:品質管理の基礎概念—品質管理の観点からみた統計的方法, 岩波書店, 1960
- [21] 大学評価学会:PDCA サイクル, 3 つの誤読:サイクル過程でないコミュニケーション過程による評価活動の提案に向けて, 晃洋書房, 2011
- [22] 中野文平:システムズ・アプローチとは何か, オペレーションズ・リサーチ:経営の科学 Vol. 33(7), pp. 301-304, 1988
- [23] 内閣府:高齢社会白書平成 25 年版, 2013
- [24] 山本勝ら:地域包括ケアシステムの開発と運用に関するシステム論的考察(第二報), 日本経営診断学会論集 Vol. 6, pp. 142-152, 2006

第2章 問題解決からみた孔子思想の体系化

2.1. 緒言

一般に問題解決には、「サイエンスの目とアートの心とのバランスが大切である」と言うことができよう。科学的、合理的そして効率的な方法・手段・手順とともに、それを内面思想から支えるための問題解決の心・理念なるものが不可欠である。これまでの問題解決は、ややもすると、理性的・合理的・客観的立場、つまり、「理」を重視した問題解決方法に偏ってきた[1]。

しかしながら、これからの社会においては、特に、人が人を支える領域・人間社会などの人にかかわるシステムの場合には、理より情、感情面が重要で、人間の満足度・QOL 向上を中心とした問題解決方法が大切になってくる。そして、この問題解決方法においては、「理」だけではなくて、人間的、感情的な側面に注目していく必要があるだろう。すなわち、情の面に対する配慮も極めて大切になってくると考えられる。このように、これからの問題解決においては、より良いシステムを実現するために、理と情のバランスをいかにうまく配慮・工夫していくかが重要な課題となってくる[2]。

一方、孔子思想は、2,500年にわたり、中国人の考え方、人々の倫理観、人間関係、日常行動など身近な生活から、企業の経営、国家の管理など社会システムに至るまで、深く影響を及ぼしてきた。孔子は、当時の社会問題を解決するために、人間がどのように考え、そしてどのように行動すればより良い社会になるかを考えた。また、社会秩序を保ち、個人だけでなく、人類の幸福を増進して理想的社会を実現するために、人間として必ず守るべき道、つまり、人間の道（人道）を分りやすく平易に説いた。それらの教えは、孔子及びその弟子たちの言行録である「論語」に詳しく記録されている[3]。

「論語」は、全部で20篇、500章から構成されている。「論語」の内容は、君子（仁者）の理想形・考え方・日常行動、政治のやり方・考え方、人生の教訓、人物の評価、孔子の日常行動などについての記述であり、特に、「論語」における統一テーマはない。「論語」においてテーマを統一することは極めて難しいと思われる。

「論語」は、2,500年前の書物であるため、文法の変化・言葉の意味の変化などの原因・理由により、多くの章に対する理解も多種多様となっているのが現状である。また、当時の論語の構成並びに文章には、明確な区切りはなく、文献・学者によって、文章の内容に対する理解も異なっている。したがって、「論語」に対する理解は、時代・地域・階層・世代・視点・角度により、さまざまであると思われる。例えば、宋の朱子は、「理」をもとに、「論語」に対する理解を「論語集注」に述べている[4]。

一方、科学技術の発展に伴って、問題解決のための手段・方法・手順も進歩発展してきた。いろいろな統計方法、データ分析方法も日進月歩で開発されてきた。その中で、KJ法[5]は、近年注目されてきた定性的分析手法の一つである。特に、漠然としてつかみどころのない問題を明確にしたり、思いもしない解決策、新しい発想を得るためには、特に有効なシステム化手法である。また、KJ法は、集まった膨大な情報・データをまとめるために、多くの断片的、雑多なデータを統合して、創造的なアイデアを生み出したり、問題の解決の糸口を探っていく創造的問題解決方法の技法であると言えよう。

そこで、本章では、孔子思想をまとめるために、KJ法を活用して、「論語」の体系化を試みる。また、こうして、体系化された孔子思想が、より良い状態の実現を目指すための問題解決やシステム・マネジメントに応用できることを言及するとともに、その方向性及び考え方等

についても若干の考察を加える。

2.2. 「論語」の体系化手順

2.2.1 KJ法について

KJ法の一般的な手順は、カード化、グループ編成、配置、A型図解及びB型文章化の順に構成される。カード化は、1つのデータを1枚のカードに要約して記述する。グループ編成は、たくさんのカードの中から内容が近いものを1つのグループにまとめ、それぞれのグループに見出し(表札)をつける。作った小グループの「表札」を眺めながら、互いに親近性のあるグループをさらに中グループにまとめる。この作業を何度かくりかえし、2~3個の大グループにまとめれば、グループ化作業は終了する。配置およびA型図解は、グループ間の論理的な関連性を配慮して、大グループを配置し、A型図解を作成する。最後に、B型文章によってその関連性・経緯を詳細に説明する。なお、本章では、従来のKJ法を一部修正した方法を採用する。特に、本章で用いる修正KJ法では、カード(テーマ)及び表札は、原則として漢字一文字で表現する。

2.2.2 作業準備

本章では、「論語」における章の編成については、李哲厚の「論語今読」[6]を参考して、500章とした。また、各章の意味においては、中国語の「論語」なら、銭穆の「論語新解」[7]を参考にした。日本語の「論語」においては、吉田賢抗の「論語」[8]、貝塚茂樹の「孔子；孟子」[9]を参考にして考察を行った。

2.2.3 カード(テーマ)作成上の考え方

- 1) 本章では、「論語」の各章を原則として一枚のカード(テーマと呼ぶ。原則として、漢字一文字で表現する)に表記している。
- 2) また、本章では、解釈を単純・明快にするために、内容を可能な限り漢字一文字あるいは1つの簡単な言葉で表現する。なお、本章では、原則として、「論語」の各章の中の文字を使って表現している。また、その文字に相当する日本語が存在しない場合には、中国語の漢字をそのままに用いる。
- 3) なお、多くの漢字は多義性を有しているため、本章では、同じ漢字一文字でも異なるテーマ(意味)を表す場合もある。例えば、「道」は、方法・原理・管理などのいくつかの意味がある。
- 4) 同じ内容(テーマ)が、複数の章に重複して、紹介されている場合もある。例えば、「其の位に在らざれば、其の政を謀らず。」は、8篇の14章と14篇の27章に述べられている。そういう場合には、内容が同じでも、統計するときには、2回と計算する。「論語」においては、大事な言葉・思想は、孔子自身も何回も強調しているために、複数の章において紹介されていることがわかる。

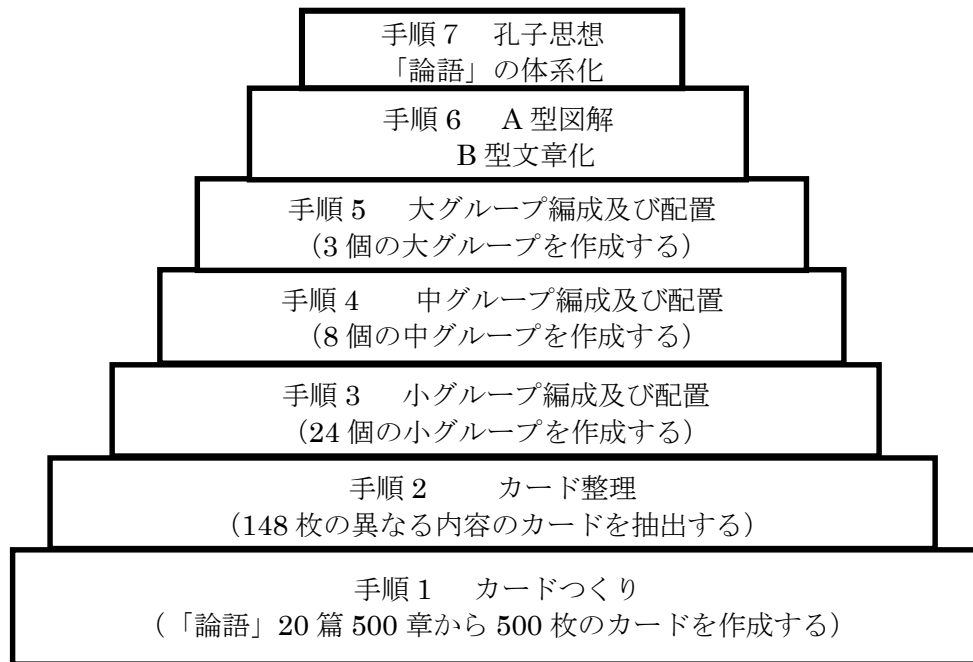


図 2-1 「論語」体系化の手順

2.2.4 作業手順

手順1) カードづくり

孔子思想（「論語」）の体系化の手順は、図 2-1 示される通りである。まず、「論語」の各章に対して、その内容によって、それぞれ漢字一文字で表現できるカードを作成する。20 篇 500 章から総計 500 枚のカードを作成した。なお、同じ文字なら、一枚のカードとして計算する原則に従って、500 枚のカードを整理した結果、合計 148 個の異なるカードが作成された。また、表 2-1 から明らかのように、その中に、「仁」というテーマ（漢字）が出る頻度が 37 回と最も高いことがわかる。また、発生頻度 6 回以上のテーマの文字数は、20 個になった。なお、4 回・5 回はそれぞれ 6 文字であり、3 回は 15 文字であり、2 回は 28 文字になった。1 回出るテーマ（漢字数）は、73 個になった。

手順2) 小グループ編成及び配置

意味が近いカードを 1 つの小グループに編成するとともに、そのグループの中から、1 つのカード（文字）を抽出し、その小グループの「表札」としてつけられる。例えば、「生」・「死」・「天」・「命」から構成される小グループの中から、「命」を抽出し、その小グループの表札とした。また、部分のカード（文字）は、このグループに入れるし、そのグループにも入れるなら、全部「その他」のグループに入る。後、それらのカード（文字）が表札として使われる。このような手順を行うことにより、孔子思想（「論語」）の内容は、表 2-2 に示される 24 個小グループ（その他を除く）から構成されることが分かった。

表 2-1 「論語」における各章のテーマ「漢字」とその発生頻度

発生頻度	各章の内容・テーマ									
6回以上	仁 (37)	道 (29)	政 (25)	学 (22)	君子 (19)	人 (16)	徳 (15)	知 (15)	楽 (13)	礼 (12)
	孝 (10)	言 (10)	時 (9)	評 (9)	聖 (8)	教 (7)	士 (6)	賢 (6)	中庸 (6)	徒 (6)
5回	聞	命	行	文	事	用				
4回	察	思	恥	為	過	悪				
3回	交	詩	器	変	勇	问	天	恕	志	謙
	憂	進	名	友	安					
2回	省	冤	師	信	君	祭	義	仕	观	富
	乱	畏	死	惑	盜	達	正	患	贼	居
	語	恒	性	民	疾	喪	直			
1回	席	和	使	哭	佞	数	求	沽	食	病
	郷	群	位	慎	明	剛	弘	更	爱	約
	受	害	方	隱	足	簡	辞	惰	忠	臣
	車	禄	固	歌	諾	儒	戒	実	斋	衣
	助	忍	成	禱	訟	免	移	改	作	夢
	奨	争	貧	檢	才	生	拒	権	海	誠
	葬	征	一	絶	財	欺	避	色	告	何
	敬	中	成人	怨						

* () 内の数字は、各章における発生頻度を表す。例えば、「仁」というテーマ：「漢字」は、「論語」の中の37の章においてカード化されたことを表す。

表 2-2 小グループの構成内容

番号	小グループの表札	各小グループに含まれる各章のテーマ（カード：漢字）							
1	仁	愛	徳						
2	命	天	生	死					
3	性	何	夢						
4	観	問	察	証					
5	思	求	明	誠	知				
6	憂	悪	患	惑	恥	病	疾	怨	
7	聖	成人	君子	賢					
8	君	士	民	使	盗	賊			
9	師	友	徒						
10	言	語	海	辞					
11	文	詩	作						
12	位	臣	器						
13	用	才	受	沽	儒	実			
14	正	礼	簡	忠	約	謙	敬	交	
15	告	隠	拒	欺	佞	斂			
16	慎	避	畏	絶	戒				
17	害	冤	乱	免	貧				
18	為	行	仕	事	禄	訟	情	時	
19	義	数	中庸	固	群	忍	争		
20	恕	信	诺	直	剛				
21	達	実	足	富	財	助	成	評	奖
22	改	過	更	変	移	勇			
23	道	一	恒	進	弘	楽			
24	郷	居	衣	食	車	祭	席	孝	
		色	斎	葬	歌	哭	喪	禱	
25	その他	志	聞	学	人	教	権	名	政

手順3) 中グループ編成及び配置

小グループを編成した手続きと同様に、「道」と「郷」という二つの小グループを除いて、表 2-3 に示すように、22 個の小グループから 8 個の中グループを編成した。つまり、「志」・

「学」・「人」・「教」・「名」・「政」・「和」・「省」という8個の中グループができた。なお、これらの中グループの表札は、小グループ編成と同様な方法により、その他のグループ中のカードを取り出し、表札をつけた。例えば、中グループの表札である「学」は、「観」・「思」・「憂」という三つの小グループから構成されている。

表 2-3 KJ法により体系化された「論語」の全体構成

番号	小グループ名札	中グループ名札	大グループ名札	
1	仁	「志」 志向・目標	「聞」： 「聞道」 知識・真理 原則の追究	
2	命			
3	性			
4	観	「学」 問題解決の学習		
5	思			
6	憂			
7	聖	「人」 学習の対象		
8	君			
9	師			
10	言	「教」 教育・意識改革	「権」： 「権道」 真理・原則 の実施	
11	文			
12	位	「名」 役割分担		
13	用			
14	正	「政」 政治・知識の応用		
15	告			
16	慎			
17	害			
18	為			
19	義	「和」 バランスをとる		「安」： 「安道」 安心・安全 評価・検査
20	恕			
21	達	「省」 評価・検査		
22	改			
23	道	フォローアップ・継続可能性の追求		
24	その他		郷	

手順4) 大グループ編成及び配置

「志」・「学」・「人」・「教」・「名」・「政」・「和」・「省」という8個の中グループと小グループ

「道」から同様の手続きにより、表 2-3 に示すような「聞」「権」「安」という 3 個の大グループ及び表札が編成された。その中の大グループ「聞」は、「志」・「学」・「人」という 3 個の中グループから構成されている。「権」という大グループは、「教」・「名」・「政」という三つの中グループから構成されている。なお、大グループ「安」は、「和」・「省」という二つの中グループと小グループ「道」から構成されていることがわかった。

手順 5) 図解及び文章化

本章では、便宜上、図解ではなく、表 2-3 に示すように、「表解」で論語の体系化の結果を要約することとする。表 2-3 に要約されるように、「論語」に述べられている孔子思想は、「聞」・「権」・「安」という三つの柱（基本概念）に要約することができよう。すなわち、「聞」は、知識・原理・真理などを身に着けることであり、問題解決方法を見つける手順に関する概念である。「権」は、現実の状況を考慮しながら、「聞」の結果・知識・方法・原理などを実行・応用していくことである。「安」は、「聞」・「権」の目的に関する概念であり、「聞」・「権」を検査・評価する標準に関する概念でもある。すなわち、「聞」は、「権」・「安」の前提であり、手段でもある。「権」は、「聞」の応用・実行であり、目的「安」を達成する手段でもある。「安」は、「聞」と「権」の結果である。以上の概念などについては、次章で詳しく述べる。

2.3. 体系化された孔子思想の全体概要

図 2-2 に示されるように、KJ 法で体系化した孔子思想（「論語」）の概要は、主に「聞」・「権」・「安」という 3 個の大グループ（3 大基本概念）から構成されることを述べた。そこで、本節においては、孔子思想を構成する 3 つの基本概念「聞」・「権」・「安」について考察を行う。

1) 「聞」の概念について

大グループ「聞」の意味は、「朝道を聞けば、夕べに死んでもかまわない」から選ばれた。「聞」という漢字の意味は、名詞においては知識、見聞、聞いたこと、情報、有名など、動詞においては「知る」、「きく」などの意味がある。ここでは、三つの角度から「聞」を考えている。「聞」の下位グループ、中グループの中に、「志」が孔子の人生の目標であり、「学」がその目標を達成する方法・手段であり、「人」が「学」・「志」の対象になる。

「道」・「仁」に志すことは、孔子の目標・夢である。「学」の方法・手段は、「訊く」、「見る」、「観る」、「察」、「視」、「思」などがある。例えば、「太廟に入りて、事毎に問う」、「多く聞き、その善き者を選びてこれに従い」などの名句がある。また、「人」については、「賢を見ては齋しからんことを思い、不賢を見ては内に自ら省みよ」のように、いわゆる周りのすべての「人」が「聞」の対象になっていると言える。

2) 「権」の概念について

「権」の意味は権衡で、「はかる」、バランスを取るなどの意味であり、「ともに学ぶべき

君たり, 臣は臣たり, 父は父たり, 子は子たり」のように, 人材・役割分担などについて, 適材適所になれるかを判断しなければならない。これは, 「権」の知恵にかかわっている。政治がある程度「教育」であると言える。自分の方針・理念を貫くために, 意識向上・人材育成などがしなければならない。それも政治の課題であると言えるかもしれない。また, 教育も相手によって, 方法・手段なども違うので, その過程も判断しなければならない。そして, 「教」も「権」とつながっているし, 「権」の一つの大事な課題である。

3) 「安」の概念について

「安」の意味は, 安定・安心・安全で, 「己を修めて以て人を安んず。己を修めて以て百姓を安んず」から選ばれた。孔子思想においては, 道を聞く目的は, 自分だけではなくて, 天下を安定・安心させるためであり, 天下の百姓の生活を向上するためであると言える。「安」は, もともと孔子思想中の本質・目標であると考ええる。

安心・安定・安全の具体的な表現は, 「和」であろう。特に, 人間関係においては, バランスが重要視されている。また, 結果・過程などの各方面においては, バランスをとって, いい結果になることは, 目標であると考ええる。また, その結果・過程を評価・検査することは, 「省」である。「省」は, 反省・検査・評価の意味であり, 「安」の検査・評価の手段である。「道」は, 継続可能性の追求・フォローアップである。

2.4. システム・マネジメント分野への応用

孔子思想は, 「人道」について, 多くの有益な教訓を述べている。特に, 500 章から構成されている「論語」のなかから最も多く, 37 個の章において「テーマ」として選択された「仁」は, 孔子の人生目標であり, 人生の原則・理念でもあり, 現在でも人間関係・教育・政治などにおいても注目を集めている。また, 孔子思想に基づいた「理」と「情」のバランスを取った孔子的問題解決理念・方法・手順は, 現代の問題解決に有効であると思われる。そこで, 本章では, 図 2-3 に示すように, 以下の 5 つの課題・視点・分野から, システム・マネジメント分野における孔子思想の応用について若干の考察を行う。

1) 推進手順 (システムズ・アプローチ) への応用

体系化された孔子思想は, 「聞」, 「権」, 「安」で要約できることが明らかとなった。なお, その「聞」, 「権」, 「安」は, 問題解決サイクルとして言われている「Plan→do→see」に対応すると言えよう。「聞」は, 計画だけではなく, 目標・達成方法・手段などにも追求している。また, 「権」は, 単純に実行することだけではなく, 実行する際に, 当事者の人間関係・バランス・実行標準などにも注目している。最後に, 「安」は, 評価・検査のみならず, 関係者・当事者・社会に安定・安心を与えることに重点が置かれている。そのように, 「聞」, 「権」, 「安」は, 新しい問題解決思想・手順・方法として, システムズ・アプローチに応用する可能性は極めて高いと考えられよう[10]。

2) 問題意識・意識革新への応用

孔子思想においては、最も大事な理念は、「仁」である。「仁」の理念は、人にやさしく、人間本位である。社会の立場・視点を尊重し、社会ニーズ及び住民ニーズの実態を把握し、人間の問題・人間社会の問題を解決していく上で、極めて有効な考え方や進め方を提案すると言えよう。

また、孔子思想においては、問題解決の最終目的は、問題解決だけではなく、人間の幸福・満足度、人間社会の安全・安定・安心、QOL (Quality of Life) 向上などのためである。このように、孔子思想は問題解決の本質について、今後多くの教訓を教えてくれるであろう。

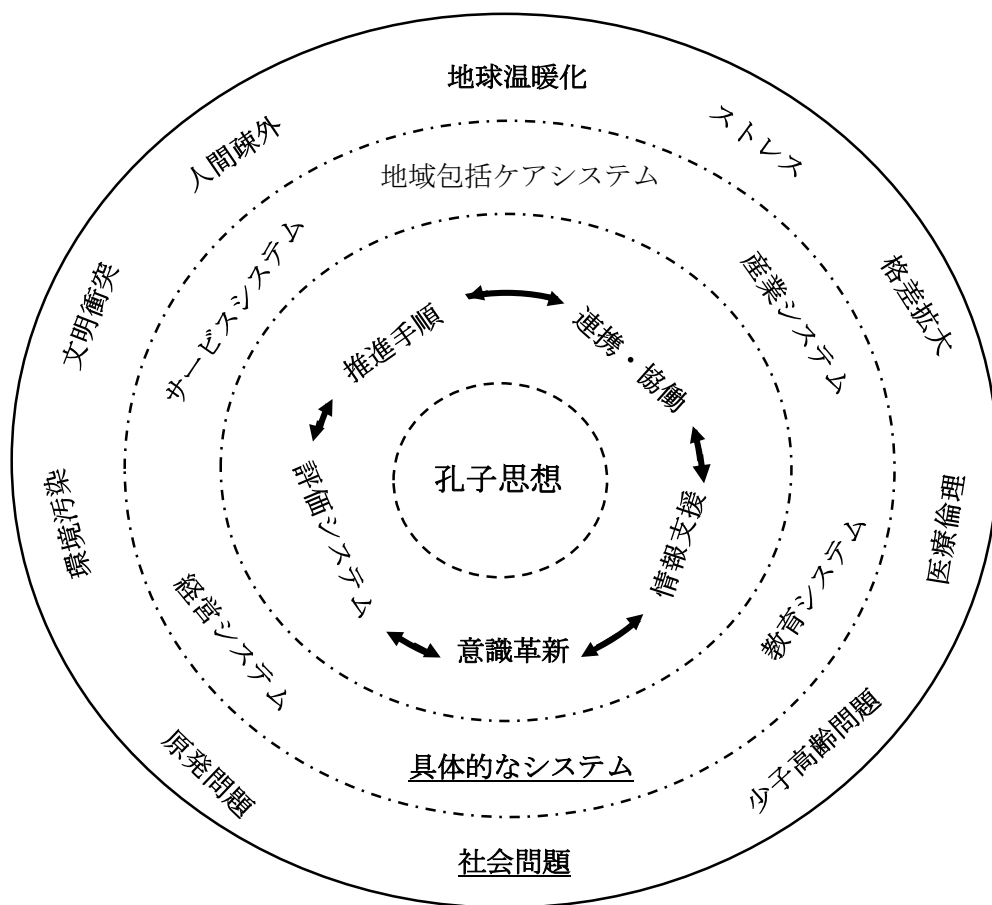


図 2-3 孔子思想(「論語」)の応用領域

3) 連携・協働への応用

近年、科学技術の発展、情報社会の到来、グローバル化の拡大、社会構造の変化などの社会環境が激変していくとともに、社会的分業の進行により、多分野・多部門・多職種間において効率的かつ効果的な連携が必要不可欠な条件となってきた。連携は、「システム全体の目的達成のため、システム関係者(組織・機関等)がそれぞれの役割・能力・機能において、対等

の立場で協力（協働）しあっていくこと」を意味する。それは、各関係者間において、関わっているだけの「連係」ではなく、相互に信頼し、協力しあっていけるような融合・統合・一体化した有機的な「連携」が連携の理想形である。

一方、顕在化あるいは潜在化している各種問題（システム）解決のための方法・体制づくりとして、当事者だけではなく、当該関係者・地域・社会の全員を含めて、「官・産・学・民」による参加・実行・連携・協働などは、孔子の考え方・教え・知恵と多くの類似点・共通点がある。したがって、「論語」に紹介されている孔子思想は、人間主体性・全員参画を中心に推進していく課題であるといえる。

4) 評価システムへの応用

問題解決においては、システムの実態把握、現状分析、問題点を明らかにするとともに、実施の結果を判断・評価するシステムが極めて重要な課題である。また、一般的に、評価とは、物事の価値を明らかにすることであり、物事の価値を判断することであると言える。さらに、日常生活においては、人間はそれぞれの価値観（価値の認識）及び判断基準に基づいて物事を判断しながら行動及び生活していく。そこで、人間の評価システムの理想形を究明することが重要かつ不可欠な課題となってきた。

一方、人間及び人間社会の問題を解決するために、中国の哲学者である孔子は、人間のあるべき姿である「君子」の生き方・考え方・進め方等を人間の基準として、人間及び人間社会を評価してきた。そういう孔子的評価の方法・角度・視点・基準・対象などにおいては、時代・社会環境などが異なっても、今日でも参考になるかもしれないと言えよう。

5) 情報支援への応用

近年の ICT（情報通信技術）の進歩発展にともない、インターネット犯罪、ウイルス侵害、人間関係疎外、情報倫理観及び社会責任感の欠如などが深刻な社会問題となってきた。これらの諸問題を解決するために、それらの問題の裏に潜む人間の意識及び価値観における問題点を見つけることが先決条件であろう。そこで、技術面だけからの解決方策ではなく、技術面と人間性の両面のバランスを融合した総合的かつ相互補完的な解決方策こそが、これからの「人が人を支える社会」においては、有効な問題解決方策である。

一方、孔子思想は、人間一人ひとりの能力、倫理観、態度、礼儀及び価値観などの面を重視するとともに、人間社会における人間関係・相互関係・社会責任感等の面を大切にしている。そこで、これからの情報社会においては、孔子論的問題解決方策を重要視していくことが期待されている。

2.5. 結言

古代社会と現代社会で、人間の生活はある程度共通性と共同性があると考えられる。2,500年前の社会における人間の道、生き方を説いた孔子思想（「論語」）が、現代社会に生き

る自分たちに、いったい何の役に立つのか、その生き方・進め方・考え方・やり方などを問い続け、考え、実践して行く必要がある[12]。とくに、現代の少子高齢社会において、生きがいのある人生 QOL (Quality of Life) を向上するためのシステム・マネジメントに有効であることを究明していくことが、本研究の目標の一つでもある。

孔子思想をシステム・マネジメント分野に応用していくことは、今後の魅力的なシステム・マネジメント課題である。とくに、重要なシステム化課題である人間関係、信頼関係、組織作り、ネットワークづくり、人材育成、意識改革、システム連携・協働などにおいて、この孔子思想を応用することは極めて有意義な研究であると考えられる。今回本章で考察した孔子思想「論語」の体系化への試みはその応用への第一歩である。

参考文献（第2章）

- [1] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2012
- [2] 山本勝: 保健・医療・福祉の私捨夢 (システム) づくり, 篠原出版新社, 2007
- [3] 烏恩溥: 仁義礼智信和現代化, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 2587-2603, 1992
- [4] 朱熹: 論語集注, 1983, 中華書局
- [5] 川喜田二郎: KJ 法: 渾沌をして語らしめる, 中央公論社, 1986
- [6] 李哲厚: 論語今読, 天津社会科学院出版社, 2007
- [7] 錢穆: 論語新解, 生活・讀書・新知三聯書店, 2005
- [8] 吉田賢抗: 論語, 明治書院, 1988
- [9] 貝塚茂樹: 孔子; 孟子, 中央公論新社, 1978
- [10] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいたシステム・マネジメントに関する一考察, 日本経営診断学会第 44 回全国大会予稿集, 別府大学, pp. 188-191, 2011
- [11] 楊先挙: 孔子マネジメント入門, 日本能率協会マネジメントセンター, 2010

第3章 システムズ・アプローチにおける孔子論的考察とその応用

3.1 はじめに

問題解決すなわち広義のシステムづくりにおいては、客観的、合理的かつ効率的な「理」の側面とともに、人間的・感性的・主観的な「情」の側面から総合的に推進していくことが大切である。しかしながら、これまでのシステムづくりは、ややもすると、理性的・合理的・客観的「理」の側面を重視したシステムづくりに偏ってきた傾向がみられる。これに対して、例えば、これからの少子高齢社会においては、QOL（Quality of Life）向上、尊厳ある生活などの主観的な目標を達成するためには、上述の「理」の側面と「情」の側面とのバランスの取れたシステムづくりが望ましいと考えられる。また、システムづくりにおける諸課題の中でも、システムの計画・実施・評価等から構成される推進手順（システムズ・アプローチ）はとくに重要なシステム化課題の一つである。

そこで、本章では、「理」の側面と「情」の側面とのバランスの取れたシステムズ・アプローチを開発するために、人間の生き方・考え方・社会の在り方等について説いている孔子思想（「論語」に記述された孔子思想）を、KJ法を用いて、システム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的システムズ・アプローチの開発及び提案を行う。また、ここで提案した孔子論的システムズ・アプローチの特徴について、従来の代表的なシステムズ・アプローチとの比較分析を行う。

さらに、ここで提案した孔子論的システムズ・アプローチの一般的特性及び特徴に基づいて、人が人を支えるシステムの一つとして、とくに、医療・介護・保健・日常サービスなどを継続的かつ包括的に提供している地域包括ケアシステムの開発に適応及び検証することを試みる。なお、ここでは地域特性を配慮した地域包括ケアシステムの構築及び運営のための詳細な推進手順を提案する。

3.2 孔子論的システムズ・アプローチの提案

3.2.1 緒言

問題解決すなわち広義のシステムづくりには、「サイエンスの目とアートの心とのバランスが大切である」と言うことができよう。図 3-1 のシステムづくり概念図に示されるように、システムづくりにおいては、科学的、合理的そして効率的な方法・手段・手順とともに、それを内面思想から支えるためのシステムづくりの心・志・理念なるものが不可欠である。

しかし、これまでのシステムづくりは、ややもすると、理性的・合理的・客観的立場、つまり、「理」を重視したシステムづくりに偏ってきた。また、従来のシステムズ・アプローチでは、主に現状と理想のギャップを問題として、技術・情報・制度・経営手法などに関する「モノ」や「コト」がシステム構築（改善）の対象となってきたのに対して、人間性、感受性、感性など精神的、倫理的、哲学的な「情」の側面、特に、信頼関係・人間関係・礼儀・マナー・尊敬などに関するシステム思考は、必ずしも十分配慮されてきたとは言い難い。とくに、「ヒトの、

ヒトによる、ヒトのための」社会システムづくりにおいては、上述の「理性・科学面」と「感性・人間面」の両面からのバランスの取れたシステムづくりが望ましいと考えられる[1]。

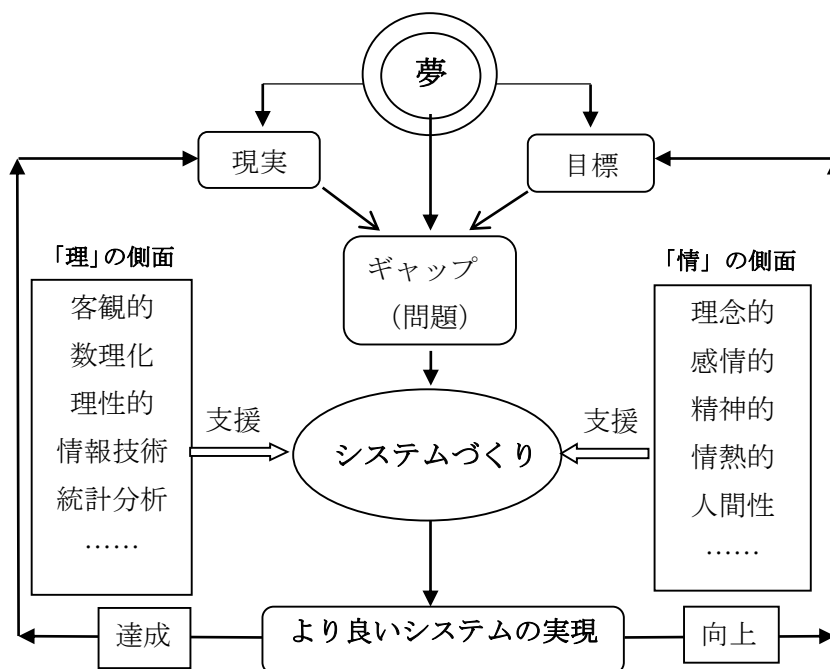


図 3-1 システムづくりの全体概念図

そこで、これからの人間社会の変化に対応するために、人間本位、人間にやさしく、「理」と「情」のバランスのとれたシステムズ・アプローチを考察および構築（創造）していくことは、極めて重要なシステム化課題になってくると言えよう。なお、本論文で用いている「システムズ・アプローチ：systems approach」とは、効率的かつ効果的な問題解決を進めていくための進め方（手順）及び考え方（理念・方針）を総称したものと定義する[2]。

一方、2,500年前の中国哲学者である孔子は、当時の社会問題を解決するために、倫理観、人間関係、日常行動などの身近な生活に、問題解決方法の糸口を探していた[3]。孔子は、「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、小者は之を懐けん」を人生目標・社会の理想形に掲げている。また、社会の要素である個人として、どのように生きるべきか、人間として必ず守るべき道、つまり、人間の道（人道）を分かりやすく平易に説いた。その人間の道とは、理だけではなく、理と情のバランスの取れた生き方・進め方・考え方・やり方を問い続け、考え、実践することであろう。これらの教え（このような人間の道を述べている孔子思想）は、孔子の弟子たちによって編成された孔子及びその弟子たちの言行録である「論語」にまとめられている[4]。

「論語」は、全部で20篇、500章から構成されている。「論語」の内容は、人間の理想形である君子（仁者）の考え方・日常行動、政治のやり方・考え方、人生の教訓、人物の評価などについての記述である。特に、「論語」には統一テーマがないため、「論語」を体系化すること

は極めて難しいと思われる。

また、科学技術の発展に伴って、問題解決のための手段・方法・手順も進歩発展してきた。多種多様な統計手法、データ分析方法も日進月歩で開発されてきた。その中で、KJ 法[5]は、近年注目されてきた定性的分析手法の一つである。

そこで、本節では、KJ 法を用いて「論語」に述べられている孔子思想を体系化するとともに、それらの分析並びに考察結果を基に、システム・マネジメント論の視点から「孔子論的システムズ・アプローチ（仮称）」を提案する。また、ここで提案した孔子論的システムズ・アプローチの特徴を明らかにするとともに、従来のシステムズ・アプローチとの比較研究及び今後の応用領域についても若干の考察を行う。

3.2.2 KJ 法による「論語」の体系化

3.2.2.1 「論語」の体系化手順

KJ 法は、川喜田二郎氏がデータをまとめるために考案した創造的問題解決技法であり、特に、漠然としてつかみどころのない問題を明確にしたり、創造的な解決策や新しい発想を得る等のために用いられる。この KJ 法の具体的な実施手順は、カード化、グループ編成、配置および A 型図解、B 型文章化の順に分けられる。

なお、本稿で用いる KJ 法は、カード（テーマ）及び表札づくりにおいては、原則として漢字一文字で表現する。また、「論語」は、全部で 500 章の長文から構成されているため、各章の内容・本質を表現する簡潔な漢字一文字でまとめるよう工夫した [6]。

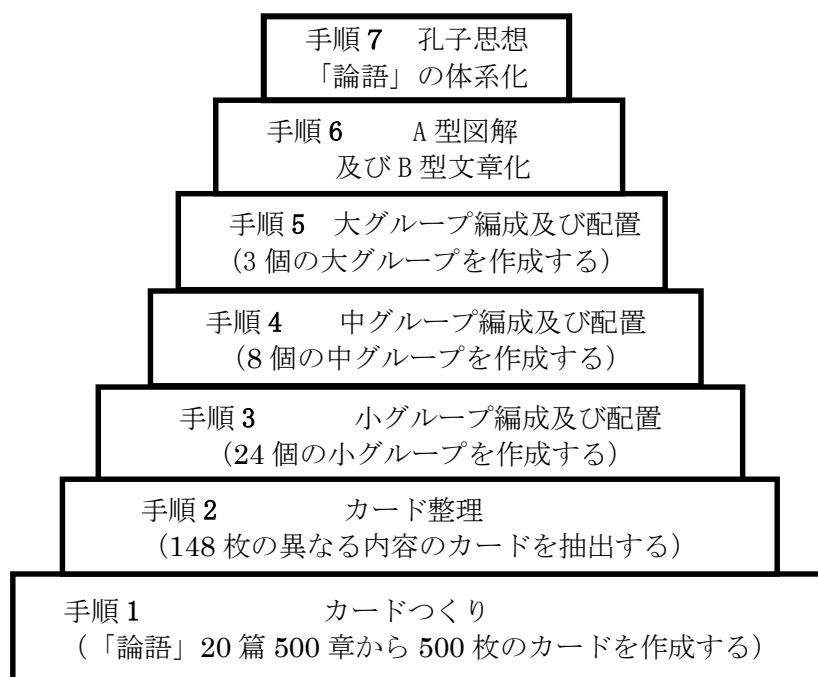


図 3-2 「論語」の体系化手順

そこで、KJ 法を用いて、「論語」に述べられている孔子思想を図 3-2 に示される実施手順

ランス,各実行者の役割分担を明らかにし,総合的かつ計画的に進めていくことが重要である。すなわち,問題解決手順における「Do」の段階に対応すると言えよう。

「安」の概念には,安心・安全・安定などの意味があり,「己を修めて以て人を安んず。己を修めて以て百姓を安んず」のように,人生・社会の最終目標,実施した結果を評価・反省・改善する手順である。すなわち,問題解決手順における「See」の段階に対応すると言えよう。

3.2.3 孔子論的システムズ・アプローチの手順

前節では,KJ法を用いて孔子思想「論語」を3つの概念:「聞」,「権」,「安」に体系化した。また,これらの3つの概念「聞→権→安」は,問題解決サイクルとしてよく知られている「Plan→Do→See」に対応することができる。以下に,孔子論的システムズ・アプローチの概要を説明するとともに,その特徴について考察する。

1) 手順1:目標設定—「志」

「吾,十有五にして,学に志す」のように,「道」を追求していく(聞道)には,計画・目的・目標設定,目的追求,強い問題意識を持つことが,極めて重要である。また,「まことに志せば悪しきこと無し」,「道に志す」のように,夢・理念,方針を設定し,また,人間のQOL向上・社会満足度向上・健幸社会の構築・上位計画・最終目的・目標(大同世界)理想形などの追求などを含めている。これが孔子論的システムズ・アプローチの手順1の目的設定・目標追求の「志」である。

2) 手順2:実態調査—「学」

孔子思想の中に,「文武の道,未だ地に墮ちずして人に在り,賢者は其の大なる物を知り,不賢者は其の小なる物を知る」のように,「学」の調査対象はすべての人間になる可能性が高い。また,「学」の方法として,「敏にして学を好み,下問を恥じず」のように,積極的に調査意識を強く持って,実情を見通す眼力も大事である。「学べば則ち固ならず」のように,社会の変化・実態の変化に順応させながら,調査方法・意識も変化し・対応していくことが必要であろう。

「学」は,孔子論的システムズ・アプローチの第2ステップとして,つねに,社会のニーズ・住民の声などを聴き,実態調査,問題点を発見し,問題点の把握,情報収集などを推進していくことが重要である。

3) 手順3:システム分析—「思」

「学びて思わざれば則ち罔し」のように,学んだ知識,収集した情報を整理・整頓・分析を行わず,そのまま使用することは危険である。また,「衆之を悪むも必ず察す。衆之を好むも必ず察す」のように,情報は,角度・立場によって,価値が異なることもあろう。一般に,システムは多面性を有しているため,多種多様の情報を収集・分析・評価していくことが必要で

ある。

「思」を、孔子論的システムズ・アプローチの第3ステップとして、調査・収集された情報に基づいて、地域特性分析・社会変化分析・社会ニーズ分析・システム特性分析・実態分析・構造分析などが行われる。

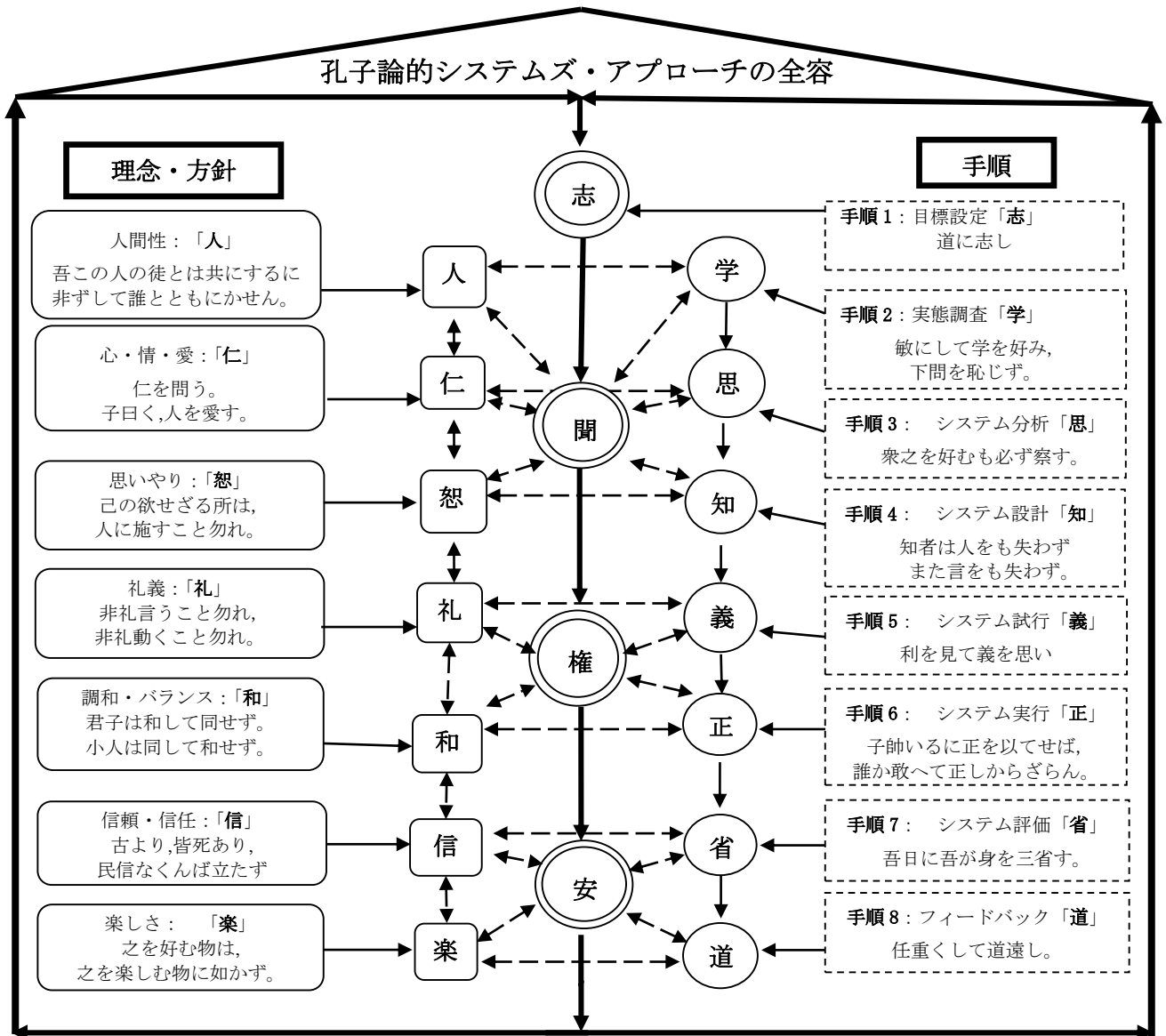


図 3-4 孔子論的システムズ・アプローチの全体概要図

4) 手順4：システム設定—「知」

「民の義を務め、鬼神を敬してこれを遠ざく。知と謂う可しと」のように、「知」は、まず、学んだ知識・実態調査・分析結果に基づいて、顧客・社会・国民の利益・ニーズ等を明らかにすることである。

システムの顧客・関係者の本音, 社会の実情・ニーズなどを明らかにするとともに, 顧客・社会・国民の利益・ニーズなどを総合的に満足するために, QOL 向上 (Quality of Life) , 国民満足度, 人間本位の人間にやさしいシステムの設計が必要である。また, 「多く聞き, その善き者を選びてこれに従い」のように, 設計した複数案の中から適切な評価尺度に基づいて最適案を選択することになる。

このように, 「知」は, 孔子論的システムズ・アプローチの第4ステップとして, 解決案の検討, 選択, また, システムの最適設計などから構成される。

5) 手順5 : システム試行—「義」

孔子思想において, 「君子の天下に於おけるや, 適も無く, 莫も無し, 義とともに比す」のように, 「義」は人間の世渡りの標準として, 社会・国民の真の利益をめざしている。一方, 義は, 利とのバランスが重要である。「利を見て義を思い」のように, 自分の利益と義のバランスをとるときに, 特に, 社会, 地域, 人間の利益に貢献できることは極めて重要である[7]。

このように, 「義」は, 孔子論的システムズ・アプローチの第5ステップとして, システムを試行するときに, 自分の利益だけでなく, システムの関係者, 社会, 地域, 自然等の総合的な満足 (例えば, 近江商人の「売手・買手・世間」の三方良しの精神に相当) に貢献できることを目指している。

6) 手順6 : システム実行—「正」

「正」という概念は, 「政は正なり。子帥いるに正を以てせば, 誰か敢へて正しからざらん」のように, 管理者・実行者のリーダーシップなどに密接に関係する。また, 「其の身を正しくする能はずんば, 人を正しくするを如何せん」のように, システムの管理者・実行者がまず自分自身からシステムを, 「義」に従って実行していくことが必要である。また, 「之に先んじ之を勞うと。倦むことなかれと」のように, システムの関係者との連携・協働, 地域, 社会とのバランスを十分に配慮して, システムを随時調整・改善していくことが大切である。すなわち, 「正」は, 孔子論的システムズ・アプローチの第6ステップとして, システムをバランス良く実施することである。

7) 手順7 : システム評価—「省」

「吾日に吾が身を三省す」のように, 自分が行ったことを省みて, 謙虚に反省することが大切である。また, 「賢を見ては斎しからんことを思い, 不賢を見ては内に自ら省るなり」のように, 他人の行動を客観的に評価し, これを自己評価の参考とすることも同様に重要である。

また, 「過ちては則ち改めるに憚ること勿れ」, 「過ちて改めざる, 是を過ちと謂ふ」のように, 失敗, 誤りから問題の本質・原因を理解し, 改善していく姿勢が大切である。反省の目的は, 「過を再びせず」のように, 更に改善・向上させることである。

このように、「省」は、孔子論的システムズ・アプローチの第7ステップとして、実行したシステムの結果を検査・評価するステップである。

8) 手順8：フォローアップ「道」

「任重くして道遠し」のように、「道」を永続的に追求していくとともに、「義を行いて以てその道を達す」のように、「義」を実施することは、「道」を達成することになる。この「道」は、本システムズ・アプローチの第8ステップとして、フォローアップのステップであり、人間の前向きの「道」であり、システムの持続可能性を追求していく「道」でもある。

以上述べたように、孔子論的システムズ・アプローチの全体の流れは、図 3-4 のように要約される。

3.2.4 孔子論的システムズ・アプローチの理念

図 3-4 に示される孔子論的システムズ・アプローチは、3.1 節で述べた具体的手順とともに、孔子思想に基づいた理念・方針に従って推進されていく。特に、下記の7つの漢字で表現される孔子思想が基本理念である。

人間本位の「人」を中心に、愛・心の「仁」を込めて、思いやりの「恕」で、信頼・「信じ」あうことで、以上述べた手順を進めていくのが孔子の教えである。

また、関係者の人間関係、連携、社会・地域、人間と自然などのバランス「和」をとりながら、社会のルール、会社の規範、国あるいは世界の制度などを遵守し、「礼」を正しく実行していくことは、大事な孔子理念である。さらに、「之を知る物は、之を好むものにしかず、之を好む物は、之を楽しむ物に如かず」のように、「楽」しく、そして継続的にシステムづくりを推進していくことは極めて重要である。

3.2.5 孔子論的システムズ・アプローチの特徴比較

以上述べたように、孔子論的システムズ・アプローチは、問題解決の最終目標である「安心・安全で幸せな人間社会の構築と生きがいのある人間生活の向上」を目指している点に最大の特徴があると言えよう。

なお、ここで提案した孔子論的システムズ・アプローチの主な特徴は、以下の5点に要約される。

- 1) 人間本位：孔子論的システムズ・アプローチの基本理念・方針は、「仁」である。「人の、人による、人のための」システムづくりを楽しく前向きに推進していく考え、姿勢、行動を大切にしている。
- 2) バランス：科学的・合理的な「理」と、人間にやさしい「情」のバランス・「和」とともに、システム内部・システム外部・社会・地域・世界・自然間におけるバランスを大事にしているのは、孔子論的システムズ・アプローチの特徴である。

3) 全員参画：孔子論的システムズ・アプローチの主体者は、システムの当事者だけではなく、関係者、地域、社会の全員を含めている。これら関係者全員の意識改革・向上、参画、実行などが大事である。

表 3-1 3つのシステムズ・アプローチの特徴比較

名称 視点	(1) 帰納的アプローチ	(2) 演繹的アプローチ	(3) 孔子論的アプローチ	【関連する孔子思想】
アプローチの 対象	現状の問題点	システムの目的	システムの関係者 「人」	吾この人の徒とはともにするに非ずして 誰ともにかせん。
アプローチの 内容 (手順)	問題点を見つける	目的を明確にする	理想と問題点を考える 「志」	まことに志せば悪しきこと無し。
	対象課題を選ぶ	理想形を考える	QOLの向上を考える 「聞」	多く聞き、その善き者を選びて これに従い。
	改善策を考える	実現可能案を考える	バランスを考える 「権」	君子の天下に於おけるや、適も無く、 莫も無し、義とともに比す。
	実施・評価する	実施・評価する	実施・評価する 「安」	己を修めて以て百姓を安んず。
アプローチの 目標	改善策の実践	理想形の追求	人の道の追求 「道」	老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、小者 は之を懐けん。
アプローチの 評価	改善前との相対評価	理想形との絶対評価	「理」と「情」のバランス 「和」	君子は和して同せず。
アプローチの 姿勢	現状重視	目的重視	人間本位 「仁」	仁者は人を愛す。
アプローチの 実行	比較的容易	比較的困難	意識レベルによる 「楽」	之を好む物は、之を楽しむ物に如かず。

4) 人間関係の重視：「信」、「和」、「恕」、「仁」、「礼」、「人」などの理念を大事にしている。「システムづくりは人間関係づくりから始まる」。「システムを造るのも人間関係なら、システムを壊すのも人間関係である」。人間関係によってシステムの成果・持続性が決まる。

5) 本質指向：問題解決の最終目的は、人間の幸福感、人間社会の安全・安定・安心、QOL 向上などである。また、従来の代表的なシステムズ・アプローチである帰納的アプローチ及び演繹的アプローチと、本章において提案した孔子的アプローチとを特徴比較すると、表 3-1 のように要約される[8]。

3.2.6 考察及び今後の課題

従来のシステムズ・アプローチあるいはシステムづくりにおいては、人は主に手段（ヒューマンリソース、ヒューマンウエア）として扱われてきた。それに対して、孔子論的システムズ・アプローチにおいては、人は目的として扱われている。即ち、人間性を尊重し、人間本位の行動姿勢となっている。また、孔子論的システムズ・アプローチの目標は、個々の問題解決のためだけではなく、人間の QOL 向上、人間社会の平和のためである。この意味では、図 3-5 に示すように、人が人を支える社会システム分野において、例えば、医療・保健・福祉領域においては、本稿で考察した孔子論的システムズ・アプローチの意義・役割と、その応用範囲並びに今後の発展性は高く評価されるであろう [9]。

このように、「人間の安心・信頼・幸福な生活と人生」を目指す孔子思想に基づいた総合的なシステムズ・アプローチの研究開発は、今後多くの社会システム分野において、とりわけ人に優しい持続可能なシステムづくりに貢献できると確信する。

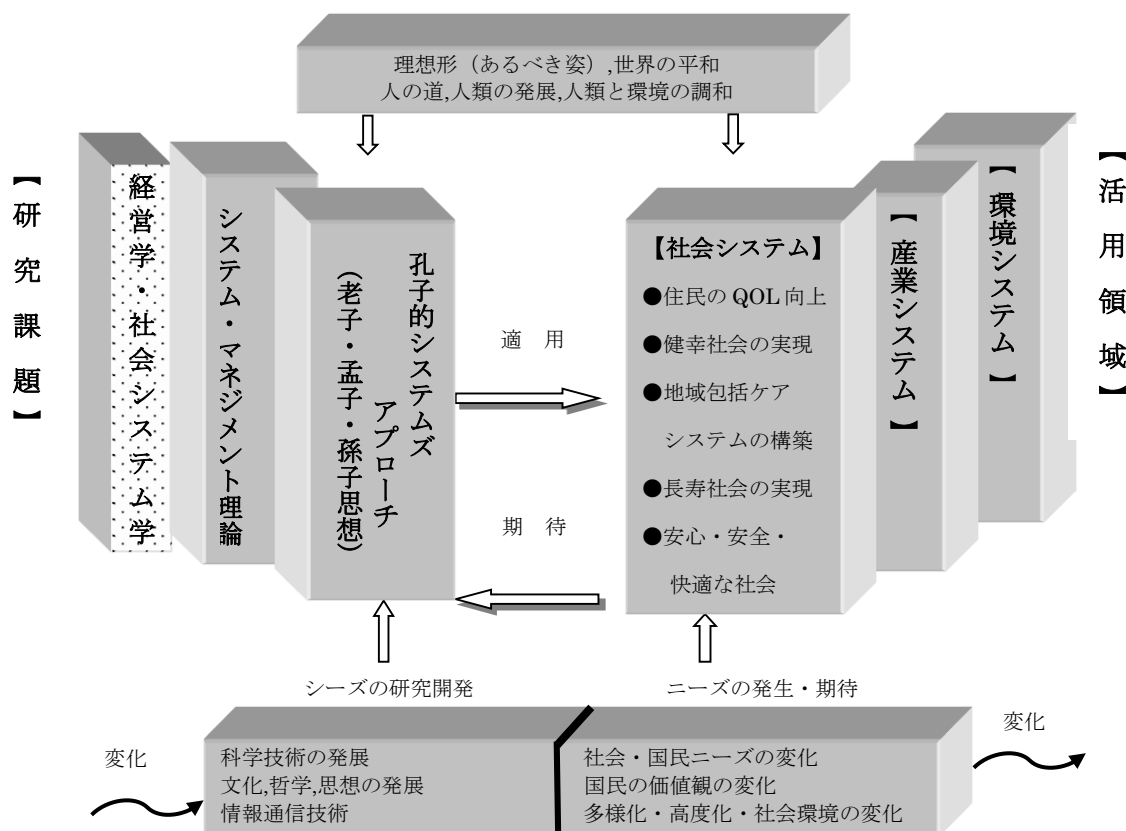


図 3-5 孔子論的システムズ・アプローチの今後の研究課題と活用領域

3.3 地域包括ケアシステム構築及び運営への応用

3.3.1 緒言

最近の科学技術の発展並びに少子高齢社会の到来とともに、ひとり暮らし老人（独居高齢者）・高齢者家族が急増し、それに伴い、在宅医療、在宅看護、日常生活支援などが社会問題となってきた。一方、住民の生きがい、QOL（Quality of Life）向上及び調和社会を目指す社会意識も強くなってきた[10]。

また、これからの社会システム、とくに人が人を支える社会システムにおいては、必要な保健・医療・福祉並びに生活支援などの諸サービスを継続的かつ包括的に提供する地域包括ケアシステムの構築及び運営が不可欠となってきた[2]。

さらには、要支援者・要介護者・患者だけではなく、サービス提供者・地域関係者などを含めた関係者全員が生きがい・働きがいのある生活・人生を暮すためには、住民を含めた地域関係者・組織間における人間関係・信頼関係を基盤としたヒューマンネットワークづくりに支えられた地域包括ケアシステムの構築が必要となってくる。

しかし、この地域包括ケアシステムの構築と運営においては、ハードウェアの整備充実、ICTの有効活用と適切な情報支援、マネジメント手法・技法などの合理的・技術的な「理」の面の充実とともに、礼儀・マナー・気持ち・態度・情熱・感情・人間性・理念などの「情」の面とのバランスが極めて重要となってくる[11]。

一方、2,500年前の中国哲学者である孔子は、当時の社会問題を解決するために、人間社会に生活している個人を原点として、「人間として必ず守るべき」生活のあり方・生き方を模索しながら、問題解決方法の糸口を探していたとともに、とくに、倫理観、人間関係、人生の生きがい・社会的責任などを中心にして、人間社会のあるべき姿、すなわち、人間社会の最高目標を目指した[3]。このように、「仁」・「礼」・「恕」などの理念を中心とした孔子思想は、2,500年にわたり、中国人の考え方、人々の倫理観、人間関係及び身近な生活から企業の経営、国家の管理に至るまで深く影響を及ぼしてきたと言えよう[4]。

また、著者らは、前節において KJ 法を用いて孔子思想を体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、孔子思想に基づいた問題解決手順（孔子論的システムズ・アプローチと呼ぶ）を提案した[11]。そして、この孔子論的システムズ・アプローチの有用性を検証するために、住民の QOL（Quality of Life）向上及び健康で幸せな地域社会の構築を目的とした地域包括ケアシステムを研究対象に取り上げる。

なお、本研究では、具体的な地域包括ケアシステムの構築及び運営において、共同研究の相手である豊田市をモデル地域として取り上げる。また、本節においては、（社）豊田加茂医師会に所属する医師並びに豊田市民のアンケート調査結果に基づいて、地域包括ケアシステムにおけるモデル地域の現状を客観的に把握するとともに、孔子論的システムズ・アプローチにおける 10 個の基本理念を提唱する。さらに、地域包括ケアシステム構築における詳細な推進手順を提案するとともに、その特徴について考察並びに提言を行う。

3.3.2 地域包括ケアシステム構築の視点及び発想

健幸社会を支える地域包括ケアシステムの構築と運営においては、これからの社会ニーズ及び住民・患者の価値観の変化に適応した新しい姿勢・視点・発想・手法等が必要となってくるであろう。

そこで、著者は、これからの地域包括ケアシステムの構築と運営において、次の5つの基本姿勢・視点を提案する[12]。

1) 地域包括ケアシステム構築の最終目的は、「健康で幸せな社会：健幸社会」づくりである。このため、「地域」+「包括ケア」+「システム」から成る（「場」+「内容」+「方法」）の3次元的システム把握が必要である（図3-6のシステム概念図を参照）。

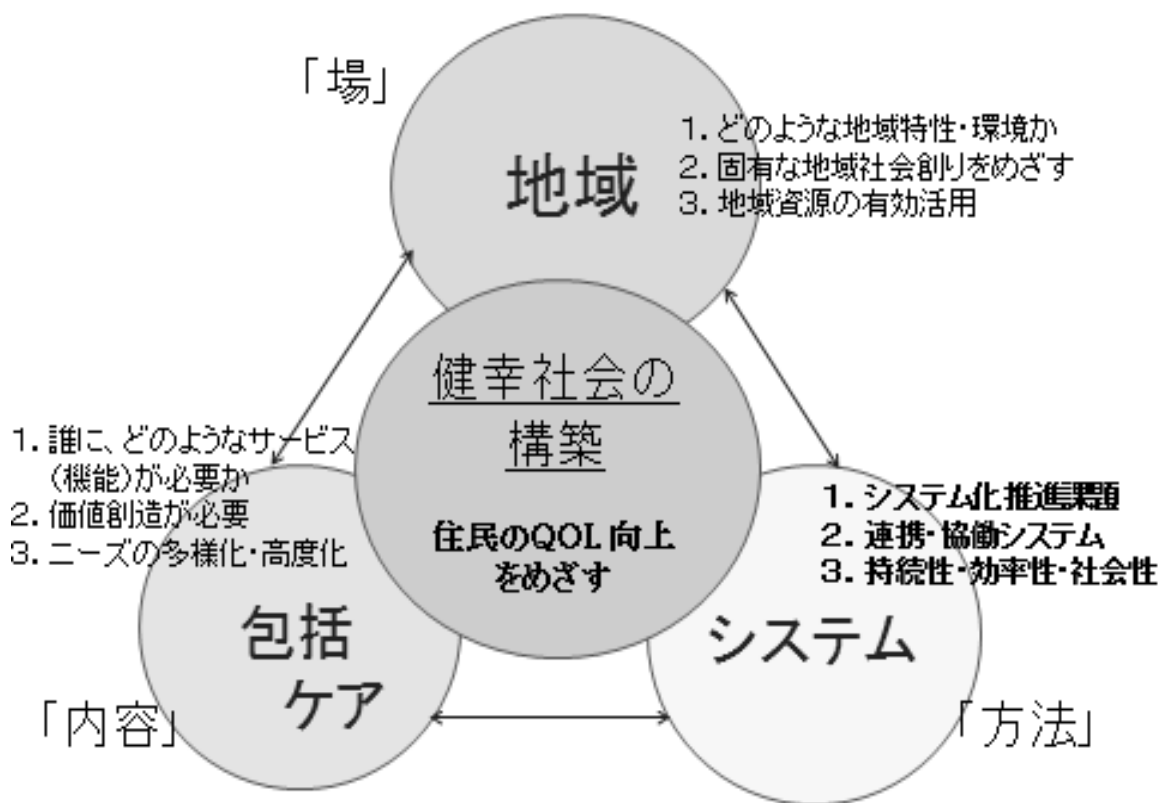


図3-6 「地域」+「包括ケア」+「システム」から構成されるシステム全体概念図

2) 地域包括ケアシステム構築の全容は、図3-7のピラミッド図に示される5階層構造から構成される。従って、各階層における立場・役割・特徴と上下関係を考慮したバランスのとれたシステム構築手順並びに全体調整・調和が必要となってくるであろう。

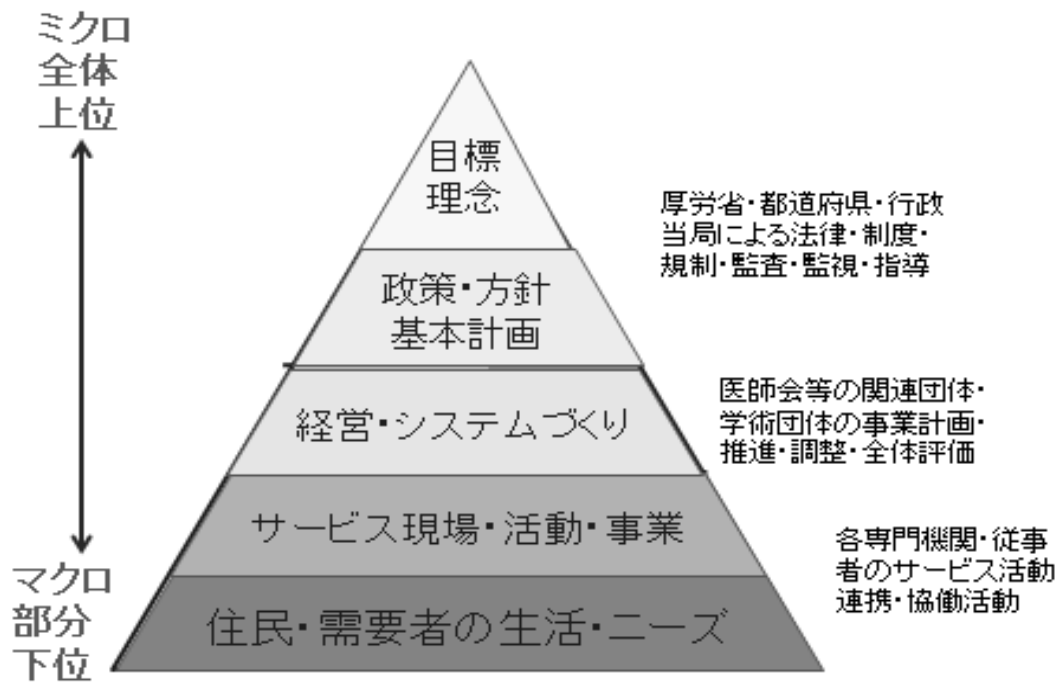


図 3-7 地域包括ケアシステム構築の 5 階層構造

3) 地域包括ケアシステムにかかわる 4 者の立場(住民・サービス提供者・行政関係者・地域社会)から見た,「四方よし」の総合評価を満足するシステムの構築と運営が望まれる(図 3-8 の概念図参照)。

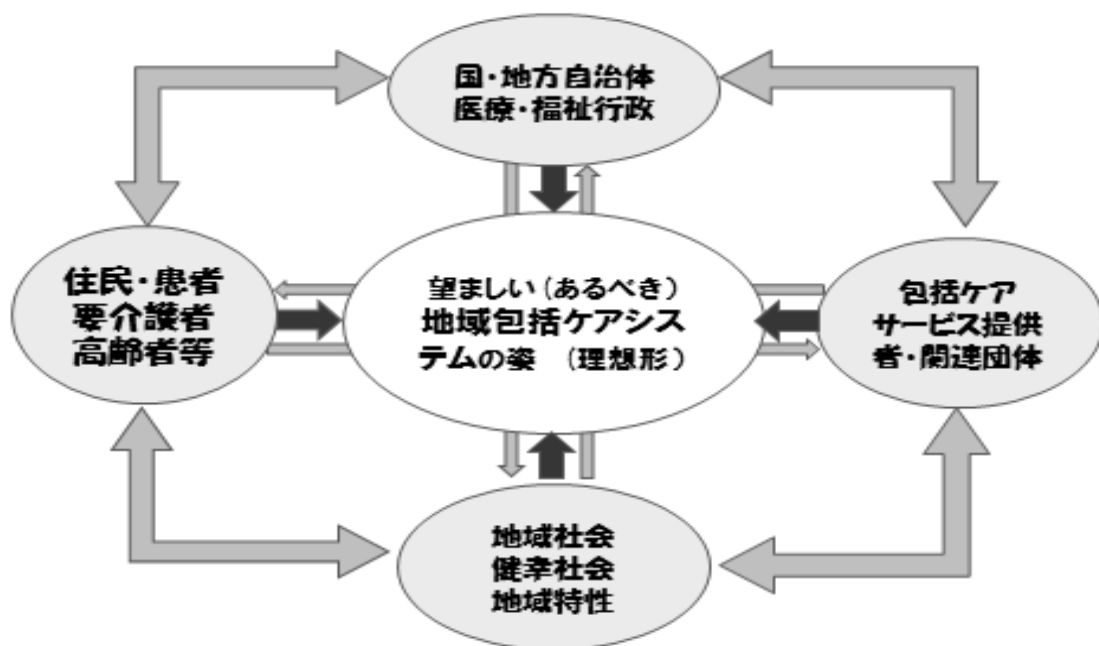


図 3-8 「四方よし」の地域包括ケアシステムの構築

4) 健康で幸せな地域社会づくりをめざして、保健・医療及び福祉サービスを中心としたバランスのとれた総合生活支援サービスの提供が、地域包括ケアシステムの目標である(図3-9)。

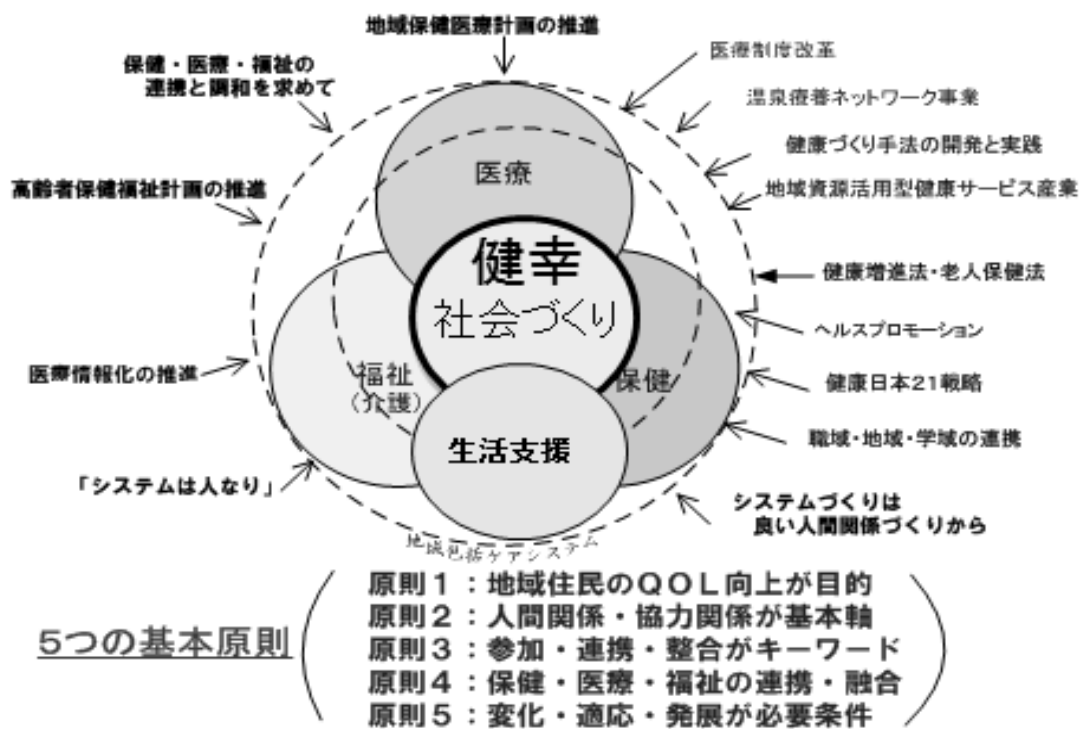


図 3-9 「健幸社会づくり」のための地域包括ケアシステムの全体概念図

5) 地域包括ケアシステムの構築並びに運営においては、図 3-10 に示されるシステム・マネジメント思想・手法並びに経営診断学の活用は極めて重要かつ有効である。特に、本研究テーマは、医学、医療管理学、保健学、経営学、システム工学、情報科学、経営診断学、等をはじめとする学際的な問題解決アプローチが不可欠であると言えよう。

以上のように、著者は、「温故知新」→「温孔知心」の思想こそが、これからの時代にふさわしい新しい地域包括ケアシステム創りへの「ブレイクスルー思考」であり、「システム・イノベーション」への手がかりであるとの考えから、これまでのような狭義の地域医療計画アプローチを謙虚に見直し、これからの少子高齢社会における多様化した社会ニーズ並びに住民ニーズに応える新しい地域包括ケアシステムのあり方とそのシステム・イノベーションをめざして、地域関係者が連携・共働して計画・行動・改革していくことが望まれよう。

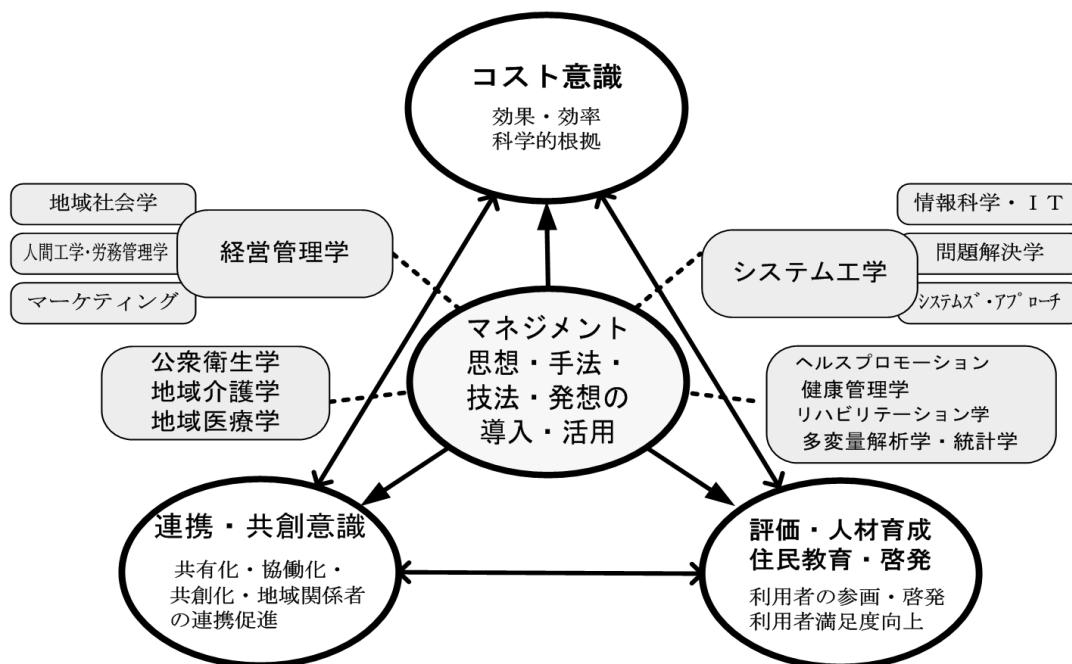


図 3-10 マネジメント思想・技法の当該分野への適応

3.3.3 医師及び市民意識実態調査の実施概要

本節においては、地域包括ケアシステムの実態を説明するために、豊田市民及び医師の活動実態及び意識実態に関するアンケート調査結果を用いて分析を行う。まず、医師の活動実態及び意識実態においては、共同研究相手の豊田加茂医師会の全面的な支援及び協力のもとに、豊田加茂医師会に所属している医師を対象に、平成 25 年 1 月に郵送方法でアンケート調査を実施した。有効回答が 114 件（有効回答率が 59%）であった[13]。

また、第 5 期豊田市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画策定のために平成 22 年 9 月に市民を対象者としたアンケート調査が郵送法で行われた。有効回答数は、一般成人が 1,491 部（有効回答率が 64.8%）、一般高齢者が 2,895 部（有効回答率が 80.4%）、認定者が 2,573 部（有効回答率が 71.5%）であった[14]。

3.3.4 地域包括ケアシステムの構築理念

前節で提案した孔子論的システムズ・アプローチの一般形は、7 個の基本理念と 8 個の推進手順から構成されている。しかし、人が人を支える地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、上述の 7 個の基本理念に「教」・「進」・「時」という 3 つの基本理念を加えた 10 個の基本理念を提案する。また、豊田市民と医師の実態調査結果に基づいて、これらの基本理念のあるべき姿と地域包括ケアシステムの実態（現実）について詳しく説明及び考察を行う。

【基本理念1】人間本位のシステムづくり：「人」

「鳥獸は与に群を同じくす可からず。吾斯の人の徒と与にする非らずして、誰と与にせん」のように、人が人を支えるとともに、人が助けあうことこそが人間社会の姿である。とくに、人間社会の幸福度・満足度・QOL 向上を図るために、人を中心にして、人にやさしい、人間本位を重要視していくことが「人」の理念である。とくに、信頼関係などの人間関係に基づいたヒューマンネットワークづくりは、地域包括ケアシステムの基盤であると言える。そのためには、地域住民及び当事者・関係者の立場に立って、考慮・行動していくことが「基本理念1」の精神である[11]。

【基本理念2】個人の社会的責任を重視する：「仁」

「仁」は、孔子思想の中心概念の一つである。現代社会においては、「仁」の概念は、人間社会における諸問題を解決する個人の社会的責任及びそれに伴う行動である[15, 16]。現代の地域包括ケアシステムの構築においては、「天下、道が有れば、吾それを変えらず」のように、健康で豊かな社会の構築及び運営を推進するためには、各個人が社会的責任を持って、主体性を発揮して行動していくことが「仁」の基本概念である。とくに、高齢社会における諸問題を解決する責任は、国家、地域、社会だけではなく、あらゆる住民にあるという意識改革が先決条件となる。

しかし、市民実態調査[14]においては、一般市民と一般高齢者の6割以上が地域の助け合い活動について「関心がある」と「どちらかといえば関心がある」を選択している一方、具体的な内容においては、介護予防に関する活動をはじめとする地域包括ケアシステムに関する活動を選択した住民は全体で1割以下であった。よって、現実には、住民は地域活動に対する関心はあるが、地域包括ケア活動に対する関心は極めて低いことが分かる。

【基本理念3】思いやりの心を尊重する：「恕」

「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」のように、人間社会、とくに地域包括ケアシステムにおいては、要支援者・要介護者・患者をはじめ、家族および住民・社会の気持、ニーズ及び本音などを理解するとともに、関係者・当事者など諸職種間において、さらには、「産・学・民・官」の連携・協働の相手同士の気持、態度、本音などを十分に考慮していくことが「恕」の基本理念である。

市民実態調査[14]では、「ボランティアを家で受け入れる意思」について、「受け入れる」を選択した人は、一人暮らしが6割に対して、高齢者世代と認定者が4割未満であった。よって、住民のニーズが異なるため、「恕」の理念が必要不可欠である。

【基本理念4】全住民教育・啓発を重視する：「教」

「弟子曰く：すでに富めり、また何をか加へんと。子曰く：之を教へんと」のように、住民の生涯学習に対して、住民を対象にする生涯教育（教育・啓発）が孔子の教訓である。礼儀・

ルール・法令遵守をはじめ、保健・介護・医療及び生活習慣病等に関する予防情報・知識の習得、意識・倫理観・社会責任感などの教育は、健康で豊かな調和社会の構築において不可欠な課題となってくる。この時、基本理念2で説明したように、住民の関心の内容及び方向性などを変える教育の重要性は言うまでもない。

【基本理念5】信頼・信用を大事にする：「信」

「信」の概念は、「子曰く：人にして信無くんば、其の可なるを知らざるなり。大車に軛なく、小車に軛無くんば、其の何を以てか之を行らんや」のように、相互信頼が連携・協働の基礎であり、地域包括ケアシステムの構築と運営の両輪であると言える。医療・介護の関係者と住民が相互に信頼することは、助け合い、協力し合いながら、住民に対して各種サービスを効果的かつ効率的に提供できるための前提条件である[14]。

しかしながら、市民実態調査[14]に指摘されているように、住民が相談する（信頼できる）相手として、「家族や親族」を選択したのが7割前後であった。「かかりつけの医師など」を選んだのが4割前後であった。一方、医師実態調査[12]においては、在宅医療をやっている医師においては、認知症の相談が93%であった（カイ二乗検定、 $p < 0.001$ ）。よって、在宅医療をやっている医師はやっていない医師より信頼されていることがわかる。

【基本理念6】タイミング・継続を重視する：「時」

必要な人に、必要なサービスを必要な時に、タイムリーに提供していく理念は、地域包括ケアシステムの構築における「時」の理念である。要支援・要介護・患者になった時、諸サービスを受ける時、平日に健康な生活を暮らす時、など人生のそれぞれの時期に関する「時間」の意識・理念を持つことは、孔子の教えである。とくに、居宅介護、在宅医療、生活支援など日常的なサービスを継続的に提供することがこれからの地域包括ケアシステムの重要な課題となってくる。

【基本理念7】マナー・礼儀を大切にする：「礼」

「君は君たり、臣が臣たり、父は父なり、子は子たり」のように、関係者の人間関係、連携、社会、地域、人間と自然などのバランスをとりながら、社会のルール、社会の規範、国あるいは世界の法律・制度などを遵守していくとともに、「敬」のように、人間同士においては、建前ではなく、礼儀・マナーが正しく心から相互尊敬していくとともに、それぞれに課せられた適切な機能及び役割分担の円滑な運営を確実に実行することが、「礼」の理念である。

【基本理念8】バランスを大切にする：「和」

「和して同せず」のように、健康で豊かな地域包括ケアシステム、さらに調和社会の構築という共同目標を達成することと、要支援者・要介護者・患者・高齢者などの個人並びに、サービス提供者・関連組織団体などのそれぞれの目標を達成することとのバランスは、必要不

可欠な条件であろう。また、同時に、制度・医療費等に関する科学的、効率的、合理性など「理」の面だけでなく、人それぞれの価値観・条件・能力・ニーズ・気持・態度・感情等に関する「情」の面とのバランスが必要不可欠である。

【基本理念9】生涯学習・成長を重要視する：「進」

科学技術の発展及び情報化の進展とともに、社会の分業は、非常に細かく行われている。そして、保健、医療、介護、福祉における職業間の知識、生活習慣病・疾病予防知識ならびに住民間の生活の情報・知識などの学習は、「吾その進むを見る。未だ其の止まるを見ざるなり」のように、生涯にわたり継続的に成長・向上していくことが孔子の教えである。

医師実態調査[13]から明らかにされたように、在宅医療をしている医師の6割くらいは、講習会に参加していることがわかる。よって、在宅医療をしている医師の方がより積極的に地域包括ケアシステムの活動にも参加していることがわかった。

【基本理念10】楽しさを大事にする：「楽」

「之を知る物は、之を好むものにしかず、之を好む物は、之を楽しむ物に如かず」のように、住民のQOL向上・全住民の満足度・幸福度などを重要視して、「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」のような楽しさを楽しむとともに、前向きに、そして継続的に地域包括ケアシステムを楽しく推進していくことは、持続可能な地域包括ケアシステム構築及び運営の基礎である。

市民実態調査[14]では、一般高齢者と介護認定者は、趣味について、両方とも4割以上がテレビの視聴を選択した。それに対して、一般成人の7割以上が「買い物などの外出」を選択した。一方、「社会貢献活動」と「老人クラブなどの地域活動」を選んだ比率は1割前後であった。また、医師実態調査[13]から明らかになったように、地域医療活動における医師の意識実態は、住民からの感謝と達成感について、「ある」と「ややある」を合わせて選択した医師が、2割前後であった。よって、地域包括ケアシステムにおける諸活動は楽しく継続していくことが不可欠であるが、現在、住民と医師が2割前後しか地域包括ケアシステムの活動を楽しみ取り込んでいないのも現状であり、今後の具体的対応が急がれる。

前述したように、豊田市における住民と医師の現状は、孔子思想に基づく地域包括ケアシステムの構築及び運営のあるべき姿（理想形）との間にはギャップが大きいことがわかった。そこで、上述した10個の基本理念に基づいて、次節では、実行可能な推進手順について提案並びに考察を行う。

3.3.5 地域包括ケアシステムの推進手順と検討課題

孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの推進手順は、図3-11に示すように、前述した10個の基本理念に基づいて、次の8つの推進手順によって構成される。また、推進主体は、全員参画及び連携・協働という方針に基づいて主に「官・産・学・民」という4者から構成さ

れる。なお、この4者の役割分担並びに相互関連図は、図3-11に示される。

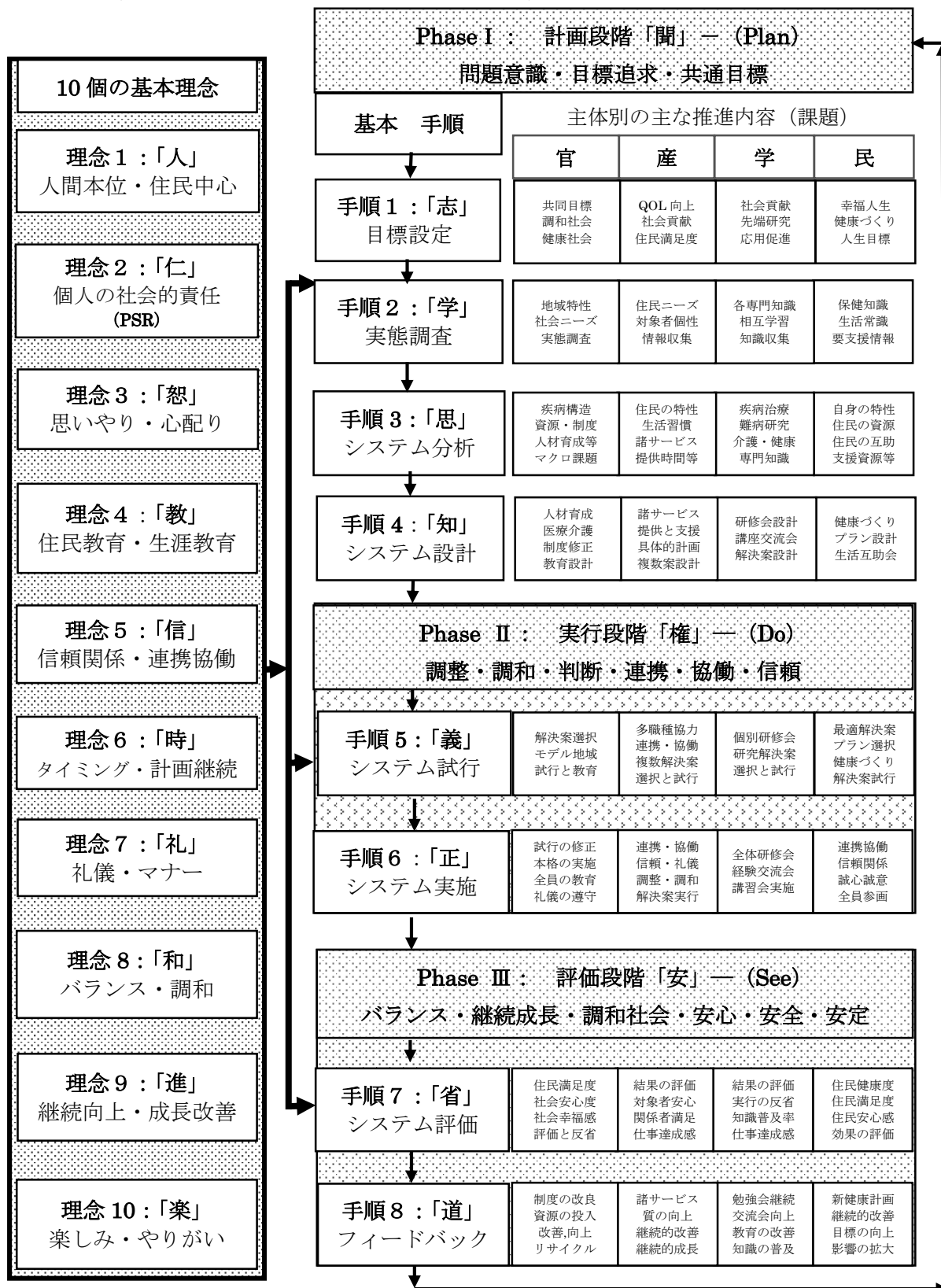


図3-11 孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの構築及び運営の全体概念図

推進手順1 問題意識及び目標設定：「志」

「子曰く：徳の修まらざる，学の講ぜざる，義を聞きて従る能はざる，不善の改むる能はざる，是れ我が憂ひなり」のように，地域住民を含めた地域関係者は，それぞれの立場から地域包括ケアシステムに対する問題意識・危機感・責任感（とくに個人の社会的責任 PSR）を持つとともに，「道に志す」のように，それぞれの目標及び人間社会に役立つという共通の目標（理想形）を設定・追求していくことは，地域包括ケアシステム構築のスタートラインである。

また，「吾，十有五にして，学に志す，三十にして立ち，四十にして惑わず」のように，地域包括ケアシステムの目標を達成するために，地域包括ケアシステムの構築を，各地域の特性・条件に基づいて段階的に実行できる短・中・長期の目標を詳細に計画していくことが重要な課題である。

推進手順2 実態調査・情報収集：「学」

「多く見て之を識す」のように，地域特性・地域経済・人口・文化・価値観・生活習慣・疾病構造などに関する過去・現在及び未来の環境特性を実態調査することが地域包括ケアシステムにおける問題点を発見する先決条件である。また，「太廟に入りて，事毎に問う」のように，個人の場合においては，疾病の治療及び予防方法・保健知識などの情報収集（学習）とともに，多職種間に効率的かつ有効的な連携協働を進めていくためには，各職種間の知識，情報を共有するための情報収集・学習は不可欠である。とくに，「学べば則ち固ならず」のように，社会の変化・実態の変化に順応させながら，調査方法・意識も変化していくことが重要視されている。

推進手順3 システム分析：「思」

「学びて思わざれば則ち罔し」のように，調査・収集されたデータをもとに，地域生活習慣（飲食習慣・意識）・病気構造・治療・予防方法，医療・介護・保健・福祉などに関する人材・制度・組織・資源を「恕」の理念でそれぞれの立場と視点から総合的に分析し，問題点を把握するとともに，真因に対する対策を考えていく。また，「多く聞きて疑わしきをかき」のように，人間関係・社会環境などからの影響について分析を加えることも必要となってくる。

推進手順4 解決方策・システム設計：「知」

分析した結果及び人間本位の理念に基づいて，「官・産・学・民」は，要支援・要介護・患者・高齢者などを対象にして，それぞれの適材適所の役割分担ならびに複数の問題解決方を設計する。

また，「知を問う。子曰く：人を知る」のように，住民のそれぞれの特性・個性・課題を配慮した適切な対応方法を設計するとともに，住民の個人的な学習を始め，職種内及び職種間

の相互学習ができる情報交換・支援ネットワークを設計することが重要な課題である。「礼を知らざれば、以て立つこと無きなり」のように、とくに、日常生活上のプライバシー問題・地域社会のルール・諸制度などをもとに、生活などを相互に信頼及び支援できる健康クラブ・老人会・町内会などのヒューマンネットワークづくりの設計が不可欠となってくる。

推進手順5 システム試行：「義」

孔子の思想に、「君子の天下に於けるや、適も無く、莫も無し、義とともに比す」のように「義」は、設計したシステムを試行する判断の標準である。とくに、地域包括ケアシステムにおいては、要介護・要支援の標準化、医療・介護技術などの標準化が進んでいくとともに、人間の価値観・社会環境等が絶えず変化していくに伴って、複数の解決案を選択し、実態を正しく判断し、適時的にシステムを調整していくのが、このシステム試行の手順内容である。

推進手順6 システム実施：「正」

「事に敏にして言に慎み」のように、試行した結果に基づいて調整したシステム（実行案）を、「官・産・学・民」がそれぞれの役割分担と社会的責任を持つとともに、効率的かつ効果的に多職種と連携協働していくことが「正」の手順である。とくに、「非礼見ること勿れ、非礼聴くこと勿れ、非礼言うこと勿れ、非礼動くこと勿れ」のように、実行する時に、要介護者・要支援者・患者などに対する態度・マナー・気持ちのなかに、謙虚さ・尊重しあう姿勢が必要不可欠である。

推進手順7 システム評価：「省」

「吾日に吾が身を三省す」のように、要支援者・要介護者・患者をはじめ、地域包括ケアシステムの当事者・関係者が、実行されたシステム成果に満足できるか、予測した結果を達成できたか、住民のQOL向上・調和社会に貢献できたか、などを謙虚に評価・反省する必要がある。とくに、人間の態度・精神・マナー・礼儀・気持ち・バランスなどが人間本位の評価基準・尺度・項目となってくる必要がある。

また、「過ちては則ち改めるに憚ること勿れ」と「過ちて改めざる、是を過ちと謂ふ」のように、勇気・責任感を持つとともに、問題の本質・原因を理解し改善していく姿勢が不可欠である。反省の目的は、「過を再びせず」のように、更に改善・向上させることである。

推進手順8 フォローアップ：「道」

「己を修めて以て人を安んず。己を修めて以て百姓を安んず」のような、住民のQOL（Quality of Life）向上・豊かな調和社会の構築という人間の「道」は、「任重くして道遠し」のように、地域社会の全員がそれぞれに課せられた責任をもつとともに、絶えず現状を改善・更新・向上し、「道」を達成することを楽しく創造的かつ永続的に前向きに追求していくことが必要である。

3.3.6 孔子思想に基づいた地域包括ケアシステム構築及び運営の特徴

本論文において提案した孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの構築及び運営における基本理念及び推進手順の全体関連図並びに特徴は、図 3-12 に示されるように以下の 4 点に要約される。

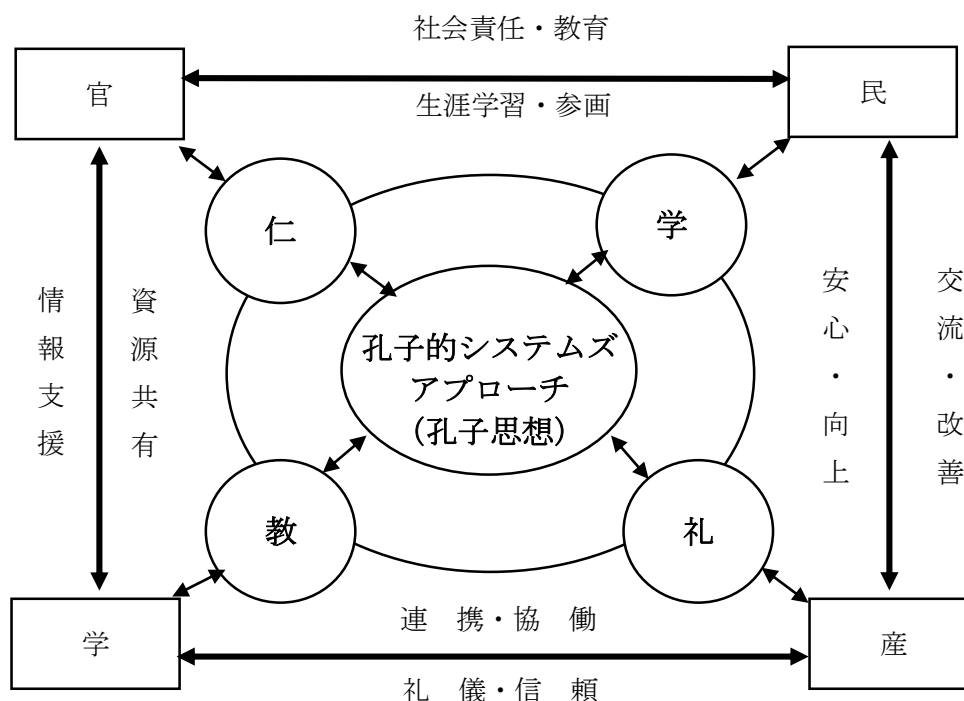


図 3-12 地域包括ケアシステムにおける孔子論的システムズ・アプローチの特徴概念図

特徴 1) 意識改革における個人の社会的責任「仁」:

地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、行政・政府の責任だけではなく、社会全体の責任であり、社会の一部としての個人の社会的責任でもある、という意識改革が地域包括ケアシステム構築及び運営の基礎である。すなわち、個人の社会的責任 PSR (Personal Social Responsibility) を中心として、「人の、人による、人のための」地域包括ケアシステムの構築及び運営を、地域関係者一人ひとりがそれぞれの自覚を持って、楽しく前向きに推進していく考え・姿勢（全員参画）が本推進手順の重点である。

特徴 2) 情報支援・情報共有における「学」:

信頼関係・人間関係、情報共有、役割分担を大切にしている連協・協働システムの一環として、情報・知識を共有する新しい手段である学習の重要性が強調されている。とくに、情報社会の発展に伴って、地域包括ケアシステムを継続的に切れ目なく円滑に推進していくために、すべての地域関係者の学習及び生涯学習をサポートする情報支援ネットワークが不可欠な条件となってくる。

特徴3) 人材育成における「教」:

人が人を支える地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、住民を含めた関係者全員のヒューマン・ネットワークづくり（人材育成・人材確保・人材活用等）は、不可欠である。そのため、一方的に地域包括ケアシステムを推進していくのではなく、全員参画できるように、関係者全員を対象にした啓発・教育（生涯教育・全員教育・道徳教育）などが極めて重要視されている。

特徴4) 連携・協働促進における「礼」:

多職種間での連携・協働を中核とした地域包括ケアシステムの円滑な運営においては、患者・住民を含めた地域全員間の人間関係・信頼関係並びに、人々のやりがい・達成感などが極めて大切な課題である。そのために、全関係者における礼儀・マナー・態度・気持ちが、地域包括ケアシステムを効率的かつ円滑的に構築及び運営していく上で不可欠な条件となってくる。

3.3.7 モデル事業での検証—足助地区における計画

第5期（平成24年度～26年度）豊田市介護保険事業計画の一環として、豊田市地域包括ケアシステムの構築をめざしたモデル事業を、下記の3つの推進方針に基づいて現在計画中である（図3-13の概念図を参照）[12]。

- 1) 豊田市第5期介護保険事業計画における5つのシステム化基本方針に基づいて推進する。
- 2) 各地域の地域特性および地域住民ニーズに合った手づくりのシステムづくりをめざす。
- 3) 地域社会及び住民ニーズの変化に適応させながらシステム創りを持続発展させていく。

そこで、その一つのモデル実験地区として、中山間地域の特性を有する足助地区においてモデル事業を計画中である。なお、この足助地区（平成17年4月に足助町から豊田市に合併）は、平成23年度の人口は15,000人をわずかに下回り、高齢化率35%近くとなり、豊田市全体の高齢化率17%強を大きく上回っている過疎地でもある。また、農林業を中心とした中山間地域であり、主な医療・介護施設としては、老人保健施設、地域包括支援センター等の介護・福祉関連施設を併設している足助総合病院がある。院長の優れたリーダーシップのもとで、住民教育、住民参加、地域連携、在宅医療、認知症在宅ケア等において、これまでに中山間地域型の地域特性を配慮したユニークな保健・医療・福祉サービスの連携システムが推進されてきた。

今回、同地区関係者との共同研究モデル事業として、「事業目標：過疎化・高齢化が進む中山間地域の足助地区において、地区住民の健康で幸せな生活を守っていくための中山間

地域型包括ケアシステムの構築」をめざして、豊田市行政、足助総合病院、地域住民団体、大学研究機関をはじめ、同地域関係者・関係組織と役割分担・話し合い等を進めているところである[12]。

なお、本モデル事業の特徴及び検討課題は以下の3点に要約することができる[12]。

- 1) 同地域においては足助病院が保健・医療・介護サービスを幅広く提供してきた実績と健康文化の発信地としても住民からの高い信頼・期待がある。
- 2) 現在、市行政からの補助金により大規模な病院改築計画が実施され、住民の安心・安全・充実した生活を支援する複合拠点施設としての機能が整備された。
- 3) 複合拠点としての足助総合病院(院長)のリーダーシップ, 地域住民の参画意識, 円滑な人間関係, 関連団体・施設からの参画・連携・協力がある。

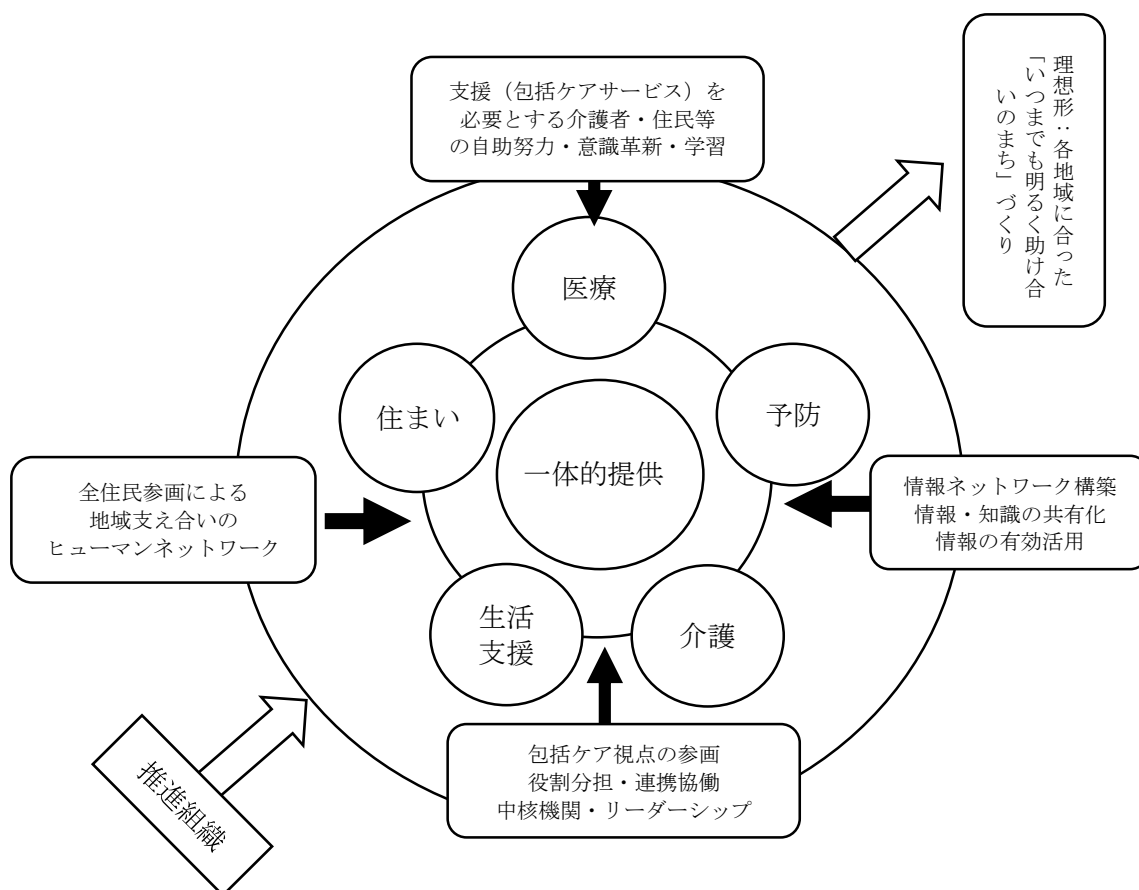


図 3-13 豊田市第 5 期介護保険事業計画におけるモデル事業の全体概要図

3.3.8 結言

個人の社会的責任を基本として、礼儀・マナーが日常の積極的な行動を通じて、信頼・調和のとれた人間関係と調和社会を構築することを説いた孔子思想（論語）は、現在のような人が人を支える少子高齢社会において、とくに、健康で豊かな調和社会を目指す地域包括ケアシステムの構築及び継続的な運営においては、有効に応用できると言えよう。しかしながら、本アプローチの問題点及び今後の改善課題を明らかにするためにも、また、本研究成果の有効性をより詳細に実証するためにも、いくつかの地域包括ケアモデル事業に対して、今後実験及び検証していくことを計画している。

3.4 まとめ

本章では、「理」の側面と「情」の側面とのバランスの取れたシステムズ・アプローチ（システムズ・アプローチの理想形）を開発するために、人間の生き方・考え方・進め方について説いてある孔子思想（「論語」に記述された孔子思想）を、KJ法を用いて、システム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的システムズ・アプローチを開発及び提案した。孔子論的システムズ・アプローチの一般形は、7つの基本理念及び8個のステップから構成されている。また、提案した孔子論的システムズ・アプローチの特徴は、「人間本位」、「バランス」、「全員参画」、「人間関係の重視」、「本質指向」という5大特徴にまとめるとともに、従来の代表的なアプローチとしての帰納的アプローチと演繹的アプローチとの比較分析を行った。なお、ここで提案した孔子論的システムズ・アプローチの有用性をより詳細に検証するために、この孔子論的システムズ・アプローチの特性及び特徴を明らかにするとともに、人が人を支える地域包括ケアシステムの構築とその運用に適応した。

地域包括ケアシステムの適応においては、地域包括ケアシステムの特性により、孔子論的システムズ・アプローチにおける7つの基本理念に3つの理念を加えて、10個の基本理念を提案した。また、地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、全員参画・連携協働していく方針に基づいて、主に「官」・「産」・「学」・「民」という4者の推進主体により推進していく提案を行った。さらに、本アプローチの特徴は、1) 意識改革における個人の社会的責任PSR (Personal Social Responsibility) 「仁」の重視、2) 情報支援・共有における「学」の強調、3) 人材育成における「教」の大切、4) 連携・協働促進における「礼」の提唱、という4つにまとめられる。

上述したように、ここで提案した孔子論的システムズ・アプローチは、現在のような人が人を支える少子高齢社会において、とくに、健康で豊かな調和社会を目指す地域包括ケアシステムの構築及び継続的な運営に有効であると言えよう。最後に、今後の課題及び展望としては、本アプローチの問題点及び今後の改善課題を明らかにするとともに、いくつかの地域包括ケアモデル事業に対して、今後更に実験及び検証を継続していく計画である。

参考文献（第3章）

- [1] 山本勝:保健・医療・福祉の私捨夢（システム）づくり, 篠原出版新社, 2007
- [2] 山本勝, 田川元也:地域保健・医療・福祉分野のシステム化推進手順に関するシステム・マネジメント論的考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 9, pp. 53-58, 2009
- [3] 楊先挙:孔子マネジメント入門, 日本能率協会マネジメントセンター, 2010
- [4] 烏恩溥:仁義礼智信和現代化, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 2587-2603, 1992
- [5] 川喜田二郎:KJ 法:渾沌をして語らしめる, 中央公論社, 1986
- [6] 史文珍:KJ 法を用いた孔子思想の体系化の試み, 愛知工業大学経営情報科学第 7 巻第 1 号, pp. 37-49, 2011
- [7] 潘乃樾:孔子与現代管理, 中国經濟出版社, 1994
- [8] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいたシステム・マネジメントに関する一考察, 日本経営診断学第 44 回全国大会予稿集, 別府大学, pp. 188-191, 2011
- [9] 山本勝:保健・医療・福祉のシステム化と意識改革, 新興医学出版社, 1993
- [10] 厚生労働省:厚生労働白書:社会保障の検証と展望, 厚生労働省, 2011
- [11] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2013
- [12] 山本勝ら:健幸社会を支える地域包括ケアシステムの基本理念と推進方策, 日本経営診断学会論集 Vol. 13, 2013, (掲載決定)
- [13] 豊田加茂医師会:平成 25 年度「豊田市地域医療提供体制強化事業」調査研究報告書, 豊田加茂医師会, 2013
- [14] 豊田市:豊田市高齢者等実態調査等結果報告書, 豊田市福祉保健部高齢福祉課, 2011
- [15] 郝大为, 安乐哲:孔子哲学思微, 江蘇人民出版社, 1996
- [16] 赫伯特芬格莱特, 彭国祥, 张华訳:孔子即凡而圣, 江蘇人民出版社, 1988

第4章 意識革新における孔子論的考察とその応用

4.1 はじめに

システムづくりにおいては、「強い問題意識を持つこと」が、問題解決における最も大切な必要条件の一つである。しかしながら、問題意識の構造及び定義については、まだ多くの未解決、不透明な課題が残されている。そこで、システムづくりにおいて意識革新を図っていくためには、まず問題意識構造を究明することが不可欠な課題となってくる。

一方、2,500年前の哲学者孔子は、強い問題意識をもって当時の社会における諸問題を解決するために、さまざまな解決方法を探していた。孔子思想（「論語」）は、2千年以上にわたって、今日まで中国をはじめ、日本・韓国など東洋諸国において日常生活から企業の経営・国家の管理まで幅広く強く影響を及ぼしてきた。時代・社会環境などがまったく異なっても、問題に対する危機意識・問題意識などに関する孔子思想・教訓・教えは、今日でも参考になると言えよう。

そこで、本章においては、前述の問題意識構造を究明するために、問題意識及び意識革新に関する孔子思想を KJ 法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から孔子論的問題意識構造・特徴・促進方策などについて考察及び提案を行う。

また、ここで提案した孔子論的問題意識構造モデルの有効性及び効果を検証するために、具体的なシステムに応用する。そこで、孔子論的問題意識構造モデルの特性及び特徴を考慮して、これからの少子高齢社会において、とくに、注目されている地域包括ケアシステムに適応することを試みる。なお、具体的な地域包括ケアシステムとして、共同研究相手の豊田市を事例として取り上げる。そのため、本章では、豊田市民を対象に行った市民意識実態調査データを用いて、孔子論的問題意識構造モデルの有用性及び効果について検証を行うとともに、住民の問題意識における問題点の把握及び市民の意識革新方策について考察を行う。

4.2 意識革新における孔子論的考察

4.2.1 緒言

システムづくりは、広義的に言えば問題解決であり、主に問題発見・問題設定・問題解決（狭義的）という三つの活動部分から構成される。まず、問題発見とは、現状に存在している問題を発見することである。そのためには、現状を強く意識することが問題発見の前提となってくる[1]。そして、発見した問題を表面的・現象的ではなく、問題の本質を追求し、真に取り組むべき課題を適切に選択・設定することが問題設定である。最後に、設定した問題を具体的に解決していくことが狭義の問題解決である。このように、システムづくりにおいては、問題解決の起点は、現状に存在している問題を意識することである。さらには、順調に問題を設定及び解決するために、問題意識を向上させていくことが必要不可欠な条件となってくる。すなわち、システムづくりは、「問題意識から始まる」とともに、「強い問題意識を維持してい

く」ことが問題解決の先決条件であると言えよう[2]。

また、問題意識とは、問題（物事・事態）に対する主観的なとらえ方・考え方・見方である[3]。一般に、システムづくりにおいては、問題意識の強さによって当事者の行動に大きな差が生じてくる。とくに、人が人を支えるシステムづくりにおいては、当事者の問題意識の強さにより構築・運営されるシステムの成果は異なる。このため、より良いシステムづくりを構築及び運営するために、強い問題意識を持っている当事者が不可欠である。そして、問題を順調に解決していく（あるいはより良いシステムづくりを構築及び運営する）ためには、問題意識を向上させるとともに、当事者の問題意識構造を究明することは極めて重要な課題となってくるであろう。

問題意識が日常生活中における物事の現状に対する主観的なとらえ方・考え方・見方であるため、問題意識は、日常生活から生ずるものであり、人間社会の諸問題を解決する過程から出てくるものでもある。その意味では、問題意識は人間の生き方・在り方と深い関係を持っていると言える[4]。

一方、人間主義を中心とした孔子思想は、2,500年にわたって、今日まで中国をはじめ、日本・韓国など東洋諸国において、人間の生き方という小さいシステムから企業の経営・国家の管理など巨大なシステムまで幅広く強く影響を及ぼしてきた。孔子は、当時の社会における諸問題を解決するために、人間の生き方・考え方を問題解決の糸口として解決方法などを探していた[5]。とくに、「君子」の生き方・考え方を人間のあるべき姿（人間の理想形）に掲げるとともに、強い問題意識をもって当時社会の人物・物事・政治などについて評価・記述した上で、様々な解決方策・方針・理念などを積極的に提唱及び実行してきた[6]。時代・社会環境などがまったく異なっても、人間及び人間社会（人間性）に対する見方・とらえ方・考え方、とくに、人間の理想形を目指す目標意識と、社会に存在している問題に対する危機意識・問題意識などに関する孔子思想・教訓・教えは、今日でも参考になると言えよう。

そして、より良い問題解決、より良いシステムづくりの構築及び運営を促進するための重要な原動力の一つである問題意識を向上するために、問題意識構造を究明することを試みる。とくに、本節においては、「論語」にまとめられた強い問題意識を持っている孔子思想を KJ法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から孔子論的問題意識構造モデルとその特徴・促進方策などについて考察及び提案を行う。

4.2.2 「論語」の体系化手順

孔子思想は、孔子の弟子たちによって編成された孔子及びその弟子たちの言行録である「論語」に記録されている。「論語」の内容は、人間のあるべき姿である君子（仁者）の生き方・日常行動、政治のやり方・考え方、人生の教訓、人物の評価、孔子の日常行動などについての記述である[7]。「論語」は編者によってバージョンが異なるが、大体 20 篇で 500 章くらいから構成される。しかし、一般に「論語」における統一テーマはないとともに、「論語」においてテーマを統一することは極めて難しいと思われる[8]。

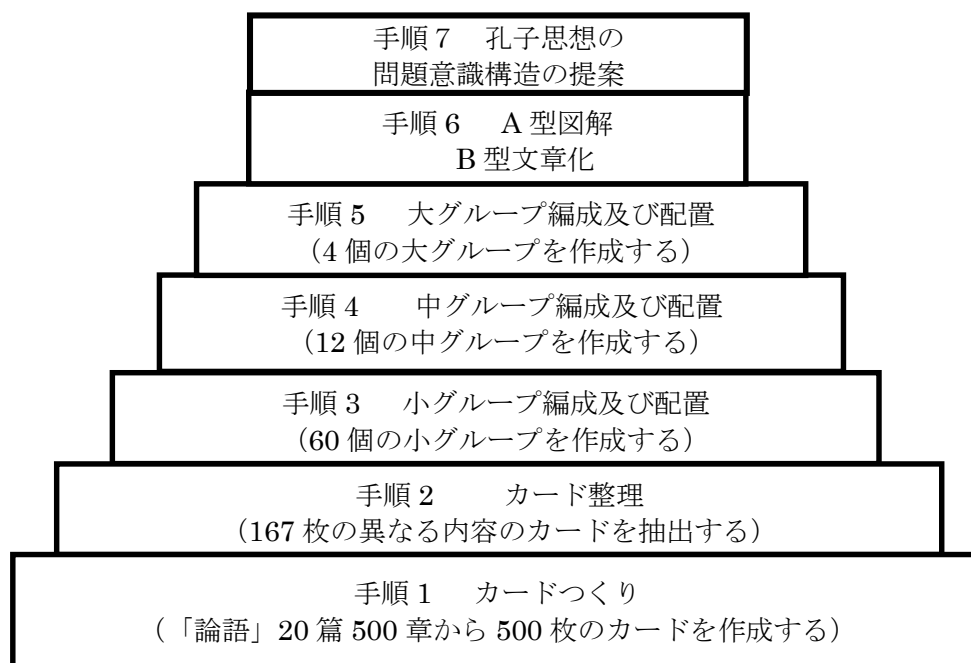


図 4-1 問題意識構造に関する「論語」の体系化手順

そこで、本節においては、定量的な分析方法ではなく、近年注目されてきた定性的な分析方法の一つである KJ 法を用いて「論語」を体系化することを試みる[9]。なぜなら、KJ 法は、漠然としてつかみどころのない問題を明確にし、解決策、新しい発想を得るためには、特に有効な手法である。また、KJ 法は、集まった膨大な情報・データをまとめるために、多くの断片的、雑多なデータを統合して、創造的なアイデアを生み出し、問題の解決の糸口を探っていく創造的問題解決方法の技法であると言えよう[10]。

なお、本節においては、「論語」の編数は、李哲厚の「論語今読」[11]を参考にして 500 章とした。「論語」の内容及び解釈は、銭穆の「論語新解」[12]、李哲厚の「論語今読」、吉田賢抗の「論語」[13]、貝塚茂樹の「孔子；孟子」[14]を参考にした。「論語」の体系化の手順は、図 4-1 に示されるように、「論語」の各章に対して、その内容によって、それぞれ一言で表現できるカードを作成する。まず、20 篇 500 章から総計 500 枚のカードを作成した。次に、問題意識に関するカードが 167 枚を選出された。意味が近いカードを 1 つの小グループに編成するとともに、そのグループの中から、1 つのカード（文字）を抽出し、その小グループの「表札」としてつけた。このような手順を行うことにより、孔子思想（「論語」）の内容は、60 個の小グループから構成されることが分かった。また、小グループを編成した手続きと同様に、60 個の小グループから 12 個の中グループを編成した。なお、12 個の中グループから同様の手続きにより、「志」・「仁」・「権」・「知」という 4 個の大グループ及び表札が編成された。このように、「論語」（孔子思想）を体系化した結果、問題意識に関する孔子思想は、「志」・「仁」・「権」・「知」という 4 つの側面にまとめられた[15]。

4.2.3 孔子論的問題意識構造モデル

本節においては、KJ法を用いて「論語」（孔子思想）を体系化した結果に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルが、図 4-2 に示されるように、目的・目標の「志」、責任感・価値観の「仁」、情報・知識・知恵の「知」及び判断・評価の「権」という4つの基本要素（側面）から構成されることを提案するとともに、その内容を詳しく考察する。

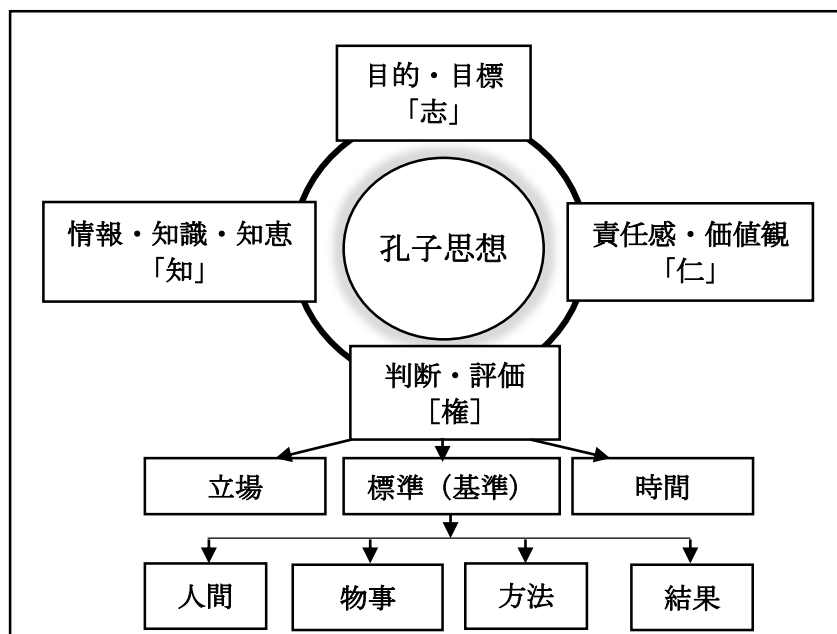


図 4-2 孔子論的問題意識構造全体概念図

1) 目的・目標の側面に関する「志」

問題とは、現状と理想形のギャップであるといえるように、「問題を発現する」とは、物事の現状とその理想形のギャップを認識することであろう[16]。「目的・目標」に関する問題意識において、孔子は、「飽食終日、心を用ふる所無きは、難いかな」では、日常生活における目標及び目的を設定しようとする意識の重要性を明確にしたとともに、直面している物事の理想形（最終目的）は何であるかについて関心がうかがえる。すなわち、問題意識を明確にする最初の重要な一歩は、目的・目標を立てることである。目的・目標を持つ意識が日常生活だけでなく、システムづくりにおいてもスタートラインである。

また、「群居終日、言義に及ばず、好みて小恵を行ふ。難いかな」では、正しい目的・目標（目標の方向）の重要性及び、組織・社会の共通目標の方向を確立する必要性が強調されている。それは、システムの関係者・当事者によってその価値観や立場などが異なるため、それぞれの人間社会に対する理解・目的なども一致していない。さらに、孔子は、具体的な方向について、

「老者は之を安んじ, 朋友は之を信じ, 小者は之を懐けん」を人生目標・社会の理想形に掲げているとともに, 「利を見て義を思う」のように, 個人利益の追求ではなく, 社会に役立つこと(社会に貢献できる)が人間社会における物事の最終目的(人間の道)であると指摘した[17]。

このように, 孔子思想において, 問題意識の最初の一步は直面している物事の理想形(最終目的)を認識すること, 物事の現状とその理想形のギャップを意識すること, より良い状態になるために目標を立てることであろう。また, その目標の方向性が正しいことの重要性, すなわち, それが人間社会に役立つという指針を明確にしたことが孔子論的問題意識構造モデルの重要な側面である。

2) 責任感・価値観の側面に関する「仁」

孔子思想においては, 「仁者(君子)」は, 孔子の人間の理想形であり, 人間のあるべき姿である。「仁」は人生を暮していく方針・理念でもあり, 人生の追求目標でもある。「仁」の概念は, 人間社会における諸問題を解決するための個人の社会的責任及びそれに伴う行動である[18]。「天下, 道が有れば, 吾それを変えらず」のように, 現状の物事に対する関心及び積極的な責任感を持つことは問題意識の生まれる重要な要因である。また, 「仁遠からんや。我仁を欲すれば, 斯に仁至る」及び「仁を為すは己に由りて, 人に由らんやと」のように, 問題の解決, あるいは, より良い目標を達成する主体・責任者は, 他人ではなく当事者自身であるという意識も重要視されている。すなわち, 問題解決の責任は自分自身にあるという意識を持つことは孔子の教訓である。問題, 特に社会問題を解決するためには, 当事者が責任感(個人の社会的責任感)を持って, 主体性を発揮して積極的に行動していくことが大切である[19]。

また, 「人の過ちや, 各々其の党に於いてす。過を觀て斯に仁を知る」のように, 過ちに対する人々の態度から, 「仁」(責任感)の有無がわかる。「子曰く, 君子は諸を己に求む。小人は諸を人に求む」のように, 問題の責任を他人に転嫁することは, 人間社会において多く見られる。とくに, 「弟子曰く, 子の道を悦ばざるに非ず。力足らざるなりと。子曰く, 力足らざる者は, 中道にして廢す。今汝は畫れりと」のように, 困難及び難題に直面する時に, 言い訳をする消極的な人間も多くいるであろう。責任を他人に転嫁すること, 言い訳をすることよりも, まず責任感を持ち自分側の責任を明らかにするという心構えが問題意識につながる。そして, その問題意識が問題解決に役立つであろう。さらに, 「子曰く, 過ちて改めざる, 是を過と謂ふ」のように, 試行錯誤しながら実行するときに, 過ち, ミスなどをおかすことがあるが, その際, 大切なことは勇気を持って修正及び改善していくことである。

3) 情報・知識・知恵の側面に関する「知」

孔子思想において, 人間社会に関する基本的な情報・知識を知ること, 社会生活できる能力・知恵を持つことが, 問題意識の一つの重要な側面となってくる。「子曰く, 位無きことを患

へずして、立つ所以を患へよ」及び「己を知る莫きを患へずして、知る可きを為さんことを求めよ」においては、自分の社会地位の有無よりも、自分が人間社会で生存していく能力があるかどうかを心配すべきであると述べている。また、「礼を知らざれば、以て立つこと無きなり」のように、人間社会に関する法律制度・文化・礼儀・習慣などを身につけていなければ、一人前の人間ではないと言える。人間社会に暮らすための基本的な知識・能力が持てなければ完全の人間にならないという発想が、孔子の教訓である。

「言を知らざれば、以て人を知ること無きなり」及び「人の己を知らざるを憂へず。人を知らざるを憂ふ」では、他人が自分のことを知ることより、自分が他人のことを知ることを目指すとともに、人間の言葉・心理・行動・本音などという人間・人間社会に関する情報・知識を知る能力が知恵の基礎である。そして、「知を問ふ。子曰く：人を知る」ように、孔子思想においては、人間あるいは人間社会を理解する・知ることが知恵である。

そして、孔子思想においては、「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり」のように、物事に関する情報・知識の有無を客観的に評価することが知恵である。それは、「問題がないのは最大の問題」と「問題があるのは改善のチャンス」と言われているように、自身の能力が不足していることを自覚し問題視することが問題解決のきっかけとなり、自身の能力を向上することにもなる。このように、孔子思想で言及されている人間社会に関する各種情報・知識を持つ能力が問題意識の生まれる前提条件である。

人間及び人間社会に関する基本的な情報・知識を知るために、「我は生まれながらにして之を知る者に非らず。古を好み敏にして以て之を求めたる者なり」のように、興味を持つこと（問題発見）、迅速的に物事の情報・知識などを行動・収集・獲得することが、問題意識を向上させる重要な一つの手段である。「子曰く、多く聞きて疑はしきを闕き、慎みて其の餘を言へば、則尤寡し。多く見て殆きを闕き、慎みて其の餘を行へば、則悔寡し」のように、多く見て、多く聞く、体験・経験とともに、わからないことを究明することが問題意識にとって大切な基本要素である。

4) 判断・評価の側面に関する「権」

孔子思想においては、「ともに学ぶべきも、未だともに道にゆくべからず、ともに道にゆくべきも、未だともに立つべからず、ともに立つべきも、未だともに権るべからず」のように、現状を適切かつ正しく判断・評価する「権」が、人間社会で一番難しいことであると言えよう。現状と理想形のギャップを判断・評価することは、問題意識の一つの側面であると言える。孔子は、とくに判断・評価における時間のとらえ方と、判断・評価における立場（位置・ポジション）と、判断・評価における当事者の標準（基準）という3つの構成要素を重要視している。

① 時間に関する判断・評価

孔子論的な時間のとらえ方（時間に関する諸概念）には、図 4-3 に示したように、1）タイミング、2）過去・現在・未来の時点、3）行動から結果までの時間（効果の遅延）、4）計画（長期・中期・短期の視点）と、5）時間の継続（継続性）という5つの種類がある。この5つの時間のとらえ方は、それぞれ異なる問題意識を呈している。まず、タイミングについては、「子曰く、與に言ふ可くして、これと言はざれば、人を失ふ。與に言ふ可からずして、之と言へば、言を失ふ」では、適時的に行動していくタイミングが、重要な問題意識として取り上げられている。とくに、人が人を支えるシステムにおいては、お客様の評価・判断の指標は、現場でサービスを提供するスタッフの態度・マナー・表情・行動などにおけるタイミングが大切であると指摘されている[20]。

また、過去・現在・未来の時点について、「成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず」のように、過去のことに対する見方が未来に対するとらえ方と異なるであろう。行動から結果までの時間（効果の遅延）については、「速やかならんことを欲すれば、則ち達せず」のように、行動してから効果が出るまでの遅延・ディレイなどに関する意識が重要なポイントである。とくに、計画（長期・中期・短期の視点）については、「人遠虜無ければ、必ず近憂あり」では、物事の見方の視点を長期・短期に置くこと（計画の期間など）によって問題意識が異なる。さらに、時間の継続については、「抑之を為びて厭わず、人を教えて倦まず」及び「歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るるを知る」のように、継続的に推進していくことが問題意識の継続性に関する課題である[21]。

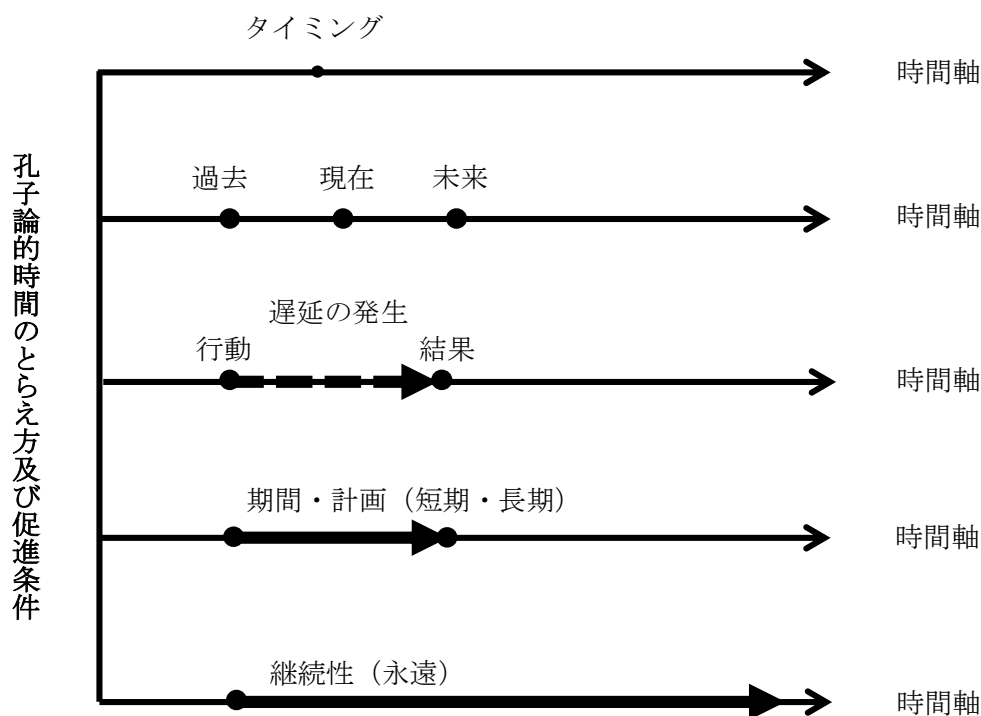


図 4-3 孔子論的時間のとらえ方及び促進方策

② 立場に関する判断・評価

立場の側面に関する問題意識においては、組織・システム中の各当事者の役割・位置・ポジションなどによって、現状に対する当事者の視点・見方・とらえ方・考え方・評価などが異なる[22]。まず、「異端を攻むるは、斯れ害があるのみ」のように、自分の意見と異なる考え・視点を単に反対・反発すること（反対ための反対）は危険である。それに対して、「君子は和して同せず。小人は同じて和せず」のように、異なる意見・視点・考え方・やり方を権衡するとともに、それぞれの背景・理由などを理解した上で、バランスをとること、すなわち、諸立場からの意見を聞く意識を持つことが重要視されている[23]。

次に、「子曰く、其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや」のように、相手の心・気持ち・態度・やる気・理由・動機・心理などを観察することも非常に重要である。「子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿れと」では、思いやり、気配り、心配りの精神で相手の立場・条件などを理解することが基本的な要点である。とくに、人が人を支援するサービス業においては、自分の立場ではなく、お客様の立場にたって考えることが必要である。お客様の個性・ニーズは異なるが、それぞれのニーズを思いやりの精神で把握し、サービスを提供することが重要である[24]。一方、「衆之を惡むも必ず察す。衆之を好むも必ず察す」のように、関係者全員が同じ目的・方向に向かって検討を進めていく姿勢・態度が必要である。

③ 標準（基準）に関する判断・評価

問題意識は、現状・物事などを判断・評価する当事者の標準（基準）によって異なる。判断の標準は、判断の対象によって異なる。孔子思想においては、判断の対象として、人間、物事、やり方（方法）、結果という4つに分類される。

「人間」に関する標準は、「善を見ては及ばざるが如くし、不善を見ては湯を探るが如くす」及び「賢を見ては齋からんことを思ひ、不賢を見ては内に自ら省みるなり」のように、理想的な人間（賢人・君子）が人間の標準（基準）である。そのために、理想的な生き方を真似るとともに、あるいは、理想（高い目標）を追求していく行動が大切である。また、不賢を見るとそれを評価・反省・改善していく危機意識・問題意識は不可欠である。具体的内容においては、「吾日に吾が身を三省す。人のために謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習はざるを伝へしかと」のように、つねに、仕事・人間関係・能力などに対する態度・行動・ミス・不注意な日常行動・精神などを検査・反省・評価することが重要視されている。

また、物事については、「君子の天下に於けるや、適も無く、莫も無し、義とともに比す」のように、物事における判断標準（基準）は正義である。「民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく。知と謂ふ可しと」のように、人間社会に貢献できること並びに、人間の QOL 向上・人間の生活に役立つことは物事の判断基準であろう。

さらに、やり方においては、「子曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしと」のように、バラ

ンス・和・中庸が物事の判断標準（基準）である。また、「子曰く、質、文に勝てば則野なり。文、質に勝てば則史なり。文質彬彬として、然かる後に君子なり」では、内容と形式のバランスをとることの重要性が指摘されている。とくに、人間関係においては、「子遊曰く、君に事へて數すれば、斯に辱しめらる。朋友に數すれば、斯に疏んぜらる」のように、適切な距離、理と情のバランスの大切さも強調されている。

最後に、「利牛の子も、あかくしてかつ角ならば、用ふることなからんと欲すと雖も、山川其れ諸を捨てんやと」のように、人間の出身より、人間の能力・役割が人間を評価する標準（基準）となってくるであろう。「詩三百をしょうすれども、これに授くるに政を以てして達せず。四方に使いして、専対すること能はずんば、多しと雖も亦何を以て為さん」のように、学問・学歴・知識より、役割・仕事実績等の結果が重視されている。

4.2.4 考察

本節においては、KJ法を用いて「論語」孔子思想を問題意識の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルについて提案を行った。孔子論的問題意識構造モデルは、KJ法でまとめられた4つの大グループ、目的・目標の「志」、責任感・価値観の「仁」、情報・知識・知恵の「知」及び判断・評価の「権」から構成されることを提案した。

また、システム・マネジメント論の視点から孔子論的問題意識構造モデルを要約すると、目的・目標の「志」、責任感・価値観の「仁」、情報・知識・知恵の「知」及び判断・評価の「権」という4つの基本要素が、システムづくりにおける問題発見、問題設定、問題解決というそれぞれの段階に応じて、一体化になってダイナミックに動いている。とくに、具体的なシステムズ・アプローチ（問題解決手順）においては、孔子論的問題意識構造モデルの4つの基本要素は、図4-4に示されるように、手順1の目標追求の段階において、適切な目的・目標に向けて強い社会的責任感を持つとともに、物事（システム）に関する情報・知識に基づいて、現状の実態を評価するという役割を行う。また、孔子論的問題意識構造モデルでは、次の手順2の実態調査の段階に移動すると、その段階に対応しながら異なる4つの基本要素の内容を弾力的に柔軟に変化していく。このように、手順1の目標追求から手順8のフォローアップまでのシステム・サイクルにおける各段階に応じて、弾力的かつ柔軟に強く問題意識を持ち続けていくことは、孔子論的問題意識構造モデルの特徴であると言える。

また、孔子論的問題意識構造モデルは、具体的なシステムづくりにおけるシステム構造・システム特性・システム環境などに適応・相応しているとともに、そのシステムを含めるもっと大きな社会システムの環境・システム特性・社会構造・社会ニーズ・法律制度・歴史文化・社会価値観・社会習慣などにも影響される。すなわち、孔子論的問題意識は、実態システムの価値観・文化・環境などの諸要素と双方向に相互影響していると言えよう。

さらに、孔子論的問題意識構造モデルの中では、個人の社会的責任感の「仁」と情報・知識の「知」が強調されている。個人の社会的責任感が強ければ強いほど人間社会における多くの事柄に関心を持つ確率は多くなる。また同時に、物事に関する情報・知識が豊かであれば

あるほど、その人の問題意識は強くなってくると思われる。

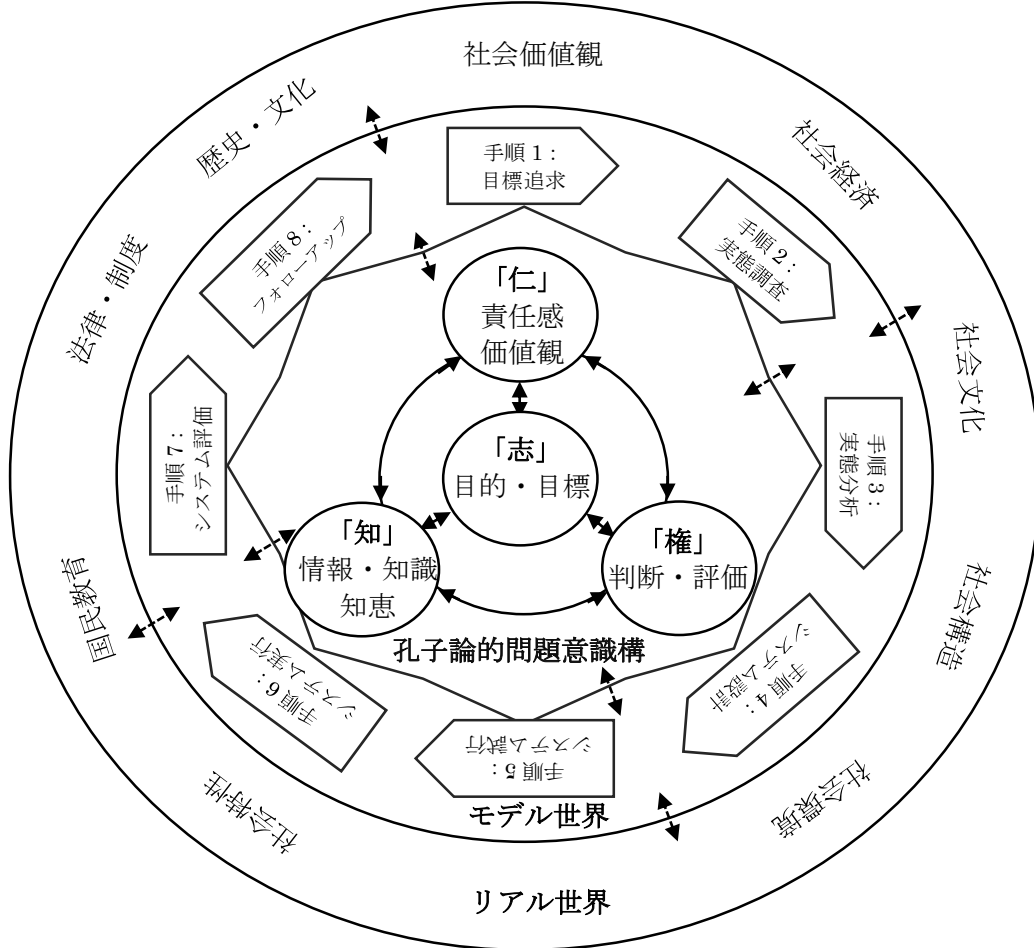


図 4-4 孔子論的問題意識構造の特徴全体概念図

4.2.5 結言

「問題解決は問題意識から始まり、新たな問題意識を生む」と言われるように、本節においては、問題意識が問題提起の段階のみに関係するという従来の狭い考え方から脱皮し、孔子論的問題意識構造モデルに示されるように、システム・サイクルの全過程において、関係者はつねに強い問題意識を持ってダイナミックに対応していくことが必要であると言えよう。

なお、ここで提案した孔子論的問題意識構造モデルにおける4つの基本要素の詳細な設計及び、本問題意識構造モデルの有用性等については、具体的なシステム事例（例えば、地域包括ケアシステムづくりにおける地域関係者の問題意識構造の解明）を通じて今後更なる検討が必要であろう。

4.3 住民の意識実態分析と意識革新の提案

4.3.1 緒言

少子高齢社会においては、高齢化率の激増により、年金・医療・介護などに関する高齢者の社会保障費の高騰、さらには、疾病構造及び家族構造の社会変化に伴い、住民の医療・保健・福祉・介護などに対するニーズも多様化・高度化・複雑化してきた[1]。そして、全住民の健康で幸せな生活を守っていくとともに、全住民のQOL (Quality Of Life) 向上のためには、それぞれの地域内において、安定な住まいのもとに、より良い医療・保健・介護・福祉・生活支援などの諸サービスを、必要な住民に、必要な時に、切れ目なく継続的に提供する地域包括ケアシステムの構築及び運営が必要不可欠となってきた[2]。

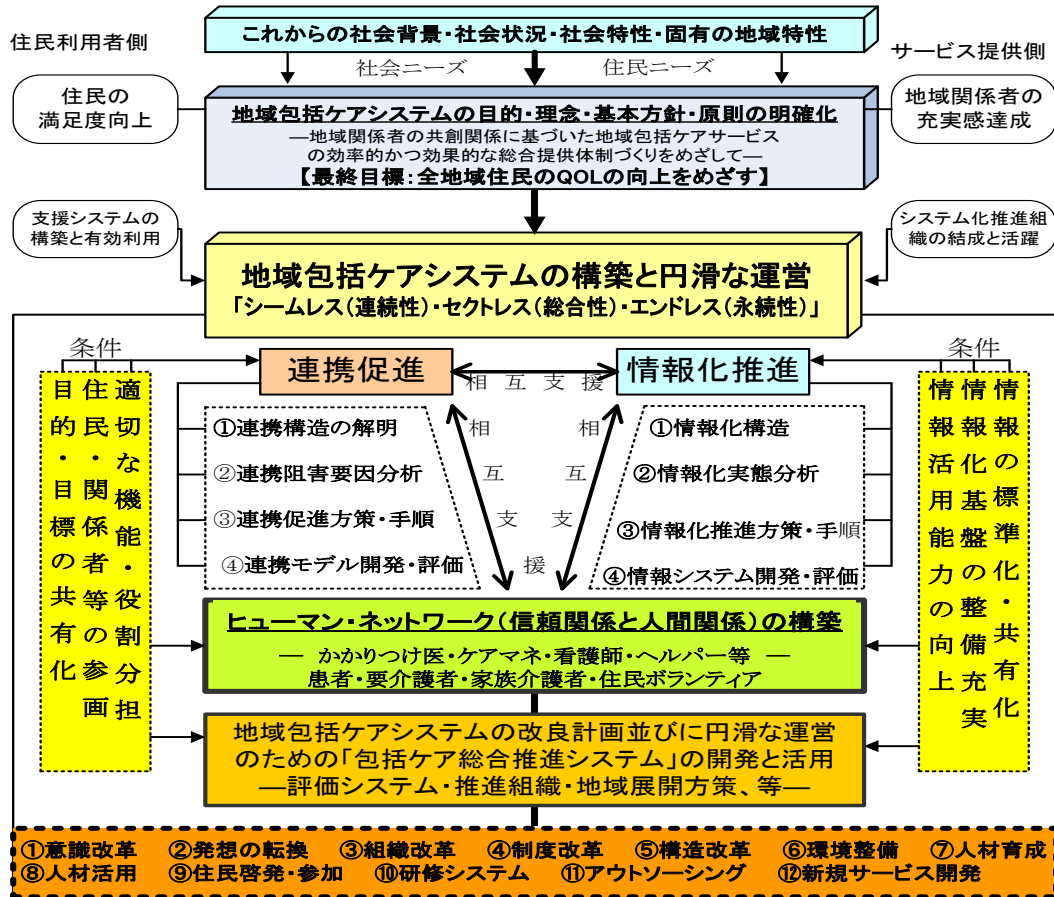


図 4-5 地域包括ケアシステム構築における主な検討課題

地域包括ケアシステムの構築及び円滑な運営のための解決すべき課題として、図 4-5 に示されるように、意識改革, 発想の転換, 組織改革, 構造改革, 人材育成, 住民啓発・参画等をあげることができる[1]。そこで、これらの諸課題を解決するために、とくに、これからの参加社会においては、「自分の健康は自分の力で守る」だけでなく、「健康で幸せな生活を、皆と一緒に守る」全員参画並びに、地域包括ケアシステムの主役が医師・行政・他人ではなく、

住民自身であるという自覚及び積極的な態度・意識革新が不可欠な条件となってきた[24]。

そこで、実際の地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、住民の地域包括ケアシステムに対する問題意識を高めることが緊急かつ重要な課題となってきた。そのために、まず、住民の意識実態・現状を把握及び分析し、意識革新における阻害要因を探索するとともに、問題意識向上及び意識革新を促進することが不可欠な条件となってきた。

一方、問題意識とは人間の生き方・考え方・進め方に強い影響を与えていると言われている[4]。そこで、前節では、人間の生き方・考え方・進め方の理想形である君子を、人間のあるべき姿に掲げてきた孔子思想を体系化した結果に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルを提案した[25]。責任感、目標、知識及び基準という4つの側面から構成されている孔子論的問題意識構造モデルの有効性を検証するために、具体的なシステムに応用することが必要となってくる。そこで、本節においては、少子高齢社会における重要な課題である地域包括ケアシステムを具体的な例として、とくに、地域包括ケアシステムの主役である住民の問題意識を取り上げる。

なお、本研究においては、具体的な地域包括ケアシステムの構築及び運営に関する共同研究相手である豊田市をモデル地域として取り上げる。また、第5期豊田市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画策定のために、平成22年9月に市民を対象者としたアンケート調査が郵送法により実施された[26]。

そこで、本節においては、孔子論的問題意識構造モデルの有効性及び効果を検証するために、豊田市に在住している市民を対象に実施した市民意識アンケート調査データに基づいて、孔子論的問題意識構造モデルの4つの側面について分析及び検証を行う。また同時に、地域包括ケアシステムにおける市民意識実態・問題点を客観的に分析・把握するとともに、問題意識の向上条件（意識革新）について提案を行う。

4.3.2 市民実態調査の概要

第5期豊田市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画策定のために、平成22年9月に無作為に選出された一般市民（要介護・要支援を認定されていない40～64歳の市民）を、対象者としたアンケート調査を実施した。アンケート調査は郵送法により行われた。有効回答数は、1,491部（有効回答率64.8%）であった。なお、本アンケート調査票は、基本属性、健康状態、生きがい、地域の助け合い、介護予防、住まい、介護保険制度、その他という8個の調査項目から構成されている。そこで、本節においては、地域包括ケアシステムにおける住民の活動実態及び意識実態などを把握・分析するために、その調査結果を用いることとした。

なお、孔子論的問題意識構造モデルに基づいた、具体的な住民の問題意識に関する内容においては、図4-6に示されるように、主に1) 高齢期に向けた準備の状態（目標の側面）、2) 介護経験及び知識の有無（知識の側面）、「地域での助け合い活動に対する関心度」（責任感の側面）、健康状態による判断の基準（判断の側面）、という4つの項目（側面）から構成されている。本節においては、前述の4つの側面から、孔子論的問題意識構造モデルの有効性に

ついて検証及び考察を試みる。

一方、前述の市民意識アンケート調査項目の内、「日頃、日常生活に健康づくりでどんなことに心がけていますか」という設問（6個の複数選択肢から構成）に対して、選択された回答数が多いほど健康づくりに心がけている意識が強いと考えられる。また、「健康づくりに心がけている意識が強い住民ほど問題意識が強い」と仮説をたてた。そこで、健康づくりに心がけている意識レベル（問題意識の強さ）においては、表 4-1 に示されるように、5つの意識レベルに分類した。また、それに基づいて地域包括ケアシステムにおける住民の問題意識について比較分析及び考察を行う。

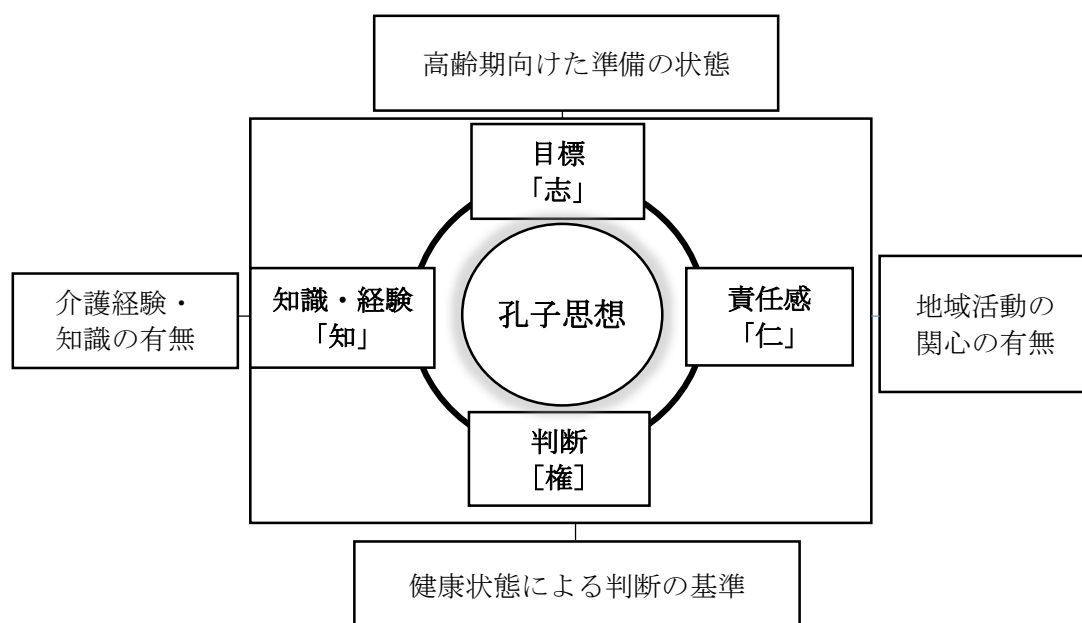


図 4-6 孔子論的問題意識構造に基づいた住民の問題意識構成図

表 4-1 日頃生活で健康づくりに心がけていることと住民の問題意識関連表

健康づくりに心がけている意識レベル (健康意識及び問題意識の強さ)	該当住民：選択肢の項目数
レベル1)：「まったく心がけていない」	「特に心がけていない」を選択した住民
レベル2)：「あまり心がけていない」	1つの項目を選択した住民
レベル3)：「ふつう」	2つの項目を選択した住民
レベル4)：「まあ心がけている」	3つの項目を選択した住民
レベル5)：「よく心がけている」	4つ以上の項目を選択した住民

4.3.3 仮説の設定

分析に先立ち、孔子論的問題意識構造モデルにおける4つの側面と「健康に対する問題意識（以降、健康意識と呼ぶ）の強さ」について次の4つの仮説（仮説1～仮説4）を設定する。

仮説1）：目標を持っている住民の方が健康意識が強い。

孔子論的問題意識構造モデルにおいては、問題意識の有無及び強弱が、目標の有無に影響を受けると指摘されている[25]。そこで、本節においては、「高齢期ための準備（目標）をしている住民の方が健康意識が強い」という仮説1を設定した。

仮説2）：介護経験・知識を持っている住民の方が健康意識が強い。

孔子論的問題意識構造モデルにおいては、知識・経験の有無が問題意識につながっている。介護経験（知識）をもっている住民が、自分の健康づくり及び地域包括ケアシステムに対する問題意識が強いと考えられる。具体的な仮説は、「介護経験（知識）を持っている住民の方が健康意識が強い」という仮説2を設定した。

仮説3）：地域での助け合い活動に関心（責任感）を持っている住民の方が健康意識が強い。

孔子論的問題意識構造モデルにおいては、責任感（関心）の有無、とくに、社会的責任感の有無が、問題意識に強く影響を及ぼしている。そこで、地域包括ケアシステムに対する関心並びに責任感を持っているかにより、地域包括ケアシステムに対する問題意識が異なると考えられる。そこで、具体的な仮説は、「地域での助け合い活動に関心（責任感）をもっている住民の方が健康意識が強い」という仮説3を設定した。

仮説4）：健康な住民の方が健康意識が強い。

孔子論的問題意識構造モデルにおいては、判断の立場・基準・時間により、問題意識が異なると記述されている。そこで、各自の健康状態と問題意識の強さに関して、「健康な住民の方が健康意識が強い」という仮説4を設定した。

上述した4つの仮説について、住民の意識実態調査分析結果に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルの有効性を検証する。

4.3.4 市民意識実態調査の結果

① 「目標」に関する問題意識

図4-7に示されるように、健康意識と充実した高齢期に向けた準備の関連について、「よ

く心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民においては、「一部準備している」と回答した市民が51%であったのに対して、「ほとんど準備していない」と回答した市民が32%であった。また、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて回答した市民においては、「一部準備している」と回答した市民が21%であったのに対して、「ほとんど準備していない」と回答した市民が4割弱であった。よって、健康づくりに心がけている市民の方がより高齢期に向けた準備をしていることが考えられる。なお、健康意識と「高齢期のための準備」において有意差が認められた(p=0.000)。

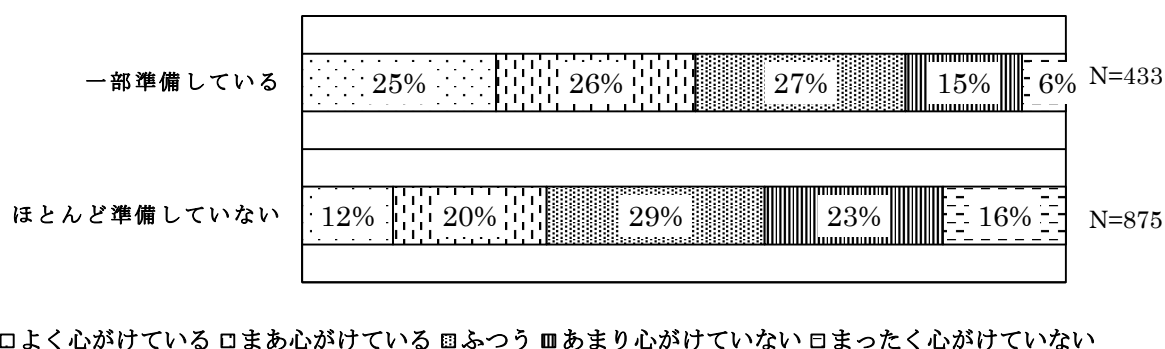
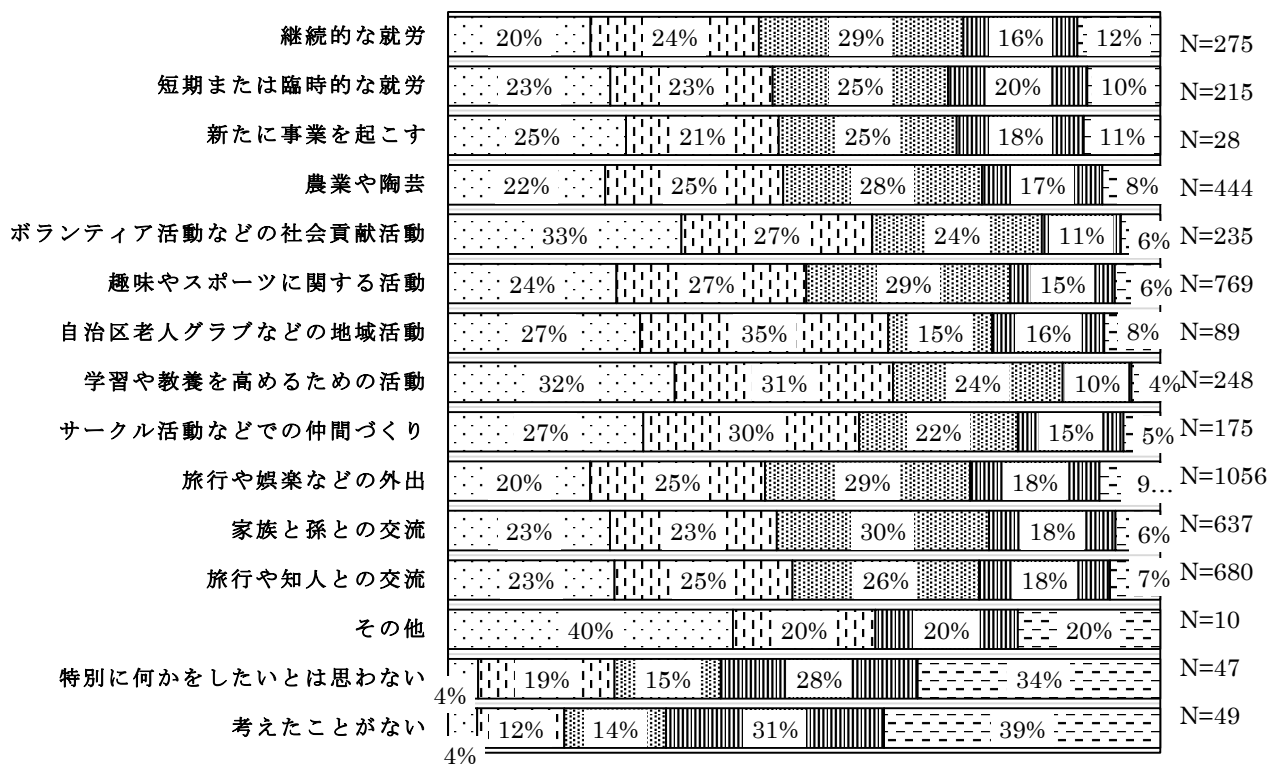


図 4-7 高齢期のための準備状態と健康意識の関連図

また、図 4-8 に示されるように、「高齢期（65 歳以降）においてどのようなことを楽しみにしたいか」（複数回答）について、「ボランティア活動などの社会貢献活動」、「学習や教養を高めるための活動」、「サークル活動などでの仲間づくり」を選択した市民においては、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民が6割前後であったのに対して、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて回答した市民は2割前後と低い値であった。また、「継続的な就労」、「短期または臨時的な就労」、「新たに事業を起こす」、「農業や陶芸」、「趣味やスポーツに関する活動」、「自治区老人クラブなどの地域活動」、「旅行や娯楽などの外出」、「家族と孫との交流」、「旅行や知人との交流」を選択した市民については、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民が5割前後であったのに対して、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて回答した市民は2割前後であった。

一方、「特別に何かをしたいとは思わない」及び「考えたことがない」を選択した比率においては、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて回答した市民は7割に近くなっているのに対して、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民は2割前後と低い値を示している。なお、高齢期における「楽しみ」として、「旅行や娯楽などの外出」（71%）、「趣味やスポーツに関する活動」（52%）、「旅行や知人との交流」（46%）、「家族と孫との交流」（43%）が選択率の上位を占めていることが分かる。

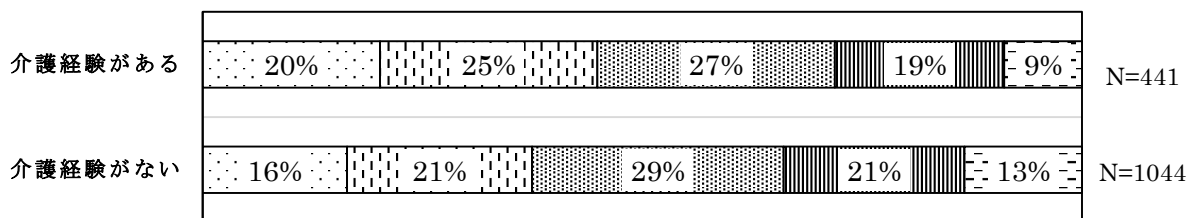


□よく心がけている □まあ心がけている □ふつう □あまり心がけていない □まったく心がけていない

図 4-8 高齢期において楽しみにしていること

② 介護経験（知識）に関する問題意識

図 4-9 に示されるように、健康意識と「介護経験の有無」の関連について、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民においては、「介護経験がある」と回答した市民が 45%であったのに対して、「介護経験がない」と回答した市民が 37%であった。よって、健康に心がけている市民の中には、介護経験がある市民の方が 2 割くらい高かった。なお、介護経験と健康意識において有意差が認められた (p=0.04)。



□よく心がけている □まあ心がけている □ふつう □あまり心がけていない □まったく心がけていない

図 4-9 介護経験の有無と健康意識の関連図

図 4-10 に示されるように、健康意識と介護教室への参加実態の関連について、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて選択した市民においては、「参加している、該当すれば参加したい」と回答した市民が 48%で、「該当しても参加したくない」と選択した市民が 26%で、「わからない」と回答した市民が 4 割であった。よって、日常生活に心がけている市民の方が積極的に介護教室に参加していると考えられる。なお、健康意識による介護教室への参加実態においては有意差が認められた ($p=0.000$)。

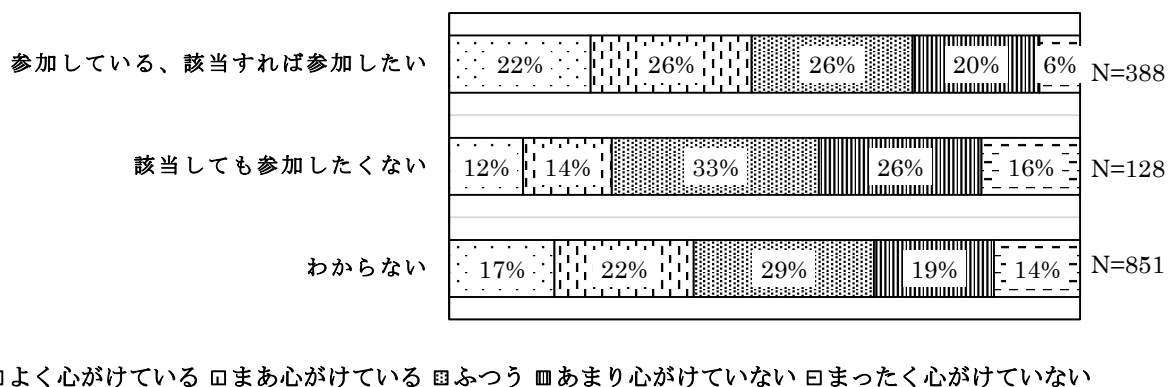


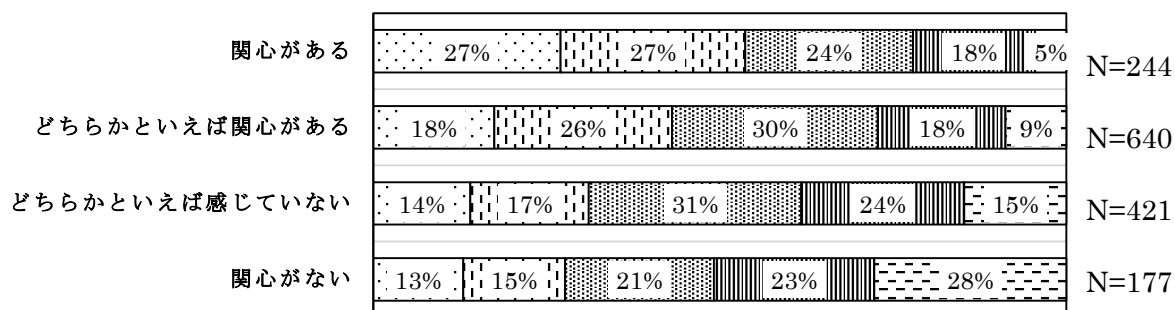
図 4-10 介護教室の参加実態と健康意識の関連図

③ 責任に関する問題意識

図 4-11 に示されるように、健康意識と地域で助け合い活動の関連において、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて選択した市民においては、「関心がある」及び「どちらと云えば関心がある」を合わせて回答した市民が 5 割前後であったのに対して、「関心がない」及び「どちらと云えば関心がない」を合わせて回答した市民が 3 割前後であった。一方、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて選択した市民においては、「関心がある」及び「どちらと云えば関心がある」を合わせて回答した市民が 25%前後であったのに対して、「関心がない」及び「どちらと云えば関心がない」を合わせて回答した市民が 5 割前後であった。よって、地域で助け合い活動に関心を持っている市民の方が、より日常生活に心がけていると考えられる。なお、健康意識による地域で助け合い活動においては有意差が認められた ($p=0.000$)。

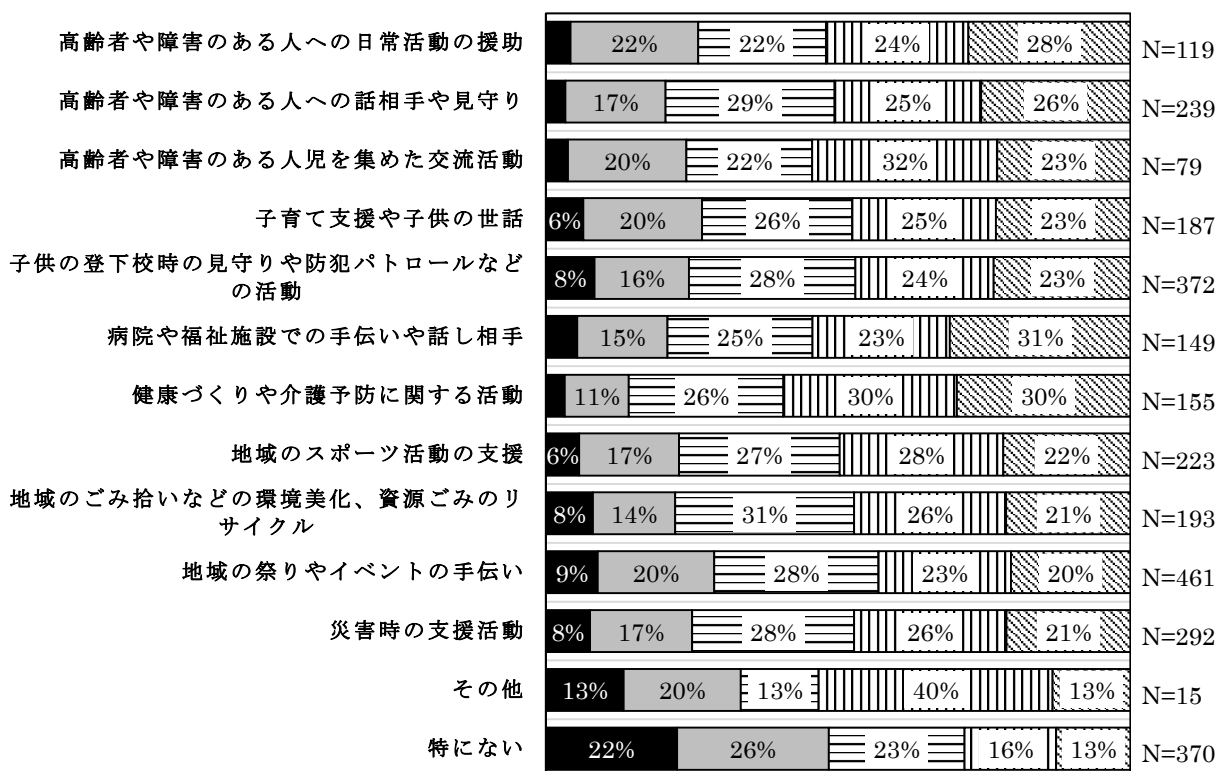
一方、地域活動において、やってみたいことやできそうな行事・活動について、図 4-12 に示されるように、「その他」及び「特にない」を除いて、他の項目においては、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民が 5 割前後であったのに対して、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて回答した市民が 2 割前後であった。なお、地域活動でやってみたいことやできそうな行事・活動として、「地域の祭りやイベントの手伝い」(32%)、「子供の登下校時の見守りや防犯パトロールなどの活動」(26%)、「災害時の支援活動」(20%) が選択率の上位を占めていることが分かる。また、

「高齢者や障害のある人児を集めた交流活動」、「高齢者や障害のある人への日常活動の援助」、「病院や福祉施設での手伝いや話し相手」、「健康づくりや介護予防に関する活動」と回答した比率は1割未満であった。



□よく心がけている □まあ心がけている □ふつう □あまり心がけていない □まったく心がけていない

図 4-11 地域で助け合い活動の関心度と健康意識の関連図

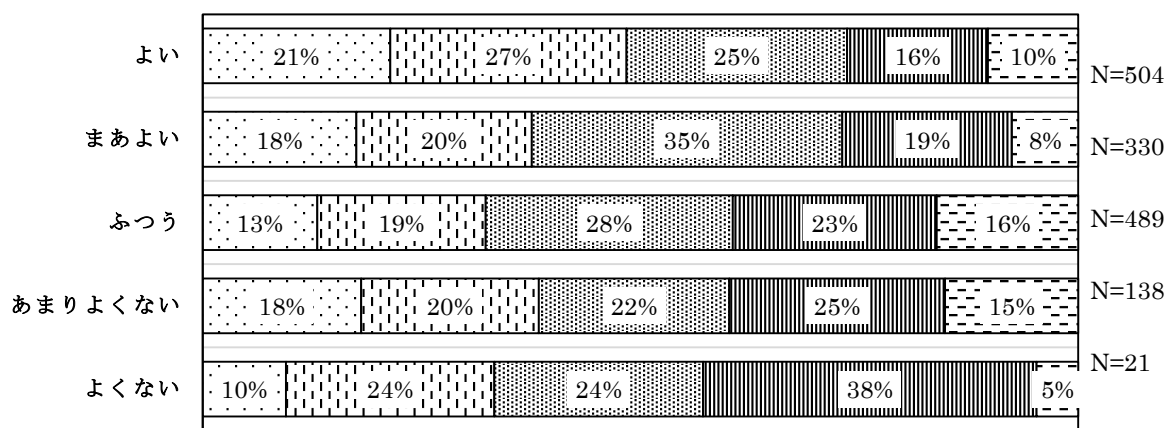


■まったく心がけていない □あまり心がけていない □ふつう □まあ心がけている □よく心がけている

図 4-12 地域活動でやってみたいこと等

④ 「立場」に関する問題意識

図 4-13 に示されるように、健康状態と健康意識の関連について、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した比率においては、健康が「よい」及び「まあよい」を合わせて選択した市民が 4 割前後であったのに対して、「あまりよくない」及び「よくない」を合わせて回答した市民が 35%前後であった。一方、「まったく心がけていない」及び「あまり心がけていない」を合わせて回答した市民においては、健康が「よい」及び「まあよい」を合わせて選択した市民が 2 割前後であったのに対して、「あまりよくない」及び「よくない」を合わせて回答した市民が 4 割前後であった。よって、健康な市民の方が日頃の健康に心がけていると考えられる。なお、健康状態による健康意識においては、有意差が認められた($p=0.000$)。



□よく心がけている □まあ心がけている ■ふつう ■あまり心がけていない □まったく心がけていない

図 4-13 健康状態と問題意識の関連図

4.3.5 市民意識実態調査の考察

1) 考察 1：目標を持っている市民の方が健康意識が強い（仮説 1）

市民意識実態調査においては、目標に関する設問として、主に「高齢期に向けた準備」に関する質問項目を選定した。今回の分析結果においては、充実した高齢期に向けた準備については、「よく心がけている」及び「まあ心がけている」を合わせて回答した市民においては、「一部準備している」と回答した市民の方が「ほとんど準備していない」市民より 2 割弱高かった。よって、健康意識が強い市民の方が、高齢期に向けて準備しながら日常生活をおくっていることが分かる。すなわち、目標を持って生活している市民ほど健康意識が強いという仮説が容認された(カイ二乗 $p=0.000$)。

2) 考察2：介護経験・知識を持っている市民の方が健康意識が強い（仮説2）

健康・介護・福祉等の経験・知識を持っているかについては、今回のアンケート調査では、介護経験の有無、という設問結果を用いることとした。「よく心がけている」と回答した市民は、「まったく心がけていない」と回答した市民より、「介護経験がある」比例が1割以上高かった。よって、介護経験がある市民の方が健康意識が強いと言える。すなわち、介護経験・知識を持っている市民の方が健康意識が強い、という仮説が容認された(カイ二乗 $p=0.04$)。

3) 考察3：地域での助け合い活動に関心（責任感）を持っている市民の方が健康意識が強い（仮説3）

責任感を持っている市民は、問題意識が強いという仮説について、地域での助け合い活動に対する関心、という設問に該当する。また、地域での助け合い活動に対する関心においては、「関心がある」と「どちらと言えば関心がある」について、「よく心がけている」市民は、「まったく心がけていない」市民より3割高かった。よって、地域での助け合い活動に対する関心を持っている市民は、日常生活に心がける問題意識が高いと言える。仮説が容認された(カイ二乗 $p=0.000$)。

4) 考察4：健康な市民の方が健康意識が強い（仮説4）

健康状態が、その人の健康意識に影響を及ぼしていることは、今回の市民意識分析実態調査からも明らかになった。とくに、日常生活において心がけている市民は、健康度がいいということがわかった。また、健康がよい市民は、問題意識が強いと言える。健康な市民の方は問題意識が強い、という仮説が容認された(カイ二乗 $p=0.000$)。

4.3.6 意識革新の提言

市民の意識実態を分析した結果により、地域包括ケアシステムに対する市民の問題点を明らかにするとともに、それに基づいて、図 4-14 に要約されるような市民の意識革新（問題意識の向上条件）について提言及び考察を行う。

まず、一般的な地域活動において、市民が具体的に参画できそうな行事・活動（複数回答）の結果により、「地域の伝統的な活動（祭り・イベント・防犯パトロール・災害活動）の手伝い」が注目されている。しかしながら、地域包括ケアシステムに関する活動を選択した市民は、全体で1割前後であった。よって、市民は地域活動には関心を持っているが、これからの少子高齢社会においては、今までの地域活動の重心を地域包括ケアシステム関連に変更・移行する「本質指向」（意識革新）がきわめて必要であると言えよう。

また、これからの地域包括ケアシステムにおいては、とくに、住民一人ひとりが「自分の健康」を守っていただくだけではなく、「地域住民と一緒に」幸せな生活・健康を楽しく守っていくとともに、「産」・「学」・「民」・「官」が相互に連携・協働していく地域「全員参画」型の社会活動が重要な課題となってきた。さらに、地域包括ケアシステムの主役が医師・行政では

なく、地域住民であるという意識を、全住民に教育・啓発することも必要であろう。

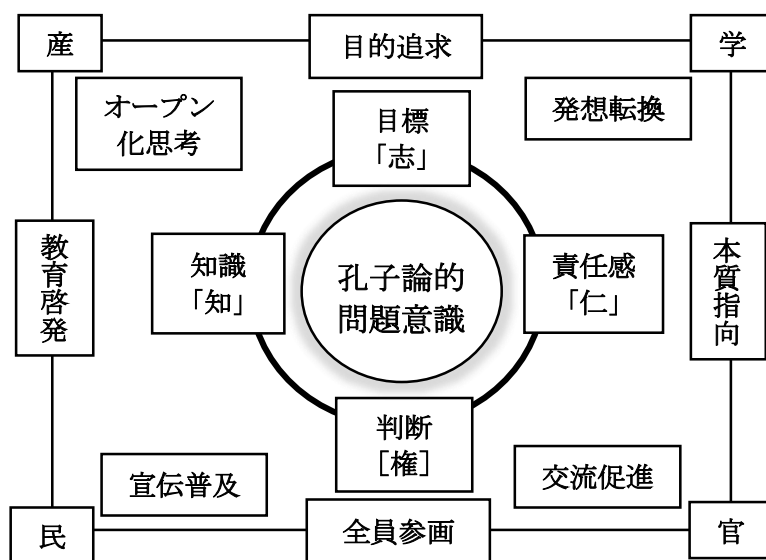


図 4-14 孔子論的問題意識構造に基づいた意識革新の概念図

4.3.7 結言

本節においては、豊田市における市民の意識実態分析結果をもとに、孔子論的問題意識構造モデルの有効性について検証した。孔子論的問題意識構造モデルの4つの側面について、それぞれの仮説を検証した結果により、孔子論的問題意識構造モデルが地域包括ケアシステムにおける市民の問題意識構造の解明と改善等に有効であることを明らかにした。

また、市民の意識実態分析結果により、市民の地域包括ケアシステムに対する関心度はまだ低いということが分かった。さらに、前述した問題点に対して、孔子論的問題意識構造モデルに基づいて、意識革新の向上条件などについて考察及び提言を試みた。とくに、目的追求、本質指向、教育啓発、全員参画という4つの基本方策が重要であると考えられる。提言した諸方策が、これからの地域包括ケアシステムにおける住民活動及び役割分担の方向性に役立つことが期待される。

最後に、今後の検討課題及び方向としては、まず、地域包括ケアシステムにおけるすべての関係者の問題意識実態及び構造を把握及び究明することが急務となってくるであろう。また、孔子論的問題意識構造モデルの更なる発展及び改善のために、本問題意識構造のモデル化及び数量化が必要な条件となってくるであろう。

4.4 まとめ

本章では、問題意識構造を究明するために、「論語」にまとめられた強い問題意識を持っている孔子思想を KJ 法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から孔子論的問題意識構造モデル・特徴・促進方策などについて提案及び考察した。また、本節においては、「問題解決は問題意識から始まり、新たな問題意識につなぐ」ように、問題意識が問題提起の段階のみにあるという従来の考え方・常識を、新しい視点から改めて考察するとともに、問題意識が問題解決の全過程にあることを提案した。この意味においても、孔子論的問題意識構造モデルを提案することが有意義であると言えるかもしれない。

また、ここで提案した孔子論的問題意識構造モデルの有効性及び効果を検証するために、孔子論的問題意識構造モデルの特性及び特徴により、とくに、人が人を支える地域包括ケアシステムに適応することを試みた。なお、具体事例として、共同研究相手の豊田市における地域包括ケアシステムを取り上げた。そこで、本章では、豊田市に在住している市民を対象とした意識実態調査に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルの有効性及び効果を検証することを行った。これらの分析結果に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルが、地域包括ケアシステムにおける市民の健康に関する問題意識に有効であることは、明らかにした。

なお、市民の意識実態分析の結果から、地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、豊田市民の問題意識はまだ低く、市民のあるべき姿（理想形）と実態とにはギャップがあることがわかった。また、本章においては、分析結果及び考察により、これからの地域包括ケアシステム構築における市民活動及び役割分担における基本方針及び今後の方向性を示した。最後に、今後の課題及び展望としては、孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムにおける関係者全員の意識分析及びあるべき姿について考察及び究明していくことは重要な課題であろう。

参考文献（第4章）

- [1] 山本勝:保健・医療・福祉の私捨夢（システム）づくり, 篠原出版新社, 2007
- [2] 山本勝:保健・医療・福祉のシステム化と意識改革, 新興医学出版社, 1993
- [3] 大枝秀一:問題と問題意識とに関する哲学的評注, 哲学 27, pp. 185-196, 日本哲学会, 1977
- [4] 戸坂潤:戸坂潤全集, 第2巻, 勁草書房, 1966
- [5] 楊先挙:孔子マネジメント入門, 日本能率協会マネジメントセンター, 2010
- [6] 潘乃樾:孔子与現代管理, 中国経済出版社, 1994
- [7] 赫伯特芬格莱特, 彭国祥訳:孔子即凡而圣, 江蘇人民出版社, 1988
- [8] 匡亜明:孔子評伝, 南京大学出版社, 1990
- [9] 川喜田二郎:KJ法:渾沌をして語らしめる, 中央公論社, 1986
- [10] 史文珍:KJ法を用いた孔子思想の体系化の試み, 愛知工業大学経営情報科学第7巻第1号, pp. 37-49, 2012

- [11] 李哲厚: 論語今読, 天津社会科学出版社, 2007
- [12] 銭穆: 論語新解, 生活・讀書・新知三聯書店, 2005
- [13] 吉田賢抗: 論語, 明治書院, 1988
- [14] 貝塚茂樹: 孔子; 孟子, 中央公論新社, 1978
- [15] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2012
- [16] 山本勝, 佐野正人: 新しい保健・医療・福祉システムの考え方・進め方, 医療情報電送センター出版事業部, 1989
- [17] 烏恩溥: 仁義礼智信和現代化, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 2587-2603, 1992
- [18] 郝大为, 安樂哲: 孔子哲学思微, 江蘇人民出版社, 1996
- [19] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいた地域包括ケアシステム構築に関する一考察, 日本経営診断学会第 45 回全国大会予稿集, 北海道大学, pp. 127-132, 2012
- [20] 山本勝ら: 地域包括ケアシステムの開発と運用に関するシステム論的考察(1), 日本経営診断学会論集 Vol. 5, pp. 128-139, 2005
- [21] 趙鈴鈴: 孔子的人生“時化”聖教, 国際儒学研究, Vol. 17, 2011
- [22] 伊丹敬之: 場の論理とマネジメント, 東洋経済新聞報社, 2010
- [23] 斎藤嘉則: 問題解決プロフェッショナル思考と技術, ダイヤモンド社, 2010
- [24] 山本勝: 介護保険時代における保健・医療・福祉のシステムづくりと人づくり, 新企画出版社, 2000
- [25] 史文珍: 孔子論的問題意識に関する考察, 愛知工業大学経営情報科学第 9 巻第 1 号, pp. 31-46, 2013
- [26] 豊田市: 豊田市高齢者等実態調査等結果報告書, 豊田市福祉保健部高齢福祉課, 2011

第5章 連携意識構造における孔子論的考察とその応用

5.1 はじめに

これからの少子高齢社会においては、健康で幸せな社会を構築及び運営するために、多分野・多部門・多職種間において効率的かつ効果的な連携が必要不可欠な条件となってきた[1]。そのため、従来の研究においては、連携の定義、影響要素、阻害要因、促進条件等が重要視されてきた。しかしながら、連携のあるべき姿及び意識構造、とくに、意識構造における各影響要素の影響度に関する研究はこれまであまりされてこなかった。

一方、2,500年前の孔子は、当時の社会における諸問題を解決するために、人間の生き方・考え方及び人間関係等に着眼してさまざまな解決方法を探していた。孔子思想は、千年以上にわたって、今日まで中国をはじめ、日本・韓国等東洋に日常生活から企業の経営・国家の管理まで幅広く強く影響を及ぼしてきた。時代・社会環境等がまったく異なっても、人間関係・信頼関係等の人間社会における基本的な問題に対する孔子思想・教訓・教えは、今日でも参考になると言えよう。

そこで、本章においては孔子思想をシステム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的連携意識構造モデルについて検討を行うとともに、その特徴、連携の阻害要因及び連携促進条件等について考察及び提言を行う。また、提案した孔子論的連携意識構造モデルの有効性及び成果を検証するために、地域包括ケアシステムにおける介護及び看護サービス従事者を対象にして、連携実態調査を実施した結果を分析するとともに、連携システムにおける問題点及び検討項目について考察を行う。

一方、地域包括ケアシステムの実践的な運営において、住民利用者に対して介護及び看護サービスを直接提供しているスタッフ（介護及び看護サービスの従事者）は、極めて重要な役割と責任を担っている。しかしながら、介護及び看護サービスシステムにおける人材不足、高離職率、労働環境の悪さ等の問題が緊急な社会課題となってきた。そこで、仕事内容・賃金・制度等に関する仕事環境要素が連携にどのような影響を及ぼしているかを明確にする必要がある。

そこで、本章においては、共同研究相手である豊田市における具体的な地域包括ケアシステムを調査対象として取り上げる。また、今回は、豊田市介護サービス機関連絡協議会に登録している機関（本章においては、訪問看護ステーション・訪問介護事業所・介護老人福祉施設・訪問入浴事業所を取り上げる）に所属しているスタッフを対象にしてアンケート調査を実施した。本調査データを用いて、孔子論的連携意識構造モデルの有効性を検証するとともに、連携促進に影響を与える要素・条件等及び各要素の重要度について明らかにすることが本章の目的とする。なお、介護及び看護サービス従事者の活動実態・連携実態に影響を及ぼしている仕事環境等についても同様に分析を行うとともに、より良い介護・看護サービスにおける連携促進方策と検討課題について考察並びに提言を行う。

5.2 連携意識構造における孔子論的考察

5.2.1 緒言

近年, 科学技術の発展, 情報社会の到来, グローバル化の拡大, 社会構造の変化等の社会環境が激変していくとともに, 社会的分業の進行により, 多分野・多部門・多職種間において効率的かつ効果的な連携が必要不可欠な条件となってきた[1]。連携とは, 「システム全体の目的達成のため, システム関係者(組織・機関等)がそれぞれの役割・能力・機能において, 対等の立場で協力(協働)しあっていくこと」を意味する[2]。それは, 各関係者間において, お互いが関わっているだけの「連係」ではなく, 相互に信頼し, 協力しあっていくような融合・統合・一体化した有機的な「連携」が連携の理想形である[3]。

しかしながら, 実際のシステム構築及び運営においては, とくに, 人が人を支えるシステムや人に深く関わっているシステムにおいては, 連携を阻害する要因が多く見られる。連携阻害要因は多種多様であるが, 最大の障害・問題点は, 地域関係者の意識・認識・資質・協力姿勢・信頼関係等のヒューマンウエアに関わる人的問題であると言えよう[4]。そこで, 連携を促進するために, 関係者の意識・理念等のヒューマンウエアを中心とした連携のあるべき姿並びに連携促進方策を究明することが緊急な課題となってきたと言える。

一方, 人間及び人間社会の問題を解決するために, 中国の哲学者である孔子は, 倫理観, 人間関係, 日常行動等の身近な生活のあり方・生き方を模索しながら, 問題解決方法の糸口を探していた[5]。また, 孔子は, 「老者は之を安んじ, 朋友は之を信じ, 小者は之を懐けん」を社会の理想形に掲げていたとともに, 人間のあるべき姿である「君子」の価値観及び生き方・考え方・進め方等に関する貴重な問題解決理念・方策・思想を提案してきた[6]。

人間の生き方・進め方を中心とした孔子思想は, 2,500年にわたって, 人々の日常生活から, 企業の経営, 国家の管理等社会システムに至るまで, 今日まで中国をはじめ, 日本・韓国等東洋において強い影響を及ぼしてきた[7]。時代・社会環境等が異なっても, 人間の生き方, 人間社会に対する見方・とらえ方ならびに, 人間関係の考え方・進め方及び促進方策等に関する孔子思想・教訓・教えは, 今日でも極めて有益であると言えよう[8]。

そこで, 本節においては, 連携における問題点の把握並びに, より良い連携を促進するために, 20篇500章から構成された「論語」にまとめられた連携に関する孔子思想を, KJ法で体系化した結果に基づいて, システム・マネジメント論の視点から, 連携意識構造及び連携促進条件における孔子論的考察を試みる。

5.2.2 「論語」の体系化手順

孔子思想は, 孔子の弟子たちによって編成された「論語」に記録されている[9]。「論語」の内容は, 人間のあるべき姿である君子(仁者)の生き方・日常行動, 政治のやり方・考え方, 人生の教訓, 人物の評価, 孔子の日常行動等についての記述である[10]。「論語」は孔子及びその弟子たちの言行録並びに, 記述の背景・動機等が不明瞭であるため, 各章に対する理解が時代や立場や読者によって異なる。そのため, 「論語」は編者によってバージョンが異なる

るとともに、20篇500章から構成される「論語」においてテーマを統一することは極めて難しいと思われている[11]。

そこで、本節においては、定量的な分析方法ではなく、近年注目されてきた定性的な分析方法の一つであるKJ法を用いて「論語」を体系化することを試みる[12]。なぜなら、KJ法は、漠然としてつかみどころのない問題を明確にし、新しい発想及び解決策を得るためには、特に有効な手法である。また、KJ法は集まった膨大な情報・データをまとめるために、多くの断片的、雑多なデータを統合して、創造的なアイデアを生み出し、問題解決の糸口を探っていく創造的問題解決方法の技法であると言えよう[13]。

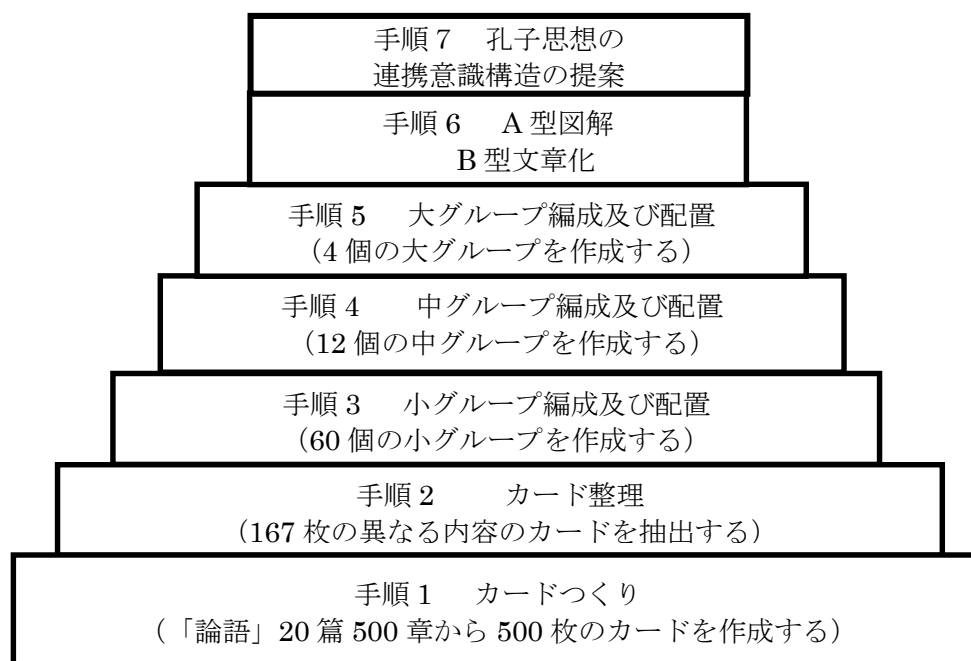


図5-1 連携意識構造に関する孔子思想（「論語」）の体系化手順

なお、本節においては、「論語」の編数は、李哲厚の「論語今読」を参考にして500章とした[14]。「論語」の内容及び解釈は、銭穆の「論語新解」[15]、李哲厚の「論語今読」、吉田賢抗の「論語」[16]、貝塚茂樹の「孔子；孟子」[17]を参考にした。また、「論語」を体系化する手順は、図5-1に示されるように、「論語」の各章に対して、その記述内容によって、それぞれ一言葉（原則として一文字の漢字）で表現できるカードを作成する。まず、20篇500章から総計500枚のカードを作成した。次に、その中から「連携」の意味に関するカード167枚を選出した。意味が近いカードを1つの小グループに編成するとともに、そのグループの中から、1つのカード（一文字の漢字）を抽出し、その小グループの「表札」とした。このような手順を行うことにより、「連携」に関する孔子思想（「論語」）の内容は、60個の小グループから構成される。また、小グループを編成した手続きと同様に、60個の小グループから12

個の中グループを編成した。更には、12個の中グループから同様の手続きにより、目的：「義」と目標：「志」、視点：「恕」と「時」、役割分担：「名」並びに相互関係：「和」という4個の大グループ及び表札が編成された。このような体系化手順（図5-1参照）により、「連携」に関する孔子思想（「論語」）は、4つの側面にまとめることができる。

5.2.3 孔子論的連携意識構造モデル

本節においては、KJ法を用いて「論語」（孔子思想）を体系化した結果に基づいて、孔子論的連携意識構造モデルが、図5-2に示すように、目標と目的：「義」と「志」、二つの視点：「恕」と「時」、役割分担：「名」（「仁」、「知」、「楽」）及び、相互関係：「和」（「信」、「学」、「礼」）から構成されることを提案するとともに、具体的な内容を以下に詳しく考察する。

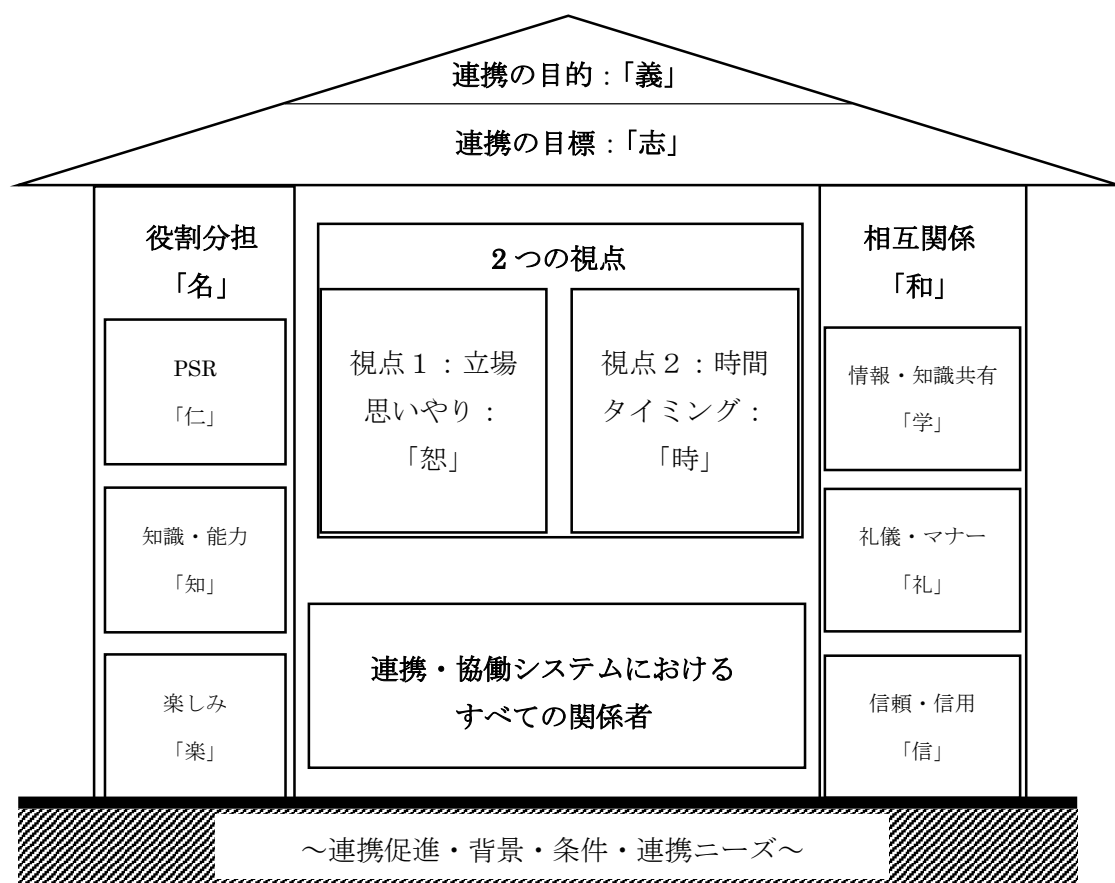


図5-2 孔子論的連携意識構造の全体図

1) 「連携の目標及び目的」について

孔子論的連携意識構造モデルにおいては、各関係者が共通している目的：「義」及び、各関係者が共有している連携の目標：「志」が先決条件である。

(1) 連携の目標：「志」について

「志」の概念が目標を意味する。連携に関わっている各関係者及び組織がそれぞれ各自の目標を設定しているとともに、調和社会の構築等共通目標の設定・共有・調整が重要視されている[18]。「道同じからざれば、相為に謀らず」に指摘されているように、システムにおける各関係者・当事者の価値観や立場等が異なるため、共通目標に対する理解・設定等が一致していないかもしれない。そこで、連携促進のために、正しい共通目標の設定・共有及び、組織・社会における共通目標の方向を調整・調和すること（目標の共有化）が重要視されている。とくに、孔子は、「老者は之を安んじ、朋友は之を信じ、小者は之を懐けん」を人生目標・社会の理想形に掲げている。その「任重くして道遠し」という目標を達成するために、「まことに志せば悪しきこと無し」に述べられているように、各関係者がそれぞれの役割分担を担って効率的かつ効果的に連携していくことが不可欠な条件である。

(2) 連携の目的：「義」について

孔子思想には、「君子の天下に於けるや、適も無く、莫も無し、義とともに比す」に強調されているように、「義」が社会の正義であり、人間の世渡り及び判断の標準・基準となる。その標準・基準は、個人利益が国民（社会）利益との矛盾を判断するものさしでもある。「富にして求む可くんば、執鞭の士と雖も、吾も亦之を為さん」に指摘されているように、正しい方法で利益を追求及び獲得することが強調されている。しかしながら、「利に放りて行へば、怨み多し」に述べられているように、個人・自分の組織の利益だけを注目することが危険である。そこで、「義ありて然る後取る。人其の取ることを厭わず」に記述されているように、個人の「利」より、住民・国民・社会の共通利益である「義」が重要視されている。そこで、「君子の仕うるや、其の義を行ふなり」及び「義を行いて以て其の道を達す」に述べられているように、各関係者が住民の QOL 向上、社会の利益、社会正義のための連携目的を共有することが極めて大切である。

2) 「二つの視点」について

孔子論的連携意識構造モデルにおいては、各関係者の立場に立って考慮していく思いやりの「恕」という視点及び、連携のタイミングと継続性を重視する「時」という視点が大切である。

(1) 連携の視点1：「恕」について

「恕」の概念は、「己の欲せざる所は、人に施すこと勿れ」に示されるように、他人の立場に立って考えていく思いやり、気配り、心配りである。連携システムにおいては、自分の立場ではなく、お客様、関係者の立場にたつて、要支援者・要介護者・患者をはじめ、家族および住民・社会の気持、ニーズ及び本音等を十分に考慮していくことが「恕」の基本理念である[19]。

とくに、システムにおける各関係者の役割・位置・ポジション・立場等によって、関係者

の視点・見方・とらえ方・考え方・評価等が異なる。「旧悪を念わず」に示されるように、共通目標を達成するために、異なる意見・視点・考え方・やり方を権衡するとともに、それぞれの背景・理由等を理解した上で、バランスをとっていくことが重要視されている。

(2) 連携の視点2：「時」について

孔子論的連携意識において、時間に関する視点については、主にタイミング及び継続性という2つの側面が重要視されている。「夫子時にして然る後に言う。人其の言うことを厭わず」と、「子曰く、與に言う可くして、之と言わざれば、人を失う。與に言う可らずして、之と言え、言を失う。知者は人を失わず。亦言を失わず」に述べられているように、人が人を支えるシステムにおいては、必要な人に、必要なサービスを必要な時に、タイムリーに提供していく「時」理念が強調されている。また、「君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す」、「事に敏にして言に慎み」、「我は生まれながらにして之を知る者に非らず。古を好み敏にして以て之を求めたる者なり」に記述されているように、多職種、多関係者間における迅速な行動は、連携にとって不可欠な条件である。

さらに、「子張政を問う。子曰く、之に居て倦むこと無く、之を行うに忠を以てす」、「そもも之を為びて厭わず」と「歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るを知る」に指摘されているように、一時の連携ではなく、継続的に連携協働していく理念が重要視されている。とくに、人が人を支えるシステムにおいては、より良いサービスを継続的に提供することが連携における重要な課題となってくる。

3) 役割分担：「名」について

「名」は、「君は君たり、臣が臣たり、父は父なり、子は子たり」に強調されているように、孔子思想の一つ重要な基本概念であり、自分が自分なりの役割を担うことである。孔子論的連携意識構造モデルにおいては、まず、自分なりの仕事及び役割分担を担っている「名」が重要視されている。「名」の内容は、主に個人の社会的責任である「仁」、仕事能力の「知」、並びに楽しみの「楽」から構成される。

(1) 個人の社会的責任：「仁」について

「仁」は、孔子思想の中心概念の一つである。「仁」の概念は、人間社会における諸問題を解決する個人の社会的責任：PSR (personal social responsibility) 及びそれに伴う行動を意味する。連携において、「天下、道が有れば、吾それを変えらず」に指摘されているように、自分なりの責任を持つことは先決条件であろう。また、「仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る」と「仁を為すは己に由りて、人に由らんやと」に示されているように、問題の解決、あるいは、より良い目標を達成する主体・責任者は、他人ではなく当事者自身であるという社会的責任感・意識も連携にとって不可欠である。

一方、実際に運営している連携が順調に進まない時に、「子曰く、君子は諸を己に求む。小

人は諸を人に求む」に指摘されているように、問題の責任を他人に転嫁する現状が多く見られる。また、「冉求曰く、子の道を悦ばざるに非ず。力足らざるなりと。子曰く、力足らざる者は、中道にして廢す。今汝は晝れりと」に述べているように、困難及び難題に直面する時に、言い訳をする消極的な人間も現実にいるであろう。そこで、連携を促進するために、責任を他人に転嫁すること、言い訳をすることよりも、自分なりの責任を明らかにして、主体性を発揮して積極的に行動していくことこそが「仁」の基本精神である。

(2) 知識・能力：「知」について

「知」の概念は、「知を問ふ。子曰く：人を知る」と「言を知らざれば、以て人を知ること無きなり」に指摘されているように、人間の言葉・心理・行動・本音等に関する情報・知識を知る能力である。「礼を知らざれば、以て立つこと無きなり」に述べられているように、人間社会に関する法律・制度・文化・礼儀・習慣等を身につける能力が、連携システムにおける自分なりの役割分担を担っていくためには不可欠な条件である。孔子思想においては、「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり」に強調されているように、自分の物事に関する情報・知識の有無を客観的に評価することは連携の知恵である。

また、「利牛の子も、あかくしてかつ角ならば、用ふることなからんと欲すと雖も、山川其れ諸を捨てんやと」と「詩三百をしょうすれども、これに授くるに政を以てして達せず。四方に使いして、専対すること能はずんば、多しと雖も亦何を以て為さん」に記述されているように、学問・学歴・知識より、仕事の効率・効果等が連携システムにおいて重要視されている。

(3) 楽しみ：「楽」について

孔子思想においては、「之を知る物は、之を好むものにしかず、之を好む物は、之を楽しむ物に如かず」に記述されているように、仕事・任務等を「楽」しく推進・実行していくことが仕事の理想形である。やりたいこと、やりがいがあること、面白いこと、達成感があることを実践していく楽しみは、持続可能な連携システムの構築及び運営にとって必要不可欠な条件である。

また、一人で楽しく実践していくだけでなく、「近き者悦び、遠き者来る」、「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」に述べられているような楽しさを楽しむとともに、仲間・同僚と一緒に前向きに、継続的に連携システムを楽しく推進していくことは、孔子思想の教えでもある。

4) 相互関係：「和」について

孔子思想においては、「君子は和して同せず。小人は同じて和せず」に示されるように、共通目標を達成するために、関係者の異なる意見・視点・考え方・やり方を調整するとともに、自分なりの役割分担と全体とのバランスをとる「和」の理念が重要視されている。孔子論的

連携意識構造モデルにおいては、各関係者間での信頼関係：「信」、人間同士の礼儀・マナー：「礼」、情報・知識の共有・交流：「学」等が不可欠な条件である。本節においては、情報・知識共有の「学」、礼儀・マナーの「礼」、信頼・信用の「信」を含めた相互関係「和」について考察を行う。

(1) 情報・知識共有：「学」について

孔子思想においては、「太廟に入りて、事毎に問う」及び「敏にして学を好み、下問を恥じず」に記述されているように、各関係者はそれぞれの立場・視点から、システムに関する地域特性・地域経済・人口・文化・価値観等のマクロ的な側面並びに、社会のニーズ・住民の声等のミクロ的な側面に関する実態調査・情報収集を行うことが連携促進の先決条件である。「己に如かざる者を友とすること無かれ」に指摘されているように、だれでも、どこでも、いつでも積極的に情報を収集する姿勢が極めて重要である。

また、「習伝えずに」、「益者三友、直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり」に記述されているように、各関係者間に効率的かつ有効的な連携協働を促進していくためには、各関係者が収集・調査した情報・知識を共有・相互交換することが重要視されている。一方、情報社会においては、大量な情報に直面している。そこで、「道に聞いて途に説くは、徳を之捨つるなり」という方針が強調されているとともに、「学べば則ち固ならず」に述べられているように、社会の変化・実態の変化に順応させながら、情報・知識の有用性及び必要性等を判断することが連携促進の重要な条件となってくる。

(2) 礼儀・マナー：「礼」について

孔子思想においては、「君子は博く文を学び之を約するに礼を以てせば、亦以てそむがざる可きか」に述べられているように、各関係者は自分なりの役割を担っているとともに、人間同士間での礼儀・マナー等を遵守し行動していく「礼」が連携の基礎である。連携システムにおける各関係者間では、「人と恭しくして礼有らば、四海の内、皆兄弟なり」とに強調されているように、建前ではなく、礼儀・マナーが正しく心から相互尊敬していくとともに、それぞれに課せられた適切な機能及び役割分担の円滑な運営を確実に実行することが、「礼」の理念である。とくに、「恭にして礼無ければ即ち勞す。慎にして礼無ければ即ち思す。勇にして礼無ければ即ち乱す。直にして礼無ければ即ち絞す」に指摘されているように、連携は「礼」により成功していくと同時に、連携は「礼」により失敗することが孔子の教訓である。そのために、「非礼視ること勿れ、非礼聴くこと勿れ、非礼言うこと勿れ、非礼動くこと勿れ」に述べられているように、連携を促進していくために、各関係者間で礼儀・マナーを正しく遵守して行動していくことが大切である。

(3) 信頼・信用：「信」について

「信」の概念は、信頼・信用・信任であり、「子曰く：人にして信無くんば、其の可なるを

知らざるなり。大車に輓なく、小車に輓無くんば、其の何を以てか之を行らんや」に記述されているように、連携の基本的な柱である。また、「言いて信あり」に重要視されているように、言ったことや約束を守ることが基本的な連携促進の条件である。「事を敬して信に」に述べられているように、役割分担を担って、慎重に行動していくとともに、相互信頼されることが望まれる。また、「朋友と交りて信ならざるか」に強調されているように、信頼・信用が連携の効果及び効率をはかる重要な評価尺度となってくる。とくに、人が人を支えている連携システムにおいては、関係者間の相互信頼が連携・協働の基礎となってくる。

5.2.4 孔子論的連携意識の特徴

前節において述べた孔子論的連携意識構造モデルの主な特徴は、以下の5点に要約される。

(1) 個人の社会的責任（PSR）：「仁」の大切さ

「仁」の概念は、自分と他人という二人を意味する。孔子思想においては、人間を自分と他人に分けているが、個人が他人につながって社会の一部となってくる。「仁」とは、個人と社会の関係を表す理念である。自分自身に対して責任を持つことは、同時に、社会に対して責任を持っていることに等しいであろう。従って、連携を効率的かつ効果的に運営及び推進していくために、システムにおける各関係者（個人）は個人の社会的責任（PSR（personal social responsibility））を持って、主体性を発揮して行動していく「仁」の心が大切である。

(2) 相互学習・集合知：「学」の重要性

問題解決及び共通目標を達成するために、連携システムにおいては、多職種・多分野・多部門間における問題共有、情報共有、知識共有、解決策・知恵共有（集合知）は極めて重要な条件である。個人の能力・知識・専門等は限界があるために、特に、情報社会及び分業社会においては、大量の情報・知識・問題解決方策を相互に交換・学習・向上・改善していく「学」の姿勢が連携システムにとって重要である。

(3) 「理」と「情」のバランス重視

孔子論的連携意識構造モデルにおいては、図 5-3 に示されるように、知識、情報、共通の利益、効率、効果等客観的な合理性（「理」）の側面と、人間の感情、責任感、礼儀、マナー、気持ち、楽しみ等主観的な人間性（「情」）の側面とのバランスをとることが重要視されている。

(4) 個人と集団（全体）の融合及び調整

連携システムにおいては、図 5-3 に示されているように、能力・役割・マナー・礼儀等個人の資質を重視するとともに、各関係者との問題共有・目標共有・情報共有・知識共有だけでなく、相互信頼・安心共有という相互関係も重要視されている。すなわち、個人の資質・能

力と関係者との相互関係のバランス・調整・調和が、連携にとって不可欠な条件である。

(5) タイミングと継続性の重視

孔子論的連携意識構造モデルにおいては、一時の連携だけではなく、持続的に連携していく継続性が大切である。また、必要な時に、必要なサービス（活動）を提供するタイミングも連携促進には重要である。

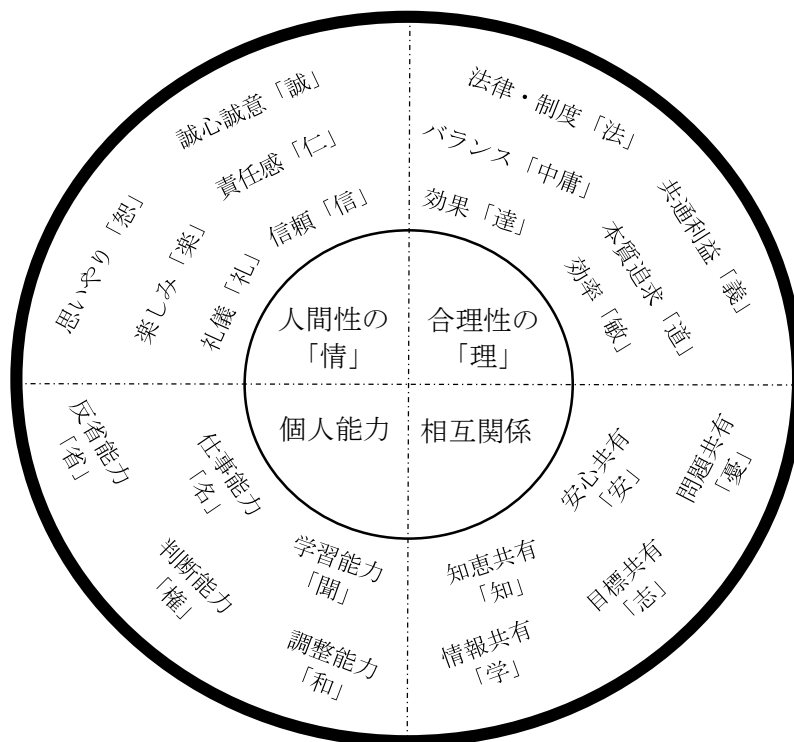


図 5-3 孔子論的連携意識における特徴

5.2.5 連携促進の課題と条件

連携促進の課題においては、孔子論的連携意識構造モデルに基づいて、これまでの先行文献等を参考にして、図 5-4 に示されるように、次の 4 点（項目）にまとめることができる [20]。まず、連携システムにおいては、地域関係者間における人間関係・信頼関係に基づいて、「ヒューマン・ネットワークづくり」を楽しく推進していくことが不可欠な条件である。そのためには、すべての関係者間における相互信頼できる人材育成及び意識改革の推進が、これからの「人が人を支え合う」連携システムの構築及びその円滑な運営においてはとくに重要な課題である。

また、何のために連携しているのかという連携の目標・目的を理解・共有・追求していくための目的追求及び本質追求（「義」）は、効率的、効果的かつ持続可能な連携システムの構築とその円滑な運営において大切な課題である。なお、連携システムの方向性及び促進のた

めに、連携の効果及び効率を評価・検証していくための実践的な「評価システム」の開発と効果的な導入が必要となってくる。すなわち、連携促進により、すべての関係者に対して安心・安定・安全させているかを正しく評価することが大切である。これにより有効かつ持続可能な連携システムの促進が期待できる。

さらに、「必要な人（あるいは施設、組織等）に、必要な情報・知識・知恵を、タイムリーに提供する」ことを目指す情報支援システムの開発とその有効活用が連携システムにおいて重要な課題である。すなわち、連携促進のためには、システムに参画する関係者への情報提供・情報の共有並びに、知識の相互学習・経験の共有等が必要不可欠な条件となってくる。

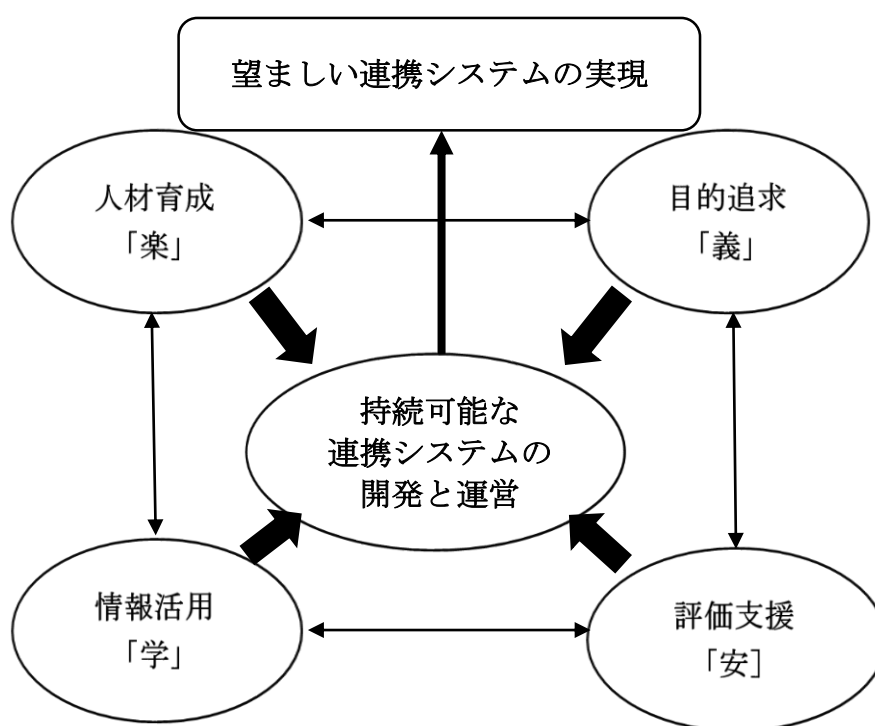


図 5-4 連携システム促進における 4つの重点課題

また、前述した孔子論的連携意識構造モデルからの考察・提案及び連携促進課題に基づいて、連携を促進していくためには、図 5-5 に要約される諸課題に対する具体的な方策が必要となってくるであろう[21]。まず、共通目的を達成するために、責任を関係者に転嫁することではなく、自分の責任・立場を明らかにした上で、連携の関係者と一緒に楽しく行動していく共生・共楽の姿勢が大切である。また、個人（組織）の利益だけを追求することではなく、連携システムにおける共通利益及び共通目的を共有する「義」への協調が必要である。なお、問題を独自に解決することより、問題・情報・知識・経験の共有及び相互学習・学習向上することこそが、これからの連携促進には強く求められている。さらに、連携は、スローガン及び宣伝ではなく、誠心誠意に連携のすべての関係者及び社会に安心・安定・安全させる実践

的な行動である。

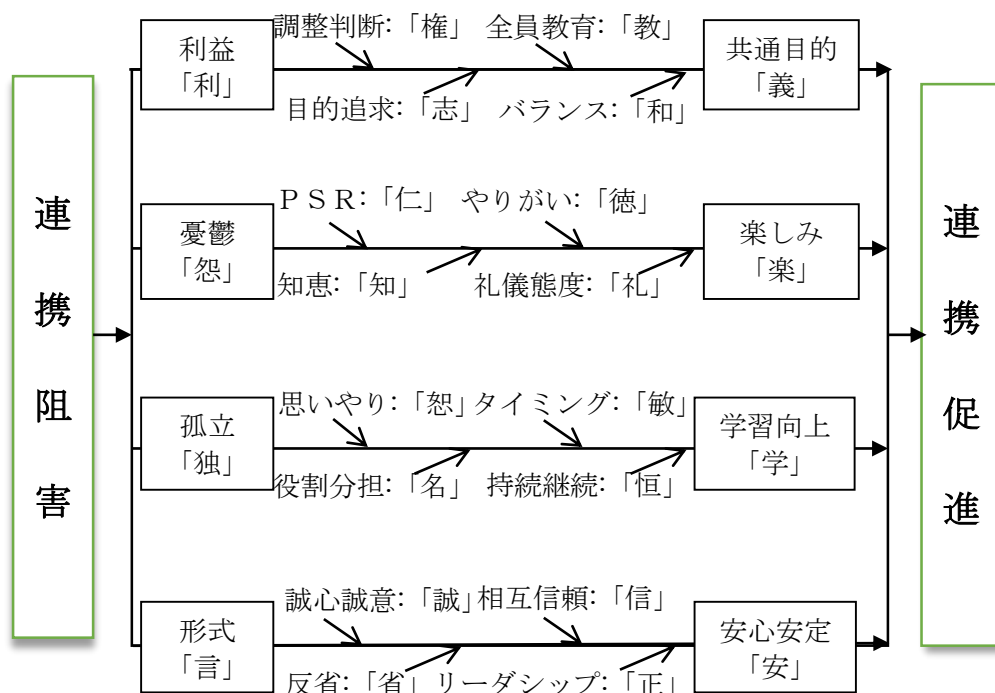


図 5-5 孔子論的連携促進方策に関する特性要因図

5.2.6 結言

本節においては、連携に関する孔子思想を明らかにするために、KJ 法を用いて「論語」で記述した孔子思想を体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から孔子論的連携意識構造モデルを提案するとともに、連携のあるべき姿及びその特徴について考察を行った。更には、孔子論的連携促進方策についても若干の考察及び提案を行った。

また、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、個人の社会的責任「仁」が特に重要視されている。「連携とは人と人のつながりである」という連携の本質から見れば、連携運営及び促進の責任は、システムのリーダーだけではなく、システムにおけるすべての関係者にあるということが強調されている。

とくに、孔子論的連携意識構造モデルの特徴から見れば、「連携」とは単純に情報交換・連絡ではない。また、知識・経験及び知恵を相互学習及び共有する集合知の形としての「学」は、連携促進にとって不可欠な条件となってきた。なお、これからの情報社会においては、「学」はこれからの革新的な連携促進の柱となることが期待されよう。

最後に、今後の課題及び展望として、本節で提案した孔子論的連携意識構造モデルが、人が人を支えるシステム（例えば、医療・介護・福祉・生活支援等を含めた地域包括ケアシステム）等に活用されることが期待できる。また、今後は、孔子論的連携意識構造モデルのモデル化及び数式化を行う計画である。

5.3 介護及び看護サービス従事者の連携意識実態分析

5.3.1 緒言

少子高齢社会を支える地域包括ケアシステムの構築と運営においては、「必要な地域住民に、必要な包括ケアサービスを、必要な時、タイムリーに、そして効率的・効果的に提供」していくことは、不可欠な条件であろう。そのために、システムにかかわるすべての関係者・組織・機関・施設等間における「円滑なヒューマン・ネットワークづくり」に裏付けされた持続可能な「連携・協働システム（以後、略して連携システムと呼ぶ）」の計画的構築と、その実践的運営（連携促進）が不可欠である[2]。

しかしながら、連携の実態において、最大の連携阻害要因・障害・問題点は、関係者の意識・認識・資質・協力姿勢・信頼関係等のヒューマンウェアに問題あるいは課題があると指摘されている[4]。連携システムにおいては、各関係者の立場・価値観・考え方・姿勢・目標も異なっているため、連携における問題点をはかる共通のものさし・基準の設定、並びに連携理想形（あるべき姿）を究明することが緊急な課題となってきた。

そこで、前節においては、人間の生き方・進め方を中心とした孔子思想を KJ 法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、孔子論的連携意識構造モデルの提案を行った。さらに、提案した孔子論的連携意識構造モデルの有効性及び効果を検証するために、本節において地域包括ケアシステムに適応する。

一方、地域包括ケアシステムの実践的な運営において、住民利用者に対して介護及び看護サービスを直接提供しているスタッフ（介護及び看護サービスの従事者）は、極めて重要な役割と責任を担っている。しかしながら、介護及び看護サービスシステムにおける人材不足、高離職率、労働環境の悪さ等の問題が緊急な社会課題となってきた。そこで、仕事内容・賃金・制度等に関する仕事環境要素が連携にどのような影響を及ぼしているかを明確にする必要がある。

そこで、本節においては、共同研究相手である愛知県豊田市を具体的な地域包括ケアシステムとして取り上げる。また、具体的な介護及び看護サービス従事者は、豊田市介護サービス機関連絡協議会に登録している機関（本節においては、訪問看護ステーション・訪問介護事業所・介護老人福祉施設・訪問入浴事業所を取り上げる）に所属しているスタッフを対象にして、アンケート調査を実施した。調査結果に基づいて、孔子論的連携意識構造モデルの有効性を検証するとともに、連携に影響する要素及び各要素の重要度を明なにすることが本節の目的とする。なお、介護及び看護サービス従事者の活動実態・連携実態に影響を及ぼしている仕事環境について分析した上で、連携の問題点及び検討課題について提言及び考察を試みる。

5.3.2 介護及び看護サービス従事者のアンケート調査概要

5.3.2.1 調査対象者及び調査方法

本アンケート調査における調査対象者（以下、スタッフと呼ぶこともある）は、豊田市介護サービス機関連絡協議会に登録している訪問看護ステーション・訪問介護事業所・介護老人福祉施設・訪問入浴事業所に所属している全スタッフ（介護及び看護サービス従事者）である。調査方法は、2013年9月5日に豊田市介護サービス機関連絡協議会が主催しているサービス調整会議でアンケート調査票を配布し、2013年10月4日に回収した。有効回答数は711部であり、有効回答率は69%であった。なお、本調査の実施にあたっては、本調査研究の趣旨を説明した依頼状において、匿名性とプライバシーを遵守すること、研究目的以外で本調査結果等を利用しないことを明記した。

5.3.2.2 調査内容及びモデルの構築

孔子論的連携意識構造モデルは、目標、視点、役割分担及び相互関係という4つの側面から構成される。その中に、視点は「恕」と「時」（タイミング）から構成されている。今回のアンケートにおいて、「時」（タイミング）が図りにくいため、それなりの内容を設計していなかった。そこで、本調査においては、前節で考察した孔子論的連携意識構造モデルの有効性を検証するため、図5-6に示されるような介護及び看護サービスシステムにおける孔子論的連携意識構造モデル（9項目）を構築した。

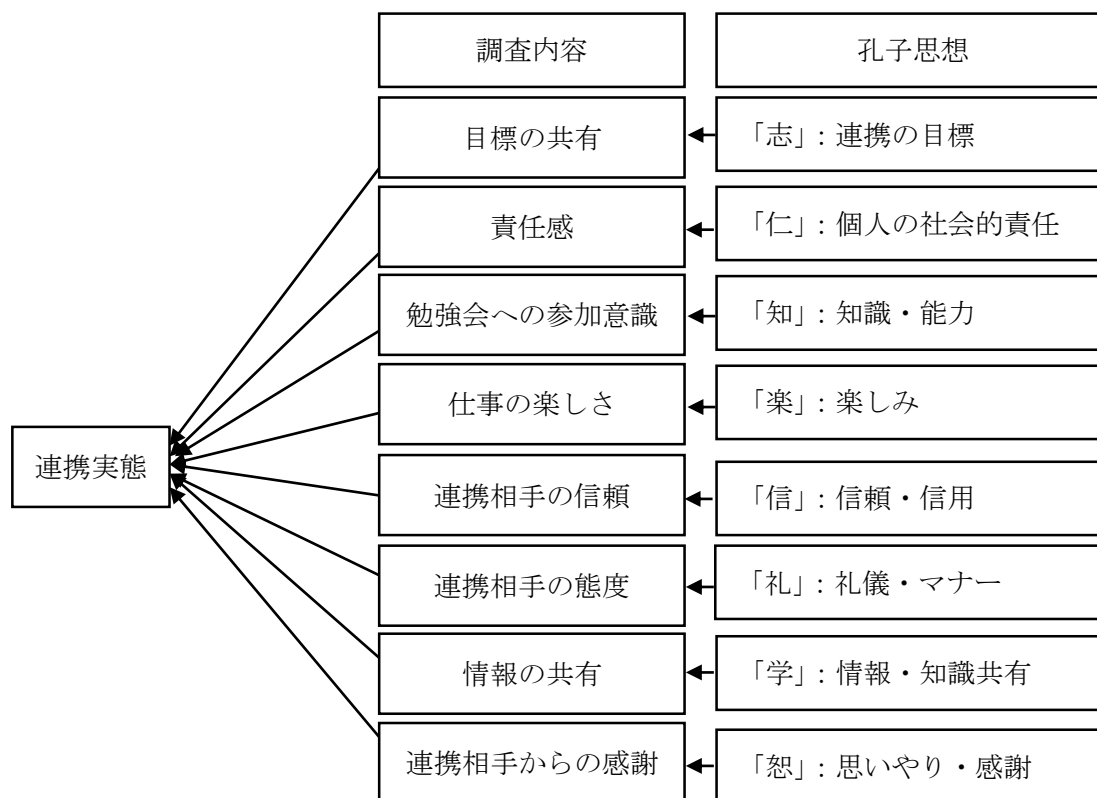


図 5-6 孔子論的連携意識構造モデルの全体概念図

また、介護及び看護サービス従事者の仕事内容及び特性に基づいて、今回のアンケート調査においては、具体的な連携相手が利用者本人（患者・要介護者・要支援者）、利用者の家族、同じ職場の従事者（仲間）、他組織の介護・看護・生活支援サービス従事者、医師及び行政関係者に大別する。また、今回使用したアンケート調査票（本学位論文の付録1を参照）においては、基本属性、連携状況、仕事のやり方、仕事の気持ち、介護・看護の理想形という5個の調査大項目（計32個の小設問）を設定した。

なお、今回の分析においては、各関係者の中に、ケアマネ・地域包括支援センター・市町村等を含める行政関係者に重点を置いている。そこで、ここでは、行政関係者との連携意識構造モデルを孔子論的連携意識モデルとして分析を行うと考えられる。本モデルにおける具体的な調査内容（質問項目）は、主に行政関係者との連携実態、目標の共有、責任感、勉強会への参加意識、仕事の楽しさ、行政関係者の信頼、行政関係者の態度、情報の共有、行政関係者からの感謝という9個の設問から構成される（図5-7参照）。なお、具体的な質問項目及び回答方法は表5-1に示される。

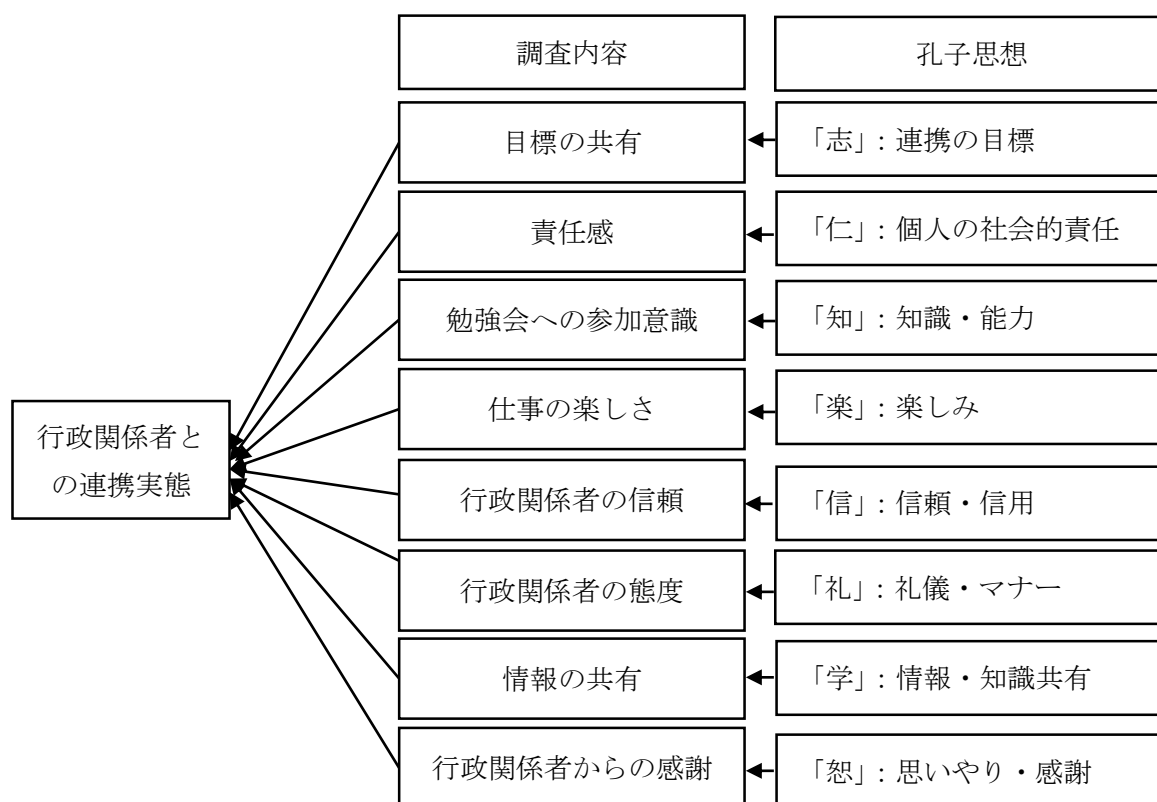


図 5-7 行政関係者との連携意識構造モデルの全体概念図

5.3.2.3 分析方法

本アンケート調査の回答方法は、表5-1に示されるように、5件法又は6件法に分ける。6

件法においては、分析時に6を選択したケースは欠損値として計算する。そこで、実際に分析するときには、すべて5件法を用いて分析を行う。また、孔子論的連携意識構造モデルの有効性を検証するために、連携実態を従属変数に、連携に影響を及ぼしている要因（孔子論的連携意識構造モデルの構成要素）を独立変数にしたモデルを、重回帰分析を用いて分析及び考察する。なお、本分析においては、すべての独立変数を合わせて、従属変数を説明することができるための強制投入法を採用する。また、欠損値を除外して、全部の質問項目（独立変数）を一度に投入する。なお、上述した分析ソフトにはSPSS 19.0 for windowsを用いた。

表 5-1 モデルにおける各項目の回答方法と選択肢

質問項目	回答方法	選択肢
行政関係者との連携程度	6件法	1：まったくとれていない～5：十分とれている 6：該当の連携相手がいない
目標の共有	5件法	1：まったく話し合っていない～5：よく話し合っている
責任感	5件法	1：まったく感じていない～5：十分感じている
勉強会への参加意識	5件法	1：まったく参加したくない～5：大変参加したい
仕事の楽しさ	5件法	1：まったく楽しくない～5：大変楽しい
行政関係者の信頼	6件法	1：まったく信頼されていないと思う～5：十分信頼されていると思う 6：該当の連携相手がいない
行政関係者の態度	6件法	1：まったく気にならない～5：大変気になる 6：該当の連携相手がいない
情報の共有	5件法	1：まったくできていない～5：順調にできている
行政関係者からの感謝	6件法	1：まったく感じていない～5：十分感じている 6：該当の連携相手がいない

5.3.3 調査結果の概要

5.3.3.1 基本属性

表 5-2 に示されるように、調査対象者（回答者）の年齢構成においては、60歳代が10%未満であったのに対して、20歳代から50歳代までは20%を超えている。また、性別においては、男性が120人（16.9%）で女性が591人（83.1%）であった。このことから、豊田市内の介護・看護サービス従事者は8割強を女性が占めていることが分かる。また、勤務年数においては、「3年未満」と「15年以上」の従事者が20%前後であったのよう、「3年以上～8年未満」と「8年以上～15年未満」の従事者が3割を超えていることが分かる。

また、回答者の所属、施設種類においては、主に4つの事業所を対象としてアンケートを実施した。その結果、訪問入浴事業所（66人）及び訪問看護ステーション（72人）の従事者は、両方とも10%前後であった。これに対して、訪問介護事業所（244人）と介護老人福祉施設

(298人)は4割前後であった。なお、勤務形態においては、非常勤・パートが256人(36.5%)及び、常勤・パートが69人(9.8%)に対して、正規・常勤が377人(53.7%)であった。

表 5-2 対象者の基本属性別構成比率

属性		人数 [人]	構成比率 [%]
年齢	20 歳代	152	21.6
	30 歳代	158	22.4
	40 歳代	174	24.7
	50 歳代	149	21.1
	60 歳代	69	9.8
	70 歳代	3	0.4
性別	男性	120	16.9
	女性	591	83.1
勤務年数	3 年未満	145	20.5
	3 年以上～8 年未満	234	33.1
	8 年以上～15 年未満	215	30.5
	15 年以上	112	15.8
施設種類	訪問入浴事業所	66	9.3
	訪問介護事業所	244	34.6
	介護老人福祉施設	298	42.2
	グループホーム	1	0.1
	訪問看護ステーション	72	10.2
	その他	25	3.5
勤務形態	非常勤・パート	256	36.5
	常勤・パート	69	9.8
	正規・常勤	377	53.7

5.3.3.2 モデルの結果

モデルの各質問項目の記述統計は、表 5-3 に示されるようになった。すべての欠損値を除外したサンプル数は 415 人となった。また、各項目の標準偏差は、すべて 1 前後の値を示していることがわかる。

表5-3 各項目の記述統計

	平均値 (ラン検定)	標準偏差	N
行政関係者の連携	2.2940	1.14644	415
目標の共有	3.7422	1.10271	415
情報共有	4.1831	.89292	415
勉強会への参加意識	4.0892	.92952	415
楽しい	3.5976	1.06299	415
行政関係者の信頼	2.7157	.98595	415
行政関係者の態度	2.8988	1.21360	415
責任感	4.2072	.93790	415
行政関係者からの感謝	2.6241	1.21917	415

表 5-4 に示されるように、分散分析の結果における F 検定の結果から、当該重回帰式は有意であった ($p < 0.000$)。すなわち、このモデルは、0.1%水準で有意であるため、諸説明変数が行政関係者の連携に役立つモデルであると考えられる[23]。

表5-4 分散分析^b

モデル	平方和 (分散成分)	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1 回帰	266.734	8	33.342	48.7	.000 ^a
残差 (分散分析)	277.401	406	.683		
合計 (ピボットテーブル)	544.135	414			

a. 予測値: (定数), 行政関係者との感謝, 情報共有, 勉強会への参加意識, 楽しい, 目標の共有, 行政関係者との態度, 責任感, 行政関係者との信頼。

b. 従属変数 行政関係者との連携

また、各質問項目間の Pearson 相関結果は、表 5-5 に示されるようになった。各質問項目間においては、高い相関 (0.8 以上) が見られなかった。よって、多重共線性の疑いがないと考えられる[22]。また、目的変数の「行政関係者との連携」との Pearson 相関においては、「行政関係者の信頼」と「行政関係者からの感謝」という二つの項目が 0.5 を超えている。「目

標の共有」と「行政関係者の態度」の二つの項目において値が0.3を超えている。これに対して、「楽しい」と「責任感」という二つの項目が0.1前後であった。一方、「勉強会への参加意識」がマイナスとなり、負の相関を示している。

表 5-5 各項目間の相関係数

Pearson の相関	行政関係者との連携	目標の共有	情報共有	勉強会への参加意識	楽しい	行政関係者の信頼	行政関係者の態度	責任感	行政関係者からの感謝
行政関係者との連携	1.000								
目標の共有	.345***	1.000							
情報共有	.226***	.239***	1.000						
勉強会への参加意識	-.052	.154**	.065	1.000					
楽しい	.131**	.177***	.139**	.256***	1.000				
行政関係者の信頼	.563***	.286***	.136**	.067	.188***	1.000			
行政関係者の態度	.329***	.181***	.080	.077	.137**	.545***	1.000		
責任感	.098*	.302***	.156**	.405***	.256***	.252***	.165***	1.000	
行政関係者からの感謝	.594***	.239***	.139**	.158**	.159**	.604***	.477***	.235***	1.000

(*は有意確率 $p<0.05$, ** は有意確率 $p<0.01$, ***は有意確率 $p<0.001$)

また,表5-6に示されるように,決定係数 (R² 乗) が0.490で,調整済みR² 乗は0.480であり,8つの質問項目 (独立変数) が行政関係者の連携 (従属変数) の49%を説明している。それは,十分に当該回帰式の有意性を提示したと考えられる[23]。また,Durbin-Watsonの値は,1.774で2に近いので,各独立変数における残差の独立性に問題がないと言える[22]。(表5-6に参照)

表5-6 モデル集計^a

モデル	R	R ² 乗	調整済み R ² 乗	推定値の標準誤差	Durbin-Watson
1	.700 ^a	.490	.480	.82659	1.774

a. 予測値: (定数), 行政関係者との感謝, 情報共有, 勉強会への参加意識, 楽しい, 目標の共有, 行政関係者との態度, 責任感, 行政関係者との信頼。

b. 従属変数 行政関係者との連携

なお,説明変数に対する標準偏回帰係数及び有意確率の結果は,表 5-7 に示されるように,「目標の共有」0.188 ($p<0.001$), 「勉強会への参加意識」-0.140 ($p<0.001$), 「行政関係者の信頼」0.299 ($p<0.001$), 「行政関係者からの感謝」0.419 ($p<0.001$), 「情報共有」0.106

($p < 0.01$) , 「責任感」 -0.090 ($p < 0.05$) が有意に目的変数を説明していた。一方, 「楽しい」と「行政関係者の態度」においては有意差が出てこなかった。なお, 全部の項目の許容度が $0.5 \sim 0.9$ の間にあり, 0.10 以下の値がなかった。さらに, 全部の項目の VIF が $1 \sim 2$ の間にあり, 10 以上の値はなかった。よって, 多重共線性が生じていないと判断できる[22]。

表 5-7 行政関係者との連携を目的変数とした重回帰分析の結果表

	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率	相関			共線性の統計量	
	B	標準誤差	ベータ			ゼロ次	偏	部分	許容度	VIF
(定数)	.232	.289		.803	.422					
目標の共有	.195	.041	.188	4.821	.000	.345	.233	.171	.825	1.212
情報共有	.136	.047	.106	2.863	.004	.226	.141	.101	.923	1.083
勉強会への参加意識	-.173	.049	-.140	-3.527	.000	-.052	-.172	-.125	.797	1.255
楽しい	.029	.041	.027	.706	.481	.131	.035	.025	.877	1.140
行政関係者の信頼	.348	.057	.299	6.095	.000	.563	.290	.216	.521	1.918
行政関係者の態度	-.052	.041	-.055	-1.263	.207	.329	-.063	-.045	.668	1.498
責任感	-.110	.050	-.090	-2.178	.030	.098	-.107	-.077	.736	1.359
行政関係者からの感謝	.394	.043	.419	9.065	.000	.594	.410	.321	.587	1.702

さらに, 共線性の診断においては, 表 5-8 に示されるように, 「行政関係者の態度」と「行政関係者からの感謝」, 「目標の共有」と「楽しい」, 「目標の共有」と「行政関係者の信頼」, 「勉強会への参加意識」と「責任感」のプロパティが同次元で重なっているが, 条件指数が 30 を超えていないため, 問題がないと言えよう[22]。

残差の正規性においては, 図 5-8 の標準化された残差の回帰の正規 P-P プロット図に示されるように, 残差が正規直線上に並んでいるとともに, 直線から大きく外れる残差もなく並んでいる。また, 図 5-9 に示されるように, 標準化された残差の「ヒストグラム」が正規分布していると言えよう。よって, 残差の正規性は満たされていると判断できる[22]。

表 5-8 共線性の診断

次元	固有値	条件指数	分散プロパティ								
			(定数)	目標の共有	情報共有	勉強会への参加意識	楽しい	行政関係者の信頼	行政関係者の態度	責任感	行政関係者からの感謝
1	8.468	1.000	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00	.00
2	.190	6.679	.01	.01	.01	.02	.02	.04	.11	.01	.19
3	.085	9.957	.00	.01	.00	.00	.00	.00	.68	.00	.49
4	.067	11.218	.00	.46	.02	.02	.43	.02	.00	.00	.04
5	.056	12.318	.01	.11	.01	.13	.42	.24	.06	.03	.08
6	.047	13.369	.01	.36	.06	.00	.10	.55	.13	.01	.13
7	.044	13.874	.01	.03	.51	.15	.02	.09	.01	.11	.05
8	.027	17.795	.01	.02	.00	.49	.00	.05	.00	.81	.01
9	.016	23.368	.96	.00	.38	.19	.01	.01	.01	.03	.02

標準化された残差の回帰の正規 P-P プロット

従属変数: 行政関係者との連携

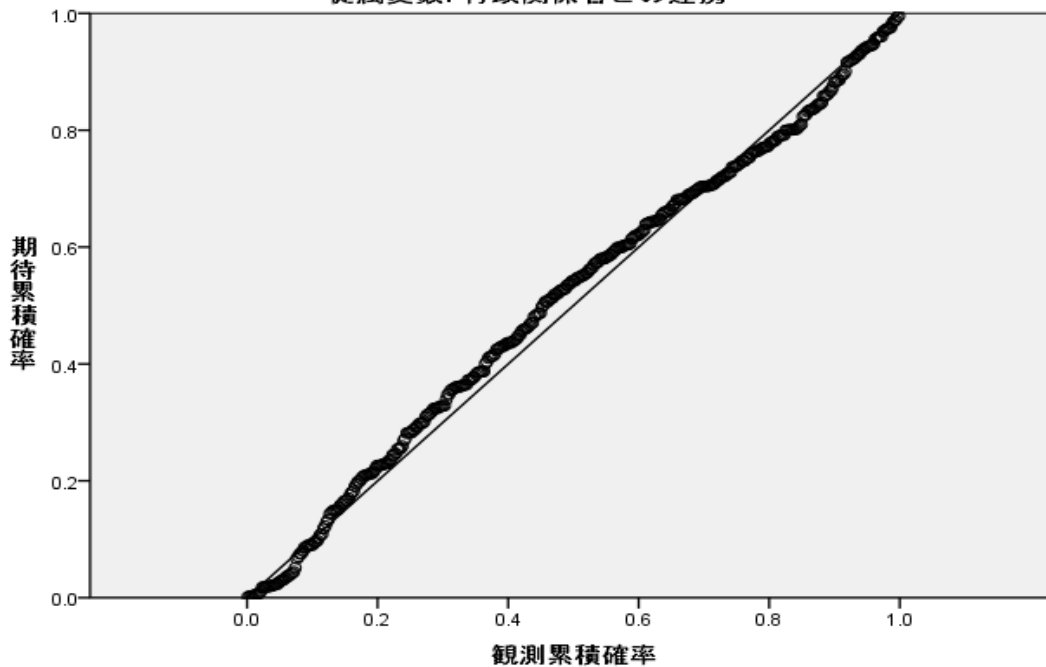


図 5-8 標準化された残差の回帰の正規 P-P プロット図

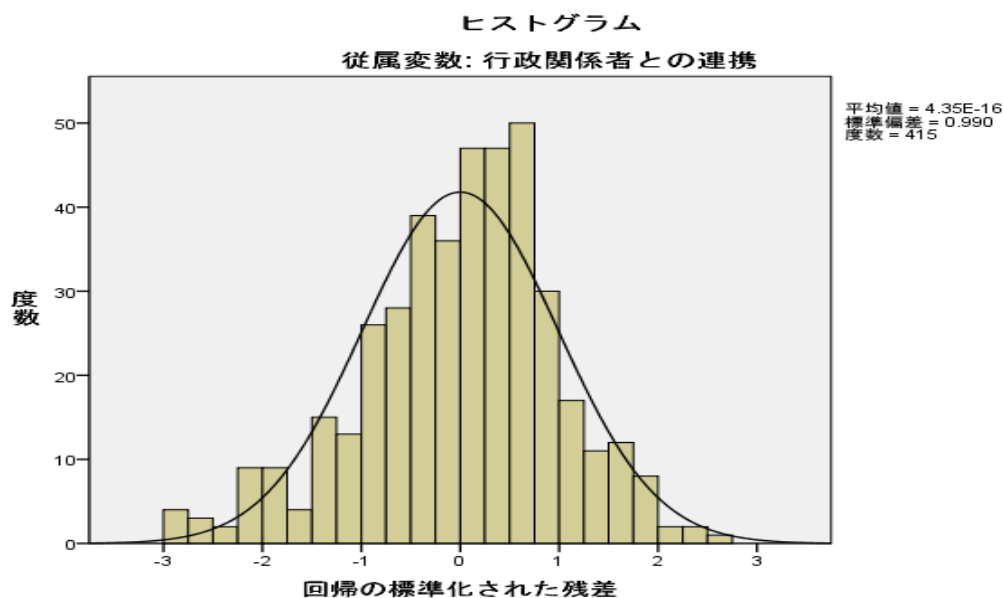


図 5-9 標準化された残差のヒストグラム図

上述した結果により,行政関係者との連携実態モデルは,図5-10に示されるように,「目標の共有」0.188 ($p<0.001$),「勉強会への参加意識」-0.140 ($p<0.001$),「行政関係者の信頼」0.299 ($p<0.001$),「行政関係者からの感謝」0.419 ($p<0.001$),「情報共有」0.106 ($p<0.01$),「責任感」-0.090 ($p<0.05$)が行政関係者との連携に影響を及ぼしていると判断できよう。また,このモデルは当てはまりがよく,行政関係者との連携モデルとして適当であると判断した。なお,具体的な回帰式は,以下ようになった。

$$\begin{aligned} \text{行政関係者との連携得点} = & 0.232 + (0.195 * \text{目標の共有}) + (0.136 * \text{情報共有}) \\ & - (0.173 * \text{勉強会への参加意識}) + (0.348 * \text{行政関係者の信頼}) \\ & - (0.11 * \text{責任感}) + (0.394 * \text{行政関係者からの感謝}) \end{aligned}$$

5.3.3.3 連携の仕事環境及び介護・看護サービスの理想形

前節で説明したモデルの得点式に基づいて,各スタッフの行政関係者連携得点は,表 5-9 に示されるように,最小値が 0.28,最大値が 4.36,平均値が 2.24 となった。また,各スタッフの連携得点においては,1 未満を「連携が大変いい」(レベル 1)に,1~2 を「連携がややいい」(レベル 2)に,2~3 を「連携が普通」(レベル 3)に,3~4 を「連携がややよくない」(レベル 4)に,4 以上を「連携が大変よくない」(レベル 5)に,5 段階の連携レベルに変換することができる。

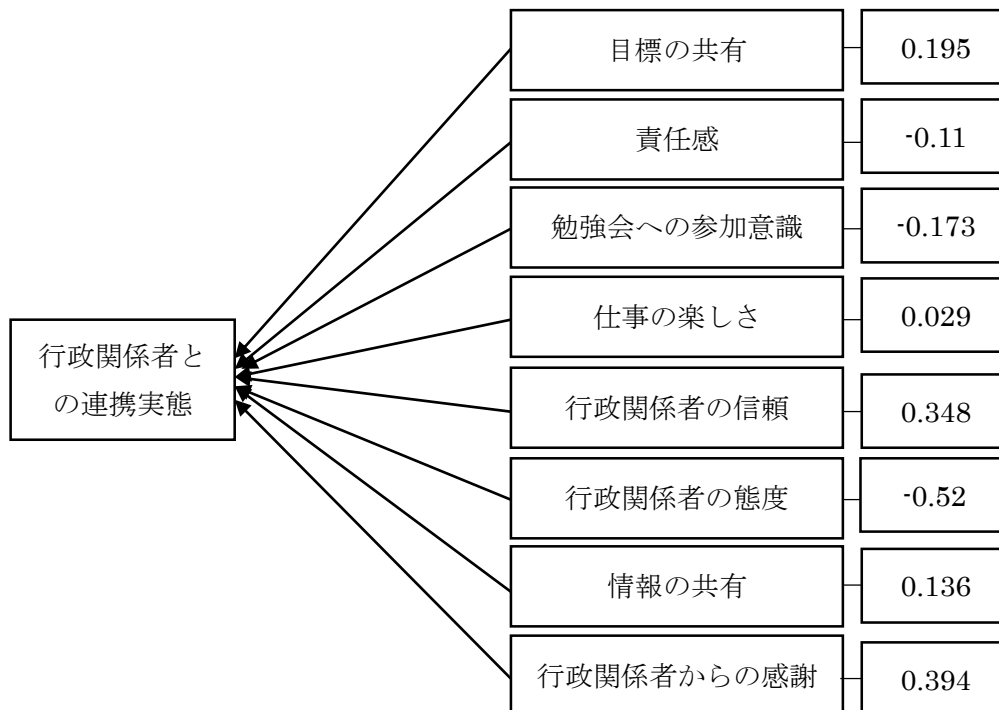


図 5-10 孔子論的連携意識構造モデル（行政関係者）における各項目の貢献値

表 5-9 スタッフの連携得点の記述統計量

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差	歪度		尖度	
	統計量	統計量	統計量	統計量	統計量	統計量	標準誤差	統計量	標準誤差
連携得点	384	0.28	4.36	2.24	0.72	-0.105	0.125	0.089	0.248
有効なケースの数 (リストごと)			384						

一方、仕事環境に関する項目として、主に、「仕事形態」、「施設種類」、「スタッフ人数（職場）」、「給与賃金の満足度」、「勤務時間」、「職場の運営方針・やり方」、「仕事内容」、「職場の人間関係」、「職場の雰囲気」、「介護保険制度の満足度」、「総合満足度」という 10 個の項目を設計した。そこで、連携レベルが仕事環境に関する項目との関連においては、表 5-10 のようになった。その中に、「仕事形態」、「給与賃金の満足度」、「職場の運営方針・やり方」、「仕事内容、職場の雰囲気」、「介護保険制度の満足度」、「総合満足度」7 個の項目においては、「連携レベル」との相関が認められた。そこで、仕事環境に関する 7 個の項目にそれぞれ着目するとともに、具体的な比較及び考察を行う。

表 5-10 仕事環境の各項目と連携レベルの相関

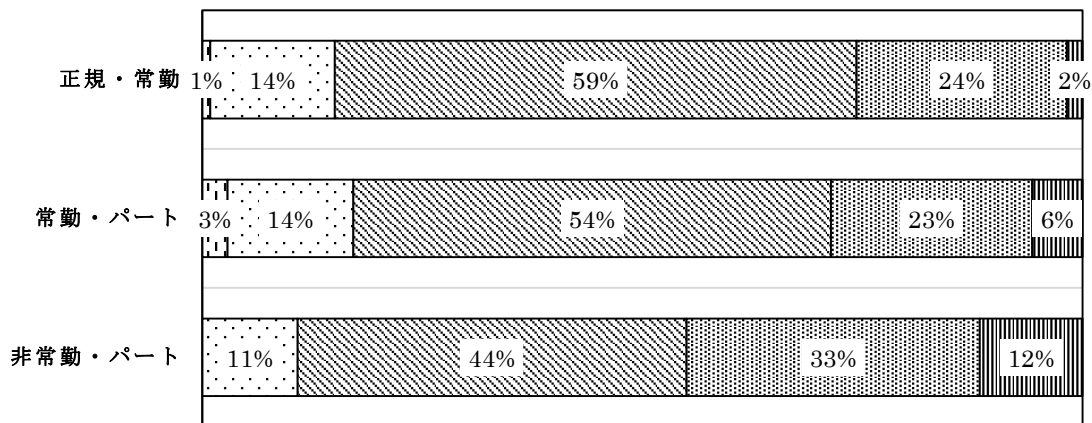
仕事環境項目		連携レベル
仕事形態	Pearson の相関係数	.199**
	N	381
スタッフ人数	Pearson の相関係数	-.019
	N	379
給与賃金の満足度	Pearson の相関係数	.180**
	N	382
勤務時間	Pearson の相関係数	.077
	N	383
職場の運営方針・やり方	Pearson の相関係数	.199**
	N	381
仕事内容	Pearson の相関係数	.197**
	N	381
職場の人間関係	Pearson の相関係数	.088
	N	382
職場の雰囲気	Pearson の相関係数	.140**
	N	382
介護保険制度の満足度	Pearson の相関係数	.212**
	N	376
総合満足度	Pearson の相関係数	.146**
	N	381

**p<0.01

まず、「仕事形態」と連携レベルとの関係について、図 5-11 に示されるように、「連携が大変いい」及び「連携がややいい」を合わせて選択したスタッフにおいては、「非常勤・パート」が 11%で、「正規・常勤」及び「常勤・パート」が 15%前後であった。一方、「連携が大変よくない」及び「連携がややよくない」を合わせて選択した比率においては、「非常勤・パート」が 45%で、「常勤・パート」が 29%で、「正規・常勤」が 26%であった。よって、「正規・常勤」の方が「非常勤・パート」より、連携が進んでいると推測できる。なお、「仕事形態」と連携レベルとの関係には、有意差が 0.01 に認められた(カイ二乗 $p=0.002$)。

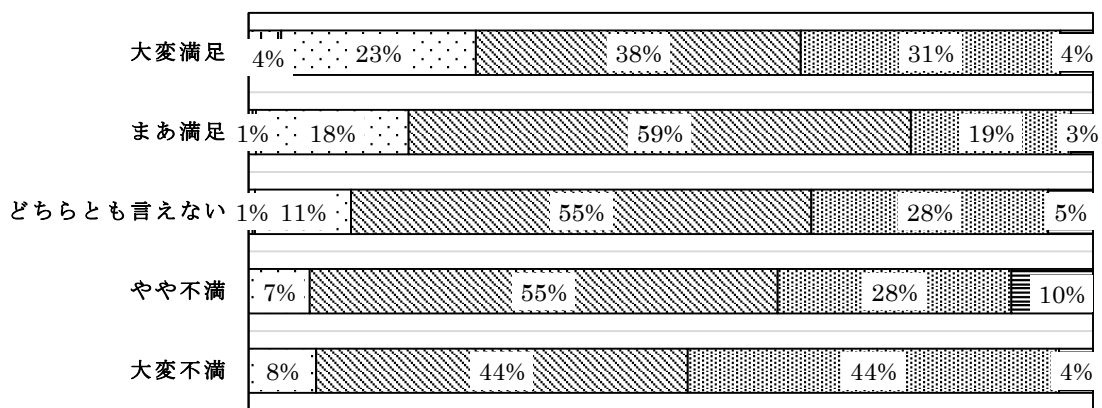
また、連携レベルと「給与賃金の満足度」の関係において、図 5-12 に示されるように、「連携が大変いい」及び「連携がややいい」を合わせて選択した比率は、「大変満足」及び「まあ満足」を合わせて回答したスタッフにおいては、2 割前後を占めているのに対して、「やや不

満」及び「大変不満」を合わせて回答したスタッフにおいては1割未満であった。一方、「連携が大変よくない」及び「連携がややよくない」を合わせて選択した比率においては、「大変満足」と「まあ満足」を合わせて回答したスタッフが3割前後で、「大変不満」と「やや不満」を合わせて回答したスタッフが4割前後であった。よって、「給与賃金」に満足しているスタッフの方がより連携が進んでいると考えられる。



□連携が大変いい □連携がややいい ▨連携が普通 ▩連携がややよくない ▪連携が大変よくない

図 5-11 仕事形態と連携レベルとの関係図



□連携が大変いい □連携がややいい ▨連携が普通 ▩連携がややよくない ▪連携が大変よくない

図 5-12 給与賃金の満足度と連携レベルとの関係図

連携レベルと「職場の運営方針・やり方」の関連においては、図 5-13 に示されるように、「連携が大変いい」と「連携がややいい」を合わせて選択した比率は、「大変満足」と「まあ満足」を合わせて回答したスタッフにおいては、3 割前後に対して、「大変不満」と「やや不満」を合わせて回答したスタッフにおいては、1 割未満であった。一方、「連携が大変よくない」及び「連携がややよくない」を合わせて選択した比率においては、「大変満足」と「まあ満足」を合わせて回答したスタッフが 2 割前後で、「やや不満」と回答したスタッフが 5 割であった。よって、「職場の運営方針・やり方」に満足しているスタッフの方がより連携が進んでいると考えられる。なお、連携レベルと「職場の運営方針・やり方」の関連においては、有意差が 0.01 に認められた(カイ二乗 $p=0.006$)。

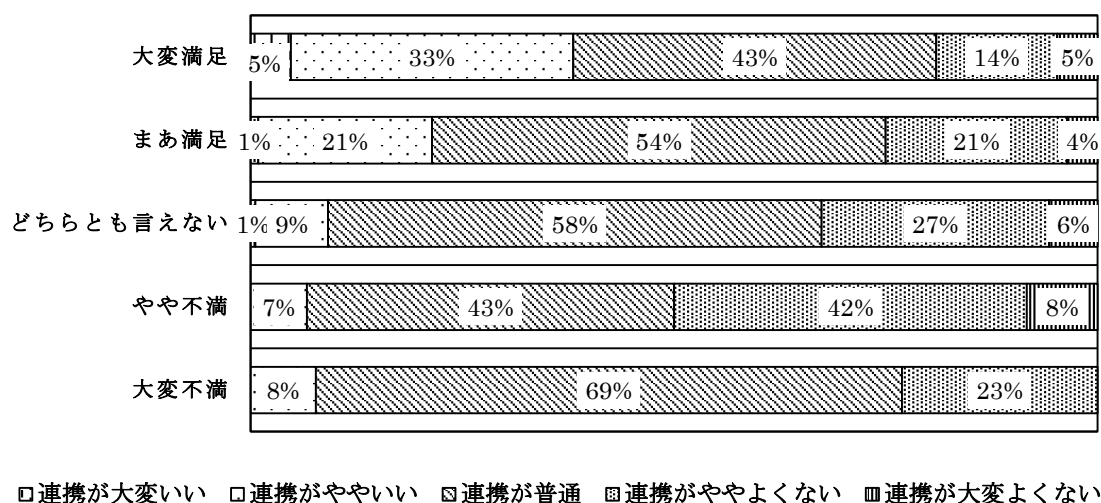
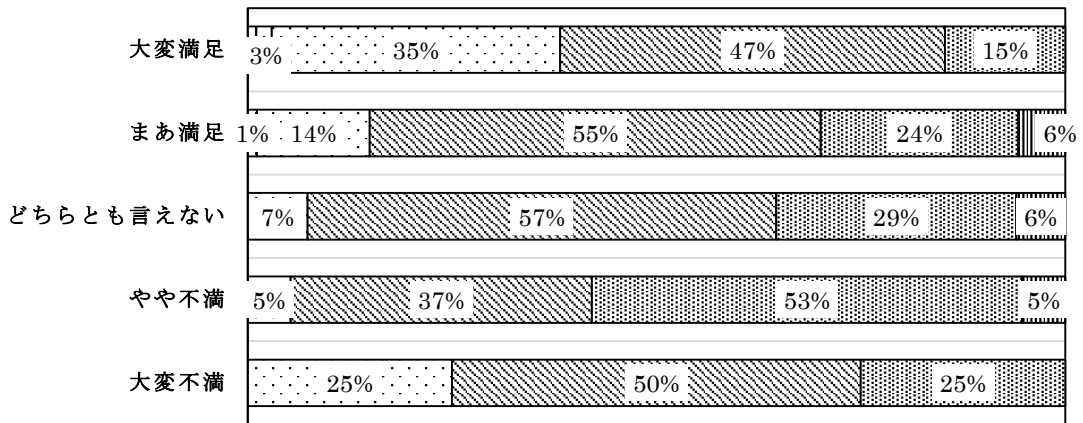


図 5-13 職場の運営方針・やり方と連携レベルとの関係図

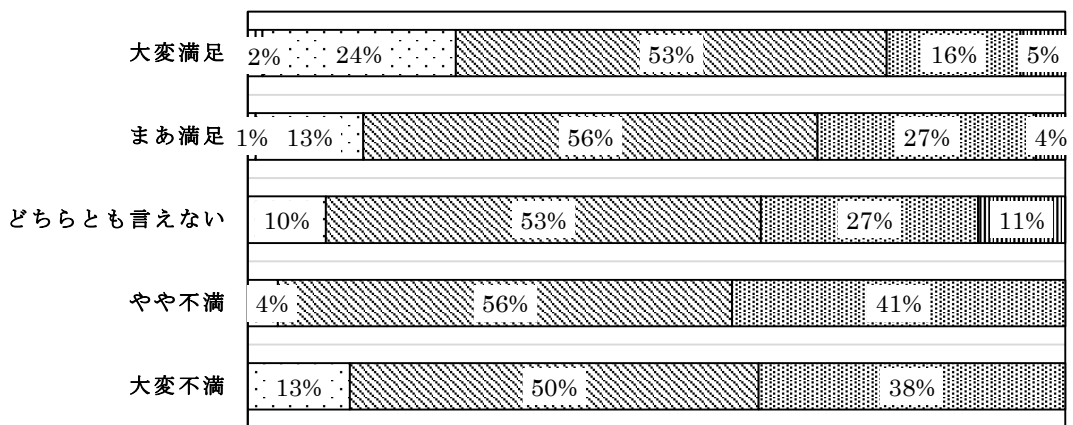
連携レベルと「仕事内容」の関連においては、図 5-14 に示されるように、「連携が大変いい」と「連携がややいい」を合わせて選択した比率においては、「大変満足」と回答したスタッフが 38%、「まあ満足」と回答したスタッフが 15%であった。それに対して、「やや不満」と回答したスタッフが 5%、「大変不満」と回答したスタッフが 25%となった。一方、「連携が大変よくない」及び「連携がややよくない」を合わせて選択した比率においては、「大変満足」と回答したスタッフが 15%、「やや不満」と「まあ満足」を合わせて回答したスタッフが 5%前後で、「大変不満」と回答したスタッフが 25%であった。よって、「仕事内容」に満足しているスタッフの方がより連携が進んでいると考えられる。なお、連携レベルと「仕事内容」の関連においては、有意差が 0.01 に認められた(カイ二乗 $p=0.007$)。



□連携が大変いい □連携がややいい ▨連携が普通 ▩連携がややよくない ■連携が大変よくない

図 5-14 仕事内容と連携レベルとの関係図

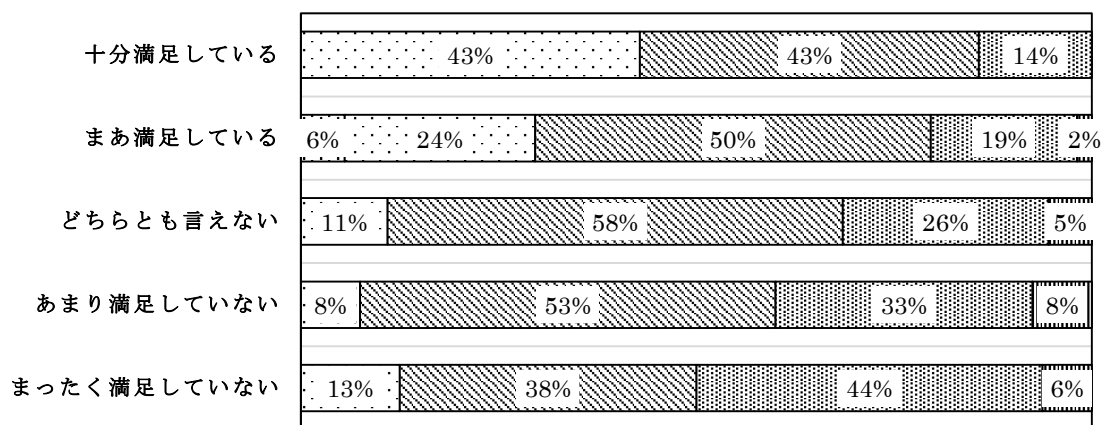
連携レベルと「職場の雰囲気」の関連においては、図 5-15 に示されるように、「連携が大変いい」と「連携がややいい」を合わせて選択した比率は、「大変満足」と「まあ満足」を合わせて回答したスタッフにおいては、2割前後に対して、「大変不満」と「やや不満」を合わせて回答したスタッフにおいては、1割前後であった。一方、「連携が大変よくない」及び「連携がややよくない」を合わせて選択した比率においては、「大変満足」と「まあ満足」を合わせて回答したスタッフが3割前後で、「大変不満」と「やや不満」を合わせて回答したスタッフが4割前後であった。よって、「職場の雰囲気」に満足しているスタッフの方がより連携が進んでいると考えられる。



□連携が大変いい □連携がややいい ▨連携が普通 ▩連携がややよくない ■連携が大変よくない

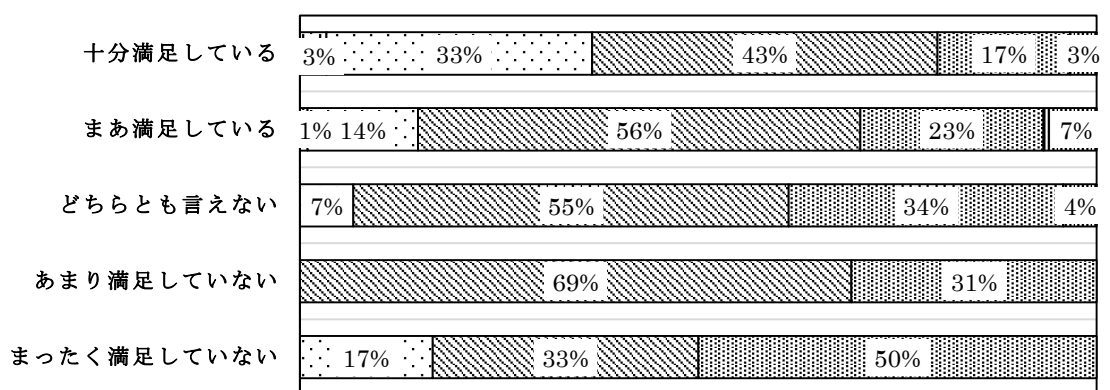
図 5-15 職場の雰囲気と連携レベルとの関係図

連携レベルと「介護保険制度の満足度」の関連においては、図 5-16 に示されるように、「大変満足」と「まあ満足」を合わせて選択した比率は、「連携が大変いい」と回答したスタッフにおいては 100%を占めているのに対して、「連携がややいい」と回答したスタッフが3割を超えているのに対して、「連携が大変よくない」と「連携がややよくない」を合わせて回答したスタッフが1割前後であった。よって、「介護保険制度」に満足しているスタッフの方がより連携が進んでいると考えられる。なお、連携レベルと「介護保険制度の満足度」の関連には、有意差が 0.01 に認められた(カイ二乗 $p = 0.002$)。



□連携が大変いい □連携がややいい ▨連携が普通 ▩連携がややよくない ■連携が大変よくない

図 5-16 介護保険制度の満足度と連携レベルとの関係図



□連携が大変いい □連携がややいい ▨連携が普通 ▩連携がややよくない ■連携が大変よくない

図 5-17 総合満足度と連携レベルとの関係図

連携レベルと「総合満足度」の関連においては、図 5-17 に示されるように、「連携が大変いい」と「連携がややいい」を合わせて選択した比率は、「十分満足している」と回答したスタッフが 4 割近く、「まあ満足している」と回答したスタッフが 15% に対して、「まったく満足していない」と回答したスタッフが 17% であった。「あまり満足していない」と回答したスタッフがいなかった。一方、「連携が大変よくない」及び「連携がややよくない」を合わせて選択した比率においては、「十分満足している」と「まあ満足している」を合わせて回答したスタッフが 3 割未満で、「まったく満足していない」と回答したスタッフが 50% で、「あまり満足していない」と回答したスタッフが 3 割を超えている。よって、「職場の雰囲気」に満足しているスタッフの方がより連携が進んでいると考えられる。なお、連携レベルと「総合満足度」の関連においては、有意差が 0.05 に認められた(カイ二乗 $p=0.02$)。

一方、図 5-18 に示されるように、介護・看護サービスのあるべき姿（あるいは理想形）の条件について選択比率（5 つ以内で選択）の高い順位に、「人あるいは人間関係を大事にする」が 72% と最も高く、ついで「連携・協働がある」50%、「つねに向上・改善していく」42%、「やりがいがある」37%、「思いやりがある」35%、「信頼できる」34%、「尊厳がある」26%、「給料がいい」26%、「気配りがある」22%、「雰囲気がいい」20%、「社会的責任感がある」18%、「達成感がある」16%、「勉強になる」14%、「和を大切にする」14%、「住民が理解できる」9%、「一生働きたい」6%、「タイムリーな提供」7%、「マナーがいい」6%となっている。

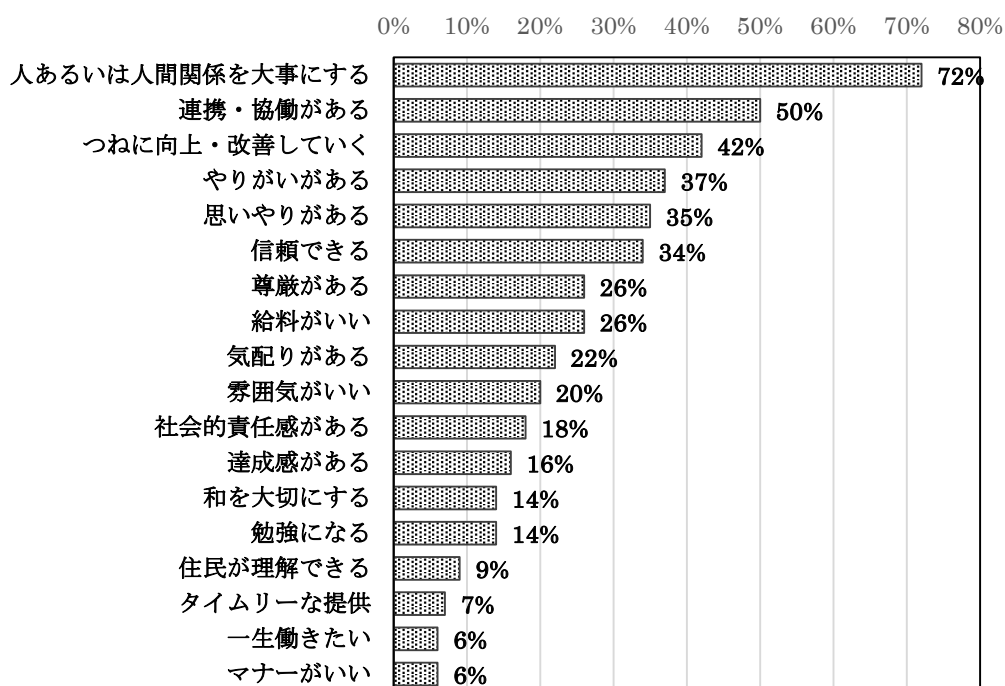


図 5-18 介護・看護サービス従事者からみた介護・看護サービスシステムの理想形

5.3.4 考察

前述した分析結果に基づいて、主に孔子論的連携意識構造モデルの有効性及び連携実態に関する仕事環境について考察を行う。

5.3.4.1 孔子論的連携意識構造モデルに関する考察

本節においては、孔子論的連携意識構造モデルの有効性を検証するため、豊田市介護サービス機関連絡協議会に登録している訪問看護ステーション・訪問介護事業所・介護老人福祉施設・訪問入浴事業所に所属しているすべてのスタッフを調査対象として、連携意識及び連携実態に関するアンケート調査を行った。また、孔子論的連携意識構造モデルを構築した上で、行政関係者の連携実態、目標の共有、責任感、勉強会への参加意識、仕事の楽しさ、行政関係者の信頼、行政関係者の態度、情報の共有、行政関係者からの感謝という9個の設問について、行政関係者の連携実態を目的変数とした強制投入法の重回帰分析を用いて分析を行った。その結果、「目標の共有」、「勉強会への参加意識」、「行政関係者の信頼」、「行政関係者からの感謝」、「情報共有」、「責任感」という6個の項目が有意に目的変数を説明していた。すなわち、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、6個の項目が有効であると検証することができた。

なお、上記の6個の項目においては、「行政関係者からの感謝」の決定係数が0.419で一番高かったため、連携実態に貢献していると考えられる。よって、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、関係者からの感謝が非常に重要なポイントとなってきた。すなわち、連携においては、相手の状況・立場を理解した上で、相手に感謝する気持ちを込めて一緒に連携・協働していることが極めて大切になってくると考えられる。次に、「行政関係者の信頼」の決定係数が0.299であるため、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、関係者の信頼が重要視されている。すなわち、連携における関係者間においては、相互信頼・信用した上で、連携・協働していくことが特に大切であると考えられる。

また、「目標の共有」及び「情報共有」の決定係数が0.1以上0.2未満であるため、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、「目標の共有」及び「情報共有」も関係者全員にとって重視されていると推測できる。よって、何のために連携しているか（連携目的）を共有した上で、共通の目標を設定するとともに、連携・協働していくことが重要である。なお、各関係者間においては、情報の共有・交換・コミュニケーション等が、連携の運営・実行にとって不可欠な条件であると推測される。

一方、「勉強会への参加意識」の決定係数が-0.140であるため、勉強会の参加・学習等が現在の連携にとってマイナスな影響を及ぼしていると考えられる。介護・医療制度等に関する体制・方針が毎年変わっているために、新しい知識を勉強することが負担になるかもしれないと推測される。あるいは、毎日の業務に追われて勉強会に時間をとられることに不満感をいっていることも原因の一つと考えられよう。しかしながら、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、各関係者がそれぞれに新しい知識を相互学習・交流するとともに、業務にお

ける技能・作法・能力等を勉強・研修・向上していくことは、連携促進には不可欠な条件・方策であると提案されている。現場においては、理想形と現状とのギャップが大きいと言える。

なお、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、各関係者がそれぞれの役割分担及び責任を担って、楽しく連携・協働していく姿勢の大切さを提案している。しかしながら、「責任感」の決定係数が -0.090 であるため、責任感が連携にとってマイナスな影響を及ぼしていると考えられる。それは、関係者が各自に課せられた責任の重さを痛感すればするほど、それがストレスとなり、連携促進に臆病になったり、慎重になりすぎるためという見方もできよう。

5.3.4.2 連携実態に関する仕事環境に関する考察

孔子論的連携意識構造モデルの回帰式によって、得られた各関係者の連携得点を5段階の連携レベルに大別した。また、連携レベルが、「仕事形態」、「スタッフ人数（職場）」、「給与賃金の満足度」、「勤務時間」、「職場の運営方針・やり方」、「仕事内容」、「職場の人間関係」、「職場の雰囲気」、「介護保険制度の満足度」、「総合満足度」という仕事環境に関する10個の項目との関連について分析した。その結果、「仕事形態」、「給与賃金の満足度」、「職場の運営方針・やり方」、「仕事内容」、「職場の雰囲気」、「介護保険制度の満足度」、「総合満足度」7個の項目においては、「連携レベル」との相関が認められた。なお、各項目ごとの詳細な分析結果については、以下に考察を行う。

「仕事形態」と連携レベルとの関係においては、「非常勤・パート」のフタッフの連携レベルが「正規・常勤」より3割低かったことが分かる。よって、「非常勤・パート」のフタッフは、連携の実態においては、正規・常勤のスタッフと比較して消極的な姿勢が見られる。なお、「仕事内容」と連携レベルとの関係においては、「仕事内容」に不満なスタッフの方が連携が順調に進んでいないと認められた。その理由・背景としては、「非常勤・パート」の仕事内容及び仕事時間等によって、連携をあまりとっていない場合もあると考えられる。

連携レベルと「給与賃金の満足度」の関係においては、有意差が認められなかったが、2割近くの差によって、連携が順調に進んでいるスタッフの方が現在の給与賃金に満足していると思われる。よって、介護・看護分野においては、給与賃金の問題が連携に及ぼしているとともに、給与賃金の問題を改善することが連携促進に役立つと推測されている。なお、仕事形態（非常勤・常勤・パート・正規）は、給与賃金と仕事時間等に関連していると考えられる。

連携レベルと「職場の運営方針・やり方」の関連結果により、順調に連携しているスタッフが職場の方針・やり方に慣れると推測される。また、連携レベルと「介護保険制度の満足度」の関連においては、制度に満足しているスタッフが連携を進んでいると考えられる。とくに、「総合満足度」に満足しているスタッフが連携を順調にとれていると言える。なお、「職場の雰囲気」と連携の間に有意差が認められていなかったが、「職場の雰囲気」に不満を持っているスタッフが連携をとれていないと推測される。以上の結果により、よって、介護・看護の体制・制度・環境及び方針が変化しているとともに、新規事業も多いために、職場の運営

方針・やり方も変化していると考えられる。よって、「職場の運営方針・やり方」・「介護保険制度」及び「職場の雰囲気」に不満をもっているスタッフが連携において順調にいかないと推測される。

上述したように、「仕事形態」・「給与賃金」・「仕事内容」・「職場の運営方針・やり方」・「介護保険制度」及び「総合満足度」という7つの環境要素が、連携に強く影響を及ぼしていると考えられる。

一方、介護・看護サービスのあるべき姿（あるいは理想形）の条件において、介護・看護サービス提供者からみた条件は、「人あるいは人間関係を大事にする」、「連携・協働がある」、「つねに向上・改善していく」、「やりがいがある」、「思いやりがある」、「信頼できる」が上位の順位を占めている。よって、介護・看護サービスシステムにおける理想形においては、人間関係（人・和）、向上・改善（省・進）、やりがい（仁・楽）、思いやり（恕）、信頼（信）等の孔子思想の理念・方針が重要視されている。

5.3.5 結言

本節においては、豊田市介護サービス機関連絡協議会に登録している訪問看護ステーション・訪問介護事業所・介護老人福祉施設・訪問入浴事業所に所属している全体のスタッフを調査対象としたアンケート調査を、重回帰分析の強制投入法で分析した。その結果に基づいて、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、前述したシステムにおけるスタッフにとって、「目標の共有」、「勉強会への参加意識」、「行政関係者の信頼」、「行政関係者からの感謝」、「情報共有」、「責任感」という6項目が有効であることを明確にした。また、検証した結果によって、スタッフの「勉強会への参加意識」及び「責任感」は、現場の連携にとってマイナスな影響を及ぼしていると考えられる。また、仕事環境と「連携レベル」の関連において、「仕事形態」、「給与賃金の満足度」、「職場の運営方針・やり方」、「仕事内容」、「職場の雰囲気」、「介護保険制度の満足度」及び「総合満足度」という7個の項目は、「連携レベル」との相関が認められた。

今後の課題としては、地域包括ケアシステムにおける他の関係者との連携意識・連携実態を明確にするとともに、孔子論的連携意識構造モデルの有効性及び効果を検証することも計画内である。なお、ここで提案した孔子論的連携意識構造モデルが具体的な地域包括ケアシステム及び他のシステムにおいても適応及び貢献することが期待される。

5.4 まとめ

本章においては、連携に関する孔子思想を明らかにするために、KJ法を用いて「論語」で記述される孔子思想を体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から孔子論的連携意識構造モデルを提案するとともに、連携のあるべき姿及びその特徴について

考察を行った。更には、孔子論的連携促進方策についても若干の考察及び提案を行った。また、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、個人の社会的責任を示す「仁」及び、知識・経験及び知恵を相互学習及び共有する集合知の形としての「学」が特に重要視されていることを明らかにした。

また、本章においては、提案した孔子論的連携意識構造モデルの有効性及び結果を検証するために、地域包括ケアシステムにおける介護及び看護サービス従事者を対象に、適応を試みた。具体的な事例としては、豊田市介護サービス機関連絡協議会に登録している訪問看護ステーション・訪問介護事業所・介護老人福祉施設・訪問入浴事業所に所属している全スタッフを調査対象としたアンケート調査を実施した。その結果に基づいて、孔子論的連携意識構造モデルにおいては、前述したシステムにおける各スタッフの連携意識及び連携促進にとって、「目標の共有」、「勉強会への参加意識」、「行政関係者の信頼」、「行政関係者からの感謝」、「情報共有」、「責任感」という6項目がとくに有効であることを明らかにした。

さらに、仕事環境と「連携レベル」の関連において、「仕事形態」、「給与賃金の満足度」、「職場の運営方針・やり方」、「仕事内容」、「職場の雰囲気」、「介護保険制度の満足度」及び「総合満足度」という7個の項目において、「連携レベル」との相関が認められた。

最後に、今後の連携課題及び展望として、介護及び看護サービス提供者以外の地域包括ケアシステムの関係者の連携意識構造を明確することが必要であろう。また、今後は、孔子論的連携意識構造の詳細なモデル化及び数量化を行う計画である。

参考文献（第5章）

- [1] E. デュルケーム, 田原音和訳: 社会分業論, 青木書店, 2005
- [2] 山本勝: 介護保険時代における保健・医療・福祉のシステムづくりと人づくり: 上巻 (基礎編), 新企画出版社, 2000
- [3] 山本勝: 保健・医療・福祉のシステム化と意識改革, 新興医学出版社, 1993
- [4] 山本勝: 保健・医療・福祉の私捨夢 (システム) づくり, 篠原出版新社, 2007
- [5] 楊先挙: 孔子マネジメント入門, 日本能率協会マネジメントセンター, 2010
- [6] 潘乃樾: 孔子与現代管理, 中国経済出版社, 1994
- [7] 于丹: 論語力, 講談社, 2008
- [8] 史文珍: システムづくりにおける孔子的問題意識に関する一考察, 愛知工業大学経営情報科学第8巻第2号, pp. 49-61, 2013
- [9] 子安宣邦: 思想史家が読む論語, 岩波書店, 2010
- [10] 金谷治: 論語, 岩波書店, 1999
- [11] 匡亜明: 孔子評伝, 南京大学出版社, 1990
- [12] 川喜田二郎: KJ法: 渾沌をして語らしめる, 中央公論社, 1986
- [13] 史文珍: KJ法を用いた孔子思想の体系化の試み, 愛知工業大学経営情報科学第7巻第1号, pp. 37-49, 2012
- [14] 李哲厚: 論語今読, 天津社会科学院出版社, 2007
- [15] 銭穆: 論語新解, 生活・讀書・新知三聯書店, 2005
- [16] 吉田賢抗: 論語, 明治書院, 1988
- [17] 貝塚茂樹: 孔子; 孟子, 中央公論新社, 1978

- [18] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2012
- [19] 史文珍, 山本勝: 孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの構築および運営に関する一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 13, 2013 (掲載決定)
- [20] 山本勝ら: 健幸社会を支える地域包括ケアシステムの基本理念と推進方策, 日本経営診断学会論集 Vol. 13, 2013, (掲載決定)
- [21] 山本勝, 横山淳一: 高齢化社会を支える地域包括支援センターの実態分析とシステム化方策, 日本経営診断学会論集 Vol. 10, pp. 56-62, 2010
- [22] 平井明代: 教育・心理系研究のためのデータ分析入門, 東京図書, 2012
- [23] 村瀬洋一ら: SPSS による多変量解析, 株式会社オーム社, 2007

第6章 評価システムにおける孔子論的考察とその応用

6.1 はじめに

問題解決においては、システムの実態把握、現状分析、問題点を明らかにするとともに、実施の結果を判断・評価するシステムが極めて重要な課題である。一般的に、評価とは、物事の価値を明らかにすることであり、物事の価値を判断することであると言える。また、日常生活においては、人間はそれぞれの価値観（価値の認識）及び判断基準に基づいて物事を判断しながら行動及び生活していく。そこで、人間の評価システムの理想形を究明することが重要かつ不可欠な課題となってきた。

一方、人間及び人間社会の問題を解決するために、中国の哲学者である孔子は、人間のあるべき姿である「君子」の生き方・考え方・進め方等（人間の基準・価値観）を提唱してきた。人間の生き方を中心とした孔子思想は、2,500年にわたって、人々の日常生活から、企業の経営、国家の管理など社会システムに至るまで、今日まで中国をはじめ、日本・韓国など東洋において強い影響を及ぼしてきた。時代・社会環境などが異なっても、人間の生き方、人間社会に対する見方・とらえ方・考え方ならびに進め方などの孔子思想・教訓・教えは、今日でも極めて有益であると言えよう。

そこで、本章においては、良い評価システムを構築するために、「論語」において評価システムに関する孔子思想を KJ 法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、孔子論的評価システム及び特徴などを提案及び考察することを試みる。また、提案した評価システムに基づいて、具体的な評価システムを設計するとともに、具体的な事例に応用することを試みる。

6.2 評価システムにおける孔子論的考察

6.2.1 緒言

問題解決においては、人間及び人間社会の実態把握、現状分析、問題点を明らかにするとともに、問題解決の促進及び、より良い人生・人間社会を構築するために、人間及び人間社会における物事を評価することが極めて重要な課題である[1,2]。「間違った秤が最悪な評価」を防ぐ客観かつ適切な評価システムを構築するために、そもそも評価とは何であるかを究明することが先決条件であろう[3]。

一般的に、評価とは、物事の価値を明らかにすることであり、物事の価値を判断することであると言える[4]。この意味で、評価は、物事の価値に対する認識及び判断の基準という2つの側面から構成されている[5]。また、日常生活においては、人間はそれぞれの価値観（価値の認識）及び判断基準に基づいて物事を判断しながら行動及び生活していく[6]。従って、評価とは、人間及び人間社会における物事の見方・考え方・とらえ方であり、人間及び人間社会における生き方・進め方でもあると言えよう[1]。

一方、人間及び人間社会の問題を解決するために、中国の哲学者である孔子は、「老者は之を

安んじ、朋友は之を信じ、小者は之を懐けん」を社会の理想形に掲げていたとともに、人間のあるべき姿である「君子」の生き方・考え方・進め方等（人間の基準・価値観）を提唱してきた[7]。その人間及び社会の理想形を達成するために、当時の人間社会における人物及び物事を評価するとともに、倫理観、人間関係、日常行動などの身近な生活のあり方・生き方を模索しながら、貴重な問題解決理念・方策・思想を含めた具体的な問題解決方法を探していた[8]。

人間の生き方を中心とした孔子思想は、2,500年にわたって、人々の日常生活から、企業の経営、国家の管理など社会システムに至るまで、今日まで中国をはじめ、日本・韓国など東洋において強い影響を及ぼしてきた[9,10]。時代・社会環境などが異なっても、人間の生き方、人間社会に対する見方・とらえ方・考え方ならびに進め方などの孔子思想・教訓・教えは、今日でも極めて有益であると言えよう[11]。

そこで、本節においては、良い評価システムを構築するために、「論語」において評価システムに関する孔子思想を KJ 法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、孔子論的评价システム及び特徴などを提案及び考察することを試みる。

6.2.2 「論語」の体系化手順

孔子思想は、孔子の弟子たちによって編成された孔子及びその弟子たちの言行録である「論語」に記録されている[12]。「論語」の内容は、人間のあるべき姿である君子（仁者）の生き方・日常行動、政治のやり方・考え方、人生の教訓、人物の評価、孔子の日常行動などについての記述である[13]。「論語」は編者によってバージョンが異なるが、大体 20 篇で 500 章くらいから構成される。しかし、一般に「論語」における統一テーマはないとともに、「論語」においてテーマを統一することは極めて難しいと思われている[14]。

そこで、本節においては、定量的な分析方法ではなく、近年注目されてきた定性的な分析方法の一つである KJ 法を用いて「論語」を体系化することを試みる[15]。なぜなら、KJ 法は、漠然としてつかみどころのない問題を明確にし、解決策、新しい発想を得るためには、特に有効な手法である。また、KJ 法は、集まった膨大な情報・データをまとめるために、多くの断片的、雑多なデータを統合して、創造的なアイデアを生み出し、問題の解決の糸口を探っていく創造的問題解決方法の技法であると言えよう[16]。

なお、本節においては、「論語」の編数は、李哲厚の「論語今読」[17]を参考にして 500 章とした。「論語」の内容及び解釈は、銭穆の「論語新解」[18]、李哲厚の「論語今読」、吉田賢抗の「論語」[19]、貝塚茂樹の「孔子；孟子」[20]を参考にした。「論語」の体系化の手順は、図 6-1 に示されるように、「論語」の各章に対して、その内容によって、それぞれ一言で表現できるカードを作成する。まず、20 篇 500 章から総計 500 枚のカードを作成した。次に、評価に関するカードが 167 枚を選出された。意味が近いカードを 1 つの小グループに編成するとともに、そのグループの中から、1 つのカード（文字）を抽出し、その小グループの「表札」としてつけた。このような手順を行うことにより、評価システムに関する孔子思想（「論語」）の内容は、60 個の小グループから構成されることが分かった。また、小グループを編成

した手続きと同様に、60 個の小グループから 12 個の中グループを編成した。なお、12 個の中グループから同様の手続きにより、方法、角度（視点）、対象及び基準という 4 個の大グループ及び表札が編成された。このように、評価システムに関する孔子思想（「論語」）を体系化した結果は、4 つの側面からまとめられた。

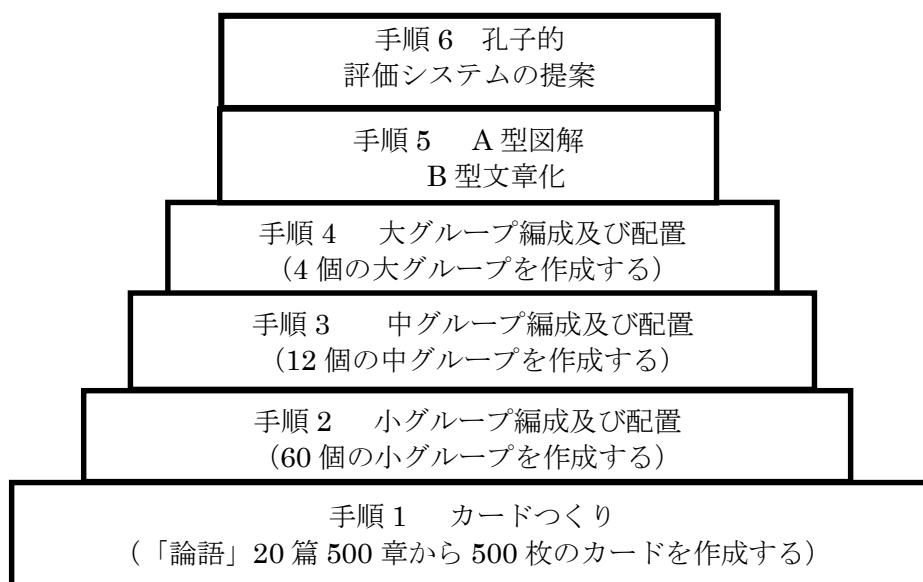


図 6-1 評価システムに関する孔子思想（「論語」）の体系化手順

6.2.3 孔子論的評価システム

本節においては、KJ 法を用いて「論語」（孔子思想）を体系化した結果に基づいて、孔子論的評価システムが、図 6-2 に示すように、評価方法（中庸と優先）、評価角度・視点（時間と立場）、評価対象（人間・人間社会）及び基準（合理性の「理」・人間性の「情」）という 4 つの基本要素（側面）から構成されることを提案するとともに、具体的な内容について以下に詳しく考察する。

6.2.3.1 評価システムの角度・視点

KJ 法を用いて孔子思想を体系化した結果に基づいて、孔子論的評価システムの評価角度・視点は、主に時間と立場の二つの側面を重点に置くことを提案するとともに、以下のように詳しく説明する。

1) 時間の評価角度・視点

孔子論的評価システムにおいては、時間の軸に立って物事を評価することが孔子の教訓である。時間の角度・視点によって、評価の結果が異なる。孔子的な時間に関する角度・視

点は、図 6-2 に示したように、タイミング、時間の継続（継続性及び持続性）、未来・計画（長期・短期の視点）と過去という 4 つの種類にまとめる。この 4 つの時間の角度・視点はそれぞれ異なる評価結果を呈している。

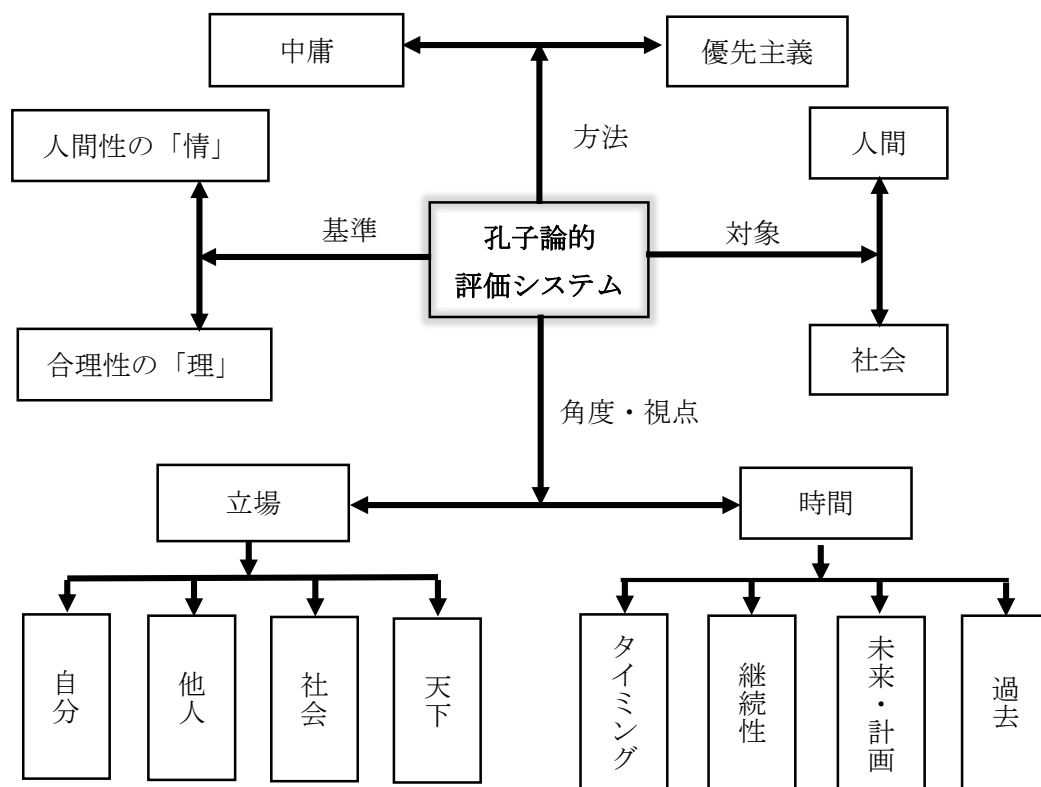


図 6-2 孔子論的評価システムの全体概念図

まず、「夫子時にして然る後に言う。人其の言うことを厭わず」と、「子曰く、與に言う可くして、之と言わざれば、人を失う。與に言う可らずして、之と言えば、言を失う。知者は人を失わず。亦言を失わず」ように、必要な人に、必要なこと（サービスなど）を必要な時に、タイムリーに行動していくタイミングは、一つの重要な評価角度・視点である。とくに、人が人を支えるシステムにおいては、お客様の評価・判断一つの指標は現場でサービスを提供するスタッフの態度・マナー・表情・行動などのタイミングであると指摘されている[21]。タイミングの評価対象は、主に「言」、「笑」など礼儀・マナー・表情・行動などである。

時間の継続性については、「回や、その心三月仁に違わず、其の余は則ち日月に至るのみと」ように、継続性という評価視点は人間を判断するときの重要な尺度となってきた。また、「抑之を為びて厭わず、人を教えて倦まず」と「歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るを知る」のように、継続的に進んでいくことが評価における一つの重要な課題である[22]。

次に、過去の評価について、「故きを温めて新しきを知れば、以て師為る可し」と「吾日に吾が身を三省す」ように、つねに過去を反省・評価することが重要視されている。また、「成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず」のように、対象により、過去に対する見方が異なるで

あろう。

また、未来の時点については、「人遠慮無ければ、必ず近憂あり」ように、未来における評価が重要視されている。未来の視点が長・短期に置くこと（計画の期間など）によって計画の長期・短期の視点に大別する。長期の視点について、「終を慎み遠きを追えば、民の徳厚きに帰す」ように、現在のやり方・考え方・進め方などは、社会・国家の未来及び国民の道德・生活にかかわっている。また、「善人民を教えること七年ならば、亦以て戒につかしむ可し」及び「三年父の道を改むること無きは、孝と謂ふ可し」ように、短期の視点も強調されている。

2) 立場の評価角度・視点

立場によって評価の結果が異なるため、孔子論的评价システムにおいては、自分(自己評価)、他人(他人評価)、社会、天下(国家)という四つの立場の評価角度・視点が指摘されている。

まず、「吾日に吾が身を三省す」及び「不賢を見ては内に自ら省るなり」ように、自分の立場で自己評価することが自分の成長・向上・改善にとって必要なステップである。また、「子曰く、其の以てする所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや」及び「夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」のように、他人・相手の立場を立てて考慮していくとともに、他人及び相手の心・気持ち・態度・やる気・理由・動機・心理などを観察する評価角度・視点が基本的な要点である。

また、「徳の修まらざる、学の講ぜざる、義を聞きてうつる能わざる、不善の改むる能わざる、是れ吾が憂いなり」ように、社会の立場を立てて社会の物事を評価することが、社会評価の基礎的な基準である。とくに、「子貢問いて曰く：郷人皆之を好せば如何と。子曰く：未だ可ならざるなりと。郷人皆之を悪まば如何と。子曰く：未だ可ならざるなり。郷人の善者は之を好し、其の不善者は之を悪むに如かざるなりと」及び「衆之を悪むも必ず察す。衆之を好むも必ず察す」ように、社会における同じ意向・傾向・流行などを慎重に観察・検討・検証する姿勢・態度も必要となってくる。さらに、「天下、道が有れば、吾それを変えらず」及び「天下道有れば、則礼樂征伐天子より出づ、天下道無ければ、則礼樂征伐諸侯より出づれ」ように、法律・制度・ルール・習慣・礼儀など世の中におけるすべての物事を天下(国家及び世界)の視点から評価することが重要視されている。

6.2.3.2 評価システムの方法

孔子論的评价システムにおいては、中庸と優先という二つの評価方法が強調されている。

1) 中庸の評価方法

「子曰く：中庸の徳為るや、それ至れるかな。民鮮きこと久しと」ように、中庸が孔子思想の方法論の一つであり、孔子論的评价システムにおいては、中庸が重要な評価方法であると言える。中庸の対象が世の中の全てであるといえるが、とくに、やり方の程度、内容と形式、人間関係が強調されている。やり方においては、「子曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしと」

では、物事のバランス・和・中庸が重要視されている。また、「子曰く、質、文に勝てば則野なり。文、質に勝てば則史なり。文質彬彬として、然かる後に君子なり」では、内容と形式のバランスをとることは指摘されている。とくに、人間関係においては、「子遊曰く、君に事へて數すれば、斯に辱しめらる。朋友に數すれば、斯に疏んぜらる」では、人間関係におけるバランス（ある程度の距離）・調整・調和も強調されている。

2) 重み付の評価方法

一方、孔子論的评价システムにおいては、中庸だけではなく、重み付（優先主義）が評価方法として重要視されている。社会に貢献すること、生活・仕事に役立つこと、などの実用性及び本質指向を優先する重み付の尺度である。まず、「管仲の器小なるかなと。…管仲にして礼を知らば、誰か礼を知らざらんと」及び、「桓公諸侯を九合するに、兵車を以てせざりしは、管仲の力なり、其の仁に如かんや、其の仁に如かんや」ように、礼儀・マナーを守っていないと、天下の平和に貢献する管仲に対する評価が異なるが、社会・天下に貢献できることがとくに優先・強調されている。

また、「利牛の子も、あかくしてかつ角ならば、用ふることなからんと欲すと雖も、山川其れ諸を捨てんやと」のように、人間の出身・身柄より、人間の能力・役割が担当できるかなどは人間を評価する指標となってくるであろう。「詩三百をしょうすけれども、これに授くるに政を以てして達せず。四方に使いして、専対すること能はずんば、多しと雖も亦何を以て為さん」のように、学問・学歴・知識より、役割・仕事ができること並びに実際現状に役立つという結果が重要視されている。

6.2.3.3 評価システムの対象及び基準

評価の対象が一般的に世の中におけるすべての物事であるが、孔子論的评价システムにおいては、主に人間と人間社会（以後社会と短称する）に大別することができる。また、評価の基準が評価の対象によって異なるために、孔子論的评价の基準は、人間及び社会において、主に価値観・礼儀・道徳・性格・気持ちなど人間性の「情」及び、見方・考え方・やり方・進め方・効率・効果など合理性の「理」にまとめられる。以下においては評価対象及び評価基準をあわせて総合的に説明を行う。

1) 人間及び人間の基準について

「論語」において、孔子は、人間のあるべき姿である「君子」（「仁者」）を基準にして、身の回りの弟子・百姓から当時の政治家・国の王までさまざまな人物に対して評価を行った。孔子論的评价システムにおいては、図3に示されるように、評価の対象が主に君子（仁者）と小人に大別することができる。また、人間の評価基準（尺度）は、主に価値観・礼儀・道徳・性格・気持ちなど人間性の「情」並びに、見方・考え方・やり方・進め方・効率・効果など合理性の「理」にまとめられる。

評価対象が人間とした人間性の「情」においては、図 6-3 に示されるように、「仁」・「恕」・「孝」・「礼」・「楽」などの基準・尺度・側面が指摘されている。まず、「天下、道が有れば、吾それを変えらず」ように、「仁」の概念は、人間社会における諸問題を解決する個人の社会的責任（PSR (personal social responsibility)）及びそれに伴う行動を意味する。「仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る」と「仁を為すは己に由りて、人に由らんやと」ように、孔子論的評価システムにおいて、自分なりの責任を持つかは重要な人間の評価基準である。

また、孔子思想においては、「礼を知らざれば、以て立つこと無きなり」ように、人間社会に関する法律制度・文化・礼儀・習慣などを身につけないと、一人前な人間ではないということは、人間の基本的な基準であると言える。さらに、「非礼視ること勿れ、非礼聴くこと勿れ、非礼言うこと勿れ、非礼動くこと勿れ」のように、人間同士間での礼儀・マナーなどを遵守し行動していく「礼」が強調されている。

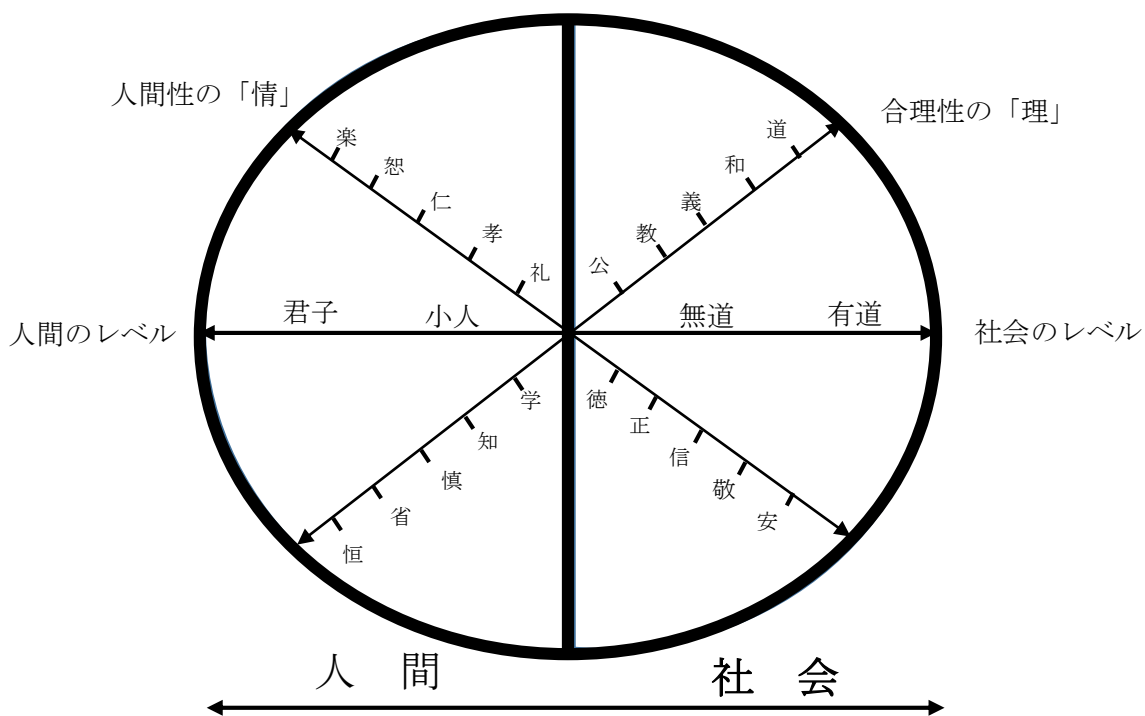


図 6-3 孔子論的評価システムにおける対象及び基準図

とくに、「之を知る物は、之を好むものにしかず、之を好む物は、之を楽しむ物に如かず」ように、「楽」という理念が人生にとって極めて大切な基準と考えられている。「己立たんと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す」のような楽しさを楽しむとともに、前向きに、そして継続的に進んでいくことは、孔子論的評価システムにおける人間の基礎であろう。

一方、評価対象が人間とした合理性の「理」においては、図 6-3 に示されるように、「学」・「知」・「思」・「慎」・「省」・「恒」などの基準・尺度が重要視されている。「仁を志す」よう

に、自分の目標を設定及び追求するとともに、「君子は学びて以て其の道を致す」ように、知識・情報を学習・追求する「学」の尺度がまず重要視されている。また、学習した知識・情報を整理・分析・思考する「知」及び「思」が指摘されている。とくに、「之を知るを之を知ると為し、知らざるを知らずと為す。是れ知るなり」ように、自分の足りないところ・短所などを客観的に認識する合理性・知恵が孔子の教訓であろう。さらに、「吾日に吾が身を三省す。人のために謀りて忠ならざるか。朋友と交りて信ならざるか。習はざるを伝へしかと」ように、絶えず自分の過失・過ちなどを慎重的に反省・検証・検査・改善する「省」が強調されている。

2) 社会及び社会の基準について

孔子は、人間だけではなく、人間社会についても、様々な評価を行った。人間社会については、図3に示されるように、「無道」と「有道」という2つのレベルにまとめられるとともに、道徳・性格などを含めた人間性の「情」並びに、効率・効果・マネジメントなどを含めた合理性の「理」という2つの社会基準に基づいて、評価を行った。

まず、評価対象が人間社会とした人間性の「情」においては、主に「徳」、「信」、「安」、「正」、「敬」などが注目されている。図3に示されるように、「政を為すに徳を以てする」ように、社会を管理するには、道徳を重点にしていくことが不可欠な条件である。社会における道徳のレベルが社会を検証する重要な基準であろう。また、「人は信が無ければ、立つことにならず」、「民信無くば、立たず」及び「朋友は之を信じ」ように、友達や国民間に相互信頼できる信頼・信用・信任という「信」が社会の大切な基準となってくる。とくに、「老者は之を安んじ」及び「己を修めて、以て百姓を安す」ように、国民・社会が安全・安定・安心するかは極めて重要な社会基準であろう。

一方、人間社会を評価する合理性の「理」は、主に「教」、「義」、「道」、「和」、「公」などに重点をおいている。まず、「子曰く：庶きかなと。冉有曰く：すでに庶し、又何をか加えんと。子曰く：之を富ますと。曰く：すでに富めり、また何をか加へんと。曰く：之を教へんと」のように、国民の生活状況（人口や健康や経済など）が社会の基本的な基準であり、そのうえで、教育がより高い評価基準と強調されると言えよう。

また、「国を有ち家を有つ者は、くわを患えずして均しからざるを患う。…和すれば寡無く、安ければ傾くことなし」、「千乗の国を道むるに、事を敬して信に、用を節して人を愛し、民を使うに時を以てす」及び「敏なれば則功有り、公なれば則悦ぶ」ように、効率・効果・公平などが社会を評価する重要な基準である。

とくに、「民の義を務め、鬼神を敬して之を遠ざく。知と謂う可しと」及び、「子貢曰く：如し博く民に施して、能く衆を済ふ有らば、何如。仁と謂ふ可きかと。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ず聖か」ように、人間社会に貢献できる効果が最高の基準となってきた。「天下道有れば、則礼楽征伐天子より出づ、天下道無ければ、則礼楽征伐諸侯より出づれば、…天下道有れば、則政大夫に在らず。天下道有れば、則庶人議せず」ように、社会の安定・平和・調和を

評価する「道」の基準が孔子論的評価システムにおいて強調されている。

6.2.4 孔子論的評価システムの特徴

上述したように、提案した孔子論的評価システムの主な特徴は、以下の3点にまとめる。

1) タイミング及び継続性の重要視

従来の評価尺度において、時間の立場に関する評価が、主に事前評価、中間評価（プロセス評価）、終了評価及び事後評価という4つの種類は重要視されている。それに対して、孔子論的評価システムにおいては、とくに、タイミング及び継続性に関する尺度が強調されている。

2) 安心・安定・安全の最高基準（尺度）

人間を評価する基準においては、自分自身・関係者などを安心・安定・安全させる「安」が最高の基準となってきた。また、社会管理・政治・国家管理などを評価する尺度においても、社会及び国家を安心・安定・安全させる「安」が最高の基準であると言える。そこで、利益のような物質などより、安心・安定・安全という尺度は、人間のあるべき姿及び人間社会のあるべき姿における重要な不可欠な基準となってきたと言えよう。

3) 社会的責任及び貢献の優先主義

孔子論的評価システムにおいては、「君子」及び「仁者」の役割あるいはあるべき姿が社会・国民に貢献できるとともに、関係者を安心させることである。それも人間及び社会管理の効果・作用などを評価する基準である。上述した社会責任を重視する優先主義の評価方法が孔子思想においてきわめて重要視されている。

6.2.5 結言

本節においては、孔子論的評価システムを提案した上で、その特徴について考察を行うことを試みた。孔子論的評価システムが、評価方法、評価角度・視点、評価対象及び評価基準から構成されていることを明らかにしたことは、まず、従来の孔子思想研究に新しい意義及び視点をもたらしたことが言えよう。

また、利益など物質的なものより、楽しみ及びやりがいなど人間性の「楽」という尺度・基準は、人間及び人間社会において幸せな健康人生と社会にとって不可欠であろう。また、[安]という尺度及び基準は、人間社会における社会管理及び国家管理の最高基準であると言えよう。「楽」及び[安]を重視する孔子論的評価システムが人間及び人間社会のあるべき姿を示したとともに、人間がいかに生かすという方向性を示したと言えよう。

さらに、タイミング及び継続性に関する時間、安心・安全・安定に関する「安」及び、社会的貢献の優先主義という孔子論的評価システムの3大特徴は、従来の評価システムの発展及び新しい視点のヒントに役立つ並びに貢献できると言えよう。最後に、今後の課題及び展望としては、本節で提案した孔子論的評価システムをモデル化及び数量化するとともに、具体的なシステム、とくに、人が人を支えるシステム（例えば、医療・介護・福祉・生活支援などを含めた地域包括ケアシステム）に応用及び検証することが計画中である。

6.3 地域包括ケアシステムにおける評価システムの設計

6.3.1 緒言

21世紀少子高齢社会において、全住民の健康で幸せな生活を守っていくためには、それぞれの地域内において、より良質の保健・医療・福祉サービス、すなわち包括ケアサービスを「必要な住民に、必要な時、タイムリーに、そして効率的に」提供していくことが重要である。そして、このためには、地域包括ケアシステムの構築とその円滑な運用が不可欠な条件となってくる[23]。また一方、地域包括ケアシステムは、各市町村（地域）の地域特性をはじめ諸状況の変化に適応させながら、たえず継続発展（計画(plan)→実施(do)→評価(see))させていくことが必要である。そのためには、地域包括ケアシステムを総合的かつ科学的に把握・分析・評価していくための地域包括ケア評価システムの開発が重要な課題となってくる[24]。

そこで、本節では、地域包括ケアシステムの評価および改善を支援するための地域包括ケア評価システムを設計・提案する。また、前節で提案した孔子論的评价システムに基づいて、先行研究で実施した実態調査結果[25-28]を用いて、本システムを適用した場合の地域包括ケアシステムの評価ならびに、地域包括ケア評価システムの問題点・課題について整理・考察する。なお、本システムの設計には、演繹的アプローチと帰納的アプローチを併用したアプローチを利用した。

6.3.2 地域包括ケア評価システム及び評価における課題・問題点

地域包括ケアシステムを適切に推進していくためには、地域包括ケアシステムの構築状況および地域包括ケア推進計画実施内容とその効果を評価していく必要がある。「地域包括ケア評価システム」とは、地域包括ケアシステムの状況と施策の効果等を適切に評価し、地域包括ケアシステムの改善をする役割である。本節では当該システムのプロトタイプ的设计を行い、課題解決の可能性について検討していく。

これまでの地域包括ケアシステムに関する先行研究、地域包括ケアシステム関係者へのヒアリング調査、システムとして一般的に問題となる点を地域包括ケアシステムに照らし合わせた結果に基づいて、システム工学および地域医療学の立場から、地域包括ケアシステムを評価する上での主な課題・問題点を分類・整理すると以下ようになる。

課題1:地域により地域特性および地域環境に違いがある

地域（市町村）により、人口、人口構造、社会資源（保健医療福祉施設、保健医療福祉関連機関従事者数）、社会環境、財政状況、地域政策、地域文化、支援団体の状況等を含めた地域特性が異なると考えられる。そのため、統一した評価項目の設定は難しく、その地域特性を配慮した評価項目・評価基準を設定する必要がある。

課題 2：保健医療福祉環境および社会状況が変化する

市町村の地域包括ケアシステムの状況は医療制度改革をはじめとする国の政策，社会状況，保健医療福祉関連施設の経営環境等によって大きく影響を受けると考えられる。そのため，評価項目・基準の見直しを定期的 to 実施し，社会状況・環境に対応していく必要がある。

課題 3：地域によって地域範囲の設定が異なる

地域により適切な地域保健医療福祉包括ケアのサービス範囲の設定が異なる場合が考えられる。たとえば，市町村単位で地域包括ケアサービスを設定している市町村もあれば，複数の市町村を含んだ広域で設定せざるを得ない市町村もある。

課題 4：政策・施策による効果・成果の見極めが難しい

「この施策によりこのような効果を得られた」という断言は難しい。地域包括ケアシステムもひとつの社会システムのため，様々な要因が複合化されて効果が発生する場合も多い。一概に要因をしぼることも簡単にはできない。また，施策の内容においては長期的に考える内容もあり，この効果の見極めが困難である。

課題 5：評価方法・基準・範囲に決まった内容がない

地域包括ケアシステムにおける統一的な評価の方法・基準はない。そのため，地域包括ケアシステムの担当者は評価方法・基準・範囲を独自で設定し評価せざるを得ない状況である。しかしながら，地域特性・社会状況・地域包括ケアシステムの状況等を十分に把握していないと，その基準の設定・評価は難しいと考えられる。

課題 6：地域包括ケアシステムの評価作業における問題点

以上の地域包括ケアシステムにおける問題に加えて，「地域包括ケアシステムの評価に手間と時間がかかる」「長期的な推進計画に基づいた評価結果を把握しにくい」「他市町村の包括ケアシステムの推進状況，取組，成果等を把握・活用しにくい」等の評価作業における問題点をあげることができる。

そして，これらの課題・問題点を解決することのできる地域包括ケアシステムの評価システム（地域包括ケア評価システム）の開発が，地域包括ケアシステムの推進において重要である。

6.3.3 地域包括ケア評価システムの提案

地域包括ケア評価システムの目的を，第 2 節による位置づけ・役割等から「地域包括ケアシステムの状況を適切かつ効率的に把握・評価し，地域包括ケアシステムの課題・問題点を明確にするとともに，地域包括ケアシステムの改善を促す」ことに設定した。また，地域包括ケアシステムの評価における課題・問題点と，地域包括ケア評価システムの目的・役割を

考慮に入れて、地域包括ケア評価システムの備えるべきアイデア（しくみ・IT・ツール等）を、地域包括ケアシステムのあるべき姿に基づいて選択した（図 6-4 参照）。なお、これらアイデアは、医療情報学、システム工学、経営工学、情報工学等で利用されているツールである。これらアイデアの活用により「地域特性・地域包括ケアシステムの状況が把握・分析できる」をはじめ 5 つの内容の効果が期待できる[29]。なお、課題・問題点からアイデアに引かれた矢印は、問題解決に深くかかわるアイデアと課題・問題のつながりに引いている。

そして、システムに期待される効果、地域包括ケアシステムを取り巻く環境(状況)、および、文献内容等から地域包括ケア評価システムの基本設計方針を以下のようにした。

- ・市町村（包括ケア会議，協議会，等）が中心となり，自主的な改善を促す自己評価システムとする
 - ・市町村の他地域を参考にしながら（情報共有），都道府県全体の包括ケアシステムの向上をめざすシステムとする
 - ・市町村の地域特性分析（SWOT 分析等）および地域包括ケアシステムの自己評価・分析が独自で行えるシステムとする
 - ・利用者にわかりやすい評価結果の表示と目標設定がしやすいシステムとする
 - ・IT 技術を活用した効率性の高く使いやすい評価支援システムとする
- 基本設計方針をもとにして，設計したシステムの内容を以下に示す。

(1) 地域包括ケア評価システムの主な機能

地域包括ケア評価システムは，図 6-4 のアイデア（ツール）を活用することにより，以下の機能を保有・実現していく。

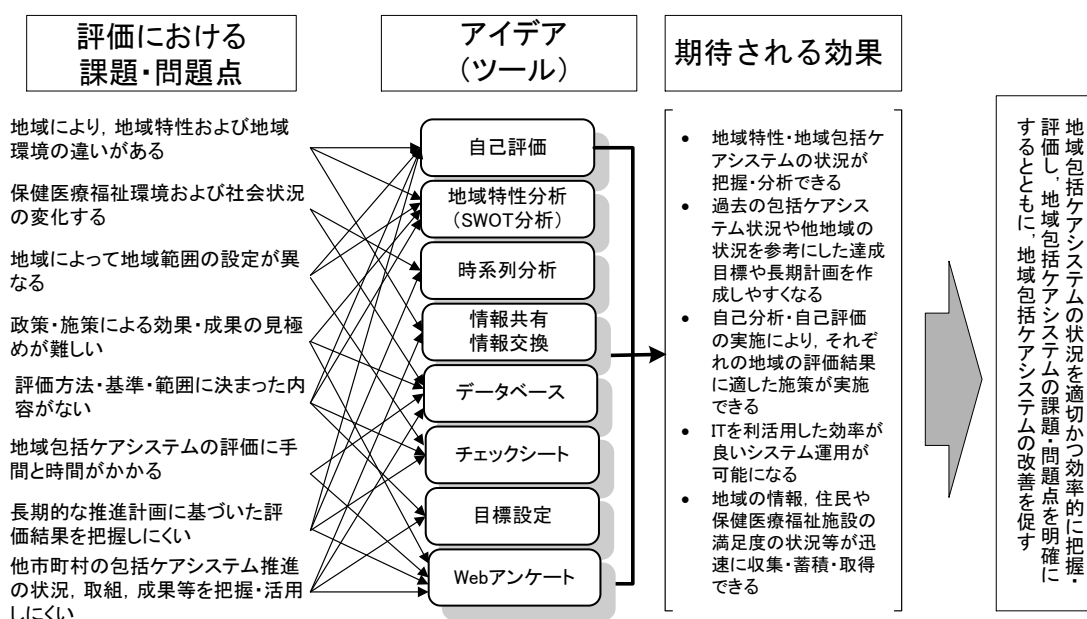


図 6-4 地域包括ケア評価システムに期待される効果

① 保健・医療・福祉施設および住民の評価結果収集機能

保健医療福祉関連施設（機関）および地域住民の地域包括ケアシステムに対する満足度や状況等を、Web アンケート等を実施することで、効率よく収集し、その集計結果等を適切な形にして提供する。また、担当者が一目でわかるようにグラフ等を用いて結果を表示する。また、人口等 Web ページ等で公開されている情報は自動収集できるようなしくみを提供する。

② 自地域の分析評価支援機能

自地域の地域特性および地域包括ケアシステムの状況等を把握・分析できるように支援する。地域内の 65 歳人口の割合、病床数、住民の医療サービスの満足度等をはじめ各項目に対して、都道府県内における市町村の数値と相対的な順位も示す。また、評価担当者に地域包括ケアシステムの状況を正しく評価・認識してもらうために、Web ページ上のチェックシートによる評価支援を行う。さらに、これら様々な情報を提供することにより、担当者に地域特性（強み、弱み、機会、および、脅威）を理解してもらうための SWOT 分析をシステムに付加する。

③ 自地域の目標設定・達成度管理機能

自地域の地域包括ケアシステムの達成目標を独自に設定し、その目標に対する自己評価を支援する。また、過去の評価項目に対する目標と達成状況を示すとともに、他地域の目標や評価結果も参照することができるようにする。

④ 情報共有・情報交換機能

自地域の地域特性や地域包括ケアシステムの状況を把握するには他地域の状況が必要になる。本システムでは他地域の地域特性や地域包括ケアシステムの状況だけでなく、目標、達成度の評価等を過去の情報も含めて知ることができる。これにより、自地域の包括ケアシステムの評価と推進に役立てることができる。また、他地域の担当者との情報交換がしやすくなるしくみを提供する。

⑤ データベース機能

保健医療福祉関連施設（機関）および地域住民の包括ケアシステムに対する満足度や状況、地域の状況、目標、達成度等様々な情報を蓄積し、必要な時に提供する。これまでの地域包括ケアシステムの状況を時系列分析できるとともに、自地域に似ている地域を現在の地域だけでなく過去の地域を含めて検索し、その施策の効果を把握できる。さらに、住民や保健医療福祉関連施設等の調査結果を集合知として活用でき、統計情報を確保できる。

(2) ネットワーク構成

本システムの運用による内容およびネットワークシステムは、Web データベースサーバとして、インターネットを通じて、地域住民および保健医療福祉施設と接続される。これにより、住民および施設からの地域包括ケアシステムの評価の状況を収集する。また、都道府県および市町村もそのサーバを利用して各種の手続き・業務を実施する。

表 6-1 地域包括ケア評価システムの利用手順

都道府県	実施項目	具体的内容			
第一段階 PLAN	シナリオ(計画)の作成, 目標の設定, 調査内容の見直し, 設定	都道府県全体のシナリオの作成・都道府県の包括ケア全体に対する目的の設定, 包括ケアシステムに関する調査内容・項目の見直し・調整・設定(基本情報・基本調査項目・特別調査項目)			
第二段階 DO	実施	市町村			
		Step.1 INPUT	基本情報の入力	人口, 高齢者人口, 世帯数, 人口増加率, 医療機関数, 福祉施設数, 包括ケア会議参加施設, 総合窓口利用者数等の基本情報を入力	
		Step.2 ANALYSIS	地域(特性)情報の入手・分析	順位づけ基本情報の参照	地域の基本情報の市町村順位, 人口当たりの順位等が表示される
				昨年の地域住民評価結果の参照	地域包括ケアシステムに関する住民の利用状況, 満足度等の結果が参照できる
				昨年の施設評価結果の参照	地域包括ケアシステムに関する施設の満足度, 問題点等の結果が参照できる
				他地域の情報の参照	他地域の基本情報, 住民評価結果, および, 施設評価結果等が参照できる
				チェック項目による地域診断の実施	チェックシートより自地域の包括ケアシステムの地域診断を行う
		Step.3 PLAN	自地域の目標の設定	SWOT分析による地域分析	SWOT分析を用いた地域の「強み」と「弱み」を分析する
				他地域の地域分析結果を参照	他地域の地域分析結果を参照可能とする
				これまでのシナリオ, 目標と評価結果を参照	これまでの自地域のシナリオ, 目標, および, 評価結果を参照可能とする
				自地域のシナリオを作成	自地域の地域包括ケアシステム推進シナリオ(計画)を作成する
		Step.4 DO	住民および施設の満足度等調査と評価結果の収集	自地域の目標を独自に設定	自地域の地域包括ケアシステムに対する目標を設定する
				独自調査項目の追加	目標の評価ができる項目等を住民・施設に対する調査項目に独自に追加する
				住民および施設の満足度等調査と評価結果の収集	包括ケアシステムの推進計画の実施をするとともに, 住民および施設の満足度等の調査を実施し, その結果を収集する
		Step.5 SEE	自己分析 自己評価	住民の評価結果を参照・分析	住民の包括ケアシステムに対する住民の評価結果(市町村順位つき)を参照・分析する
施設の評価結果を参照・分析	住民の包括ケアシステムに対する施設の評価結果(市町村順位つき)を参照・分析する				
独自調査結果を参照・分析	独自で加えた調査項目に対する調査結果を参照・分析する				
設定目標の達成度の自己評価	上記3つの結果を利用して, 独自に設定した目標の達成度等を自己評価する				
実施における問題点の整理と推進方法の検討	自己評価の結果の反省から問題点の整理と今後のシステム推進方法を検討する				
Step.1へ					
第三段階 SEE	全体の評価, 市町村のフォロー, 今後の推進方法の検討	都道府県全体の包括ケアシステム推進状況の評価と推進計画の評価を行う 市町村のうちで包括ケアシステムが効率よく推進されていない市町村へのフォロー 都道府県における包括ケアシステムの推進の問題点と今後の推進方法の検討			

(3) 評価項目の内容

本システムの自己評価の評価項目・評価基準においては、自地域で設定できるようにしている。また、基本情報、および、住民ならびに施設の満足度等の評価内容においてはシンプルでわかりやすい共通の項目を用意している。さらに、都道府県は地域包括ケアシステムに関する基礎的な継続調査項目のほかに、随時、独自の項目・基準を追加できるようになっている。市町村も住民ならびに施設の調査に対して、独自の質問等の項目を追加できるようになっている。

表 6-2 調査項目と換算点算出方法

調査対象	調査項目		回答	換算方法	換算点
住民調査「民」	住民満足度	医療サービス満足度	5段階評価	5段階評価の平均値に2をかけたものを点数とする	10点
		介護サービス満足度	5段階評価		10点
		総合的なサービス満足度	5段階評価		10点
		…	5段階評価		10点
		体制満足度	5段階評価		10点
		情報獲得満足度	5段階評価		10点
	生活の期待	5段階評価	10点		
	地域包括ケア参加意識	5段階評価	10点		
サービス提供者調査「産」	連携満足度	病院	5段階評価		10点
		診療所	5段階評価		10点
		歯科診療所	5段階評価		10点
		薬局	5段階評価		10点
		…	5段階評価		10点
		市町村（行政）	5段階評価		10点
	情報獲得状況	救急医療情報	5段階評価	10点	
		住民ニーズ	5段階評価	10点	
		包括ケアの構築の必要性	5段階評価	10点	
		包括ケアの構築の参画	5段階評価	10点	
市町村行政「官」	各関係者の連携満足度		5段階評価	10点	
	住民・市場ニーズ等		5段階評価	10点	
	地域包括ケアの構築の必要性		5段階評価	10点	
	地域包括ケアの構築の参画		5段階評価	10点	
大学・研究所「学」	各関係者の連携満足度		5段階評価	10点	
	地域包括ケアの構築の必要性		5段階評価	10点	
	地域包括ケアの構築の参画		5段階評価	10点	

(4) 手順

地域包括ケア評価システムを利用した地域包括ケアシステムの評価の手順は表 6-1 のようになる。都道府県は第一段階、第二段階、そして第三段階のループを継続的に繰り返すこととなる。また、市町村においても基本的に PLAN-DO-SEE を回し、システム改良を実施していく。

6.3.4 地域包括ケアシステムの評価事例

地域包括ケアシステムの特性及び孔子論的評価システムの基本理念・方針・原則等並びに、地域包括ケアシステムにおける評価システムに関する先行文献で実施した意識実態調査結果に基づいて、具体的な地域包括ケアシステムを評価する調査項目・方法と内容を提案する。具体的には、評価対象、評価内容、評価方法、評価点算出方法等が表 6-2 に示した。なお、各評価項目は、利用者（担当者）が判定しやすいように 10 点満点としている。

6.3.5 結言

本節では、地域包括ケアシステムを適切に評価するための課題・問題点を考察し、「地域包括ケア評価システム」の考え方・位置づけを明確にして、課題・問題点を解決すべくアイデアを示し、「地域包括ケア評価システム」の設計を行った。この結果、本システムが評価におけるすべての課題・問題点を解決できるわけではないものの、いくらかの効果が期待できることがわかった。また、事例適用によりコンテンツ表示上の問題点も見つかった。今後、さらに改良を進め、導入に向けた提案をしていく計画である。

6.4 医師の役割分担と意識構造分析

6.4.1 緒言

高齢化率が急激に進行しているとともに、疾病構造及び家族構造などが変化しているために、住民の医療・保健・福祉・介護などに対するニーズも多様化・高度化・複雑化している[2]。そして、全住民の健康で幸せな生活を守っていくとともに、全住民のQOL (Quality Of Life) の向上のためには、それぞれの地域内において、安定な住まいを前提にした上で、より良い医療・保健・介護・福祉・生活支援など諸サービスを、必要な住民に、必要な時に、切れ目なく継続的に提供する地域包括ケアシステムの構築及び運営は不可欠となってくる[3]。

そして、人が人を支える地域包括ケアシステムを構築及び効果的かつ効率的に推進するためには、制度・技術・情報・器械など「理」の側面並びに、感性・情熱・マナー・人間関係・人間性など「情」の側面とバランスを取れたシステムづくりが不可欠である[11]。とくに、「産」・「学」・「民」・「官」を含めた全員参画・目標追求・連携協働・信頼関係などが効率的及び効果的に運営していくヒューマン・ネットワークが重要な前提条件となってくる[29]。その中に、在宅医療・チーム医療・地域医療などを重点に推進していく地域包括ケアシステムにおけるリーダーシップを役割分担している医師の全員参画及び連携協働などは不可欠である。そこで、現在の医師の活動実態、連携実態、問題点、意識実態などを把握するとともに、地域包括ケアシステムにおける医師のあるべき姿、役割分担、改善方策および今後の検討課題・方針などを提言及び考察することが緊急な課題となってくる。

一方、人間のあるべき姿である「君子」(人間の理想形)の生き方・考え方・進め方を中心にした孔子思想は、2,500年前から東洋で影響を強く及ぼしている。孔子思想は、社会問題を積極的に解決するために、個人の社会的責任感、問題意識などを重要視するとともに、人間の信頼関係・連携協働などの人間関係を解決策の糸口として唱えていた。なお、そういう人間関係を大事にしている孔子思想は、全員参画・連携協働・信頼関係を重要視しているヒューマン・ネットワークを基礎にする地域包括ケアシステムに有効及び役立つとともに、適応・応用する可能性も高いと思われる。なお、著者らがその孔子思想に基づいて地域包括ケアシステム構築及び運営における基本理念及び推進手順を提案するとともに、リーダーシップを役割分担している医師のあるべき姿においては、「恕」、「信」、「進」、「楽」という4つの基本理念が強調される。

そこで、孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムにおける医師のあるべき姿を検証する並びに、医師の意識実態及び活動実態を把握するために、豊田加茂医師会との共同研究により、豊田加茂医師会に所属している全医師に対して、平成25年1月にアンケート調査を実施した[30]。また、本節においては、そのアンケート調査の分析結果をもとに、孔子思想から見た地域包括ケアシステムにおける医師のあるべき姿、地域包括ケアシステムにおける医師の役割などについて考察及び提言を行う。

6.4.2 孔子思想に基づいた医師のあるべき姿

地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、「産」・「学」・「民」・「官」を含めた全員参画・目標追求・連携協働・信頼関係などが必要不可欠な条件となってくる。また、高齢化の急激の進むに伴って、地域包括ケアシステムにおいては、在宅医療・地域医療・認知症対応などの医療活動で、リーダーシップを発揮する医師の役割が欠かせない。とくに、対象者・住民・関係者への気配り・心配り・思いやり精神、住民・関係者・地域との相互信頼、耐えず現状を改善・成長・向上・進歩していく理念、問題を楽しく前向きに進んでいく姿が医師のあるべき姿（理想形）であると考えられている。そこで、著者が提案した孔子思想に基づいた地域包括ケアシステム構築及び運営の基本理念をもとに、地域包括ケアシステムにおける医師のあるべき姿（理想形）と現状について、特に、10個の基本理念の中に、「恕」、「信」、「進」、「楽」という4つの基本理念から分析及び考察を試みる。

なお、これからの地域包括ケアシステムにおける緊急かつ重要な課題の一つである在宅医療においては、住民のニーズ・特性及び地域医療資源等を考慮するとともに、他職種との連携・協働、相互信頼に楽しくサービスを提供していく姿が重要である。在宅医療の特性によって、在宅医療を行っている医師の姿が、孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムにおける医師のあるべき姿に近いと考えられる。そこで、本節においては、主に「在宅医療を行っている医師」と「在宅医療を行っていない医師」に大別して医師の実態について分析比較及び評価を行う。

6.4.3 医師実態調査の概要

本節においては、地域包括ケアシステムにおける医師の活動実態及び意識実態などを把握・分析するために、共同研究での豊田加茂医師会の全面的な支援及び協力のとともに、豊田加茂医師会に所属する全医師会員を対象に実態調査を実施した[30]。調査期間は平成25年1月6日～28日であった。調査対象は豊田加茂医師会に所属する全医師会員であった。調査方法は豊田加茂医師会に経由、郵送による配布・回収であった。有効回答は114件（有効回答率59%）であった。

調査内容における主な項目は、回答者の属性、在宅医療の状況、認知症の対応状況、家族介護者のメンタルヘルスケア、病診連携事業、地域包括支援センター、地域内の保健医療福祉関連施設との地域連携・機能連携、地域医療活動・在宅医療における達成感・充実感、自由記述から構成されている。

また、上述した4つの孔子思想の基本理念に基づいて、本章における主な調査内容においては、以下の4つの大項目に大別する。1) 住民・関係者への気配り・心配り・思いやり精神の「恕」が地域医療活動における在宅医療の充実度及び訪問看護であり、2) 住民・関係者・地域からの信頼・信用・信任の「信」が介護うつ病・介護負担の相談及び認知症の相談と行政からの相談であり、3) 耐えず成長・向上・進歩の「進」が研修会と講習会の参加意識であり、4) 楽しく前向きの「楽」が達成感及び住民からの感謝である。なお、各施設との

連携実態及び連携必要度についても考察を行う。

6.4.4 医師実態調査の結果

1) 基本属性

回答があった114名の医師の年齢構成は、表6-3に示されるように、「40歳代以下」37%、「50歳代」33%、「60歳代」18%、「70歳代以上」12%となっている。この結果から、50歳代以下が70%を占めていることがわかる。なお、医師が所属している医療機関の種類と立場は、「病院（院長・副院長）」16%、「有床診療所（院長）」7%、「無床診療所（院長）」73%、「その他」4%となっている。診療所の院長が80%を占めていることがわかる。また、医師の主たる専門科目は、多い順に「内科」56人（50%）、「眼科」9人（8%）、「外科」8人（7%）、「整形外科」8人（7%）、「その他」32人（28%）となっている。このように「内科」が約半数となっている。

表 6-3 医師の基本属性

項目		回答数	構成比率
年齢	30歳代	3	3%
	40歳代	39	34%
	50歳代	38	33%
	60歳代	21	18%
	70歳代	11	10%
	80歳以上	2	2%
	合計	114	100%
所属立場	病院（院長・副院長）	18	16%
	有床診療所（院長）	8	7%
	無床診療所（院長）	83	73%
	その他	5	4%
	合計	114	100%
専門科目	内科	56	50%
	外科	8	7%
	整形外科	8	7%
	眼科	9	8%
	その他	32	28%
	合計	113	100%

2) 孔子思想に基づいた医師の実態調査結果

① 地域医療活動に対する理解の現状

地域包括ケアシステムにおける訪問看護の実態においては、図 6-5 に示されるように、「在宅医療を行っていない医師」は、「訪問看護に関心がない」を選択した比率が 79%に達した。それに対して、「在宅医療を行っている医師」の 7 割強が「訪問看護に関心がある」と回答した。なお、カイ二乗検定では、在宅医療の実施と訪問看護に対する関心には有意差が見られた ($p = 0.000$)。

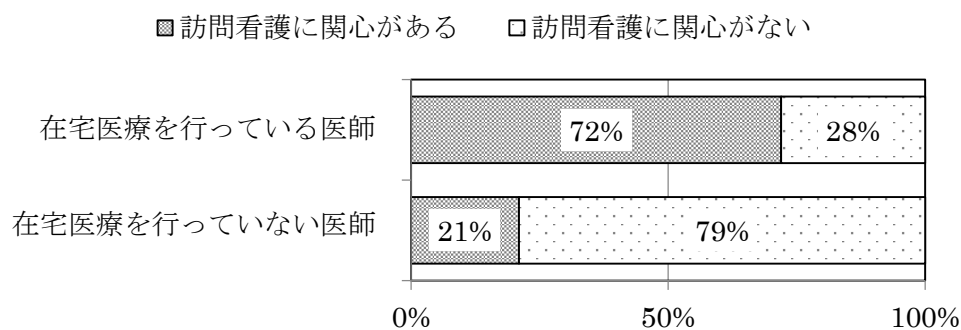


図 6-5 訪問看護への関心の有無

また、地域包括ケアシステムにおける在宅医療の充実度については、図 6-6 に示されるように、「在宅医療を行っていない医師」の 7 割以上は、「わからない」を選択した。それに対して、「在宅医療を行っている医師」の 3 割くらいは、「わからない」を選んだことがわかった。なお、カイ二乗検定では、在宅医療の実施と在宅医療の充実度には有意差が見られた ($p = 0.000$)。

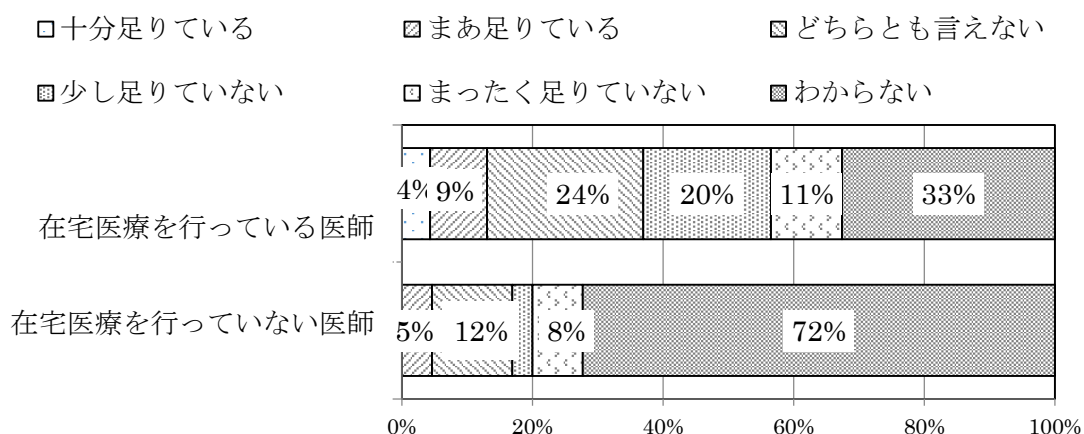


図 6-6 在宅医療の充実度に対する意識

② 地域医療活動における相談実態

医師実態調査においては、介護うつ病・介護負担の相談について、図 6-7 に示されるように、「在宅医療を行っている医師」の 73%は、相談があったと回答している。それに対して、「在宅医療を行っていない医師」の 3 割が、相談があったと回答していることがわかった。なお、カイ二乗検定では、在宅医療の実施と介護うつ病・介護負担相談の有無には有意差が見られた ($p = 0.000$)。

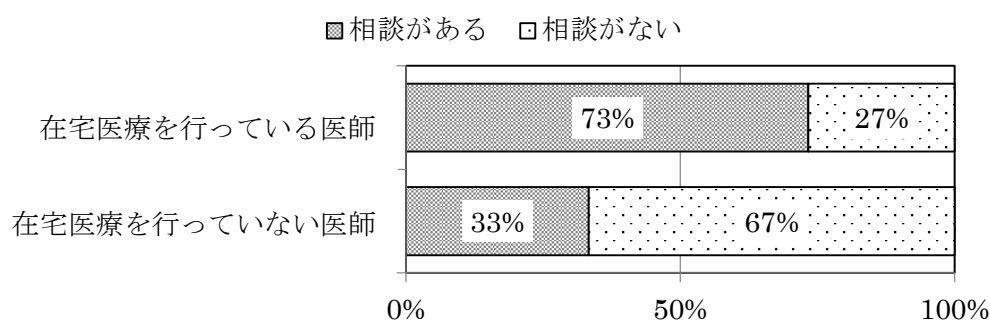


図 6-7 介護うつ病・介護負担の相談実態

また、認知症に関する相談は、「在宅医療を行っている医師」は、図 6-8 に示されるように、93%が相談を受けたことがあった。「在宅医療を行っていない医師」もほぼ 5 割の医師が相談があったと回答している。なお、カイ二乗検定では、在宅医療の実施と認知症に関する相談の有無には有意差が見られた ($p = 0.000$)。

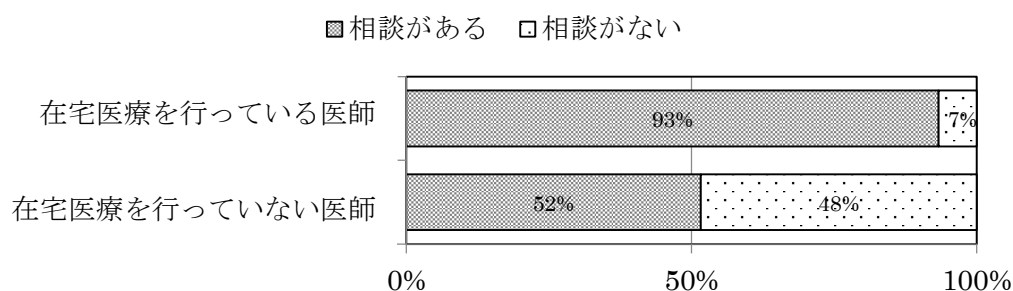


図 6-8 認知症に関する相談実態

また、地域包括支援センター・行政からの相談について、図 6-9 に示されるように、「在宅医療を行っている医師」の半分ちかくは相談があったと回答している。これに対して、「在宅医療を行っていない医師」は、8 割以上が相談がなかったと回答している。なお、カイ二乗

検定では、在宅医療の実施と地域包括支援センター・行政からの相談の有無には有意差が見られた ($p = 0.007$)。

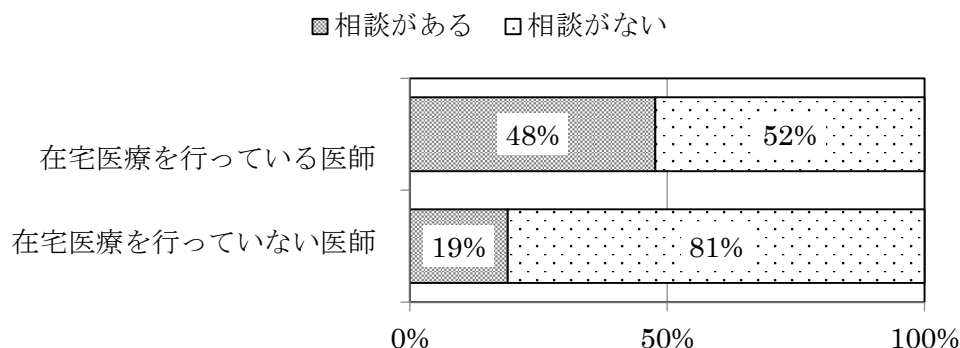


図 6-9 地域包括支援センター・行政からの相談の有無

③ 研修会・講習会の参加意識

在宅医療及び緩和ケアに関する講習会への参加意思については、図 6-10 に示されるように、「積極的に参加する」及び「内容によって参加する」を合わせて選択した比率は、「在宅医療を行っている医師」では、6 割近くであったのに対して、「在宅医療を行っていない医師」においては 4 割であった。なお、カイ二乗検定では、在宅医療の実施と研修会・講習会への参加意識には有意差が見られた ($p = 0.04$)。

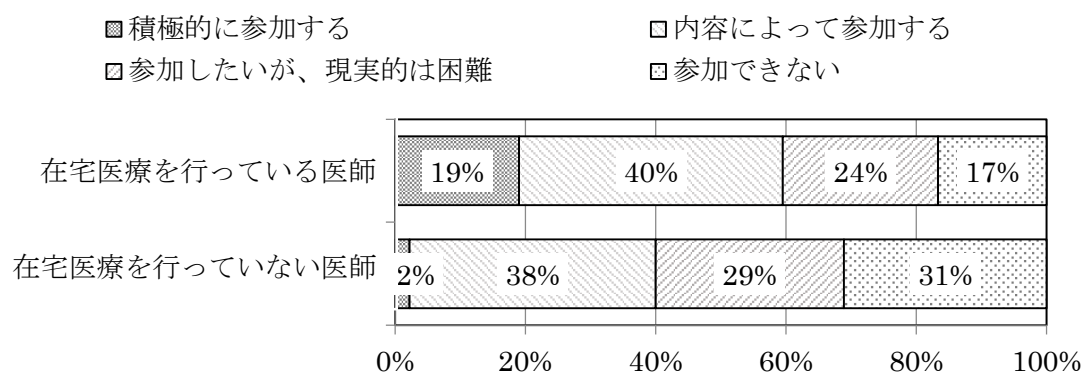


図 6-10 緩和ケアに関する講習会の参加意識

また、認知症に関する研修会への参加意識実態については、図 6-11 に示されるように、「在宅医療を行っている医師」の 6 割以上は、参加することがわかった。それに対して、「在宅医療を行っていない医師」は 7 割近くが参加しないと回答している。なお、カイ二乗検定では、

在宅医療の実施と認知症に関する研修会への参加には有意差が見られた ($p = 0.007$)。

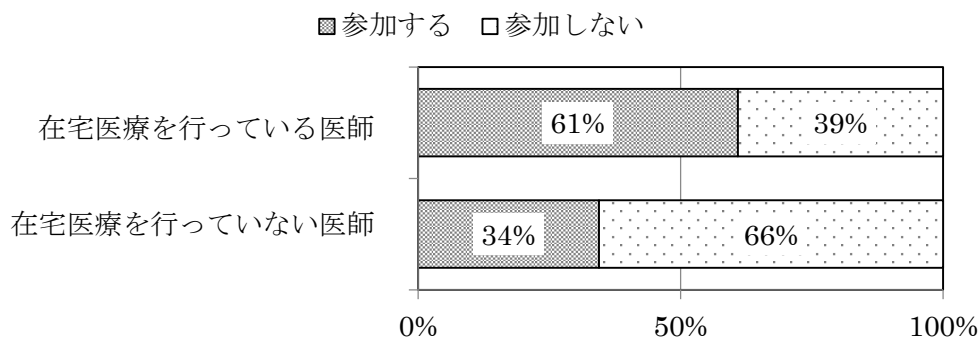


図 6-11 認知症に関する研修会の参加意識

④ 地域医療活動における医師の達成感

地域医療活動における達成感について、図 6-12 に示されるように、「達成感はある」及び「やや達成感はある」を合わせて選択した合計比率においては、「在宅医療を行っている医師」が 6 割近く、「在宅医療を行っていない医師」は 45%であった。なお、カイ二乗検定では、両者における達成感の有意差は見られなかった ($p = 0.15$)。

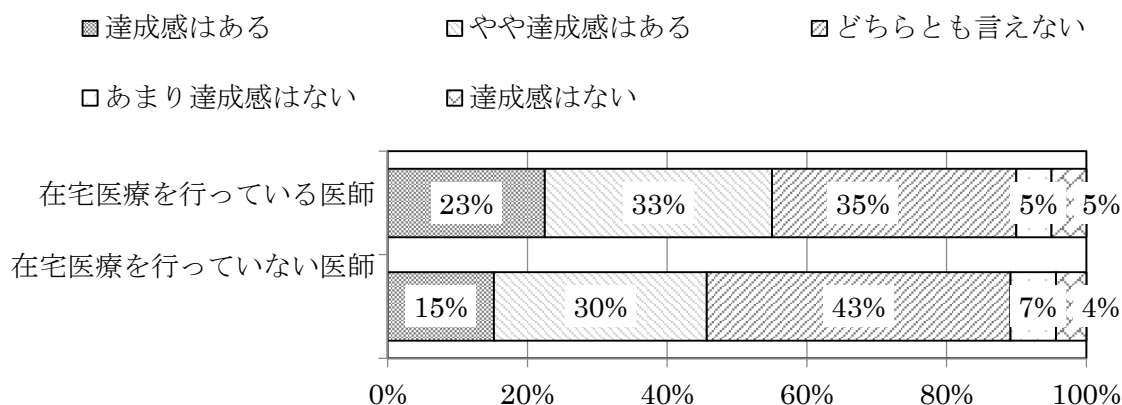


図 6-12 地域医療活動における達成感の意識

また、地域医療活動に対して住民からの感謝を感じているかについては、図 6-13 に示されるように、「感じる」及び「やや感じる」を合わせて選択した合計比率においては、「在宅医療を行っている医師」が 66%で、「在宅医療を行っていない医師」も 60%であった。両者に差がみられなかった。なお、カイ二乗検定では、在宅医療の実施の有無と感謝を感じているかの関係においては、有意差が見られなかった ($p = 0.17$)。

■感じる □やや感じる ▨どちらとも言えない □あまり感じない □感じない

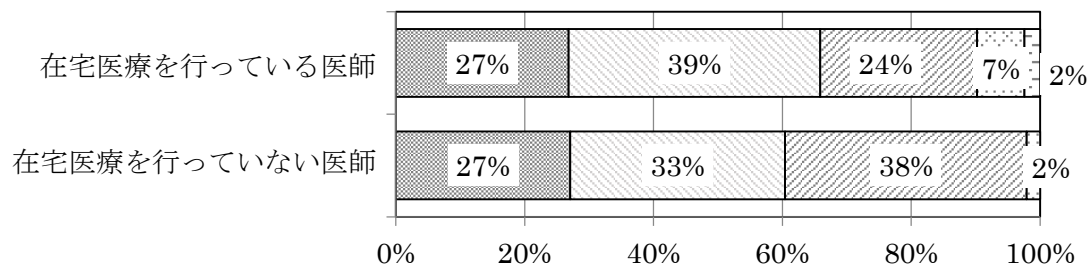


図 6-13 地域医療活動における住民からの感謝

上述の分析結果等により、各項目における「在宅医療を行っている医師」及び、「在宅医療を行っていない医師」の総合結果は、各項目の平均値を 10 点化にしてから、図 6-14 のレーダチャートに要約された通りである。この図より明らかなように、「在宅医療を行っている医師」においては、行政等関係者の相談と認知症の相談における得点は、5 点前後となった。また、地域医療の達成感における得点は 9 点と高得点を示す結果となった。

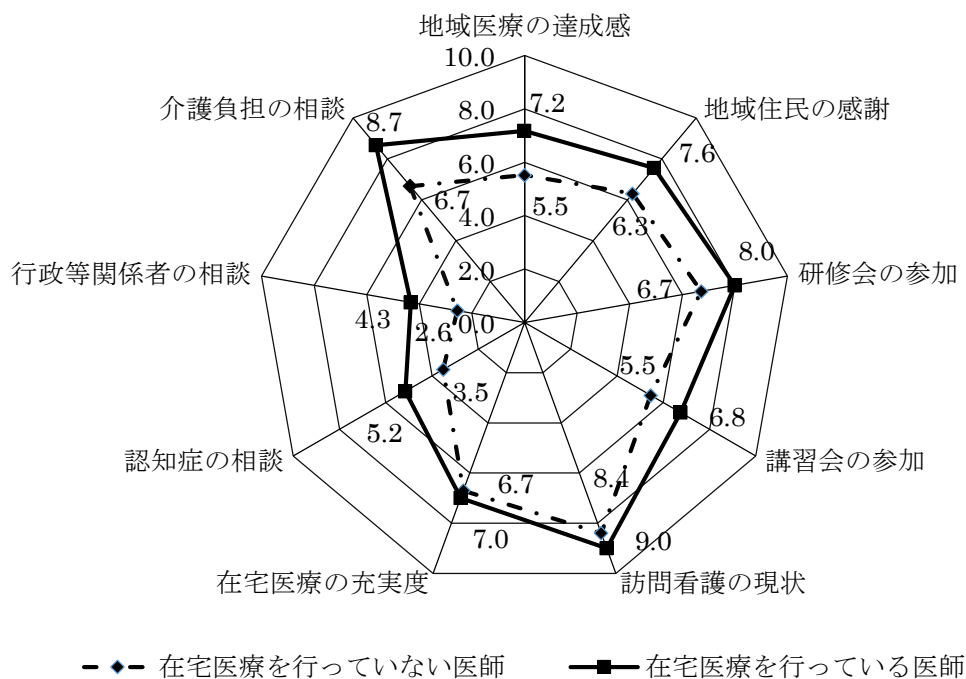


図 6-14 各項目における医師の総合評価

それに対して、「在宅医療を行っていない医師」においては、行政等関係者からの相談と認知症の相談における得点は、3 点前後と低い値を示す結果となった。地域医療の達成感における得点は9 点と高い値を示す結果となった。

しかしながら、各項目における「在宅医療を行っている医師」及び、「在宅医療を行っていない医師」両者の差においては、「地域医療の達成感」と「地域住民からの感謝」の二つの項目における差が 0.5 前後と比較的小さい値であったのに対して、他の項目においては、いずれも差が1 以上となっていることが分かる。

3) 施設間の連携実態及び必要度

豊田市内における各関係施設間における連携実態及び連携必要度においては、医師からみた調査分析結果は図 6-15 に示されるようとなった[30]。まず、連携実態においては、各連携関係施設ごとに、1) 連携はまったくとれていない、2) 連携はあまりとれていない、3) どちらともいえない、4) 連携はまあとれている、5) 連携は十分とれている、という5つの項目を用意した。各関係施設に対する連携実態の得点として、全回答医師の平均値を用いた。また、連携必要度においては、1) 連携はまったく必要でない、2) 連携はあまり必要でない、3) どちらともいえない、4) 連携はまあ必要である、5) 連携は非常に必要である、という5項目を用意した。各関係施設に対する連携必要度の得点として、同様に全回答医師の平均値を用いた。

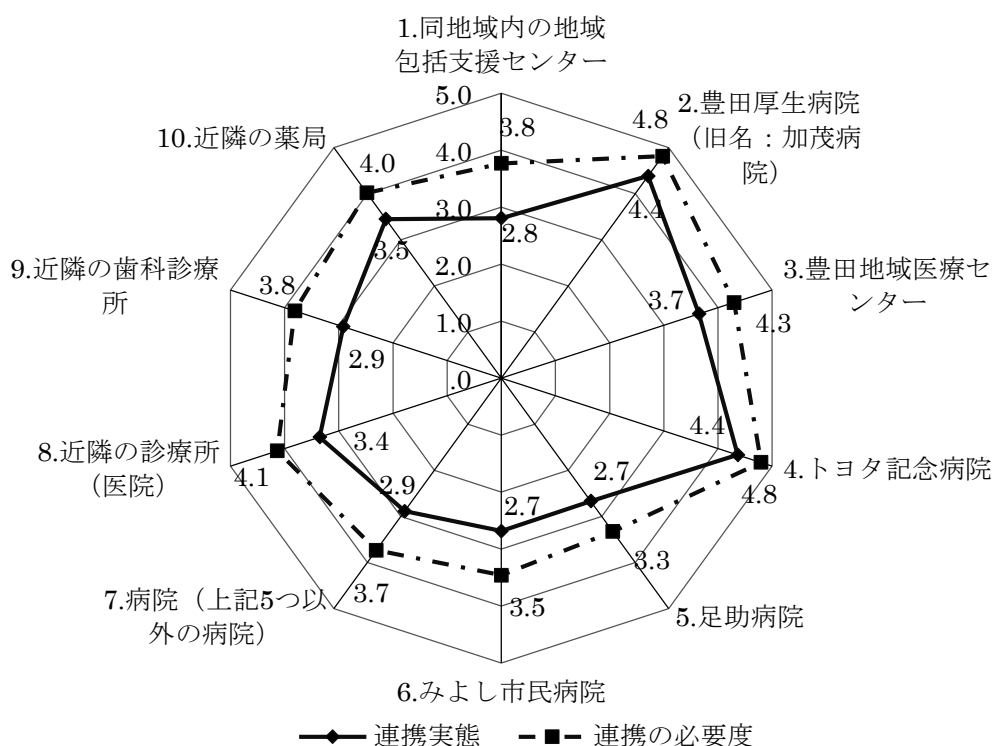


図 6-15 医師からみた関係施設・機関との連携実態及び必要度

上記の分析結果から、医師からみた豊田市内の関係施設・機関等との連携実態においては、足助病院、みよし市民病院、近隣の歯科診療所、病院（上記5つ以外の病院）との連携が4以下となっていることが分かる。それに対して、豊田厚生病院とトヨタ記念病院との連携が両方とも4.4となってきた。一方、連携必要度においては、足助病院、みよし市民病院、近隣の歯科診療所、病院（上記5つ以外の病院）及び同地域内の地域包括支援センターとの連携が4以下となっていることが分かる。また、豊田厚生病院、トヨタ記念病院、豊田地域医療センター、近隣の医療所（病院）、近隣の薬局との連携必要度が4を超えている。

また、在宅医療を行っている別の医師の機関に対する連携意識及び連携必要度においては、図6-16のようになった。また、「在宅医療を行っている」医師においては、豊田厚生病院との連携が4.4で、トヨタ記念病院との連携が4.3となった。それに対して、足助病院、みよし市民病院、近隣の歯科診療所との連携が3以下となってきた。なお、連携必要度においては、「在宅医療を行っている」医師にとって、豊田厚生病院、トヨタ記念病院及び豊田地域医療センターとの連携必要度が4.6以上以外、他の施設との連携必要度は4前後となってきた。

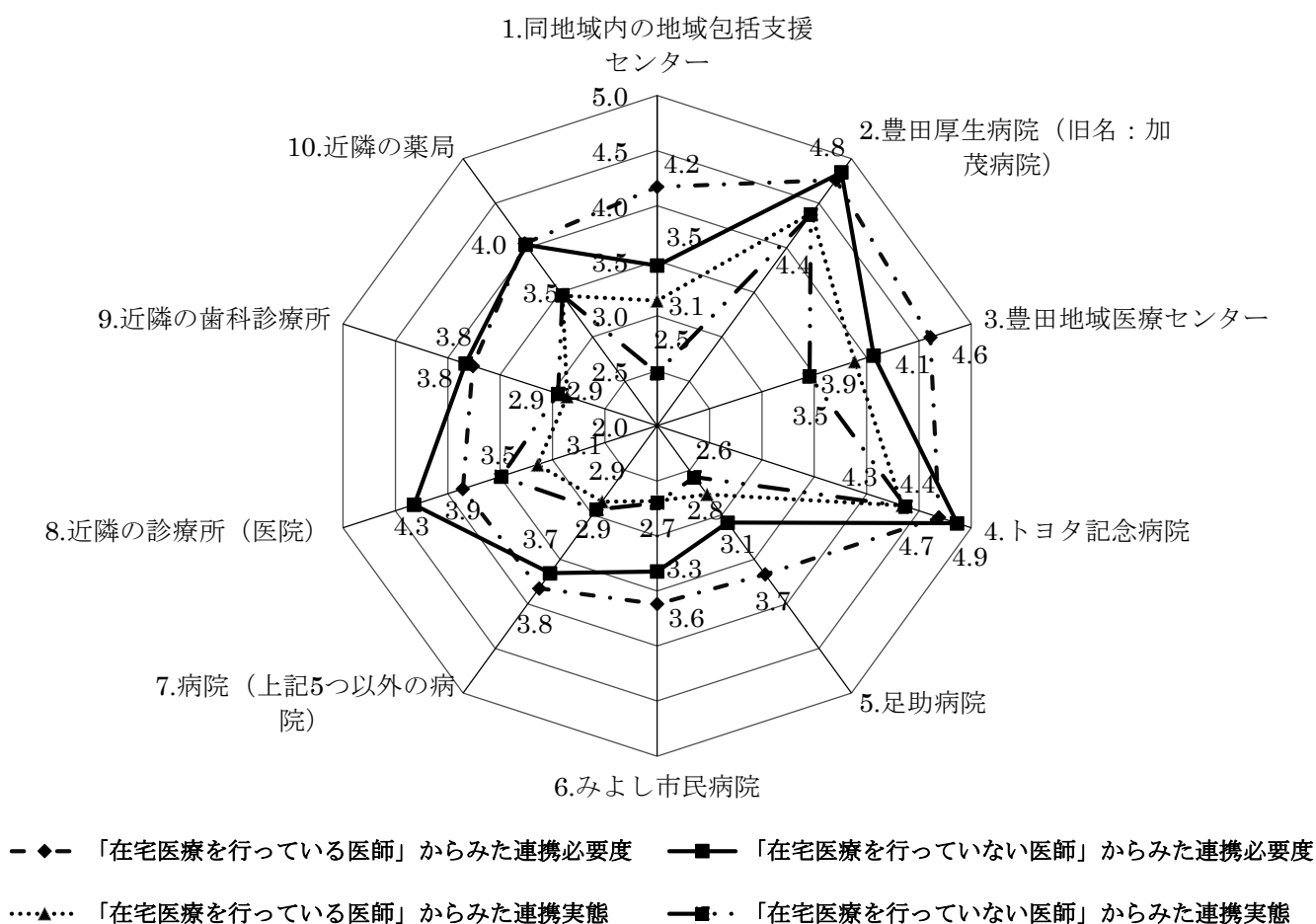


図 6-16 在宅医療を行っている別における医師の連携実態及び連携必要度

なお、「在宅医療を行っていない」医師においては、豊田厚生病院及びトヨタ記念病院との連携が二つとも 4.4 となった。それに対して、足助病院、みよし市民病院、近隣の歯科診療所、病院（上記 5 つ以外の病院）及び同地域内の地域包括支援センターとの連携が 3 以下となってきた。とくに、同地域内の地域包括支援センターとの連携が 2.5 と最も低かった。なお、連携必要度においては、「在宅医療を行っていない」医師にとって、豊田厚生病院及びトヨタ記念病院との連携必要度が 4.8 以上で、豊田地域医療センター、近隣の歯科診療所、近隣の薬局、近隣の医療所（病院）と病院（上記 5 つ以外の病院）が 4 前後で、同地域内の地域包括支援センター、足助病院及びみよし市民病院との連携必要度は 3.5 以下となってきた。

一方、連携実態と連携必要度のギャップについて、「在宅医療を行っている」医師においては、同地域内の地域包括支援センターが 1.1 と最も大きく、次いで近隣の歯科診療所、病院（上記 5 つ以外の病院）、足助病院及びみよし市民病院が 0.9 で、近隣の医療所（病院）が 0.8 で、豊田地域医療センターが 0.7 で、近隣の薬局、豊田厚生病院及びトヨタ記念病院が 0.5 未満となってきた。なお、「在宅医療を行っていない」医師においては、同地域内の地域包括支援センターが 1.0 と最も大きく、次いで近隣の歯科診療所が 0.9 で、病院（上記 5 つ以外の病院）、近隣の医療所（病院）が 0.8 で、豊田地域医療センターが 0.7 で、足助病院及びみよし市民病院、近隣の薬局、豊田厚生病院及びトヨタ記念病院が 0.5 前後となってきた。

同地域内の地域包括支援センター、病院（上記 5 つ以外の病院）、足助病院及びみよし市民病院において、連携実態及び連携必要度が二つとも、「在宅医療を行っている」医師が「在宅医療を行っていない」医師より高かった。それに対して、近隣の医療所（病院）、近隣の歯科診療所において、連携実態及び連携必要度が二つとも、「在宅医療を行っていない」医師が「在宅医療を行っている」医師より高かった。一方、近隣の薬局、豊田厚生病院及びトヨタ記念病院に対する連携実態及び連携必要度について、「在宅医療を行っている」医師と「在宅医療を行っていない」医師がほぼ同じであった。

6.4.5 考察

これからの地域包括ケアシステムにおいては、在宅医療・認知症対応などが重要な課題となってきた。そして、本節では、在宅医療をやっているかにより、地域包括ケアシステムへの医師の参加意識、活動実態、意識実態並びに、孔子思想の「恕」、「信」、「進」、「楽」の 4 つの基本理念の側面から、医師のあるべき姿について比較及び考察を試みる。

1) 思いやりの「恕」の基本理念

地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、地域関係者を含める全員参画・連携協働のヒューマン・ネットワークが必要な条件である。そのために、全部の関係者が自分側の立場に立って考えるより、いつも向こう側（多角度）の立場に立って思慮及び行動していくことが極めて重要な条件であると言える^[10]。その中に、特にリーダーシップを役割分担している医師が患者、対象者、住民、関係者など人への思いやり精神並びに、地域医療活動におけ

る現状、人材資源、財源などのマクロ的な面に対する関心・了解などは「怒」の理念であろう。

「怒」の理念は、在宅医療と訪問看護は足りるかという2つの項目の結果により、「わからない」を選択した「在宅医療を行っていない医師」は、「在宅医療を行っている医師」より、両方とも4割くらい高くなった。それによって、「在宅医療を行っている医師」がより地域包括ケアシステムの実態・現状に関心をもって積極的に取り込んでいる姿勢が推測される。

2) 信頼の「信」の基本理念

地域包括ケアシステムにおける医師の役割分担において、患者、要支援者、住民からの信頼、連携協力者からの信頼、行政など関係者からの信頼などが、人が人を支える地域包括ケアシステムの構築及び円滑な運営にとって必要不可欠である。具体的に言えば、各関係者からの相談・治療・連絡などが指摘される。

医師の実態調査により、介護うつ病・介護負担の相談及び認知症に関する相談においては、「在宅医療を行っている医師」が「在宅医療を行っていない医師」より4割くらい高くなることが明らかになった。また、地域包括支援センター・行政からの相談についても、「在宅医療を行っている医師」が3割高くなる。により、地域包括ケアシステムにおける諸地域活動においては、積極的に地域包括ケアシステムに投入している医師がより住民から信頼されることが言えるかもしれない。一方、「在宅医療を行っていない医師」と相談する割合は、認知の相談が5割を超えて、介護うつ病・介護負担の相談が3割を超えていることがわかった。それは、住民が医師に対する信頼感及び期待感などが持っていることが推測される。

3) 進歩・向上の「進」の基本理念

住民全員のQOLの向上のために、社会環境・条件・ニーズ・価値観・方針などが耐えず変化している地域包括ケアシステムにおいては、現状に応じて常に向上・発展していく「進」の理念が特に重要である。地域包括ケアシステムにおける医師の具体的な活動においては、難病・認知症・在宅緩和・在宅医療などに関する研修会、講習会、勉強会、ワークショップなどの参加意欲が向上意識であるといえる。

調査により、認知症に関する研修会の参加及び在宅緩和ケア及び訪問看護に関するワークショップの参加という2つの項目を分類した。両方において、「在宅医療を行っている医師」が2割高くなってきた。それは、地域包括ケアシステムに積極的に取り込んでいる医師はより積極的に行動していくためであるといえる。

4) 楽しくの「楽」の基本理念

様々なニーズに合わせるとともに、医療・介護・生活支援など諸サービスを継続的に提供する地域包括ケアシステムの構築および運営においては、多職種間、多分野間、多施設間での連携協働が継続できるヒューマン・ネットワークが必要である。そのため、全員が楽しく参画および行動していく理念が不可欠であるといえる。

調査結果により、「在宅医療を行っている医師」は両項目ともやや高くなって、意識の差はほぼ見えなかったことがわかった。地域包括ケアシステムにおける諸活動は、他職種間の連携協働であるため、一方的に推進していても効果・達成感がなかなか出てこない可能性も高いといえる。また、住民のニーズ・要望・満足度などが異なるために、在宅医療を受けてもハードウェアなどの制約条件により理想的なサービスを提供できない可能性もあるかもしれない。

5) 連携実態及び連携必要度について

在宅医療においては、医師が多職種及び多施設との連携が必要不可欠である。そこで、本節においては、医師と各施設との連携実態及び連携必要度について比較分析を行った。まず、地域包括ケアシステムにおける重要な役割分担を担っている地域包括支援センター及び豊田地域医療センターとの連携が不可欠である。結果によって、地域包括支援センター及び豊田地域医療センターとの連携実態及び連携必要度について、「在宅医療を行っている医師」は、両項目において「在宅医療を行っていない医師」より0.5前後高かったことも分かった。しかしながら、地域包括支援センター及び豊田地域医療センターとの連携実態と連携必要度のギャップにおいては、「在宅医療を行っている医師」と「在宅医療を行っていない医師」ともまだ大きいと言える。すなわち、連携の現状と連携のあるべき姿との間にギャップがまだ大きいと言える。

6.4.6 結言

本節においては、豊田加茂医師会に所属している医師の意識を分析した結果により、現在の医師の意識実態は、孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの構築及び運営にかなめとなる医師のあるべき姿（理想形）とギャップがあることが明らかにした。また、これからの地域包括ケアシステムにおける医師活動及び役割分担などに方向性及び基本方針を示したと言える。なお、孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムにおける関係者の全員の意識分析及びあるべき姿を考察及び究明していくことが今後の緊急課題であろう。

6.5 まとめ

本章では、「論語」において評価システムに関する孔子思想をKJ法で体系化した結果に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、孔子論的评价システム及び特徴などを提案及び考察することを試みた。また、提案した評価システム及び先行研究の事例に基づいて、具体的な評価システムを設計するとともに、地域包括ケアシステムに応用した。具体的な事例は、豊田市加茂医師会に入会している全医師の意識実態及び活動実態を取り上げられる。分析した結果に基づいて、地域包括ケアシステムにおける医師の意識及び活動を考察及び評価した上で、現在の医師の実態においては、孔子思想からみた医師のあるべき姿とのギャップがまだ大きいと言える。

参考文献（第6章）

- [1] 佐々木亮:評価の論理：評価学の基礎, 多賀出版, 2010
- [2] 山本勝:保健・医療・福祉のシステム化と意識改革, 新興医学出版社, 1993
- [3] 山本勝:保健・医療・福祉の私捨夢（システム）づくり, 篠原出版新社, 2007
- [4] Scriven, M.: *The Logic of Evaluation*. Pt. Reyes, CA: Edgepress, 1980
- [5] 佐々木亮:そもそも評価とは何か, 21世紀社会デザイン研究 No. 8, pp. 77-85, 2009
- [6] 吉田正昭:価値の心理学的研究, 東京大学出版会, 1970
- [7] 史文珍:KJ法を用いた孔子思想の体系化の試み, 愛知工業大学経営情報科学第7巻第1号, pp. 37-49, 2011
- [8] 史文珍:システムづくりにおける孔子的問題意識に関する一考察, 愛知工業大学経営情報科学第8巻第2号, pp. 49-61, 2013
- [9] 潘乃樾:孔子与現代管理, 中国経済出版社, 1994
- [10] 楊先挙:孔子マネジメント入門, 日本能率協会マネジメントセンター, 2010
- [11] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2012
- [12] 子安宣邦:思想史家が読む論語, 岩波書店, 2010
- [13] 金谷治:論語, 岩波書店, 1999
- [14] 匡亜明:孔子評伝, 南京大学出版社, 1990
- [15] 川喜田二郎:KJ法:渾沌をして語らしめる, 中央公論社, 1986
- [16] 史文珍:KJ法を用いた孔子思想の体系化の試み, 愛知工業大学経営情報科学第7巻第1号, pp. 37-49, 2012
- [17] 李哲厚:論語今読, 天津社会科学院出版社, 2007
- [18] 銭穆:論語新解, 生活・讀書・新知三聯書店, 2005
- [19] 吉田賢抗:論語, 明治書院, 1988
- [20] 貝塚茂樹:孔子孟子, 中央公論社, 1966
- [21] Wenzhen Shi, Masahiro Nagai, Junichi Yokoyama, Masaru Yamamoto :The structure of Confucian problem consciousness ,The 10th International Conference on Service Systems and Service Management, (proceeding)2013, pp. 60-64, 2013
- [22] 趙玲玲:孔子的人生“時化”聖教, 国際儒学研究, Vol. 17, 2011
- [23] Nagai, M. et al., “Design and Implementation of Health-Medical-Welfare Information Network System for Community Comprehensive Health Care in Japan” , Proceedings of Asia Pacific Conference on Information Management 2009 (APCIM2009), pp. 417-426, 2009
- [24] 伊藤弘人:医療評価, 真興交易（株）遺書出版部, 2003
- [25] 永井昌寛ら:保健・医療・福祉包括ケアシステムの推進と評価ー青森県における保健・医療・福祉連携の評価を中心にー, 日本経営診断学会論集 Vol. 8, pp. 79-84, 2008

- [26] 永井昌寛ら:保健・医療・福祉施設から見た地域包括ケアシステムの市町村規模別分析～青森県における施設連携意識と連携状況から～, 日本経営診断学会論集 Vol. 9, pp. 59-65, 2009
- [27] 永井昌寛ら:保健・医療・福祉包括ケアシステムに関する地域住民の意識実態分析, 日本経営診断学会論集 Vol. 10, pp. 14-21, 2010
- [28] 永井昌寛ら:市町村から見た保健・医療・福祉包括ケアシステムの現状と評価―青森県における実態調査結果をもとに―, 日本経営診断学会論集 Vol. 11, pp. 55-62, 2011
- [29] 山本勝ら:地域包括ケアシステムの開発と運用に関するシステム論的考察(第二報)―推進組織作りと地域展開方策―, 日本経営診断学会論集 Vol. 6, pp. 142-152, 同友館, 2006
- [30] 豊田加茂医師会:平成 25 年度「豊田市地域医療提供体制強化事業」調査研究報告書, 豊田加茂医師会, 2013

第7章 情報社会における孔子論的問題解決方策

7.1 緒言

近年の ICT（情報通信技術）の進歩発展にともない、ゼロ距離社会・便利で豊かな社会の到来とともに、情報過剰、インターネット犯罪、プライバシー問題、ウイルス侵害、人間関係疎外、情報倫理観及び社会責任感の欠如などが深刻な社会問題となってきた。これらの諸問題を解決するために、いろいろな解決方法・方策・課題・戦略などが今日まで工夫・実行されてきた。しかしながら、従来の解決方法においては、情報技術（主にハードウェア技術・ソフトウェア技術）面からの問題解決に偏ってきたと言えよう[1]。

また同時に、科学技術、社会環境、価値観の変化及び情報価値の主観性によって、情報社会における問題・犯罪及び現象はさらに複雑化してきた。情報社会におけるこれらの諸問題は、「技術自身の問題」と言うより、「情報の価値は人次第である」のように、技術を使用する「人間側の問題」であるということが出来る[2]。情報社会における問題を解決するためには、これらの問題の裏に潜む人間の意識及び価値観における問題点を見つけることが先決条件であろう[3]。すなわち、技術面だけからの解決方策ではなく、技術面と人間性の両面のバランスを融合した総合的かつ相互補完的な解決方策こそが、これからの「人が人を支える社会」においては、有効な問題解決方策であると言えよう。

一方、2,500 年前の中国哲学者である孔子は、当時の社会問題を解決するために、倫理観、人間関係、日常行動などの身近な生活のあり方・生き方を模索しながら、問題解決方法の糸口を探していた。とくに、「仁」・「礼」・「恕」などの理念を中心とした孔子思想は、2,500 年にわたり、中国人の考え方、人々の倫理観、人間関係及び身近な生活から企業の経営、国家の管理に至るまで深く影響を及ぼしてきた[4,5]。

なお、この孔子思想は、孔子の弟子たちによって編成された孔子及びその弟子たちの言行録である「論語」に記録されている[6]。著者らは、KJ 法¹を用いて「論語」を体系化した結果に基づいて、「聞・権・安」から構成される孔子的問題解決方法（孔子的システムズ・アプローチ）を提案した[7]。そこで、本研究では、情報社会における諸問題を抜本的に解決するために、孔子思想と現代科学技術・手法との融合を柱とした孔子論的問題解決方策について考察と提言を行う。

7.2 情報社会における問題解決方策

7.2.1 情報社会の問題構造

一般に、システムづくりにおいては、目的・ソフトウェア・ハードウェア・ヒューマンウエ

¹ KJ 法とは、KJ 法は、川喜田二郎氏がデータをまとめるために考案した創造的問題解決技法であり、特に、漠然としてつかみどころのない問題を明確にしたり、創造的な解決策や新しい発想を得る等のために用いられる。参考文献：「川喜田二郎：KJ 法：渾沌をして語らしめる，中央公論社，1986」

ア（システムにおける4本柱）というシステム構造分析方法が注目されている[2]。この情報社会システムづくりにおいても、1）情報社会において活用されている情報設備・機器及び技術から構成されているハードウェア、2）諸問題及び現象に関する規則・ルール・法律・制度などを含めているソフトウェア、3）人間能力・人材・情報リテラシー等にかかわるヒューマンウェア、4）倫理、理念、方針、目的、理想形などにかかわっているフィロソフィ、というシステムづくりの4本柱から構成されていることが分かる[8]。

7.2.2 従来の問題解決対策

前述したように、情報社会における諸問題及び現象として、知的財産権犯罪、ネットワーク犯罪、人間関係疎外、価値観の変化、倫理観の欠如、社会的責任観の欠如、などを挙げることができる。そして、それらの諸問題に対して、いろいろな解決対策が工夫・実行されてきた[9,10]。

特に、従来の対策においては、1）主にセキュリティー対策、ウイルス対策、暗号化技術などの機械・道具・ソフトなどに関する技術面からの対策（これらは **Engineering** 面からの対策と呼ばれている）、2）犯罪、処罰の強化、法制化、管理体制強化、規則、規定、マニュアル化、法令順守、検挙などを含む法的・制度面（これらは **Enforcement** 面からの対策と呼ばれている）からの対策、及び3）人材、資質、人間関係などに関する教育面（これらは **Education** 面からの対策と呼ばれている）からの対策、すなわち、3E対策（**Engineering** 面・**Enforcement** 面・**Education** 面）に大別することができる[1]。

しかしながら、従来の対策においては、論理（**Ethics**）及び目的などに関する対策、すなわち4番目のE対策が十分に配慮されているとは言えない。これらの4E対策を融合し、総合的かつ相互補完的に導入していくことが、これからの情報社会問題を抜本的に解決していく一つの方法であると考えられる。

7.2.3 孔子論的問題解決方策

これからの情報社会における諸問題を解決するために、客観的な技術・手法あるいは個々の問題だけを取り上げるだけではなく、問題及び現象の裏に潜む人間の意識及び価値観などをトータル的に考えていくためのシステム思考（TPO思考²）が必要となってくるであろう。すなわち、情報社会における諸問題を抜本的に解決するためには、技術面と人間性の両面のバランスを融合した総合的かつ相互補完的な解決方策こそが、これからの「人間主体の情報社会」においては極めて重要であると考えられる。

一方、孔子思想において述べられている人間社会の倫理観、人生目的及び社会の目標などに関する理念・知恵・教訓は、人にかかわっている現代情報社会にも応用できる可能性が高いといえる。とくに、システム・マネジメント論の立場から、KJ法で体系化した孔子思想の3大概要概念である「聞」・「権」・「安」は、孔子論的問題解決方法の基本概念である。そこ

² TPO思考とは、システム思考を代表する三つの思考である。Total化思考、Purpose思考及びOpen思考を総称してTPOと呼ぶ。

で,図 7-1 の概念図に示すように,システム・マネジメント論の視点から,4 E 対策である現代科学技術・手法を上述の孔子思想と補完・融合するとともに,総合的かつ持続的に解決を推進していくことが,本節で提案する孔子論的問題解決方策である[6,7]。

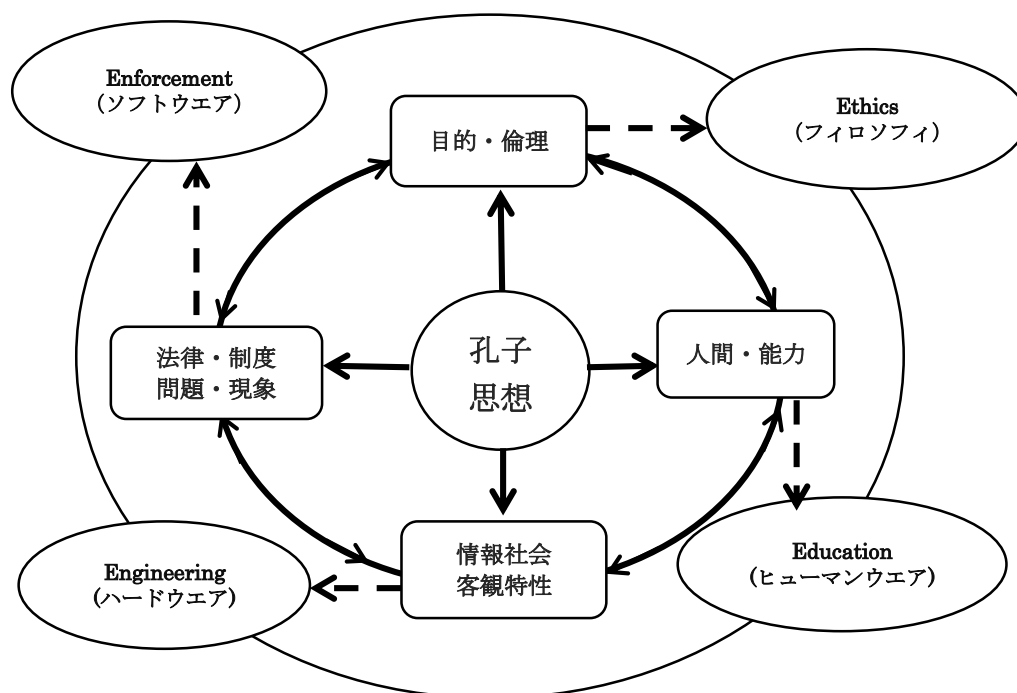


図 7-1 孔子論的問題解決方策の全体概念図

7.3 情報社会における孔子思想の概要

孔子思想は,孔子の弟子たちによって編成された孔子及びその弟子たちの言行録である「論語」に記録されている。論語は,全部で 20 篇,500 章から構成されている。論語の内容は,君子(仁者)の理想形・考え方・日常行動,政治のやり方・考え方,人生の教訓,人物の評価,孔子の日常行動などについての記述である[11]。論語においてテーマを統一することは極めて難しいと考えられる[12]。また,孔子思想を現代の情報システムに応用するために,孔子思想を体系化する必要がある。そこで,KJ法を用いて「論語」を体系化した結果に基づいて,孔子思想を「聞」・「権」・「安」から構成され 3 個の大項目に要約するとともに,この「聞」・「権」・「安」が孔子的問題解決方法における基本概念であることを提案した。

提案した「聞」・「権」・「安」という三つの柱(基本概念)は,孔子的問題解決方法であるといえる。「聞」の概念は,知識・原理・真理などを身に着けることであり,問題解決方法を見つける手順に関する対策である[13]。「権」の概念には,はかり,権衡,バランスをとるなどの意味がある。「ともに立つべきも,未だともに権るべからず」のように,身につけたこと・学んだ

ことを実施する時に、変化・実態に従って、具体的な状態を客観的に判断するとともに、各構成要素・バランス、各実行者の役割分担を明らかにし、総合的かつ計画的に進めていくことが重要である。「安」の概念には、安心・安全・安定などの意味があり、「己を修めて以て人を安んず、己を修めて以て百姓を安んず」のように、情報社会の最終目標が、人間に安心感・信頼感を与え、便利なやさしい健幸社会・地域になることである。「安」の概念は、行動などを評価・反省・継続していくことである[14]。

7.4 孔子的問題解決方策の提案

情報社会における諸問題を解決するための孔子論的問題解決方策の全容は、図 7-2 のようにまとめられる。この図から明らかとなった本解決方策においては、孔子思想の基本概念である「聞・権・安」及び4E対策（Education・Enforcement・Engineering・Ethics）が相互的に補完・融合していることが分かる。以下に、本解決方策における孔子思想を配慮した4E対策の概要について考察する。

7.4.1 ハードウェア（Engineering）面からの解決方策

ハードウェア面においては、ハードウェア及びそれに関する諸技術の開発、応用および評価という手順が重要な課題である。まず、「工、その事を善くせんと欲せば、必ず先ずその器を利にす」のように、情報社会で楽しく生活していく必要な道具、すなわち、セキュリティ技術、ウイルス対策ソフト、暗号化技術などのコンピュータの使い方及び技術について、つねに強い問題意識を持って、積極的に勉強及び開発していくことが重要視されている[15]。とくに、科学技術及び社会環境が変化していくために、コストなどを考える上で、社会ニーズを満足するための技術革新などが強調されている。

また、「詩三百を誦すけれども、之に授くるにまつりごとを以てして達せず。多しといえどもまたなにを以て為さん」のように、多くの本を読んでも、あるいは、多くの知識を得たとしても、実際の生活にはなんら役に立たないという教えは、孔子の教訓の一つでもある。セキュリティ技術などの各種技術の正の効果と負の副次的弊害面からの解決方策を検査・評価・反省する必要がある。とくに、便利性、効率性、安全性、継続性などが重要な評価尺度となってくるであろう。

7.4.2 ソフトウェア（Enforcement）面からの解決方策

ソフトウェア面においては、主に利用者のマナー及び個人的社会責任、発信者の規則及び信頼性、行政の法律という三つの側面から考察していく。まず、「君子は広く文を学び、之を約するに礼を以てせば、亦以てそむかざるべきか」のように、利用者側においては、情報・知識を勉強した上で、社会の法律・礼儀・マナーの基準を守らなければならない。また、「非礼視ること勿れ、非礼聴くこと勿れ、非礼言うこと勿れ、非礼動くこと勿れ」のように、利用者においては、法律・マナーなどに従って自分の安全は自分で守るように、自分の言論・行動などを慎

まなければならないとともに、礼儀正しくエチケットを遵守することが重要視されている。特に、情報社会のメリットを利用するとともに、自分なりの責任を持つこと、すなわち、個人的社会責任 PSR (Personal Social Responsibility) が情報社会において不可欠な条件であると言えよう。

また、発信側においては、「古より皆死あり、民信無くんば立たず」、「信なければ則ち民任ず」のように、発信側も法律などに従って実態を判断しながら、信頼されるよう行動していくことは、情報社会の基本ルールである。特に、発信側においては、規則・ルール・マナーなどを守っているか、信頼できるか、宣伝・広告と内容が同じであるか、また、自分自身が法律・マナーを遵守したかなど、正しく自己評価・反省していくことの大切が強調されている。

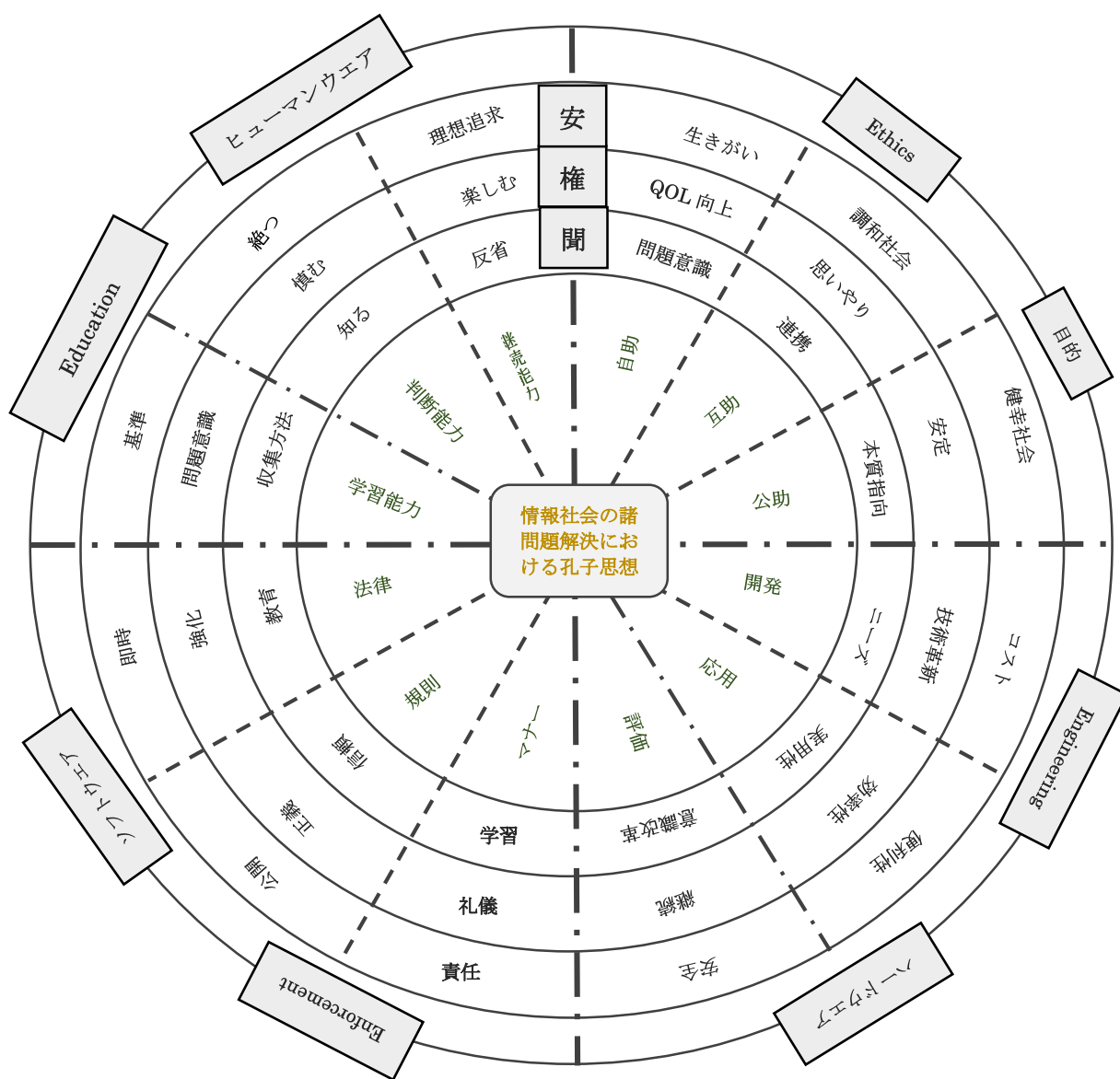


図 7-2 情報社会の諸問題における孔子的問題解決方策の全容

一方、行政側においては、情報社会の中は、科学技術・環境・価値観などは非常に速いスピードで変化しているのに対して、法律・規則・マナー・ルールなどの設計・設定・企画等のスピードは遅くなっている。そこで、「権量を謹み、法度を審らかにし、廢官を修れば、四方のまつりごと行われん」のように、常に社会の現象・問題の変化を理解するとともに、実態に沿った処罰の強化、法制化、管理体制強化などが必要である。

また、設立した法律・マナー・規定の実施効果、信頼性、継続性を評価・反省するとともに、絶えず実態に従って改善・調整・更新・変化していくことが大切である。さらに、社会の安定化、利用者の安全性から見た評価尺度は重要な課題の一つとなってくるであろう。

7.4.3 ヒューマンウエア (Education) 面からの解決方策

ヒューマンウエア (Education) 面においては、情報社会における諸問題及び現象を解決するためには、とくに学習能力の「聞」、判断能力の「権」及び継続能力の「安」が重要な検討課題となってくるであろう。

1) 学習能力の「聞」の概念について

「聞」の概念は、知識・原理・真理などを身に着けることであり、問題解決方法を見つける手順に関する対策である。情報社会においては、学際間、学科間、職種間において知識がつながっている（関係している）ためには、膨大な情報の中に重要・必要な情報・知識を手に入れることは不可欠な課題である。そのために、「聞」の概念が重要となってくる。特に、その中で学習能力は、重要な役割を果たす。孔子思想においては、以下のように、情報・知識の収集方法、問題意識及び基準という三つの側面から学習能力について説いている。

まず、必要な情報・知識は、本だけに載っているのではないため、「多く見て之を識す」のように、いろいろなことをみるとともに、本だけではなく、現実の社会におけるすべてのことを観察していくことが重要視されている。また、「太廟に入りて、事毎に問う」、「下問を恥じず」のように、分からないことがあれば、聞くことは、重要な方法である。情報社会においては、技術・環境などすべてが日進月歩に発展しているために、新しい技術・知識が発信されて分からないことや不明なことがたくさんあると考えられる。その時に、先生・友達・同僚・しりあい・上司・先輩などに「きく」・「相談」及び「問う」ことは大切な学習方法の一つである。さらに、「古を好み、敏にして、以て之を求めたる物なり」のように、分からないことがあれば、証拠・証明をみつけ、追求すること、あるいは、疑問を明らかにすることが大切なポイントである。

また、「衆之をにく（悪）むも必ず察す。衆之を好むも必ず察す」のように、社会に使われている情報・知識は、人によって角度・立場・価値が異なっているため、強い問題意識を持つことは強調されている。

さらに、「道で聞きて道で話す、徳の捨てる」のように、確認できない情報・知識、あるいは、風評などを勝手に他人に伝えることは好ましくないと言えよう。情報過剰化の原因の一つ

に、利用者が不適切な情報を発信していることが挙げられている。特に、ブログ、フェイスブック、ミクシィなどのソーシャルメディアにおいては、そういう問題を特別に注意しなければならない。そのために、さまざまな大量の情報・知識に直面した時に、「学びて思わざれば則ちくらく、思いて学ばざれば則ちうたがう」のように、収集した情報・知識を分析・思考するとともに、情報・知識は主観性があるため、自分なりの理念・ポリシー・基準等を持っていることが重要視されている。それに対して、さまざまな情報・知識を収集して、無責任的に勝手に他人に伝えることは、他人・組織・社会・国・世界に迷惑及び危険をかける可能性が高いと考えられる。

2) 判断能力の「権」の概念について

【権】の概念は、判断能力の評価尺度であり、「ともに学ぶべきも、未だともに道にゆくべからず、ともに道にゆくべきも、未だともに立つべからず。ともに立つべきも、未だともにはかるべからず」のように、実態を正しく判断するとともに、行動していくことは、孔子思想において重要な課題である。しかしながら、「知者惑わず」のように、判断する時に、迷わずに意思決定することは「智者」である。まず、「民の義を務め、鬼神を敬して之をとお（遠）ざく。知というべしと」のように、虚無な鬼神のようなものではなく、社会・国民のために、役立つことをすることは「知」である。また、「問“知”。子曰：“知人”」のように、情報・知識を有効に活用するためには、知恵が必要である。その知恵は、主に人間を知ることであろう。人間を知ることにより、情報・知識を有効に活用していくための方向性・使い方が理解できるわけである。

「言を知らざれば、以て人を知ること無きなり」のように、「子曰く、巧言は徳を乱る」、「子曰く、巧言令色、鮮いかな仁」のように、甘言には乗らないし、立派な肩書や形式に目を惑わされることなく、過大宣伝・広告と実物の内容を比較分析し、物事（情報）の本質を見わけるように心がけるとともに、発信元を確認する方法を習慣づけることが重要視されている。

一方、自分の行動においては、「君子は一言以て知と為し、一言以て不知に為す。言慎まざるべからざるなり」のように、自分の言葉・話を慎まなければならない。「多くきて疑わしきをかき、慎みてそのよを行えば、則ち悔少なし」のように、自分の言行は、直接に自分と他人の利益につながっているために、信頼できないホームページなどを登録すること、無責任な発言、などは慎まなければならない。

また、「郷人の善者は之を好し、その不善者は之を悪むに如かざるなりと」のように、賢いかつ優しい人がしたことを選び、それをまねていく姿勢が強調されている。「賢を見ては、斉からんことを思い、不賢を見ては内に自ら省みるなり」のように、賢者を見てから、自分もそういうふうになりたいことは、重要な基準である。さらに、「子、四を絶つ。意なく、必なく、固なく、我なし」のように、主観的な私意、必ずやり通そうとする無理押し、頑固に自分を守り通そうとするかたくなさ、自分のことだけを考えるエゴイズム、という四つの考え方は基本的に禁止されている[16]。要するに、実態に従って判断することが孔子の教えである。

上述したように,判断能力を向上するために,人間を理解すること,特に,人間の話・言葉・セリフ・広告宣伝などを知ることが重要な課題である。また,責任を取って慎重に行動すること及び判断基準を設定することとともに,四つの考え方を禁止することが重要視されている。

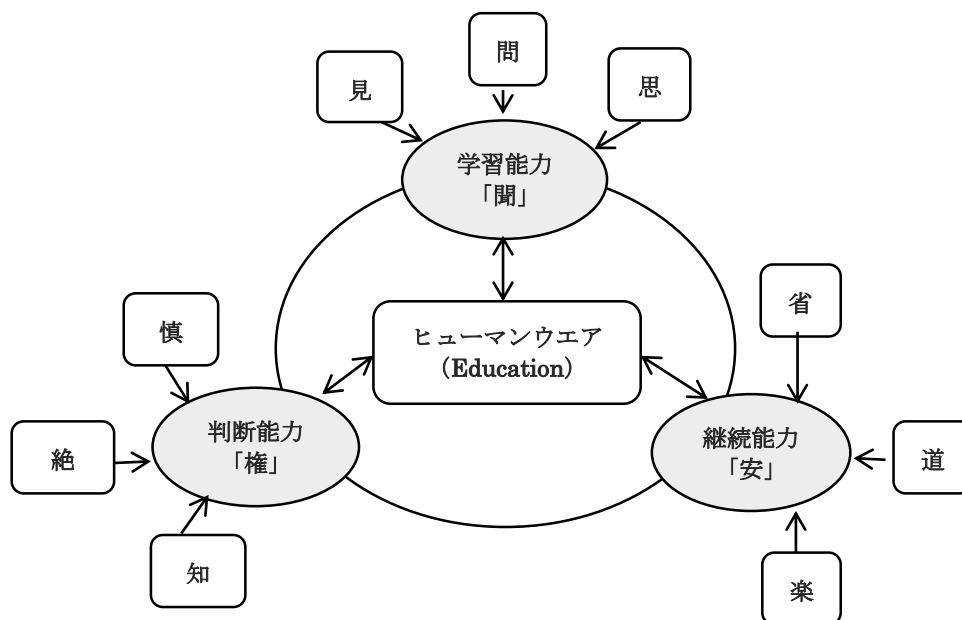


図 7-3 「聞」におけるヒューマンウェアの概要

3) 継続能力の「安」の概念について

情報社会においては,科学技術,価値観,社会環境などは,絶えず変化していくために,ヒューマンウェア面においても,その変化に従って,継続的に適応していくことは必要となってきた。孔子論的問題解決方策において,[安]の概念は,継続能力の評価尺度であり,反省,楽しさ及び理想追求という三つの項目から構成される。そこで,「吾日に吾が身を三省す」「不賢を見ては内に自ら省みるなり」のように,自分の行動などを反省・評価することが過去の実例から学ぶことができると言える。また,「過ちてはすなわち改めるに憚(はばか)ること勿れ」と「之を改めるを貴しと為す」のように,どこが間違ったのか,どこをミスしたか,などを反省・評価した後,調整・改善することは重要な課題である。

また,「再求曰く,子の道を悦ばざるに非ず。力足らざるなりと。子曰く,力足らざる者は,中道にして廃す。今汝は限れりと」のように,情報社会における諸問題を解決することができるという信念を持っていくとともに,改善を継続していくことが重要視されている。

さらに,「之を知る物は,之を好むものにしかず,之を好む物は,之を楽しむ物に如かず」のように,「楽」しく,そして継続的にシステムづくり(改善向上)を推進していくことは重要な課題である。

上述したように,ヒューマンウェア面からの解決方策においては,図 7-3 にまとめられるよ

うに,学習能力(聞)・判断能力(権)・継続能力(安)からなる三つの能力がこれからの情報社会において不可欠な条件である。

7.4.4 フィロソフィ(Ethics)面からの解決方策

フィロソフィ面においては,主に目的,理念,方針などが注目されているとともに,情報社会における倫理観も重要な課題である。そこで,本節では,倫理観の側面から,とくに,孔子思想からフィロソフィ面について考察していく。フィロソフィ面においては,主に,1)強い問題意識をもって,自分の身は自分で守るという「自助精神」,2)人間同士間の助け合いという「互助精神」,3)国家からの支援などを含める「公助精神」,という三つの側面から考察していく[17]。

まず,「吾,十有五にして,学に志す」のように,「道」を追求していく(聞道)には,計画・目的・目標設定,目的追求,強い目的意識を持つことが先決条件である。また,「徳の修まらざる,学の講ぜざる,義を聞いて従る能はざる,不善の改むる能はざる,是れ我が憂いなり」のように,孔子の「憂」は,当時の社会における現状・問題に対する心配であり,情報社会においては,常に強い問題意識を持っていることとも言えよう。そこで,自分の身は自分で守るという「自助」精神が重要視されている。

また,「夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て,己達せんと欲して人を達す」のように,自分が望んでいい生活を送りたければ,身の回りの人にもそういう生活を達成させることが孔子の教訓である。そこで,人間社会においては,他人を傷つけることなく,互いに助け合い(互助),相互に連携・協働していくことは,便利で豊かな情報社会の構築及び円滑な運営において重要な課題である。

さらに,孔子の目標が「老者は之を安んじ,朋友は之を信じ,小者は之を懐けん」のように,人間のQOL向上・社会満足度向上・健幸社会の構築・上位計画・最終目的・目標(大同世界)理想形などの追求,社会の安全・安定・世間の安心・人間の信頼などは,国家の目標であり,人間の理想形でもある。それを達成するためには,個人の行動・努力が必要であることは言うまでもなく,国家の制度・政策・戦略なども強調されている。すなわち,政府・公的な部門からの支援(公助)は,安全・安心・信頼できる情報社会の構築並びに円滑な運営に欠かせない。

7.5 結言

情報社会における従来の諸問題解決方法は,主に情報技術面(ハードウェア面及びソフトウェア面)からの解決方策に注目してきたと言えよう。そこで,本稿では,図7-4の全体概念図に示すように,情報社会における諸問題及び現象をシステム・マネジメント論の視点から構造特性分析を行うとともに,その抜本的な問題解決方策について考察並びに提言を行った。とくに,その情報化問題の真因に対して,2,500年前の中国の哲学者である孔子の問題解決方法である「聞」・「権」・「安」の考え方を,4E対策と相互的に補完し合いながら,総合的な問

題解決策を試みた。

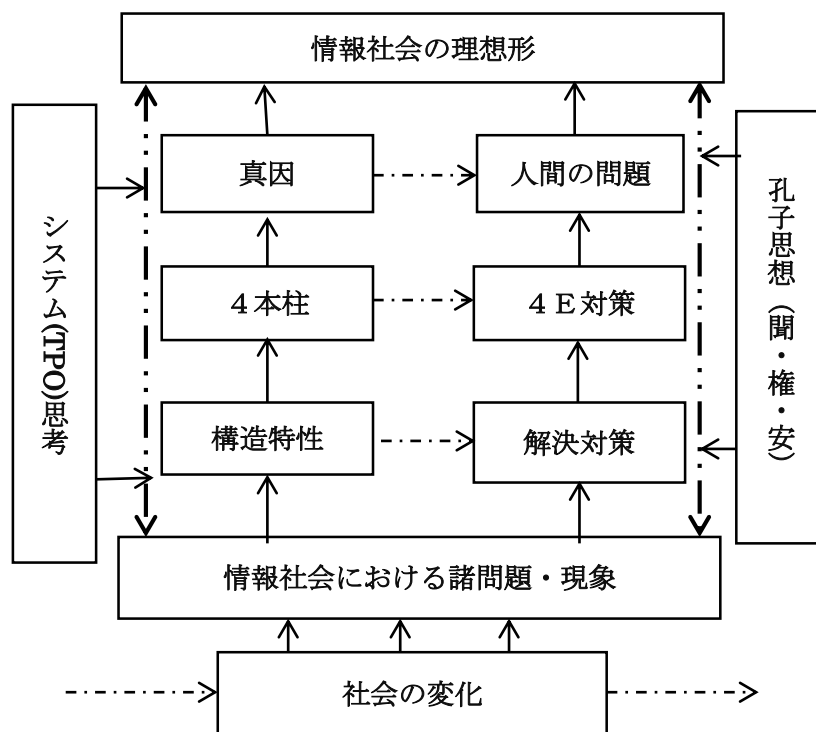


図 7-4 孔子思想に基づいた諸問題解決策の全体概要図

特に、4 E 対策の中で、ハードウェア (Engineering) 面からの対策においては、学習、応用、評価からなる三つのステップを用いて考察を行った。ソフトウェア (Enforcement) 面からの解決策においては、利用者側、発信者側・行政側の 3 つの角度から法律・マナー・規則を中心に考察を行った。また、ヒューマンウェア (Education) 面からの対策においては、情報社会における学習能力の「聞」・判断能力の「権」・継続能力の「安」という 3 つの項目について、孔子的解決策について論述した。さらに、目的・理念 (Ethics) 面からの対策においては、情報社会における諸問題を解決するために、「自分で自分のことを守る」ことをはじめとして、「人間同士が互いに助け合う」こと、「おおやけ (公) が支援する」という自助・互助・公助の「3 助精神」の重要性を掲げた。

情報社会における諸問題及び現象を解決するには、特に、「人にやさしい社会」及び「人が人を支える社会」において、技術・法律面からの解決策だけではなく、人間一人ひとりの能力活用及び社会責任感などの面からの問題解決策を重要視していくことが期待されている。なお、本研究で提案した孔子論的問題解決アプローチは、これからの情報社会、とくに人に深くかかわっている社会における諸問題の解決に有効かつ効果的なアプローチであると期待されている。

参考文献（第7章）

- [1] 山本勝:愛知工業大学講義「情報社会及び情報倫理」配布資料, 2011 年度講義ノート
- [2] 山本勝:保健・医療・福祉の私捨夢（システム）づくり, 篠原出版新社, 2007
- [3] ビーター・M・センゲ:学習する組織, 英治出版, 2011
- [4] 楊先挙:孔子マネジメント入門, 日本能率協会マネジメントセンター, 2010
- [5] 潘乃樾:孔子与現代管理, 中国経済出版社, 1994
- [6] 史文珍:KJ 法を用いた孔子思想の体系化の試み, 愛知工業大学経営情報科学第 7 巻第 1 号, pp. 37-49, 2011
- [7] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会第 44 回全国大会予稿集, 別府大学, pp. 188-191, 2011
- [8] 山本勝:保健・医療・福祉のシステム化と意識改革, 新興医学出版社, 1993
- [9] 師啓二ほか:現代の情報科学, 学文社, 2010
- [10] 中島義明, 野嶋栄一郎:「情報」人間科学, 朝倉書店, 2008
- [11] 李哲厚:論語今読, 天津社会科学院出版社, 2007
- [12] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチの一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2012
- [13] 銭穆:論語新解, 生活・讀書・新知三聯書店, 2005
- [14] 烏恩溥:仁義礼智信和現代化, 孔子誕辰 2540 周年與學術討論論文集, 生活・讀書・新知三聯書店上海支店, pp. 2587-2603, 1992
- [15] 吉田賢抗:論語, 明治書院, 1988
- [16] 貝塚茂樹:孔子孟子, 中央公論社, 1966
- [17] 田中滋:高齢社会-自助・互助・共助・公助のコラボレーション, 生活福祉研究, 通巻 79 号, 2011

第 8 章 孔子論的問題解決アプローチにおける今後の課題

8.1 はじめに

前述したように、本論文においては、「論語」に記述されている孔子思想を KJ 法を用いて体系化した結果を、システム・マネジメント論の視点から、孔子論的問題解決アプローチにおける 5 大方策について提案及び考察してみた。また、ここで提案した諸方策を具体的なシステム（人が人を支える地域包括ケアシステム）に応用及び適応した結果と、本論文で提案したこれらの諸方策（孔子論的問題解決アプローチ）は、とくに、人にかかわっているシステム（地域包括ケアシステム）における問題解決に役立つことは明らかにした。しかしながら、今回提案した孔子論的問題解決アプローチの 5 大方策には、改善及び修正すべき課題が残っている。そこで、本章においては、今回検討されなかった課題、孔子論的問題解決アプローチ自身のこれからの発展・方向と新分野への応用等について考察を行う。

8.2 孔子論的問題解決アプローチにおけるシステムづくり課題

システム及びシステムづくりにおいては、一般的に次のような特性、傾向、特徴及び検討課題を要約することができる[1]。

- 1) システム内の各構成要素における相互関係は曖昧かつ複雑である。
- 2) システムは一般にオープン性を有し、システム境界が不明瞭である。
- 3) システムを開発及び安定運営していくためには、つねに状況の変化に適応した改良計画の推進が必要である。
- 4) 「システムは人なり」と言われている。
- 5) システムづくりには多くの経費と時間がかかる。
- 6) システムづくりの目的及び価値観・理念は各人の置かれている立場や生き方により異なる。
- 7) システムにおける人間要素は重要である。
- 8) システムは、それぞれ固有の立場及び環境特性を有している。
- 9) システムづくりとは問題解決のための一つの方法である。
- 10) 問題はいろいろな側面及び課題を含んでいる。

そこで、本章においては、上述したシステム化特徴及び課題に基づいて、推進手順、問題意識、連携協働、評価支援、情報支援という 5 大課題について考察・提案及び応用を行った。一方、システムづくりの諸課題においては、図 8-1 に示されるように、5 大課題（方策）以外に、また、未開発・未提案のシステム化課題が残されている。そして、それらの重要なシステム化課題について、孔子思想に基づいて、新しい解決方策を提案及び応用することが今後の課題であろう。

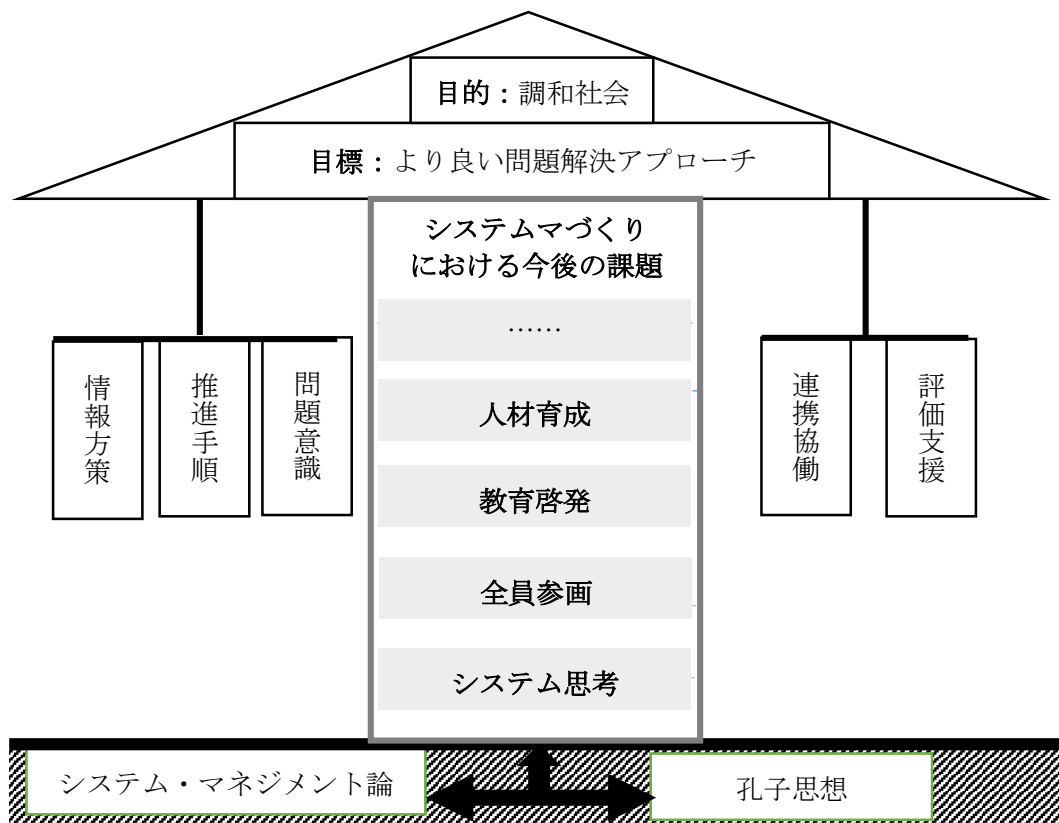


図 8-1 孔子論的問題解決アプローチの開発結果及び今後の課題

8.3 孔子論的問題解決アプローチの発展課題

本論文においては、孔子論的問題解決アプローチにおける 5 大方策を提案及び応用してみたいうで、その有効性及び可能性を明らかにした。しかしながら、ここで提案した 5 大方策は、理想形・方針・理念並びに、原理・原則等に関する定性的考察が主流となっている。そこで、今後の課題としては、本論文において提案した 5 大方策を更にモデル化・数量化・具体化・シミュレーションすることが必要であろう[2~4]。とくに、評価システムにおける各項目の詳細設計・適応、連携意識構造のモデル化、問題意識構造の数量化及び推進手順のシミュレーション等がこれからの緊急な課題となってくるであろう。

8.4 孔子思想と他の思想の融合及び発展方向

人間及び人間社会における問題を解決するために、本論文においては、主に人間を中心とした孔子思想に基づいて、システム・マネジメント論の視点から、問題解決アプローチを提案及び考察してみた。一方、孔子思想には、時代の特性、立場及び背景などにより、完全かつ完璧な問題解決アプローチを支えていくのには、多くの限度及び制約条件があると推測される。そこで、孔子思想だけではなく、孔子思想を発展・補完していくためには、儒学の孟子・荀子・

子思・朱子をはじめ、老子・荘子などほかの中国古典哲学並びに、世界における哲学思想、とくに、現代の思想を融合することが必要な課題となってくるであろう。

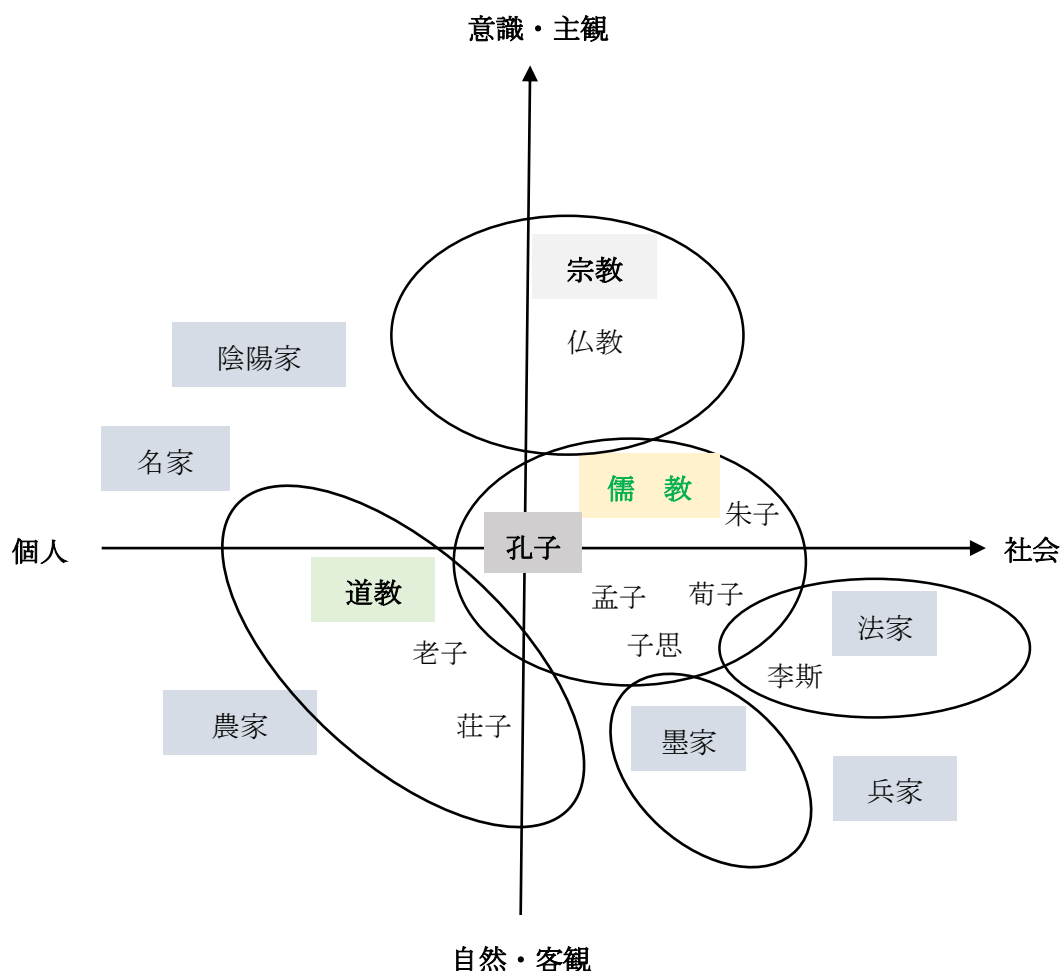


図 8-2 孔子思想と中国哲学思想の特徴比較

1) 孔子思想と中国古典哲学の特徴比較及び融合の課題

孔子思想においては、君子の生き方・見方・考え方・進め方を人間のあるべき姿（理想形）として考察及び提唱してきた。孔子が提案した人間及び社会の理想形に基づいて、孔子の後継者孟子及び荀子が、孔子の理念を発展していくとともに、より具体的な論証・方策などを提唱してきた。また、子思、曾子が「大学」と「中庸」において、孔子思想を詳細的かつ具体的に説明及び論述してきた。このように、孔子後継者の学説及び思想（孔子思想を含めて儒学と総称する）は、孔子思想を補い、発展してきたと言えよう。

一方、孔子と同じ時代に生活していた老子は、人間の生き方・考え方などが異なり、人間の個体価値、人間と自然の調和を重要視している独立・自由・変化・動的な世界観及び方法論を提唱してきた[5]。また、荘子は、老子の思想に基づいて、前述した思想をより具体的に論述・

論説してきた。老子と荘子の思想（老荘思想と呼ぶ）は、中国に 2000 年以上影響を強く及ぼしている[6]。そこで、この老荘思想は孔子思想と異なる視点から人間及び人間社会について考察しているため、孔子論的問題解決アプローチの発展に役立つことが期待される。

なお、中国の古代哲学においては、孔孟を主とした儒学並びに、老荘を中心とした道教以外、図 8-2 に示されるように、墨家、法家、兵家、名家、縦横家、農家、陰陽家などの思想も、これまでの人間社会に影響を及ぼしてきた。前述した思想を十分に利活用することが孔子論的問題解決アプローチの拡大発展に貢献できると考えられる。

2) 孔子思想と世界の思想との融合及び発展の課題

孔子思想を主とした儒学（日本では儒教と呼ぶ）は、日本においては 1000 年以上影響を及ぼしている。儒学思想に影響された「三方良し」、「則天去私」などの思想は、日本の文化及び国民の生活に重要な役割を担っていると言える。なお、明治維新以来、日本においては、儒学と西洋文明を充分かつ成功に融合してきた「和魂洋才」などの思想も現在でも重要視されている。そこで、図 8-3 に示さるよう、日本で重要視されている東洋思想も、これからの孔子論的問題解決アプローチの発展に貢献できると期待できよう。

一方、科学思想及び民主思想を重点とした西洋思想は、産業革命以来、世界に影響を強く及ぼしてきた[7]。構造主義、還元主義、実証主義などの思想は、人間及び人間社会を含めた世界を、東洋文明と異なる視点から論述及び検証している。なお、孔子論的問題解決アプローチ自身も東洋思想と西洋思想を融合した産物のため、上述した西洋思想が、孔子論的問題解決アプローチの発展に有効かつ貢献できると考えられよう。

8.5 孔子論的問題解決アプローチの応用分野及び今後の課題

本論文においては、人間及び人間社会における問題を解決するための孔子思想に基づいて、開発及び提案した孔子論的問題解決アプローチが、図 8-4 に示されるように、主に人間と自然の問題、人間と心の問題、人間と人間の問題並びに、社会及び国際の問題（人間と人間の関係の拡大）、という 4 種類の問題に応用及び適応することが考えられる。これも今後の課題として期待されている。

1) 人間と自然の問題

現在に、人間社会が直面している人間と自然の問題としては、資源問題、原発問題、工業の汚染問題、地球温暖化などの環境問題が注目を集まっている。前述した問題は、客観的な自然問題であるが、その裏に人間が自然に対する付き合い方・考え方などは隠れている。問題解決には、まず人間の考え方を解決することが先決条件となってくるであろう。

2) 人間と心の問題

倫理問題、精神問題、自殺問題、心理問題、モチベーション問題、イノベーション問題などが、人間の生き方・見方・考え方で、主に心にかかわっている問題であると言える。孔子論的問題

携働などに関係していると考えられている。

そこで、高齢社会における諸問題を解決するために、医療・介護・福祉・生活支援等諸サービスを継続的に提供する地域包括ケアシステムの構築及び運営は、重要な課題となってくるであろう。また、今後、深刻な高齢問題に直面していくことが懸念される中国において、本研究に開発された孔子論的問題解決アプローチの応用が期待されるであろう

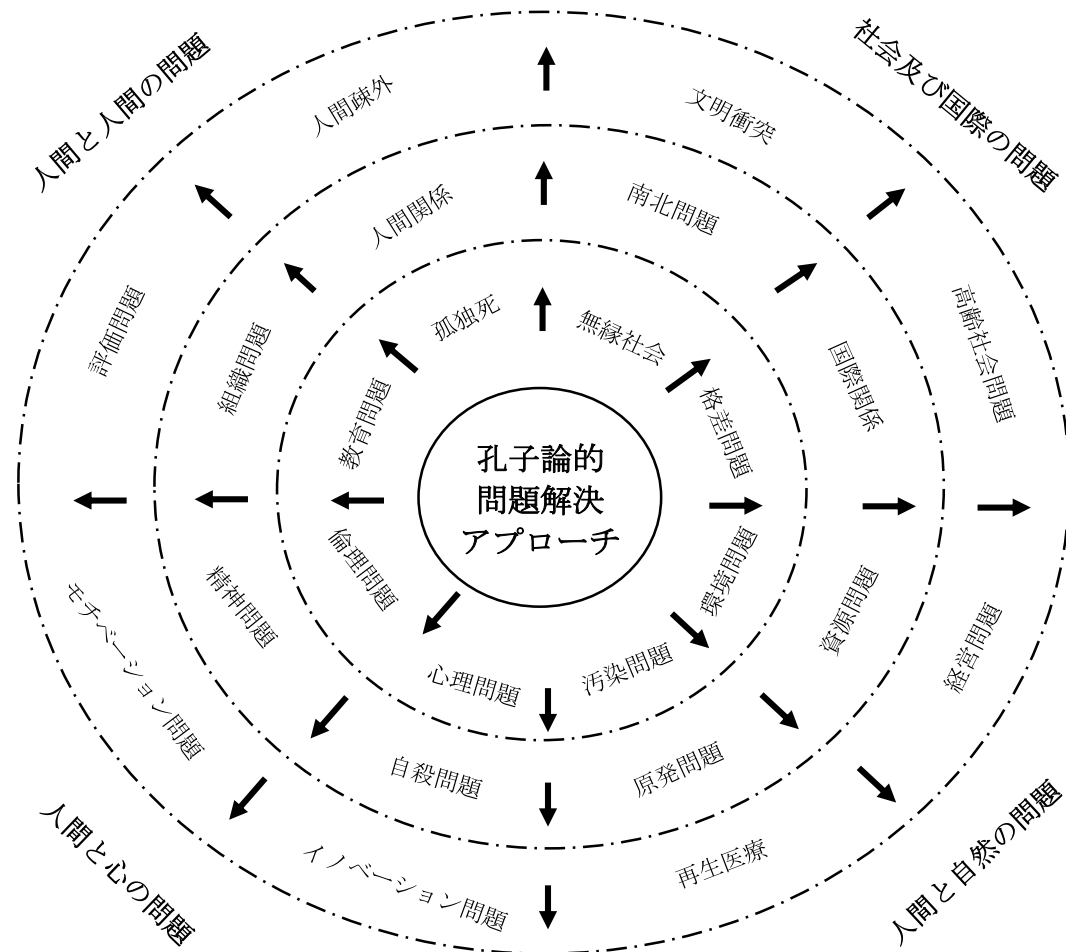


図 8-4 孔子的問題解決アプローチの応用分野・領域

参考文献（第8章）

- [1] 山本勝:保健・医療・福祉の私捨夢（システム）づくり, 篠原出版新社, 2009
- [2] 史文珍:システムづくりにおける孔子的問題意識に関する一考察, 愛知工業大学経営情報科学第8巻第2号, pp. 49-61, 2013
- [3] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチに関する一考察, 日本経営診断学全国大会論集 Vol. 12, pp. 47-52, 2012
- [4] 史文珍, 山本勝:孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの構築および運営に関する一考察, 日本経営診断学会論集 Vol. 13, 2013 (掲載決定)
- [5] 李宗桂:儒道対立互補の比較, 20世紀儒学研究大系-儒道比較研究, pp. 173-181, 中華書局, 2003
- [6] 邵漢明:儒道人生哲学の総体比較, 20世紀儒学研究大系-儒道比較研究, pp. 182-195, 中華書局, 2003
- [7] 張世英:中国伝統哲学と西方後現代主義哲学, 20世紀儒学研究大系-儒学と西方哲学, pp. 400-412, 中華書局, 2003

第9章 結 論

科学技術の急速な発展により、我々の人間社会は、豊かな社会になったとともに、環境汚染をはじめ、自殺、孤独死、精神病、テロ事件、などの問題に直面することとなった。とくに、少子超高齢社会の日本においては、高齢者給付費の高騰、医療資源の不足、不安・ストレス社会の深刻化などは極めて重要な社会問題となってきた。一方、健康かつ幸せな人生及び調和社会の構築へのニーズもますます高まってきた。そのために、客観的・数理的・合理的な「理」と、主観的・人間的・感性的な「情」とのバランスのとれた問題解決アプローチが不可欠な条件となってきた。

そこで、本研究においては、「理」と「情」のバランスのとれた新しい問題解決アプローチを開発するために、人間の生き方・考え方・進め方を中心とした孔子思想（「論語」に記述した孔子思想）を、KJ法を用いて、システム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、孔子論的問題解決アプローチの開発及び提案を模索した。本研究において、具体的な問題解決アプローチとして、主に、推進手順、意識革新（問題意識）、連携協働、評価促進、情報支援というシステムづくりにおける5大基本課題について開発及び提案した。また、ここで開発及び提案した孔子論的問題解決アプローチの有効性及び効果を検証及び適応するために、これからの少子超高齢社会における重要な課題である地域包括ケアシステムに、これらの問題解決アプローチを応用することを試みた。

なお、具体的なモデル地域として、共同研究相手である愛知県豊田市を取り上げることとした。とくに、豊田市における市民、介護サービス従事者、医師を対象にして、それぞれアンケート調査を実施した。そして、本研究においては、アンケート調査結果を分析した上で、市民の問題意識、介護サービス従事者の連携実態及び意識並びに医師の活動実態及び意識実態における問題点・検討項目及び促進条件などについて考察及び提言したとともに、孔子論的問題解決アプローチが地域包括ケアシステムの構築及び運営について有効であることを明らかにした。

以下、各章の総括を行うことにする。

第1章では、本研究の背景として、社会環境の特性及び問題点・課題について考察した上で、あらゆる問題点が人間に関連していることにまとめることができた。また、人間を中心とした孔子思想の影響力・内容・特徴並びに、先行研究の視点・方法・内容などを考察した。なお、本研究においては、孔子思想をシステム・マネジメント論の視点から体系化した結果に基づいて、問題解決アプローチを開発するため、問題の概念及び問題解決の歴史・手順・視点とともに、システム及びシステムアプローチの概念及び手法・手順・種類・特徴などについて概観した。さらに、提案及び開発した孔子論的問題解決アプローチを地域包括ケアシステムに適応するために、少子高齢社会の現状及び地域包括ケアシステムの課題について考察した。最後に本論文の目的及び構成について述べている。

第2章では、「理」と「情」のバランスがとれた新しい問題解決アプローチを開発するために、人間主義を中心とした孔子思想を、KJ法等を活用してシステム・マネジメント論の視点・立場から整理・分類・体系化を試みた。なお、これらの分析結果に基づいて、孔子思想の概要は、システム・マネジメント論の視点から「聞」・「権」・「安」という3つのキーワード（システム概念）にまとめられることを提案した。

また、システム・マネジメント論の視点から体系化された孔子論的問題解決アプローチを、システムづくりにおける5つの主要課題に対して、適応並びに考察した結果について、以下の第3章～第7章において述べる。

第3章では、主に7つのシステム化基本理念と8個のステップから構成されている孔子論的システムズ・アプローチ（推進手順）を開発及び提案した。本アプローチは、「人間本位」、「バランス」、「全員参画」、「人間関係の重視」、「本質指向」という5大特徴を有している。従来の代表的なアプローチである帰納的アプローチと演繹的アプローチとの比較分析も同時に行っている。また、本アプローチの有効性を検証するために、具体的な地域包括ケアシステムの構築及び運営に適応した。孔子論的推進手順の特徴の一つである全員参画及び協力・信頼の精神に基づいて、地域包括ケアシステムの構築及び運営においては、「官」・「産」・「学」・「民」という4者の連携・協働体制により推進していくことを提案した。さらに、本アプローチにおいては、1) 個人の社会的責任 PSR (Personal Social Responsibility) 「仁」の重視、2) 集合知「学」の強調、3) 教育啓発「教」の大切、4) 礼儀・マナー「礼」の提唱、という4つの視点・態度が重視されている。

第4章では、責任感「仁」、目標「志」、知識「知」及び基準「権」という4つの側面から構成されている孔子論的問題意識構造モデルを提案した。また、問題意識が問題解決の全過程において重要な役割を果たすことを示した。なお、その有効性及び効果を検証するために、本研究における共同研究相手である豊田市を具体事例として、地域包括ケアシステムに対する市民の意識実態分析を行った。その結果に基づいて、孔子論的問題意識構造モデルが地域関係者の意識構造分析及び意識啓発に有効であることを明らかにした。

第5章では、目標「志」、視点（「恕」と「時」）、役割分担「名」及び、相互関係「和」という4つの側面から構成される孔子論的連携モデルを提案するとともに、個人の社会的責任「仁」及び、知識・経験及び知恵を相互学習及び共有する集合知の形としての「学」が特に重要であることを明らかにした。また、連携の阻害要因及び連携促進条件等について考察及び提言を行った。なお、介護・看護サービス従事者を対象とした連携実態調査結果に基づいて、孔子論的連携モデルの特性を明らかにしたとともに、連携促進における問題点及び連携促進方策並びに条件・課題等について考察及び提案を行った。

第6章では、評価方法、評価角度・視点、評価対象及び評価基準から構成される孔子論的評価システム（モデル）を提案するとともに、タイミング及び継続性を重視する「評価視点」、安心・安全・安定に関する「安」の「評価尺度」及び、社会的貢献を最優先する「重み付け評価方法」の3項目において孔子的評価システムの特徴をまとめた。なお、提案した孔子論的評

価システムに基づいて、医師の意識及び活動実態分析及び評価を行った。

第7章では、高度情報社会における問題点及び情報化課題についてシステム・マネジメント論の視点から考察した。とくに、孔子論的問題解決アプローチの視点・立場から、これからの高度情報社会における問題解決方策並びにその情報化について考察並びに提言を行った。

第8章では、今後の課題として、本論文で提案したシステムづくりにおける孔子論的問題解決アプローチの更なる改良・発展をめざして、他の優れた思想・科学技術、例えば、老子、孟子思想との融合の可能性と期待について考察した。また、本孔子論的問題解決アプローチの適応分野・領域として、安心・安全・快適・豊かな生活を目指している人間社会が抱えている多くの難問題への適応について考察を行っている。

第9章では、本論文の結論として本研究の総括を行うとともに、今後の検討課題について述べている。

付 録

介護及び看護サービス従事者
各 位

平成 25 年 9 月 吉日

豊田市介護サービス機関連絡協議会
会 長 安藤 惣吾

「介護及び看護サービス従事者の仕事並びに意識に関するアンケート」のお願い

残暑の候、皆様におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

高齢化の進展とともに、在宅看護、在宅緩和、在宅医療、認知症対策などが地域包括ケアシステムにおける重要な課題となってきました。地域包括ケアシステムを円滑かつ効率的に運営するために、地域関係者を含めた連携協働システムが必要不可欠です。そのためには、責任感・使命感、思いやりの心及び相互信頼とともに、楽しく仕事を継続していく姿勢が重要な条件となってきました。そこで、重要な役割を担っておられる介護及び看護サービス従事者の仕事並びに意識実態を把握するために、豊田市介護サービス機関連絡協議会では、介護及び看護サービス従事者の皆様を対象にアンケート調査を実施させていただくことといたしました。

お忙しいところお手数をおかけしますが、安心して暮らせる地域包括ケアシステムの実現に向けて、皆様の率直なご意見並びにお考えをお聞かせ下さい。

どうか、本アンケート調査にご協力くださいますようお願い申し上げます。

敬 具

※1 本調査データ並びに分析結果の取り扱いにつきましては、個人情報保護法を遵守するとともに、すべて集計結果のみを用いますので、お答えいただいた皆様にご迷惑がかかることは一切ございません。

※2 各所属ごとにまとめて、10月4日（金）のサービス調整会議にご持参ください。

<本件に関する問い合わせ先>

部署名：愛知工業大学経営学部システム・マネジメント研究室 山本 勝 教授

464-0044 名古屋市千種区自由ヶ丘2-49-2

電話番号： 052-757-0810（内406）

FAX： 052-751-0600

メールアドレス： yamamoto-masaru@aitech.ac.jp

介護及び看護サービス従事者の仕事並びに意識に関するアンケート調査

※下記の各質問において該当する番号に○印をお付けください。

1 あなたご自身についてお聞きします。

1. 平成 25 年 6 月現在、あなたは何歳ですか。

1	20 歳代	2	30 歳代	3	40 歳代	4	50 歳代	5	60 歳代	6	70 歳以上
---	-------	---	-------	---	-------	---	-------	---	-------	---	--------

2. あなたの性別は

1	男性	2	女性
---	----	---	----

3. あなたのこれまでの介護・看護の仕事に関する経験年数は通算でどのくらいですか。

1	3 年未満	2	3 年以上 8 年未満	3	8 年以上 15 年未満	4	15 年以上
---	-------	---	-------------	---	--------------	---	--------

4. 現在、あなたはどんな資格・免許等を持っていますか（複数回答可）。

1	保健師	2	看護師・准看護師	3	社会福祉士	4	介護支援専門員
5	介護福祉士	6	ホームヘルパー	7	PT・OT	8	その他（ ）

5. あなたは現在どのような事務所・組織・施設（以後、職場と呼ぶ）で働いていますか。最もあてはまるもの 1 つに○印をお付けください。

1	病院・診療所	2	居宅介護支援事業所	3	介護老人保健施設
4	訪問介護事業所	5	デイサービスセンター	6	地域包括支援センター
7	グループホーム	8	通所リハビリテーション	9	介護老人福祉施設
10	訪問看護ステーション	11	その他（ ）		

6. あなたが所属する上記の職場のスタッフ（正規とパートすべて）は全部で何人いますか。

1	10 人未満	2	10 人以上 50 人未満	3	50 人以上 100 人未満
4	100 人以上	5	わからない		

7. あなたは上記の職場において正規・パートのどちらに該当しますか。

1	正規・常勤	2	パート・常勤	3	パート・非常勤
---	-------	---	--------	---	---------

2 現在のあなたの仕事における関係者との連携状況についてお聞きします。

8. 貴職場では、ミスや事故が発生した時、その理由・原因・対策等について、スタッフ同士で情報共有はできていると思いますか。

1	うまくできている	2	少しできている	3	どちらとも言えない
4	あまりできていない	5	まったくできていない		

9. あなたは、現在の仕事において、以下の関係者とどの程度連携がとれていますか。各連携相手ごとに最もあてはまる番号に○印を一つずつお付け下さい。

連 携 相 手	連 携 の 現 状					
	十分とれている	まあとれている	どちらともいえない	あまりとれていない	全くとれていない	該当の連携相手がいない
1.利用者本人（患者・要介護者・要支援者）	1	2	3	4	5	6
2.利用者の同居家族	1	2	3	4	5	6
3.同じ職場の従事者（仲間）	1	2	3	4	5	6
4.他組織の介護・看護・生活支援サービス従事者	1	2	3	4	5	6
5.医師	1	2	3	4	5	6
6.行政関係者	1	2	3	4	5	6

10. あなたは、現在の仕事において、利用者（患者・要介護者等）の状況変化・プラン・介護方針などの情報を、以下の関係者とどの程度交換（共有）をしていますか。

連 携 相 手	情 報 の 交 換 (共 有) 状 況					
	十分交換している	まあ交換している	どちらともいえない	あまり交換していない	全く交換していない	該当の連携相手がいない
1.利用者本人（患者・要介護者・要支援者）	1	2	3	4	5	6
2.利用者の同居家族	1	2	3	4	5	6
3.同じ職場の従事者（仲間）	1	2	3	4	5	6
4.他組織の介護・看護・生活支援サービス従事者	1	2	3	4	5	6
5.医師	1	2	3	4	5	6
6.行政関係者	1	2	3	4	5	6

11. あなたは、現在行っているサービスの問題点・目標について利用者本人とよく話し合っていますか。

1	よく話し合っている	2	少し話し合っている	3	どちらとも言えない
4	あまり話し合っていない	5	まったく話し合っていない		

12. あなたを含めたサービス関係者（利用者本人を除く）が集まって、現在のサービスにおける問題点・目標についてよく話し合っていますか。

1	よく話し合っている	2	少し話し合っている	3	どちらとも言えない
4	あまり話し合っていない	5	まったく話し合っていない		

- 3 あなたの仕事のやり方等についてお聞きします。

13. あなたは、日頃の仕事について見直しを行っていますか。

1	よく見直している	2	少し見直している	3	どちらとも言えない
4	あまり見直していない	5	まったく見直していない		

14. あなたは、研修・勉強会などに参加していますか。

1	よく参加している	2	たまに参加している	3	どちらとも言えない
4	あまり参加していない	5	まったく参加していない		

15. あなたは、研修・勉強会などに参加したいと思いますか。

1	大変参加したい	2	少し参加したい	3	どちらとも言えない
4	あまり参加したくない	5	まったく参加したくない		

16. 研修を受けた内容は日頃の仕事に活用できていますか。

1	うまく活用できている	2	少し活用できている	3	どちらとも言えない
4	あまり活用できていない	5	まったく活用できていない	6	受けていない

17. あなたは、仕事において修得した知識などを仲間・同僚等にも教えていますか。

1	よく教えている	2	たまに教えている	3	どちらとも言えない
4	あまり教えていない	5	まったく教えていない		

18. あなたは仕事に関する自分の目標（理想、仕事能力・持ちたい資格など）をもっていますか。

1	強く持っている	2	少し持っている	3	どちらとも言えない
4	あまり持っていない	5	まったく持っていない		

4 日頃の仕事に対する気持ちなどについてお聞きします。

19. あなたは、日頃の仕事において、連携相手から感謝の気持ちを感じていますか。各連携相手ごとにあてはまる番号に○印を一つずつお付け下さい。

あなたのお気持ち 連携相手	あなたのお気持ち					
	十分感じている	まあ感じている	どちらともいえない	あまり感じていない	全く感じていない	該当の連携相手がいない
1.利用者本人（患者・要介護者・要支援者）	1	2	3	4	5	6
2.利用者の同居家族	1	2	3	4	5	6
3.同じ職場の従事者（仲間）	1	2	3	4	5	6
4.他組織の介護・看護・生活支援サービス従事者	1	2	3	4	5	6
5.医師	1	2	3	4	5	6
6.行政関係者	1	2	3	4	5	6

20. あなたは、現在の自分の仕事についてどう感じていますか。各項目ごとにあてはまる番号に○印を一つずつお付け下さい。

あなたのお気持ち 項目	十分感じて いる	まあ感じて いる	どちらとも いえません	あまり感じ ていない	全く感じて いない
1. 仕事に対するやりがい	1	2	3	4	5
2. 使命感	1	2	3	4	5
3. 達成感	1	2	3	4	5
4. 責任感	1	2	3	4	5

21. あなたは、現在の仕事において、以下の関係者から信頼されていると思いますか。連携相手ごとにあてはまる番号に○印を一つずつお付け下さい。

あなたのお気持ち 連携相手	十分信頼されていると 思う	まあ信頼されていると 思う	どちらともいえません	あまり信頼されていない と思う	全く信頼されていない と思う	該当の連携相手がいない
1.利用者本人（患者・要介護者・要支援者）	1	2	3	4	5	6
2.利用者の同居家族	1	2	3	4	5	6
3.同じ職場の従事者（仲間）	1	2	3	4	5	6
4.他組織の介護・看護・生活支援サービス従事者	1	2	3	4	5	6
5.医師	1	2	3	4	5	6
6.行政関係者	1	2	3	4	5	6

22. あなたは、仕事において、連携相手及び自分自身の態度が気になりますか。あてはまる番号に○印を一つずつお付け下さい。

あなたのお気持ち 連携相手	大変気になる	まあ気になる	どちらともいえません	あまり気にならない	全く気にならない	該当の連携相手がいない
1. 利用者本人（患者・要介護者・要支援者）の態度	1	2	3	4	5	6
2. 利用者の同居家族の態度	1	2	3	4	5	6
3. 同じ職場の従事者（仲間）の態度	1	2	3	4	5	6
4. 他組織の介護・看護・生活支援サービス従事者の態度	1	2	3	4	5	6
5. 医師の態度	1	2	3	4	5	6
6. 行政関係者の態度	1	2	3	4	5	6
7. 自分自身の態度	1	2	3	4	5	6

23. あなたは、現在の仕事をつづけたいと思っていますか。

1	ぜひつづけたい	2	まあつづけたい	3	どちらともいえない
4	あまりつづげたくない	5	まったくつづげたくない		

24. 上記の質問 24 で「1」と「2」と答えた方におたずねします。つづけたい理由を下記の内から 5 つ以内でお選びください。

1	楽しい	2	利用者の態度がいい	3	社会的責任
4	給料がいい	5	労働時間が少ない	6	達成感がある
7	自分の専門分野	8	職場の人間関係がいい	9	人との出会い
10	やりがいがある	11	新しい知識の学習	12	その他 ()

25. 上記の質問 24 で「4」と「5」と答えた方におたずねします。つづげたくない理由を下記の内から 5 つ以内でお選びください。

1	楽しくない	2	やりがいがない	3	責任感が重い
4	給料が少ない	5	労働時間が長い	6	仕事の量が多い
7	人間関係が悪い	8	利用者の態度が悪い	9	仕事内容がづらい
10	勉強会がよくある	11	一時の仕事	12	その他 ()

26. あなたは、現在の仕事は楽しいと感じていますか。

1	大変楽しい	2	まあ楽しい	3	どちらともいえない
4	あまり楽しくない	5	まったく楽しくない		

27. 現在の仕事に対するあなたの満足度をお答えください。(各内容ごとに当てはまる番号に○をつけてください。)

あなたの満足度 仕事の内容・条件		あなたの満足度				
		大変満足	まあ満足	どちらとも いえない	やや不満	大変不満
1	給与・賃金	1	2	3	4	5
2	勤務時間	1	2	3	4	5
3	職場の運営方針・やり方	1	2	3	4	5
4	仕事内容	1	2	3	4	5
5	職場の人間関係	1	2	3	4	5
6	職場の雰囲気	1	2	3	4	5

28. あなたは総合的にみて、現在の仕事に満足していますか。

1	大変満足している	2	まあ満足している	3	どちらともいえない
4	あまり満足していない	5	まったく満足していない		

5 介護・看護分野における制度・人材育成・理想形等についてお聞きします。

29. あなたは、現在の介護保険制度に対して満足していますか。

1	大変満足している	2	まあ満足している	3	どちらともいえない
4	あまり満足していない	5	まったく満足していない		

30. 質問 30 の回答理由を簡単にお書きください。

--

31. あなたが考える介護・看護サービスのあるべき姿（あるいは理想形）の条件を 5 つ以内でお選びください。

1	人あるいは人間関係を大事にする	2	やりがいがある	3	住民が理解できる
4	連携・協働がある	5	達成感がある	6	思いやりがある
7	尊厳がある	8	信頼できる	9	給料がいい
10	雰囲気がいい	11	一生働きたい	12	勉強になる
13	和を大切にする	14	気配りがある	15	社会的責任感がある
16	つねに向上・改善していく	17	マナーがいい	18	タイムリーな提供

32. 最後に介護・看護サービス等に関してご意見や要望があればご自由にお書き下さい。

--

ご協力ありがとうございました。

実施主体： 豊田市介護サービス機関連絡協議会会長 安藤 惣吾

調査分析： 愛知工業大学教授 山本 勝
愛知県立大学教授 永井 昌寛
名古屋工業大学院准教授 横山 淳一
愛知工業大学院生 史 文珍

本論文と関係する発表または投稿論文リスト

(2013年11月23日現在)

論文題目	発表年	公表の方法及び時期	著者	対応章
1. KJ 法を用いた孔子思想の体系化の試み	2011年	愛知工業大学経営情報科学 第7巻第1号,pp.37-49	史文珍	第2章
2. 情報社会における孔子論的問題解決策	2012年	愛知工業大学経営情報科学 第7巻第2号,pp.73-86	史文珍	第7章
3. 孔子思想に基づいたシステムズ・アプローチに関する一考察	2012年	日本経営診断学会論集 Vol.12, pp.47-52	史文珍 山本勝	第3章
4. 地域保健・医療・福祉包括ケアシステムにおける評価支援システムの設計と課題	2012年	日本経営診断学会論集 Vol.12, pp.131-137	永井昌寛 山本勝 横山淳一 史文珍	第6章
5. 孔子思想に基づいた地域包括ケアシステムの構築および運営に関する一考察	2013年	日本経営診断学会論集 Vol.13, (掲載決定)	史文珍 山本勝	第3章
6. 健幸社会を支える地域包括ケアシステムの基本理念と推進方策	2013年	日本経営診断学会論集, Vol.13, (掲載決定)	山本勝 史文珍 永井昌寛 横山淳一	第3章
7. システムづくりにおける孔子的問題意識に関する一考察	2013年	愛知工業大学経営情報科学 第8巻第2号,pp.49-61	史文珍	第4章
8. 連携意識構造における孔子論的考察	2013年	愛知工業大学経営情報科学 第9巻第1号,pp.31-46	史文珍	第5章
3'. 孔子思想に基づいたシステム・マネジメントに関する一考察	2011年	日本経営診断学会第44回 全国大会予稿集,別府大学, pp.188~191,	史文珍 山本勝	第3章

5. 孔子思想に基づいた地域包括ケアシステム構築及び運営に関する一考察	2012年	日本経営診断学会第45回全国大会予稿集,北海道大学, pp.127-132,	史文珍 山本勝	第3章
6. 健幸社会を支える地域包括ケアシステムの基本理念と推進方策	2012年	日本経営診断学会第45回全国大会予稿集,北海道大学, pp.57-60,	山本勝 史文珍 永井昌寛 横山淳一	第3章
9. 孔子思想からみた地域包括ケアシステムにおける医師の役割分担と意識構造分析	2013年	日本経営診断学会第46回全国大会予稿集,愛知工業大学, pp.69-72	史文珍 山本勝	第6章
10. 地域包括ケアシステム構築における連携促進のための革新的システム化方策	2013年	日本経営診断学会第46回全国大会予稿集,愛知工業大学, pp.155-158	山本勝 史文珍 永井昌寛 横山淳一	第5章
11. 在宅医療および医療機関連携に関する医師の意識実態分析	2013年	日本経営診断学会第46回全国大会予稿集,愛知工業大学, pp.159-162	永井昌寛 史文珍 山本勝	第6章
12. 孔子思想に基づいた評価システムに関する一考察	2013年	日本経営システム学会第51回全国大会予稿集,広島経済大学,	史文珍 山本勝	第6章
13. The structure of Confucian problem consciousness	2013年	The 10th International Conference on Service Systems and Service Management, (proceeding), CUHK, pp.60-64	Wenzhen Shi Masahiro Nagai Junichi Yokoyama Masaru Yamamoto	第4章
14. Study on the consciousness structure of the participants in community comprehensive care system based on Confucius thought	2013年	The 20th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics, AF1527, Seoul,	Wenzhen Shi Masahiro Nagai Junichi Yokoyama Masaru Yamamoto	第5章

謝 辞

日本の文学・文化・経営が好きな私は、教師になる夢を叶えるために、6年前に長年勤めた会社を退職して、大学院留学生として来日しました。井の中の蛙の私は、経営における様々な専門分野・知識・技術に目を奪われました。そのなかでも、「私捨夢（システム）づくり」こそが、私が長い間追求していた「則天去私」の世界だ、と悟ったきっかけは、恩師山本勝教授の授業「システム・マネジメント論」でした。そして先生からは、「温故知新」ならぬ、「温孔知心」という言葉を与えられて、本学大学院博士課程に進んできました。

学問の門外漢である私を、学問の従へと導くために、博士論文の指導教員である山本勝教授は、「人を教えて倦まず」のように、日本語の修正、論文作成のコツなど研究の進め方や高度で専門的な技術の御指導はもとより、共同研究及び合同ゼミ機会の用意、国内・国際学会発表及び貴重な見学・ヒヤリング調査などの機会を沢山与えていただきました。また、本論文執筆の最初から最後まで、誠実で寛大かつ懇切丁寧なる御指導をいただきました。なお、はじめて先生の研究室に所属して以来、快適な研究環境をつくっていただきました。さらには、生活面においても、日頃の日常生活から、家族来日の手続きまで全面的な御支援をいただきました。とくに、困難な状況に陥った際や、慣れない環境でストレスが溜まってしまい、冷静に考えられない状況の時や、自分が進むべき方向に困惑しているときにも、ユーモアかつ情熱的な御指摘及び御指導をいただき、いつも心を温められたとともに、つねに進むべき道を示していただきました。なお、巻末に、研究業績を書かせていただきましたが、研究者として非力な私の実力を超える成果は、恩師山本勝教授の御指導の賜物です。どれだけ言葉を尽くしても足りません。ここに心をこめて深甚の謝意を申し上げます。

また、本論文の審査においては、愛知工業大学副学長鈴木達夫教授並びに愛知工業大学大学院経営情報研究科科長近藤高司教授の両先生には副査として、大所高所からの御指導並びに御鞭撻をいただき心から感謝申し上げます。さらに、両先生には、日頃の生活面においても、様々な考慮をしていただき、厳しい留學生活において多大な御支援及び御指導をいただいたことを心より深謝申し上げます。

さらに、本研究において、活用致しましたデータ分析手法及び基礎的な論文の書き方・ルール・規則などは修士課程の時の恩師小田哲久教授から御指導及び御指摘をいただきました。経営の基礎知識及び日本語能力などが極めて乏しい私に、幅広い授業を勉強させていただいたとともに、親身になってご指導いただきました。また、貴重な学会発表の機会もいただいたことが、その後の博士課程の論文発表にも大変役に立ちました。とくに、留學手続き、入学手続き及び生活支援において大変お世話になり、心より深謝申し上げます。

また、学位公聴会において、親切かつ貴重な御指導及び御指摘をいただいた野村健太郎特任教授をはじめ、6年間にわたり、御指導及び御助言をいただいた田村隆善教授、岡崎一浩教授、野村重信教授、池田良夫教授、小森清久教授、石井成美教授、後藤時政教授に対して感謝申し上げます。なお、小橋勉准教授及び吉成亮准教授には進路及び生活において親身な御支援及

び御指導をいただきました。ここに感謝申し上げます。

また、愛知工業大学の先生方以外にも、共同研究を通じて貴重な研究指導・助言をいただきました愛知県立大学の永井昌寛教授及び名古屋工業大学大学院の横山淳一准教授には、この3年間先生のゼミに参加させていただきました。論文の書き方、データの分析方法、アンケートの設計及び実施などにおいて御指導及び御指摘を多々いただきました。さらに、2回の国際発表にも同行していただき心細い私に多大な勇気を与えていただきました。ここにあらためて深謝致します。

なお、現在でも共同研究をさせていただいている藤田保健衛生大学連携地域医療学寄附講座浅井幹一教授及び山本俊輔先生、豊田地域医療センター松井道裕事務局長、豊田市社会福祉部の職員各位、豊田加茂医師会の諸先生方、豊田市介護サービス機関連絡協議会の皆様、並びに、アンケート調査にご協力いただいた豊田市介護サービス機関連絡協議会の皆様には心から感謝申し上げます。

さらに、愛知工業大学国際交流センター、愛知工業大学図書館、本山キャンパス及び自由ヶ丘キャンパス事務室の皆様及びキャリアセンターの伊藤直美様からは、多大なご支援及びご助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

日本での6年余りの研究・学習生活は、私のこれまでの、そして、これからの人生において大変有意義な思い出及び深い経験となりました。日本で出会ったすべての方に対して、これまでの御厚情と御支援に対して心から感謝致します。

なお、博士課程（平成23年度～25年度）の3年間、につとくアジア留学生奨学基金をいただいたおかげで、経済面においては苦勞をせずに、学位論文作成に全力を注ぐことができました。ここに深く謝意を表します。また、本研究は、平成23年度～25年度の3年間、愛知工業大学大学院グローバル人材育成研究助成からの御支援をいただきました。愛知工業大学関係者各位に対して心から感謝申し上げます。

最後に、家族についても触れさせていただきます。毎晩、研究室に閉鎖時間まで滞在している私の世話のみならず、博士後期課程の3年間で生まれた二人の子どもの世話をしてくれた妻の汪宇に感謝します。また、毎年半年間来日して子育てを手伝ってもらった中国の両親に感謝します。なお、二人の子供の笑顔には、勇気と元気を与えてもらいました。

平成25年12月8日
愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス
山本研究室406室にて

史 文珍